

富田 細田 遺跡  
富田 宮下 遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

〈本文編〉

2006

国 土 交 通 省  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



富田細道・富田宮下遺跡

号地北原中遺跡正誤表

第25表 群馬県内出土土器十二線一覽 (正誤・追加)

番号	遺跡名	遺構名	所在地	富本館		開場	開功	開平	富壽	承和	長年	貞觀	寛平	延喜	元大	不明	計	備考
				線	網													
	(修正)																	
17	豊岡後原1遺跡	1-10号住居	高崎市下豊岡町			1											1	
19	神貞観音山古墳	墓坑4	高崎市錦貫町									1	1				2	4
修正後の合計				1	15	3	6	3	11	1	2	3	1	1	2	0	2	51?
52	五代木幡Ⅱ遺跡	104号住居	前橋市五代町			1											1	
53	五代竹花Ⅱ遺跡	7号住居	前橋市五代町			2	3										5	
54	富田下大日蓮遺跡	Ⅱ-3号住居	前橋市富田町						1								1	
55	中之沢宮沢遺跡	研跡	前橋市粕川町					1									1	
56	大貫原遺跡	6号住居	昭和村大字赤井							1							1	
57	小八木志真	5区48号遺構	高崎市小八木町				1										1	
58	戸邊跡																	
追加後の合計				1	18	3	10	4	12	2	2	3	1	1	2	0	2	61?



# 富田細田遺跡 富田宮下遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

〈本文編〉

2006

国 土 交 通 省  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





1 富田細田・富田宮下遺跡周辺の地形（後方、赤城山）



2 富田細田・富田宮下遺跡周辺の地形（右上方、荒砥川）



1 富田細田遺跡C区の調査



2 富田宮下遺跡C区の調査





1 富田宮下遺跡A区の調査



2 富田宮下遺跡B区の調査



1 宮下遺跡C区16号住居出土土器



2 宮下遺跡C区77号住居出土土器



3 宮下遺跡C区12号住居出土土器



4 宮下遺跡C区14号住居出土土器



5 宮下遺跡A区6号住居出土土器



6 宮下遺跡C区20号住居出土土器



7 宮下遺跡C区60号住居出土土器



8 宮下遺跡C区36号住居出土土器

# 序

上武道路は、一般国道17号バイパスの一環として、埼玉県の深谷バイパスから前橋市田口町の現道に接続する道路として計画されました。平成元年には前橋市今井町の国道50号まで、平成17年には富田町までの区間が開通・供用されており、国道17号の交通混雑緩和に寄与するとともに沿線地域の生活道として活用されています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会および当事業団によって行われてまいりました。更に、平成11年度からは前橋市今井町の国道50号以北の発掘調査に着手し、記録保存の措置が取られました。

本書は、平成11年4月より翌年の平成13年3月にかけて発掘調査を行いました前橋市富田町所在の縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡である富田細田遺跡・富田宮下遺跡の報告書です。平安時代の2面の水田跡、120軒に及ぶ竪穴住居など当地域の歴史的発展を知る上での貴重な資料が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、国土交通省関東地方整備局（旧建設省関東地方建設局）、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から、種々、ご指導・ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これらの関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成18年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇夫



# 例 言

1. 本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴い、事前調査された富田細田遺跡・富田宮下遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡は旧石器時代から中・近世までの複合遺跡である。遺跡の立地や種別、遺構の種類を考慮して、本書は富田細田遺跡と富田宮下遺跡で調査した縄文時代以降の遺構・遺物について報告する。なお、旧石器時代の成果については別途報告を予定している。
2. 本遺跡は、群馬県前橋市富田町に所在する。発掘調査区は、富田細田遺跡が富田町297-1・306-1～3・309・310・312・313・2001・2003～2008・2019～2031・2032-2・2033番地他、富田宮下遺跡が富田町298-1～2・299・303～305番地他である。
3. 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所(調査時、建設省関東地方建設局高崎工事事務所)
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 富田細田遺跡 平成11年4月1日～平成13年3月31日  
富田宮下遺跡 平成11年8月2日～平成13年3月31日
6. 調査組織 管理・指導 菅野 清、小野宇三郎、赤山容造、住谷 進、神保脩史、水田 稔、  
事務担当 真下高幸、小山友孝、坂本敏夫、笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、  
柳岡良宏、岡嶋伸昌、森下弘美、片岡徳雄（事業団職員）  
大澤友治、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、  
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、浅見宣記、  
吉田 茂、藤原正義（事業団補助員）  
事務担当 飯塚卓二、中沢 悟、坂口 一、児島良昌、根岸 仁、津島秀章、新井英樹、  
山村英二、久保 学、石田 真、西原和久、徳江秀夫（事業団職員）  
黒沢はるみ、小宮山達雄（事業団嘱託員）
7. 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 平成15年4月1日～平成18年6月30日
9. 整理組織 管理・指導 小野宇三郎、高橋勇夫、住谷永市、木村裕紀、神保脩史、津金澤吉茂、  
萩原利通、矢崎俊夫、萩原 勉、右島和夫、中東勝志、西田健彦、相京建史  
事務担当 榎原恒夫、丸岡道雄、宮前結城雄、笠原秀樹、國定 均、竹内 宏、高橋房雄、  
石井 清、須田朋子、吉田有光、斉藤恵利子、柳岡良宏、佐藤聖行、清水秀紀、  
今泉大作、栗原幸代、阿久澤玄洋、田中賢一（事業団職員）  
今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、  
狩野真子、松下次男、吉田 茂、武藤秀典（事業団補助員）  
整理担当 山村英二（平成15年度、現、富岡市立高瀬小学校教諭）  
徳江秀夫（平成16～18年度）
10. 本書作成の担当者は次の通りである。  
編 集 山村英二・徳江秀夫  
執 筆 第1章第1節 矢口裕之

第1章第2～5節、第2・3章、第4章4～7節、第6章第1節の一部・第2節 山村英二  
第4章第1～3、4～7節（各遺構所見の項）8節、第6章第1節の一部・第3節・第4節  
徳江秀夫

遺構観察表 山村英二（富田細田遺跡出土遺物）

徳江秀夫（富田宮下遺跡出土遺物）

大西雅弘（富田細田遺跡・富田宮下遺跡出土陶磁器の産地・年代）

遺構・遺物観察指導、助言

中沢 悟、石坂 茂、女屋和志雄、原 雅信、飯田陽一、大木紳一郎、藤巻幸男、小島敦子、  
木津博明、大西雅広、津島秀章、新井英樹（事業団職員）

遺構写真 各発掘担当者

遺物写真 佐藤元彦（事業団職員）

保存処理 関 邦一（事業団職員）、土橋まり子（事業団嘱託員）、小村浩一（事業団補助員）

遺構・遺物図面整理、図面作成等

黒沢はるみ（事業団嘱託員）、高橋裕美、掛川智子、湯浅美枝子、武永いち、牧野裕美、  
小菅優子、嶋崎しづ子、高橋初美、田中富美子、土田三代子、狩野芳子、須藤 聖、  
八峠美津子（事業団補助員）

器械実測 富沢スミ江、伊東博子、岸 弘子、廣津真希子、田中精子、酒井史恵（事業団補助員）

11. 石器・石製品の石材同定については飯島静雄氏（群馬県地質研究会会員）にご教示を得た。

12. 委託関係

火山灰、プラント・オパール分析 株式会社古環境研究所

炭化材樹種同定 株式会社パレオ・ラボ

遺構・遺物トレース 株式会社調研

13. 富田細田遺跡・富田宮下遺跡の出土遺物と記録資料の一切は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で  
管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

14. 本書作成にあたっては、次の方々に指導と助言を賜った。記して感謝の意を申し上げる次第である。

群馬県教育委員会 前橋市教育委員会 地元関係者各位 井上唯雄、鹿田雄三、前原 豊、倉品敦子  
（順不同。敬称略）

## 凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、日本平面直角座標系（国家座標）第IX系で、  
本遺跡の起点座標値は、 $X=42,100\text{m}$ 、 $Y=-61,200\text{m}$ である。
2. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は、mを用いた。
3. 遺構の位置を示すグリッドの表記は、その遺構が掛かるグリッド名をすべて示した。
4. 遺構名称は、富田細田遺跡・富田宮下遺跡で、それぞれの調査区毎・遺構の種別毎に通し番号を付した。  
調査時に付した番号をそのまま使用したため欠番が生じている。

5. 遺構図で使用した北方位はすべて心北を示している。
6. 遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として下記のとおりとし、各図にスケールを入れた。  
 遺構 竪穴住居 1:60 竈詳細図 1:30 掘立柱建物跡 1:60 井戸・土坑・溜井 1:60  
 溝 1:100 水田跡 1:400
- その他の遺構、及び概念図・全体図については、逐一縮尺率を示した。
- 遺物 土器・陶磁器 1:3 古銭 1:1 石製品 1:2、1:3 板碑・石塔 1:6
- 同一実測図中に縮尺率の異なる図を併載した場合は、図右下にそれぞれ縮尺率を記載した。
- 遺物実測図の中軸線の一点鎖線は回転実測、実線は直接実測を表す。
7. 写真図版の遺物の縮尺率は自在であり、遺物図の縮尺率とは必ずしも一致しない。
8. 遺構の方位は、北を基準に傾きを計測した。東に傾いた場合、N-〇°-E というように示した。
9. 竪穴住居の面積は、住居の上端をプランメーターを用いて3回平均値で測定した。なお、竈を持つ住居では竈を含めていない。
10. 本書では、テフラの呼称として下記の略語を用いる。

テフラ等の名称	略語	降下年代
浅間A軽石	As-A	1783年(天明3年)
浅間B軽石	As-B	1108年(天仁元年)
榛名二ツ岳渋川テフラ	Hr-FA	6世紀初頭
浅間C軽石	As-C	4世紀初頭

11. 本書の図版に使用したスクリーンパターンは、次のことを示す。下記以外は図版毎に凡例を示す。

遺構図 焼土  炭化物  粘土  灰 

遺物図 磨面 

12. 水田面積の計測は、畦畔の下端で求め、3次元測定機(3SP)で計測した。

13. 本書に掲載した地図・写真は、下記のものを使用した。

第1図 国土地理院発行 地勢図 1:200,000「長野」「宇都宮」  
 第2・8図 国土地理院発行 地形図 1:25,000「大湖」  
 第4左・7図 前橋市発行 現形図38・47・57(昭和49年測図)  
 第4右図 前橋市発行 現形図38・47・57(平成10年測図)  
 第6図 『群馬県史』通史編1付図を簡略化した「荒砥上ノ坊遺跡I」第5図を修正して使用  
 第9図 「荒砥宮田遺跡I」第9図を転載  
 第466図 群馬県立文書館所蔵「壬申地券地引絵図」富田村の一部を使用  
 写真図版P L 1 国土地理院発行の空中写真

# 目次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

## 第1章 発掘調査の方法と経過

第1節 発掘調査に至る経緯……………1

第2節 発掘調査の方法

1 調査区の設定……………4

2 グリッドの設定……………4

3 調査の方法……………4

第3節 発掘調査の経過

1 遺跡名について……………5

2 富田細田遺跡……………5

3 富田宮下遺跡低地部……………7

4 富田宮下遺跡台地部……………7

第4節 「調査面」と「面」……………8

第5節 基本土層……………9

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境……………10

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代……………12

2 縄文時代……………12

3 弥生時代……………12

4 古墳時代……………12

5 奈良・平安時代……………12

6 中・近世……………15

## 第3章 富田細田遺跡と

富田宮下遺跡低地部の調査

第1節 調査の概要

1 富田細田遺跡……………17

2 富田宮下遺跡低地部……………23

第2節 基本土層……………23

## 第3節 奈良～平安時代の遺構と遺物

1 奈良～平安時代

(1) 細田遺跡C区洪水層下木田……………27

(2) 細田遺跡C区土坑……………29

(3) 細田遺跡C区ピット……………30

(4) 細田遺跡C区溝……………30

(5) 細田遺跡E区土坑……………34

(6) 細田遺跡E区溝……………34

(7) 細田遺跡E区畠……………39

2 平安時代

(1) As-B下木田……………39

(2) 宮下遺跡A区溝……………43

3 遺構外出土遺物(平安時代以前)

……………44

## 第4節 中世以降の遺構と遺物

1 平安時代末～中世

(1) 細田遺跡C区溝……………46

2 中・近世

(1) 細田遺跡C区掘立柱建物……………48

(2) 細田遺跡C区土坑……………49

(3) 細田遺跡C区溝……………51

(4) 宮下遺跡A区溜井……………59

(5) 宮下遺跡A区溝……………61

3 遺構外出土遺物(中・近世以降)

……………69

## 第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

第1節 調査の概要……………71

第2節 基本土層……………71

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 概要……………72

2 土坑……………72

3 遺構外出土遺物……………77

第4節 弥生時代の遺構と遺物

1 概要……………85

2 住居……………85

3 遺構址……………113



4	遺構外出土遺物	115
第5節	古墳時代前期・中期の遺構と遺物	
1	概要	123
2	住居	123
3	遺構址	156
4	土坑	158
5	倒木痕	158
6	遺構外出土遺物	159
第6節	古墳時代後期の遺構と遺物	
1	概要	160
2	住居	160
3	溝	223
4	土坑	224
5	遺構外出土遺物	224
第7節	奈良・平安時代の遺構と遺物	
1	概要	225
2	住居	225
3	掘立柱建物	330
4	地割れ	335
5	遺構外出土遺物	336
第8節	中世以降の遺構と遺物	
1	概要	337
2	掘立柱建物	337
3	井戸	340
4	溝	349
5	土坑	383
6	道状遺構	393
7	遺構址	395
8	遺構外出土遺物	396

第5章	自然科学分析	
第1節	富田細田遺跡の土層とテフラ	402
第2節	富田細田遺跡における プラント・オパール分析	406
第3節	富田宮下遺跡の土層とテフラ	412
第4節	富田宮下遺跡C区26号住居跡 出土炭化材の樹種同定	417
第6章	成果と問題点	
第1節	調査のまとめ	420
第2節	富田細田遺跡における洪水層下の 水田について	430
第3節	富田宮下遺跡出土土器の変遷	435
第4節	富田宮下遺跡における堅穴住居の 構成と居住城の変遷	444
参考文献		448
報告書抄録		450

#### 別冊 写真図版編

富田細田遺跡・富田宮下遺跡低地部分  
(遺構・遺物)

富田宮下遺跡台地部分(遺構・遺物)

#### 別冊 遺物観察表編

富田細田・富田宮下遺跡低地部分

富田宮下遺跡台地部分

付図1 富田宮下遺跡A・B区遺構全体図

2 富田宮下遺跡C区遺構全体図

# 挿図目次

第 1 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡の位置	1	第 59 図	宮下 A 区 3・8・9 号溝	65
第 2 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡のグリッド設定図	2	第 60 図	宮下 A 区 5・6 号溝	67
第 3 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡の調査区設定図	3	第 61 図	宮下 A 区 7 号溝	68
第 4 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡調査区的位置	6	第 62 図	中・近世以降の遺構外出土遺物	69
第 5 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡基本土層模式図	9	第 63 図	富田宮下遺跡台地部分基本土層	71
第 6 図	群馬県中央部の地形と富田細田遺跡・富田宮下遺跡	10	第 64 図	B 区 4・6 号土坑	72
第 7 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡周辺の地形	11	第 65 図	B 区 9・13 号土坑	73
第 8 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡周辺の遺跡分布	13	第 66 図	B 区 15~17 号土坑	74
第 9 図	弥生時代から古墳時代前期の遺跡分布	16	第 67 図	B 区 18~20 号土坑	75
第 10 図	富田細田遺跡 C 区古墳時代(第 6 面)遺構概念図	18	第 68 図	B 区 22~24 号土坑	76
第 11 図	富田細田遺跡 C 区平安時代(第 5 面)遺構概念図	18	第 69 図	C 区 33 号土坑	77
第 12 図	富田細田遺跡 C 区奈良~平安時代(第 4 面)遺構概念図	19	第 70 図	縄文時代遺構・遺物分布図	78
第 13 図	富田細田遺跡 C 区平安時代(第 3 面)遺構概念図	19	第 71 図	遺構外出土縄文土器(1)	80
第 14 図	富田細田遺跡 C 区古代末~中世(第 2 面)遺構概念図	20	第 72 図	遺構外出土縄文土器(2)	81
第 15 図	富田細田遺跡 C 区中・近世(第 1 面)遺構概念図	20	第 73 図	遺構外出土縄文土器(3)	83
第 16 図	富田細田遺跡 E 区平安時代(第 5 面)遺構概念図	21	第 74 図	遺構外出土縄文土器(2)	84
第 17 図	富田細田遺跡 E 区奈良~平安時代(第 4 面)遺構概念図	21	第 75 図	C 区 11 号住居	85
第 18 図	富田細田遺跡 D 区土層断面図	21	第 76 図	C 区 11 号住居出土遺物(1)	86
第 19 図	富田宮下遺跡 A 区平安時代(第 5 面)遺構概念図	22	第 77 図	C 区 11 号住居出土遺物(2)	87
第 20 図	富田宮下遺跡 A 区中・近世(第 1 面)遺構概念図	22	第 78 図	C 区 16 号住居(1)	88
第 21 図	富田細田遺跡・富田宮下遺跡 A 区トレンチの位置と基本土層	24	第 79 図	C 区 16 号住居(2)	89
第 22 図	富田細田遺跡 A・B 区トレンチの位置と基本土層	26	第 80 図	C 区 16 号住居出土遺物(1)	89
第 23 図	細田 C 区洪水層下水田・出土遺物	28	第 81 図	C 区 16 号住居出土遺物(2)	90
第 24 図	細田 C 区 1・2・4~6 号土坑	29	第 82 図	C 区 16 号住居出土遺物(3)	91
第 25 図	細田 C 区 6・7・12~15 号溝	31	第 83 図	C 区 19 号住居	92
第 26 図	細田 C 区 8~11 号溝・9 号ゼット・出土遺物	33	第 84 図	C 区 19 号住居出土遺物(1)	93
第 27 図	細田 E 区 1 号土坑・出土遺物	34	第 85 図	C 区 19 号住居出土遺物(2)	94
第 28 図	細田 E 区 1・2 号溝	35	第 86 図	C 区 26 号住居(1)	95
第 29 図	細田 E 区 3 号溝・出土遺物	36	第 87 図	C 区 26 号住居(2)	96
第 30 図	細田 E 区 4 号溝	37	第 88 図	C 区 26 号住居出土遺物(1)	97
第 31 図	細田 E 区 5 号溝・出土遺物	38	第 89 図	C 区 26 号住居出土遺物(2)	98
第 32 図	細田 E 区島跡	39	第 90 図	C 区 27 号住居	99
第 33 図	細田 C・E 区、宮下 A 区 A <sub>s</sub> -B <sub>F</sub> 水田概念図	40	第 91 図	C 区 27 号住居出土遺物	100
第 34 図	細田 C 区 A <sub>s</sub> -B <sub>F</sub> 水田	41	第 92 図	C 区 53 号住居(1)	100
第 35 図	細田 E 区 A <sub>s</sub> -B <sub>F</sub> 水田	43	第 93 図	C 区 53 号住居(2)	101
第 36 図	宮下 A 区 A <sub>s</sub> -B <sub>F</sub> 水田・10 号溝	44	第 94 図	C 区 53 号住居出土遺物(1)	101
第 37 図	平安時代以前の遺構外出土遺物	45	第 95 図	C 区 53 号住居出土遺物(2)	102
第 38 図	細田 C 区 5・16・17・19~21 号溝	47	第 96 図	C 区 58 号住居	102
第 39 図	細田 C 区 1 号獨立柱建物・出土遺物(1)	48	第 97 図	C 区 58 号住居出土遺物	103
第 40 図	細田 C 区 1 号獨立柱建物出土遺物(2)	49	第 98 図	C 区 59 号住居	104
第 41 図	細田 C 区 7 号土坑	49	第 99 図	C 区 59 号住居出土遺物	105
第 42 図	細田 C 区中・近世遺構	50	第 100 図	C 区 73 号住居(1)	106
第 43 図	細田 C 区 1~3 号溝(1)	52	第 101 図	C 区 73 号住居(2)	107
第 44 図	細田 C 区 1~3 号溝(2)	53	第 102 図	C 区 73 号住居出土遺物	108
第 45 図	細田 C 区 1~3 号溝(3)	54	第 103 図	C 区 77 号住居(1)	109
第 46 図	細田 C 区 1~3 号溝(4)	55	第 104 図	C 区 77 号住居(2)	110
第 47 図	細田 C 区 1 号溝出土遺物(1)	55	第 105 図	C 区 77 号住居出土遺物(1)	110
第 48 図	細田 C 区 1 号溝出土遺物(2)	56	第 106 図	C 区 77 号住居出土遺物(2)	111
第 49 図	細田 C 区 1 号溝出土遺物(3)	57	第 107 図	C 区 80 号住居(1)	112
第 50 図	細田 C 区 1 号(4)・3 号溝出土遺物	58	第 108 図	C 区 80 号住居(2)	113
第 51 図	宮下 A 区 1 号溝井	59	第 109 図	C 区 80 号住居出土遺物	113
第 52 図	宮下 A 区 1 号溝井出土遺物(1)	59	第 110 図	C 区 1 号址	114
第 53 図	宮下 A 区 1 号溝井出土遺物(2)	60	第 111 図	C 区 1 号址出土遺物	114
第 54 図	宮下 A 区 2 号溝井	60	第 112 図	C 区弥生時代遺構・遺物分布図	116
第 55 図	宮下 A 区 1~9 号溝、1・2 号溝井	61	第 113 図	遺構外出土弥生土器(1)	118
第 56 図	宮下 A 区 1・2 号溝	62	第 114 図	遺構外出土弥生土器(2)	119
第 57 図	宮下 A 区 1・2 号溝出土遺物	63	第 115 図	遺構外出土弥生土器(3)	120
第 58 図	宮下 A 区 3・4 号溝	64	第 116 図	遺構外出土弥生土器(4)	121
			第 117 図	遺構外出土弥生土器(5)・石器	122

第118册	A区4号住居·出土遺物	123
第119册	C区4号住居(1)	124
第120册	C区4号住居(2)	125
第121册	C区4号住居出土遺物(1)	126
第122册	C区4号住居出土遺物(2)	127
第123册	C区6号住居(1)	128
第124册	C区6号住居(2)	129
第125册	C区6号住居出土遺物	130
第126册	C区12号住居(1)	131
第127册	C区12号住居(2)	132
第128册	C区12号住居出土遺物(1)	133
第129册	C区12号住居出土遺物(2)	134
第130册	C区15号住居(1)	135
第131册	C区15号住居(2)	136
第132册	C区15号住居(3)	137
第133册	C区15号住居出土遺物(1)	137
第134册	C区15号住居出土遺物(2)	138
第135册	C区15号住居出土遺物(3)	139
第136册	C区17号住居(1)	140
第137册	C区17号住居(2)	141
第138册	C区17号住居出土遺物	141
第139册	C区21号住居·出土遺物	142
第140册	C区24号住居	143
第141册	C区24号住居出土遺物	144
第142册	C区25号住居(1)	145
第143册	C区25号住居(2)	146
第144册	C区25号住居(3)	147
第145册	C区25号住居出土遺物	147
第146册	C区29号住居(1)	148
第147册	C区29号住居(2)	149
第148册	C区29号住居出土遺物(1)	149
第149册	C区29号住居出土遺物(2)	150
第150册	C区32号住居出土遺物	151
第151册	C区34号住居	151
第152册	C区34号住居出土遺物	152
第153册	C区43号住居	153
第154册	C区43号住居出土遺物	153
第155册	C区57号住居·出土遺物	154
第156册	A区5号住居	155
第157册	A区5号住居出土遺物	155
第158册	C区2号城	156
第159册	C区2号城出土遺物	156
第160册	A区1号城	157
第161册	A区1号城出土遺物(1)	157
第162册	A区1号城出土遺物(2)	158
第163册	C区6号土坑·出土遺物	158
第164册	C区1号列木·出土遺物	159
第165册	古墳時代前・中期の遺構外出土遺物	159
第166册	A区1号住居(1)	160
第167册	A区1号住居(2)·出土遺物	161
第168册	B区2号住居	162
第169册	B区2号住居出土遺物	162
第170册	B区3号住居	163
第171册	B区3号住居出土遺物	164
第172册	B区4号住居(1)	165
第173册	B区4号住居(2)	166
第174册	B区4号住居出土遺物(1)	166
第175册	B区4号住居出土遺物(2)	167
第176册	B区5号住居	168
第177册	B区5号住居出土遺物	169
第178册	B区10号住居(1)	170
第179册	B区10号住居(2)	171

第180册	B区10号住居(3)	172
第181册	B区10号住居出土遺物(1)	172
第182册	B区10号住居出土遺物(2)	173
第183册	B区10号住居出土遺物(3)	174
第184册	B区10号住居出土遺物(4)	175
第185册	B区13号住居	175
第186册	B区13号住居出土遺物	176
第187册	B区16号住居(1)	176
第188册	B区16号住居(2)	177
第189册	B区16号住居出土遺物	177
第190册	C区3号住居	178
第191册	C区3号住居出土遺物	179
第192册	C区9号住居(1)	179
第193册	C区9号住居(2)	180
第194册	C区9号住居出土遺物(1)	180
第195册	C区9号住居出土遺物(2)	181
第196册	C区13号住居(1)	182
第197册	C区13号住居(2)	183
第198册	C区13号住居出土遺物(1)	183
第199册	C区13号住居出土遺物(2)	184
第200册	C区14号住居	185
第201册	C区14号住居出土遺物(1)	186
第202册	C区14号住居出土遺物(2)	187
第203册	C区14号住居出土遺物(3)	188
第204册	C区14号住居出土遺物(4)	189
第205册	C区14号住居出土遺物(5)	190
第206册	C区18号住居(1)	191
第207册	C区18号住居(2)	192
第208册	C区18号住居出土遺物(1)	193
第209册	C区18号住居出土遺物(2)	194
第210册	C区38号住居·出土遺物	195
第211册	C区42号住居	196
第212册	C区42号住居出土遺物	197
第213册	C区44号住居(1)	197
第214册	C区44号住居(2)	198
第215册	C区44号住居出土遺物	199
第216册	C区55号住居(1)	200
第217册	C区55号住居(2)	201
第218册	C区55号住居出土遺物(1)	202
第219册	C区55号住居出土遺物(2)	203
第220册	C区55号住居出土遺物(3)	204
第221册	C区62号住居(1)	205
第222册	C区62号住居(2)·出土遺物	206
第223册	C区65号住居(1)	206
第224册	C区65号住居(2)	207
第225册	C区65号住居(3)	208
第226册	C区65号住居出土遺物(1)	208
第227册	C区65号住居出土遺物(2)	209
第228册	A区6号住居	210
第229册	A区6号住居出土遺物(1)	211
第230册	A区6号住居出土遺物(2)	212
第231册	B区12号住居出土遺物	212
第232册	B区12号住居	213
第233册	C区7号住居(1)	213
第234册	C区7号住居(2)	214
第235册	C区7号住居出土遺物	215
第236册	C区23号住居(1)	216
第237册	C区23号住居(2)	217
第238册	C区23号住居出土遺物(1)	217
第239册	C区23号住居出土遺物(2)	218
第240册	C区41号住居	218
第241册	C区41号住居出土遺物	219

第242回	C区63号住居	220	第304回	C区31号住居出土遺物(2)	264
第243回	C区63号住居出土遺物	220	第305回	C区32・33号住居(1)	264
第244回	C区71号住居	221	第306回	C区32・33号住居(2)	265
第245回	C区71号住居出土遺物	222	第307回	C区33号住居出土遺物	266
第246回	A区23号溝・出土遺物	223	第308回	C区39号住居	266
第247回	C区3号土坑	224	第309回	C区39号住居出土遺物	267
第248回	古墳時代後期の遺構外出土遺物	224	第310回	C区45号住居	268
第249回	A区2号住居(1)	225	第311回	C区45号住居出土遺物	269
第250回	A区2号住居(2)	226	第312回	C区52号住居(1)	269
第251回	A区2号住居出土遺物	227	第313回	C区52号住居(2)	270
第252回	A区3号住居(1)	227	第314回	C区52号住居出土遺物	270
第253回	A区3号住居(2)・出土遺物	228	第315回	C区56号住居(1)	271
第254回	A区7号住居(1)	229	第316回	C区56号住居(2)	272
第255回	A区7号住居(2)	230	第317回	C区56号住居出土遺物	272
第256回	A区7号住居出土遺物(1)	231	第318回	C区60号住居(1)	273
第257回	A区7号住居出土遺物(2)	232	第319回	C区60号住居(2)	274
第258回	B区0号住居	232	第320回	C区60号住居出土遺物(1)	274
第259回	B区0号住居出土遺物	233	第321回	C区60号住居出土遺物(2)	275
第260回	B区1号住居(1)	233	第322回	C区64号住居・出土遺物	276
第261回	B区1号住居(2)	234	第323回	C区67号住居(1)	277
第262回	B区1号住居出土遺物	234	第324回	C区67号住居(2)	278
第263回	B区7号住居(1)	235	第325回	C区67号住居出土遺物(1)	279
第264回	B区7号住居(2)	236	第326回	C区67号住居出土遺物(2)	280
第265回	B区7号住居出土遺物	236	第327回	C区67号住居出土遺物(3)	281
第266回	B区8号住居	237	第328回	C区74号住居	282
第267回	B区8号住居出土遺物	238	第329回	C区74号住居出土遺物	283
第268回	B区9号住居	239	第330回	C区79号住居	284
第269回	B区9号住居出土遺物(1)	240	第331回	C区79号住居出土遺物	285
第270回	B区9号住居出土遺物(2)	241	第332回	C区1号住居(1)	286
第271回	B区11号住居(1)	241	第333回	C区1号住居(2)	287
第272回	B区11号住居(2)	242	第334回	C区1号住居出土遺物(1)	287
第273回	B区11号住居出土遺物(1)	242	第335回	C区1号住居出土遺物(2)	288
第274回	B区11号住居出土遺物(2)	243	第336回	C区22号住居(1)	288
第275回	B区14号住居(1)	243	第337回	C区22号住居(2)	290
第276回	B区14号住居(2)	244	第338回	C区22号住居出土遺物	291
第277回	B区14号住居出土遺物	244	第339回	C区30号住居	292
第278回	B区15号住居	245	第340回	C区30号住居出土遺物(1)	292
第279回	B区15号住居出土遺物	246	第341回	C区30号住居出土遺物(2)	293
第280回	B区17号住居	246	第342回	C区35号住居(1)	294
第281回	B区17号住居出土遺物	247	第343回	C区35号住居(2)	295
第282回	C区5号住居(1)	248	第344回	C区35号住居出土遺物(1)	295
第283回	C区5号住居(2)	249	第345回	C区35号住居出土遺物(2)	296
第284回	C区5号住居出土遺物(1)	249	第346回	C区36号住居	297
第285回	C区5号住居出土遺物(2)	250	第347回	C区36号住居出土遺物	298
第286回	C区8号住居(1)	251	第348回	C区37号住居	299
第287回	C区8号住居(2)	252	第349回	C区37号住居出土遺物	300
第288回	C区8号住居出土遺物	252	第350回	C区40号住居	301
第289回	C区10号住居(1)	253	第351回	C区40号住居出土遺物	302
第290回	C区10号住居(2)	254	第352回	C区46号住居	302
第291回	C区10号住居出土遺物	254	第353回	C区46号住居出土遺物	303
第292回	C区20号住居(1)	255	第354回	C区47号住居(1)	304
第293回	C区20号住居(2)	256	第355回	C区47号住居(2)	305
第294回	C区20号住居出土遺物(1)	256	第356回	C区47号住居出土遺物(1)	305
第295回	C区20号住居出土遺物(2)	257	第357回	C区47号住居出土遺物(2)	306
第296回	C区20号住居出土遺物(3)	258	第358回	C区49号住居	306
第297回	C区20号住居出土遺物(4)	259	第359回	C区49号住居出土遺物	307
第298回	C区28号住居(1)	260	第360回	C区48号住居・49号住居掘り方	307
第299回	C区28号住居(2)	261	第361回	C区48号住居出土遺物	308
第300回	C区28号住居出土遺物(1)	261	第362回	C区51号住居	308
第301回	C区28号住居出土遺物(2)	262	第363回	C区51号住居出土遺物	309
第302回	C区31号住居	263	第364回	C区54号住居	310
第303回	C区31号住居出土遺物(1)	263	第365回	C区54号住居出土遺物	311

第366回	C区61号住居	312
第367回	C区61号住居出土遺物	313
第368回	C区66号住居	314
第369回	C区66号住居出土遺物	315
第370回	C区68号住居(1)	315
第371回	C区68号住居(2)	316
第372回	C区68号住居出土遺物	316
第373回	C区70号住居(1)	317
第374回	C区70号住居(2)	318
第375回	C区70号住居出土遺物(1)	319
第376回	C区70号住居出土遺物(2)	320
第377回	C区72号住居	321
第378回	C区72号住居出土遺物	322
第379回	C区75号住居	323
第380回	C区75号住居出土遺物	324
第381回	C区76号住居(1)	325
第382回	C区76号住居(2)	326
第383回	C区76号住居出土遺物(1)	326
第384回	C区76号住居出土遺物(2)	327
第385回	C区78号住居	328
第386回	C区78号住居出土遺物	328
第387回	B区6号住居	329
第388回	C区50号住居・出土遺物	329
第389回	C区1号竪立柱建物	330
第390回	C区2号竪立柱建物(1)	331
第391回	C区2号竪立柱建物(2)	332
第392回	C区3号竪立柱建物・出土遺物	333
第393回	C区4号竪立柱建物・出土遺物	334
第394回	C区地割れ	335
第395回	奈良・平安時代の遺構外出土遺物	336
第396回	A区1号竪立柱建物	337
第397回	A区2号竪立柱建物	338
第398回	B区1号竪立柱建物	339
第399回	A区1・2号井戸	340
第400回	A区3・5号井戸	341
第401回	A区6号井戸、B区1・2号井戸	342
第402回	B区3号井戸	343
第403回	B区4号井戸	344
第404回	C区1号井戸	345
第405回	C区3・4号井戸	346
第406回	A区2・3号井戸出土遺物	346
第407回	A区6号井戸、B区1・2号井戸出土遺物	347
第408回	B区3号井戸、C区1・3(1)号井戸出土遺物	348
第409回	C区3(2)・4号井戸出土遺物	349
第410回	A区12号溝(1)	350
第411回	A区12号溝(2)	351
第412回	A区13号溝	352
第413回	A区14号溝	353
第414回	A区12・15・16・18～22・25・29号溝	354
第415回	A区15・16号溝(1)	356
第416回	A区15・16号溝(2)	357
第417回	A区18～20号溝	358
第418回	A区21・22号溝	359
第419回	A区25・24号溝	360
第420回	A区24・26～28号溝	361
第421回	A区29号溝	362
第422回	B区1号溝	363
第423回	B区2・4・10～12号溝	365

第424回	B区3号溝	367
第425回	B区5～9号溝	369
第426回	B区13号溝	370
第427回	C区1号溝(1)	372
第428回	C区1号溝(2)	373
第429回	C区2号溝	374
第430回	C区5号溝	375
第431回	C区6～10号溝	376
第432回	C区12号溝	377
第433回	A区12号溝出土遺物(1)	378
第434回	A区12(2)・15号溝出土遺物	379
第435回	A区18～20・22・28・29号溝	
	B区1号溝(1)出土遺物	380
第436回	B区1(2)・2号溝出土遺物	381
第437回	B区3・8号溝、C区1・2(1)号溝出土遺物	382
第438回	C区2(2)・5～9・12号溝出土遺物	383
第439回	A区1号土坑	383
第440回	A区2号、B区1・2号土坑	384
第441回	B区3・7・8・10号土坑	385
第442回	B区11・12・14号土坑	386
第443回	C区4・5・7号土坑	387
第444回	C区8～10号土坑	388
第445回	C区11～13号土坑	389
第446回	C区14・15・20・21号土坑	390
第447回	C区22～24・27号土坑	391
第448回	C区28～30号土坑	392
第449回	C区32号土坑	393
第450回	B区3・8号土坑出土遺物	393
第451回	C区遺状遺構・出土遺物	394
第452回	C区3号址	395
第453回	C区3号址出土遺物	395
第454回	中・近世の遺構外出土遺物(1)	396
第455回	中・近世の遺構外出土遺物(2)	397
第456回	中・近世の遺構外出土遺物(3)	398
第457回	中・近世の遺構外出土遺物(4)	399
第458回	中・近世の遺構外出土遺物(5)	400
第459回	中・近世の遺構外出土遺物(6)	401
第460回	C区断面の土層柱状図	405
第461回	富田畑田遺跡におけるプラント・オパール分析結果	410
第462回	C区54S-11グリッドの土層柱状図(一部)	415
第463回	C区55G-13グリッドの土層柱状図(一部)	415
第464回	C区76号住居セクションH-H'の土層柱状図	416
第465回	群馬県内出土の皇朝二銭出土分布図	426
第466回	富田宮下遺跡中・近世以降の 遺構と区割りの変遷	428・429
第467回	富田畑田遺跡C区洪水層下水田	430
第468回	荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡洪水層下水田	431
第469回	下増田遺跡遺跡洪水層下水田	433
第470回	中原遺跡群A・B区水田	434
第471回	富田宮下遺跡出土土器の変遷(1)	435
第472回	富田宮下遺跡出土土器の変遷(2)	436
第473回	富田宮下遺跡出土土器の変遷(3)	437
第474回	富田宮下遺跡出土土器の変遷(4)	439
第475回	富田宮下遺跡出土土器の変遷(5)	440
第476回	富田宮下遺跡出土土器の変遷(6)	441
第477回	富田宮下遺跡出土土器の変遷(7)	443
第478回	富田宮下遺跡検出整穴住居の変遷	444・445

# 文中写真図版目次

図版 1-1	富田細田遺跡C区洪水層下水田(西から).....70	の顕微鏡写真(倍率はすべて400倍).....411	
-2	荒砥前田遺跡洪水層下水田(東から).....70	図版 3	富田宮下遺跡C区26号住居出土 炭化材査電子顕微鏡写真.....419
-3	荒砥宮田遺跡洪水層下水田(東から).....70		
図版 2	植物種標本(プラント・オパール)		

## 表 目 次

第1表	上武道路発掘調査遺跡一覧(7工区その1).....4	第15表	A区1号掘立柱建物計測値一覧.....338
第2表	富田細田遺跡・ 富田宮下遺跡低地部遺構確認面対照表.....8	第16表	A区2号掘立柱建物計測値一覧.....338
第3表	周辺遺跡一覧.....14	第17表	B区1号掘立柱建物計測値一覧.....339
第4表	富田細田遺跡洪水層下水田計測表.....27	第18表	富田細田遺跡におけるテフラ検出分析結果.....405
第5表	富田細田遺跡As-B下水田計測表.....42	第19表	富田細田遺跡における炭屑率測定結果.....405
第6表	細田C区1号掘立柱建物計測値一覧.....48	第20表	富田細田遺跡におけるプラント・オパール分析結果.....409
第7表	富田宮下遺跡台地部分の遺構一覧.....71	第21表	富田宮下遺跡におけるテフラ検出分析結果.....415
第8表	遺構外出土縄文土器一覧.....79	第22表	富田宮下遺跡における炭屑率測定結果.....415
第9表	遺構外出土縄文土器一覧.....82	第23表	富田宮下遺跡C区26号住居 出土炭化材種同定結果.....418
第10表	遺構外出土弥生土器一覧.....117	第24表	富田宮下遺跡出土土器土器一覧.....424
第11表	C区1号掘立柱建物計測値一覧.....330	第25表	群馬県内出土皇朝十二歳一覧.....425
第12表	C区2号掘立柱建物計測値一覧.....332	第26表	富田宮下遺跡中・近世以降出土遺物一覧.....427
第13表	C区3号掘立柱建物計測値一覧.....333	第27表	富田宮下遺跡出土堅穴住居一覧.....447・448
第14表	C区4号掘立柱建物計測値一覧.....334		

## 謝 辞

発掘調査にあたっては、下記の方々には作業に従事していただいた。お名前を記して心から感謝の意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

青木敏子、青柳君代、赤羽規仁、秋山友衛、阿久澤利夫、阿部悟、天笠正義、新井隆、新井敏夫、  
荒木孝一、安藤良治、飯島清、飯島タイ子、池田清、池田登志夫、池田由紀子、石坂万寿男、石原伸一、  
伊豆礼子、岩上幸子、上原けさ江、内田宏、遠藤逸子、及川信雄、大川悦子、大澤裕子、大島けさみ、  
大島伸子、尾内秋雄、片山信治、狩野喜美枝、狩野光子、榎澤菊司、川上富士枝、川鍋卓、菊池金雄、  
菊池幸子、菊池静枝、喜多正治、久保田愛次、久保田祐弘、栗原かず江、黒岩義夫、桑原和子、小林泉、  
小林一也、小林昭昭、小林真枝、小武海めぐみ、小原玉喜、斎藤和代、斎藤慶一、佐藤久美子、  
佐藤初子、澁谷朱美、清水里子、正田和男、正田幸子、白石悦子、白石始、菅谷浅吉、鈴木和子、  
鈴木武夫、関根秋子、関矢玉枝、台善之、瀧亀三郎、高橋次男、高橋正彦、高橋幸男、高橋洋子、  
田川真知、竹内厚子、竹内三朗、田島祐一、多田ひさ子、田村勇、田村富男、千木良米吉、塚越金次郎、  
戸崎佛雄、富田完三、土居昭五郎、内藤猛秀、中良雄、中澤忠三郎、中沢緑、中島玉恵、中村賢一、  
中村浩子、中村兵三、中山定夫、奈良親江、新島政藤、西倉昭正、新田弘、萩原崇伸、萩原秀子、  
秦野新平、浜名敏子、原沢純子、平井公平、平野ミツ子、福島澄子、藤井実、藤掛榮也、干川孝明、  
星野佳子、堀越晴子、本多和子、本間多津子、松岡英子、松岡久、松田恵子、松田はつ子、松原三友、  
松村富夫、松村志津子、宮島千寿子、武藤喜平、村岡理一、持田金敏、森村輝雄、森本孝三、  
八木田泰三、八木原敬三、八木原節子、矢島とく江、山田美由紀、山中五雄、山野内圭子、山本正司、  
横澤美枝子、横堀永子、吉田寛、吉田静江、四日市恵、渡邊安明

## 第1章 発掘調査の方法と経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

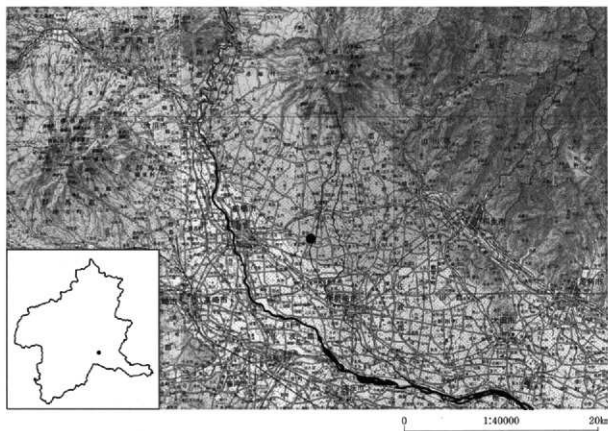
建設省(現、国土交通省)関東地方建設局と群馬県教育委員会及び前橋市教育委員会は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する事前協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長並びに群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、1999(平成11)年4月1日に「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財調査(その1)の実施に関する協定書」を締結し、今井道Ⅱ遺跡～荻野Ⅱ遺跡に至る上武道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画を決定した。

この協定を踏まえて同日に関東地方建設局長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、1999(平成11)年度の発掘調査受委託契約を締結し、富田細田、富

田宮下、富田西原遺跡を調査地とする上武道路関連の埋蔵文化財発掘調査がスタートした。

なお、一般国道17号(上武道路)改築工事7-2工事区域は、同様にして国土交通省関東地方整備局と群馬県教育委員会及び前橋市教育委員会による事前協議を行い、2001(平成13)年度に群馬県教育委員会文化財保護課が事業地内の試掘・確認調査を実施した。

これに基づいて国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長並びに群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、2002(平成14)年4月1日に「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財調査(その2)の実施に関する協定書」を締結し、上武道路7-1工事区に引き続き荻野Ⅱ遺跡～上泉唐ノ堀遺跡に至る埋蔵文化財発掘調査事業を実施した。

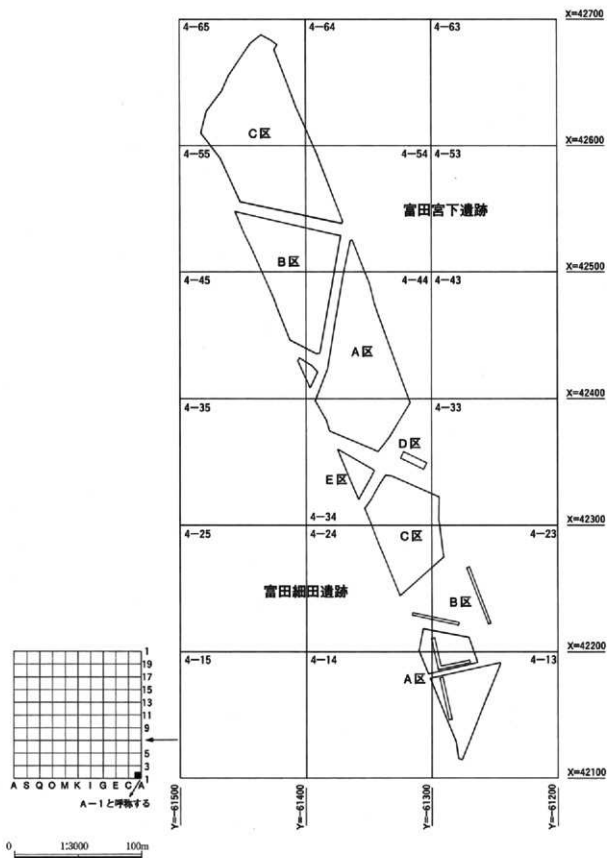


第1図 富田細田遺跡・富田宮下遺跡の位置



第2図 富田細田遺跡・富田宮下遺跡のグリッド設定図





第3図 富田細田遺跡・富田宮下遺跡の調査区設定図

## 第2節 発掘調査の方法

## 1 調査区の設定

発掘調査区は、前橋市富田町に所在する。富田細田遺跡の調査区は第3図に示したよう現在の道路・水路で分けて、南南東から北北西に向かって、A・B・C・D・E区と呼称した。富田宮下遺跡の調査区でも、現在の道路・水路で分けて、南からA・B・C区と呼称した。

## 2 グリッドの設定

遺構・遺物等の記録については、国家座標第IX系を用いたグリッド設定を行い、測量図化した。国家座標(旧座標)第IX系の原点は、北緯36°00'00"、東経139°50'00"(千葉県野田市)である。本遺跡の起点座標値(13A-1グリッド)は、X=42,100、Y=-61,200である。

グリッドの設定にあたっては第2図のよう前橋市今井町から上泉町にいたる上武道路路線上に1,000m四方の大グリッドを設定した。富田細田・宮下の両

遺跡は大グリッド4に含まれる。次に大グリッドを100m四方の区画に区切り中グリッドとし、南東隅から1から100までの呼称とした。さらに、この中グリッドを一边5m四方で等分し、この区画をグリッドとした。区画の呼称方法は、中グリッドの南東隅を起点としてX軸は南から北へ算用数字の1から20を、Y軸は東から西へアルファベットのAからTを用いた。

## 3. 調査の方法

(1) 表土掘削及び火山灰・洪水砂等の遺構面被覆層の除去は、調査の効率化を図るため、大型掘削機械で行い、排土の運搬についてはダンプトラックとキャタピラー式のクローラダンプを使用した。

(2) 遺構の名称は、調査区ごと、遺構の種別ごとに通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位、グリッド単位を基本とし、現位置をとどめるものについては、その都度番号を付し、図面上に記録した。報告においても調査時の呼称を踏襲したため欠番が生じている。

第1表 上武道路発掘調査遺跡一覧(7工区その1)

遺跡略号	遺跡名	調査区	調査担当者	調査期間
J K 36 B	今井道上Ⅱ遺跡		飯塚卓二・小島敦子・今泉晃・佐藤理重	13. 4. 1～14. 3. 31
		未収地	割口正史・新井英樹	14. 6. 1～14. 9. 10
J K 37	荒砥北三本堂Ⅱ遺跡	1区	新倉明彦・亀山幸弘・(小宮山達雄)	12. 4. 3～12. 9. 30
		2区	飯塚卓二・小島敦子・今泉晃・佐藤理重	13. 4. 1～14. 3. 31
		3区	石塚久則・小島敦子・関根慎二・金子伸也・池田政志・金井仁史・今泉晃・(前田和昭)	12. 4. 3～13. 3. 31
J K 38	荒砥北原Ⅱ遺跡	1区	小島敦子・今泉晃	13. 4. 1～14. 3. 31
		2・3区	小島敦子・関根慎二・池田政志・金井仁史・今泉晃・(前田和昭)	12. 4. 3～13. 3. 31
J K 39	荒砥前田Ⅱ遺跡	1区	小島敦子・今泉晃	13. 4. 1～14. 3. 31
		2・3区	石塚久則・小島敦子・関根慎二・金子伸也・池田政志・金井仁史・今泉晃・(前田和昭)	12. 4. 3～13. 3. 31
		4区	田村公夫・今井和久・平方篤行・関部豊	14. 7. 1～15. 2. 4
J K 40	富田細田遺跡	A～D区	児島良昌・津島秀幸・山村英二	11. 4. 1～11. 9. 30
		E区	徳江秀夫・新井英樹	11. 4. 1～13. 3. 31
J K 41	富田宮下遺跡		飯塚卓二・児島良昌・津島秀幸・山村英二・久保学・石田真・西原和久・(黒澤はるみ・小宮山達雄)	11. 8. 2～12. 3. 31
		未収地	中沢清・坂口一・徳江秀夫・根岸仁・新井英樹・西原和久	12. 4. 3～13. 3. 31
J K 42	富田西原遺跡		女屋和志雄・安藤剛志・青木さおり	11. 9. 1～12. 3. 31
J K 43	富田高石遺跡		飯塚卓二・女屋和志雄・安藤剛志	12. 4. 3～13. 3. 31
		未収地	女屋和志雄・青木さおり	13. 4. 1～13. 9. 30
		未収地	割口正史・新井英樹	14. 4. 1～14. 7. 5
J K 44	富田津田遺跡		飯塚卓二・女屋和志雄・木津博明・児島良昌・田村公夫・安藤剛志	12. 4. 3～13. 3. 31
		田石勝	女屋和志雄・木津博明・吉田和夫・青木さおり	13. 4. 1～14. 3. 31
		未収地	割口正史・新井英樹	14. 4. 1～14. 5. 15
J K 45	富田下大日遺跡		木津博明・児島良昌・田村公夫	12. 4. 3～13. 3. 31
		未収地	木津博明・吉田和夫	13. 4. 1～14. 3. 31
J K 46	江木下大日遺跡		女屋和志雄・割口正史・木津博明・吉田和夫・新井英樹・高橋弘道・青木さおり	13. 4. 1～14. 3. 31
		未収地	割口正史・新井英樹	14. 8. 1～14. 10. 25

- (3) 遺物の注記は、遺跡略号、調査区名、調査面、遺構名またはグリッド名などを記入した。
- (4) 測量については、水田遺構は、業者委託し、気球による航空測量を実施した。他の遺構測量については、業者、作業員に指示し、平板測量を行い、1/20、1/40、1/100縮尺図を作成した。
- (5) 作成した遺構実測図には、遺構名・実測図名・縮尺・実測者名・レベル高・ベンチマークの高さ・作成年月日を記入し、調査区・調査面・遺構単位で1枚ごとに通し番号を付した。
- (6) 写真撮影には、35mm版と6×7インチ版カメラのモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用した。水田跡の全景写真撮影は、気球による空中写真撮影を行った。
- (7) 撮影したフィルムは現像処理し、モノクロはベタ焼きを行った。ベタ焼きはネガ検査台紙に調査区、調査面、遺構ごとに貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・フィルム番号を記録した。リバーサルフィルムはコマごとに遺跡名・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、通し番号を付した。
- (8) 富田細田・宮下遺跡ともに自然科学分析を実施した。その分析結果は第5章に掲載した。

### 第3節 発掘調査の経過

#### 1 遺跡名について

調査を開始するに当たり、遺跡の命名については群馬県埋蔵文化財調査事業団の方針に則り、遺跡地の大字名である富田町の「富田」に各々の小字名である「細田」「宮下」を付し、「富田細田」「富田宮下」遺跡とした。

ところで富田宮下遺跡の一部、B区については1980(昭和55)年に前橋市教育委員会が、前橋市土地改良事業実施地区(富田南部)ならびに新農業構造改善事業実施に係わる調査を実施した時の調査区と一部が重複している。その時の遺跡名称は、富田遺跡群中の「宮下遺跡」である。先行調査歴を踏まえれば、本調査区については宮下遺跡の別地点として遺跡名を命名するべきであった。本報告にあたり、

事業時の名称を改訂すべきとも考えたが、発見届けをはじめとした事業団取り扱い文書の一切において「富田宮下遺跡」の名称を使用したこともあり、今回は表記遺跡名で報告する。しかしながら「宮下遺跡」と「富田宮下遺跡」の両者は、調査の調査内容、立地等の点からみても明らかに同一の遺跡である。

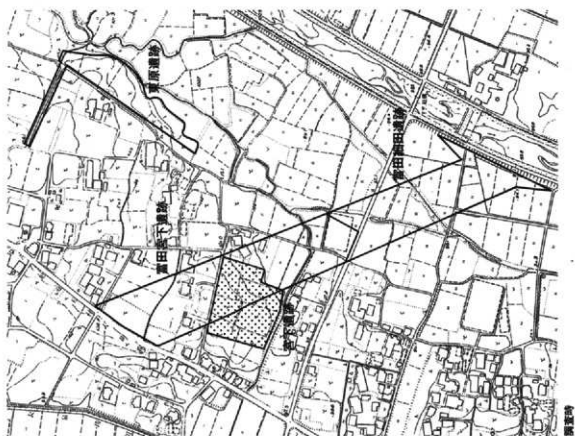
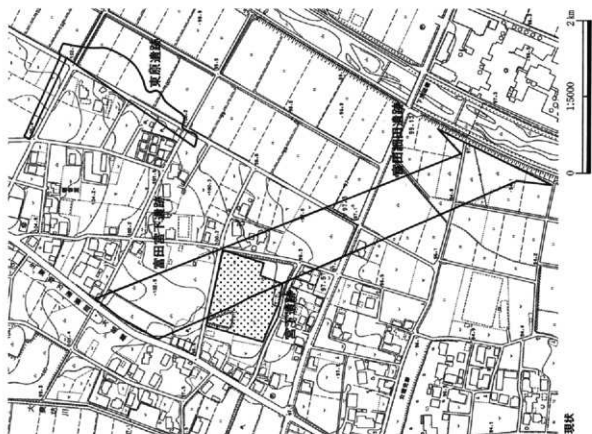
#### 2 富田細田遺跡

本遺跡の調査は、調査担当3名で、平成11年4月上旬から調査準備に入った。4月15日より、調査区を設定し重機による表土掘削作業を開始した。調査事務所は、調査区内(C区北部)に設けた。調査は、まず、富田細田遺跡A区から開始し、順次、B区、C区、D区と進めていくことにした。

4月19日から作業員を入れて本格的な調査をA区で開始した。A区では表土掘削後に鉤塵による精査作業を行ったが、遺構は確認できなかった。更に2箇所においてトレンチ試掘調査を行い、土層断面を観察したが、遺構は確認できなかった。A区西側約180mの箇所で見つかった女堀跡を現地形で確認することができ、A区においても女堀の検出が予想された。しかし、A区は荒砥川の氾濫原のため砂層や砂礫層が厚く堆積していて、女堀の遺構は確認できなかった。B区でも同様に2箇所においてトレンチ試掘調査を行ったが、遺構は確認できなかった。

5月10日にC区でトレンチ試掘調査を行い、土層中にAs-B軽石層と古代の洪水層を確認し、少なくとも2面の調査が必要であるとわかった。5月11日からC区南半分で重機による表土掘削作業を行った。5月12日から第1調査面のAs-B下水田跡の精査作業を行った。南北方向と東西方向に走る畦畔を確認した。C区西部では中世から近代まで使用された溝3条を発見した。また、C区南東部で掘立柱建物跡1棟を確認した。また、As-B混土で埋もれた数条の溝を確認した。6月3日に業者に委託し、空中写真撮影と航空測量を実施した。

6月8日からC区南半分で第2調査面に着手した。As-B下黒色粘質土(耕土)とその下位に堆積する洪水砂層を重機によって除去した。洪水砂層下からは



第4図 富田線・富田地下道線・富田駅調査区の位置

水田跡を確認した。また、洪水砂で埋もれた溝・土坑を確認した。7月23日に空中写真撮影と航空測量を実施した。7月28日に基本土層断面の実測と注記を行った。

富田宮下遺跡B区に調査事務所を移転した後、8月9日からC区北半分の表土掘削を開始した。8月23日から鋤簾による精査作業を再開した。C区南半分で確認した中世から近代までの溝の続きやAs-B下水田跡を確認した。9月14日に空中写真撮影と航空測量を実施した。

9月16日から第2調査面の洪水砂層下水田跡の精査作業を行った。9月28日には業者に委託し、自然科学分析の試料採取を行う。9月30日に空中写真撮影と航空測量を実施した。

空中写真撮影後、C区で10m四方のグリッドを5箇所に設定し、第3調査面のAs-C混水田跡等の確認作業を試みた。南側でAs-Cに覆われた粘質土を確認したり、北側で古代の洪水層に覆われた粘質土を確認したが、第3調査面では水田跡等は確認できなかった。10月19日にC区の調査を終了した。

12月9日からD区の調査を開始した。D区ではC区の調査からAs-B下水田跡等の遺構の存在が予想された。効率的に調査を進めるためD区ではトレンチ試掘調査を行った。東西南北の各壁で土層断面を実測し、写真撮影を行った。土層断面でC区で確認した中世以降の溝の続きを確認した。As-B下に黒色粘質土が堆積していて、水田耕土として利用された可能性が高いと言える。しかし、古代の洪水層の堆積は認められず、C区で確認した洪水層下水田跡は確認できなかった。

E区については用地買収後、2000(平成12)年度に調査を行った。11月27日から表土掘削作業を開始した。第1調査面でAs-B下水田跡を確認した。12月5日に航空測量を実施した。

12月7日からC区の洪水層下に相当する第2調査面に着手した。12月13日に空中写真撮影と航空測量を行った。

12月15日からAs-B層とAs-C混土層間の第3調

査面に着手した。溝5条と土坑1基を確認した。

平成13年1月13日には下位面の調査を進め、E区の一部で高の痕跡を確認した。高跡の精査作業で耕作時のサクの痕跡を確認した。

1月22日からAs-C混土上面・下面の調査を開始した。2月6日に第3調査面以下の空中写真撮影と航空測量を実施した。2月20日に調査を終了した。

### 3 富田宮下遺跡低地部

宮下遺跡A区の調査は、平成11年6月29日から開始し、重機による表土掘削作業を行った。A区低地部では8月9日から第1調査面、As-B下水田跡の確認作業を行った。

第1調査面では、As-B混土で埋もれた溝9条と溜井2基を確認した。更にAs-B下水田跡を確認した。As-B下水田跡は畦畔の残存状況が悪く、南北方向で水田面の高低差を確認する程度であった。9月1日に空中写真撮影と航空測量を実施した。

富田宮下遺跡A区ではその洪水層が認められず、洪水層下水田跡はないと判断した。10月12日からAs-C混土の上面・下面で遺構確認作業を試みた。鋤簾による精査作業を行ったが、遺構は確認できなかった。11月18日に空中写真撮影を行い、A区低地部の調査を終了した。

### 4 富田宮下遺跡台地部

本遺跡台地部の調査は、諸準備の後、平成11年5月20日にB区の調査区を設定し、調査担当2名で開始された。

調査は、B区北端の調査事務所設営部分を先行して実施した。表土の掘削・除去、土層の確認を実施、6月16日から当該部分の旧石器調査を開始、7月中旬でこれを終了した。

また、7月中旬からはC区の表土掘削・除去を開始、合わせて遺構確認作業を開始した。8月に入り、遺構確認調査を本格的に開始した。調査は道路状遺構の検出を皮切りに調査区北側から南西部分に向かって進めた。以後C区の調査は11月中旬まで継続した。遺構確認作業の結果、調査区の北端、主要地方道藤岡大胡線寄りの25m幅部分は、縄文時代以降の

## 第1章 発掘調査の方法と経過

土層が削平されていることが確認されたため、8月下旬から10月下旬まで旧石器の試掘調査を行った。

10月に入ると調査体制は5人となり、12日からA区台地部分とB区調査事務所以南の表土掘削、遺構確認作業を開始、10月22日からはA区の遺構調査を、11月9日からはB区の調査を開始した。B区の調査は2月10日に空中写真の撮影後、細部の掘り下げ、測量を済ませ終了した。

12月以降は調査体制が7人となる中、A・B区とも旧石器の試掘調査と並行して諸遺構の調査を実施、3月末までにB区全体とA区44グリッド11ライン以南について調査を終了した。

2年次の調査は、平成11年4月5日に再開した。4月12日からはC区の土坑、柱穴を中心とした遺構確認調査を継続して進めた。また、堅穴住居等の調査を継続して進めた。

5月25日からは用地買収の進展を待っていたA区44号グリッド11ライン以北の表土掘削・除去を行った。

6月19日からは、用地買収が終了したB区44-T-4グリッド周辺の小対象地の調査を行い、8月4日に作業を完了させた。

8月8日からはA区44グリッド11ライン以北の遺構確認作業を開始、15号・16号溝をはじめとする遺構検出作業を進め、10月24日の空中写真、その後の測量作業を経て11月21日に上面の調査を終了した。

C区では76号住居周辺における地割れ等の検出作業と並行し、10月10日から北側部分で旧石器の試掘

調査を開始した。以後、平成12年度下半期は旧石器調査が主体となった。C区の旧石器調査は、3月20日まで継続した。A区44グリッド11ライン以北の旧石器調査は平成13年1月15日から3月8日までの間実施した。

3月20日には各調査区の埋め戻しを完了、調査対象地を旧状に覆した。

記録類、用具類の整理後、3月28日に調査事務所の撤収、3月29日に富田宮下遺跡に係わる調査の全てを終了した。

なお、平成12年9月30日には一般県民を対象とした現地説明会を実施した。

## 第4節 「調査面」と「面」

富田細田遺跡・富田宮下遺跡低地部の調査区は、現有道路や用水路を挟み、各調査区の様相は様々である。本報告では、重層的に確認された遺構「調査面」を層序・遺物等から検討して時期の分離を行い、「面(第1～6面)」ごとに記載している。ただし、富田細田遺跡A・B区については、調査対象となる時代の遺構が確認できなかったため、下記の表には記載していない。なお、ここでいう「調査面」「面」は以下の通りである。

「調査面」：調査工程上、実際の調査に関わる確認面。火山灰層や洪水層等を鍵層とし、旧地表面が純粋に鍵層に覆われている地点もあるが、地点によっては上面からの遺構の掘り込みが認められる。そのため複数の時代の遺構が同時に確認されている。

第2表 富田細田遺跡・富田宮下遺跡低地部遺構確認面対照表

調査面	面	時代・時期	富田細田遺跡			富田宮下遺跡
			C区	D区	E区	A区低地部
1面	第1面	中・近世 中世以降	掘立柱建物、土坑、溝	溝		掘井、溝
	第2面		古代末～中世			
	第3面	平安時代	As-B下水田	As-B下水田	As-B下水田	As-B下水田、溝
2面	第4面	奈良～平安	奈良～平安時代1 土坑、ピット、溝		溝	
	第5面		奈良～平安時代2 洪水層下水田		土坑、擬似島	
3面	第6面	古墳	遺構なし	遺構なし	遺構なし	遺構なし

「面」：「調査面」で確認された遺構の時期を検討し、「調査面」からの分離を行った。報告では新しい時期から古い時期に向かって、第1面から第6面までの数字を設定した。各「面」は、同時性が確認できる場合もあるが、多くはある程度の時間幅があり、その幅も一定ではない。

「調査面」「面」の対応関係は第2表の通りである。

## 第5節 基本土層

表土及び排除する土層を掘削するたびに土層の堆積状況を観察した。その結果、本遺跡周辺は圃場整備のため、調査区でAs-A軽石は、現耕作土に働き込まれていた。第5図は、富田細田遺跡と富田宮下遺跡(低地部)の基本土層をまとめて模式図にしたものである。なお、富田細田遺跡と富田宮下遺跡(低地部)の各地点における基本土層は、第3章第2節に掲載したので、参照されたい。

I層は、現耕作土で灰褐色土あるいは褐色土である。現状は水田あるいは桑園で、一部が宅地である。II層は、にぶい褐色土で白色軽石や明黄褐色粒子を含む。III層は、褐色土で白色軽石を含み、粘性や締まりが少々ある。IV層は、As-B軽石や白色軽石を含む黒褐色土である。V層は、にぶい橙色の火山灰である。V層は、As-A軽石を含む上位の土層とAs-B軽石を含む下位の土層の間にある。層序からV層は、浅間一泊川テフラ(As-Kk)と考えられる。層序として確認できたのは、富田細田遺跡C・D・E区である。VI層はAs-B軽石層である。富田細田遺跡C・D・E区と富田宮下遺跡A区の一部でAs-B軽石の一次堆積が確認された。富田宮下遺跡A区では全体にAs-B軽石の残存状態が悪く、一次堆積の状態をとどめる所は少ない。VII層は、黒色粘質土のAs-B軽石下水田耕土であり、しまり・粘性がある。VIII層は、灰黄色砂質土で洪水砂や黄色軽石、明黄色粒子を含む。IX層は、洪水砂とVIII層の混土である。X層は、IX層は富田細田遺跡D区で確認された。XI層は、洪水砂層でにぶい黄褐色土である。古代における河

川の洪水・氾濫等によるものと考えられる。XI層は、褐色土で角閃石を含む白色軽石(FP)を含み、X層とXIII層の混土である。XII層は、XI層に類似し、XI層より洪水砂を多く含む。XIII層は、灰白色砂層で富田宮下遺跡A区で確認され、洪水層と考えられる。XIV層は、灰褐色土で白色軽石(FP)を含み、しまり・粘性が中位の土層である。XV層は、灰褐色土であり土層中に洪水砂(親指大)をブロック状に含む。XVI層は、黒色粘質土でしまりが強い。XVII層は、As-C軽石を多く含む黒褐色土である。富田細田遺跡E区では、この土層中で噴砂の水平方向の堆積が確認された。噴砂は、地震に伴って形成されると推定されてきた現象である。XVIII層は、As-C軽石の一次堆積層である。XIX層は、黒褐色土で粘性は弱いがしまりが強い。XX層、灰褐色砂泥土で粘性は弱いがしまりが強い。

ところで、富田細田遺跡A・B区は荒砥川に近く、その土層には砂礫層が堆積し、古代より荒砥川の影響を強く受けていることがわかる。よって、富田細田遺跡A・B区の基本土層は、ここに掲載する基本土層と異なり、第3章第2節で詳しく提示する。

I層	表土
II層	にぶい褐色土
III層	褐色土
IV層	黒褐色土
V層	粕川テフラ
VI層	As-B軽石
VII層	黒色粘質土(As-B下耕土)
	V層 灰黄色砂質土
	IX層 灰褐色土
X層	洪水砂
XI層	褐色土
XII層	黄褐色土
XIII層	灰白色砂
XIV層	灰褐色土
XV層	灰褐色土
XVI層	黒色粘質土
XVII層	As-C混土
XVIII層	As-C軽石
XIX層	黒褐色土
XX層	灰褐色土

第5図 富田細田遺跡・富田宮下遺跡基本土層模式図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 位置と地理的環境

富田細田遺跡・富田宮下遺跡は、前橋市東南部、富田町に位置し、J R 両毛線の駒形駅から北北東に約3.2kmの距離に位置する。

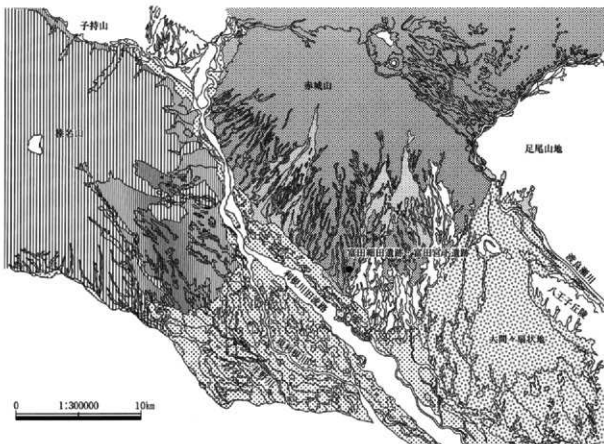
前橋市南東部は、群馬県中央部に位置する赤城山南麓に形成された扇状地の端部にあたる。南麓を流下する主な河川は、西から荒砥川、宮川、江龍川、神沢川などである。赤城山南麓の端部は、中小の河川や台地端部からの湧水により樹枝状に同析が進み、丘陵性の台地と南北に長い沖積地が複雑に入り組んだ地形が形成されている。

富田細田遺跡は、荒砥川の右岸に位置し、地形的には荒砥川により形成された沖積地にあたる場所で

ある。標高は95m前後である。荒砥川に沿って圃場整備が行われ、現在、形の整った水田が広がっている。

富田細田遺跡の北側に隣接する富田宮下遺跡は、東を荒砥川、西を大泉坊川によって形成された谷地に区切られた舌状台地の南端近くに位置する。同遺跡は、南から荒砥川右岸の低地部およびローム台地に移行する微高地部分から、更にローム台地の頂部に相当する場所である。ローム台地頂部の標高は約100mである。調査以前は、桑園や畠で、一部が宅地になっていた。

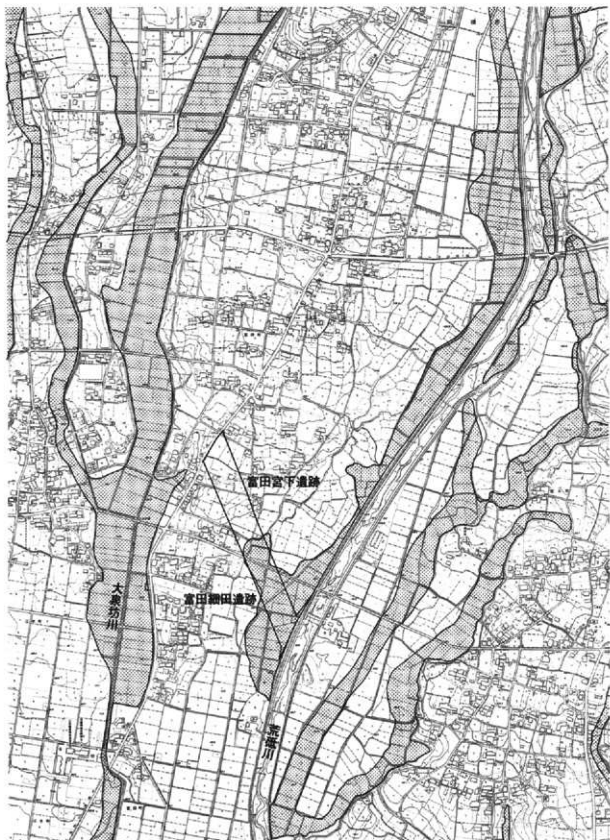
荒砥川周辺の基盤層は、赤城山を起源とする泥流層である。地表面はローム台地の原形面、砂壤土からなる微高地、沖積地に分類される。



『群馬県史』通史編付図を簡略化した「荒砥上ノ坊遺跡I」を再編集

第6図 群馬県中央部の地形と富田細田遺跡・富田宮下遺跡





0 1:10000 500m

第7図 富田縄田遺跡・富田宮下遺跡周辺の地形

## 第2章 遺跡の位置と環境

沖積地では、平安時代末、1108(天仁元)年の浅間山の噴火を起源とする浅間B軽石(As-B)、6世紀初頭の榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)、4世紀中葉とされる浅間C軽石(As-C)などのテフラの堆積が周辺の遺跡で確認されている。

ローム台地は、浅間山を起源とする板鼻黄色軽石(As-YP)・板鼻褐色軽石(As-BP)や、榛名山二ツ岳起源の榛名八崎軽石(Hr-HP)などのテフラが堆積している。

## 第2節 歴史的環境

富田細田遺跡・富田宮下遺跡の周辺では、県営圃場整備事業荒砥北部地区に係わる事業や一般国道17号(上武道路)改築工事等に伴い、多くの遺跡が発掘調査されている。ここでは、遺跡の位置する富田町を中心として、その周辺の主な遺跡の分布を略述する。荒砥川以西については現時点で地域内の遺跡分布の在り方を正しく反映させるほどの調査事例が多くない。

### 1 旧石器時代

この地域における旧石器時代の遺跡は、近年、規模は様々であるが、幾つかの遺跡が確認されている。

窟屋型彫器を伴う細石刃や細石刃核が出土した頭無遺跡、始良丹沢火山灰(AT)降下以前のナイフや槍先形尖頭器、剥片が出土した柳久保遺跡群が確認されている。二之宮洗橋、二之宮谷地、今井道上・道下の各遺跡では、始良丹沢火山灰(AT)降下以前の石器群や槍先形尖頭器を伴う時期の石器群が確認されている。

### 2 縄文時代

縄文時代前期とともに中期の遺跡数が増加している。荒砥宮田遺跡、荒砥北原遺跡、下鶴谷遺跡で前期の住居跡が確認されている。荒砥北原遺跡、今井白山遺跡等で中期の住居跡が確認されている。草創期や早期の遺跡数は少なく、資料が断片的である。この時期の主な遺跡は、柳久保遺跡群である。

### 3 弥生時代

中期後半から後期の住居の確認が報告されている。

これらの弥生時代の遺跡は、沖積地を臨む台地縁辺や微高地に立地している。中期後半の遺跡としては、荒口前原遺跡、荒砥宮川遺跡、鶴谷遺跡群、頭無遺跡等があげられる。後期の遺跡としては荒砥大日塚遺跡があげられる。

### 4 古墳時代

古墳時代前期の遺跡は、遺跡の分布は弥生時代後期の遺跡分布に比べ、濃密な分布状況になる。集落遺跡の分布は荒砥地域ほぼ全域に及んでいる。集落は、小河川に沿って、あるいは小河川の合流点を臨む台地縁辺部や沖積地の谷頸周辺に立地している。

本遺跡の対岸の荒砥川右岸では、荒砥宮田遺跡、諏訪遺跡、荒砥諏訪西遺跡が分布する。上流域には北原遺跡、丸山遺跡があり、下流域に荒砥前田Ⅱ遺跡、荒砥北原遺跡があり、多くの住居が確認されている。

荒砥川右岸では本遺跡に匹敵するような大規模集落はまだ発見されていない。大泉坊川流域では富田西原遺跡、富田高石遺跡がある。

その他、多数の住居が確認された遺跡として、宮川上流域では柳久保遺跡がある。江龍川下流域では荒砥上之坊遺跡がある。

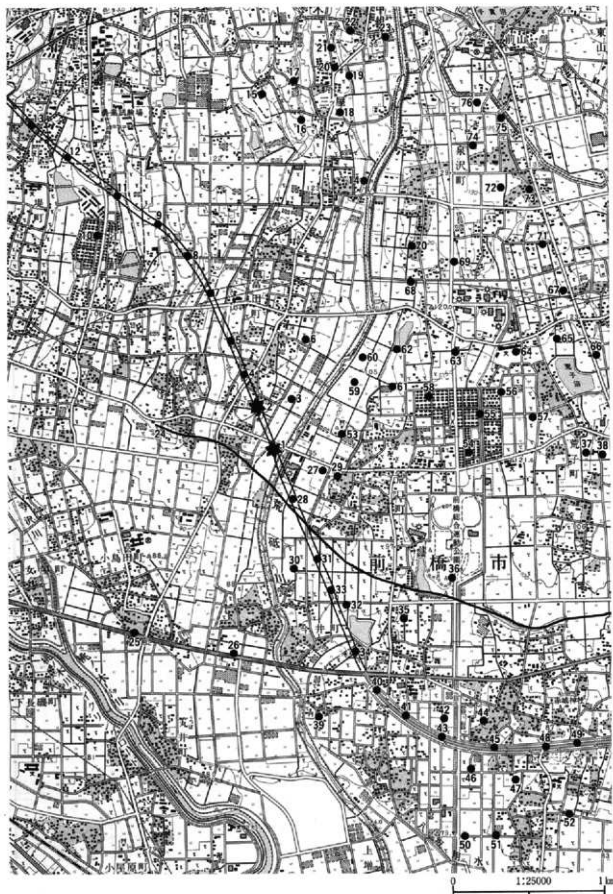
二之宮千足遺跡や二之宮宮下東遺跡では浅間C軽石に埋没した水田が確認されている。荒砥天之宮遺跡や荒砥宮川遺跡の微高地域上では浅間C軽石を動き込んだ畠が確認されている。

前期の集落のうち多くは古墳時代中・後期の遺跡に継続し、「伝統集落」となる。それとともに新たな地点に遺跡が分布するようになる。荒砥天之宮遺跡や荒砥北三木堂遺跡などに代表される集落である。荒砥天之宮遺跡では、溜井掘削によって人為的に湧水を利用するといった報告がされている。

また、荒砥荒子、梅木、丸山遺跡では、古墳時代中期の方形区画の堀が確認され、首長層の居宅と考えられている。

### 5 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代からの遺跡が継続し、更に周囲に拡大している。小河川沿いの台



第8図 富田細田遺跡・富田宮下遺跡周辺の遺跡分布

第2章 遺跡の位置と環境

第3表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	住居跡					その他の遺構	遺跡の概要
			弥生	古墳	奈良	平安	中世		
1	富田畑田遺跡	前橋市富田町						As-B下木田、洪水層下木田	本報告の遺跡
2	富田宮下遺跡	前橋市富田町	○	○	○	○		旧石器、As-B下木田	本報告の遺跡
3	東原遺跡	前橋市富田町			○	○		縄文住居、中世墳墓群、寺院	古墳7
4	富田西原遺跡	前橋市富田町	○	○				旧石器、As-B下木田	
5	富田高石遺跡	前橋市富田町		○	○	○			前方後方形形周溝墓1
6	おとうか山古墳	前橋市富田町		○					古墳1
7	富田津田遺跡	前橋市富田町		○	○	○		平安須器工房跡、煎所、As-B下木田	
8	富田下大日遺跡	前橋市富田町		○	○			縄文住居	古墳1
9	江木下大日遺跡	前橋市江木町		○	○	○		旧石器、縄文住居	
10	萱野遺跡	前橋市江木町		○	○	○		縄文中期住居、古墳	
11	萱野Ⅱ遺跡	前橋市江木町		○	○	○		旧石器、縄文前・中期住居	古墳2(7世紀)
12	境沼上遺跡	前橋市境町		○	○				
13	鳥島坂上遺跡	前橋市鳥島町		○				縄文住居、中世道状遺構	
14	稲荷前遺跡	前橋市茂木町		○					
15	大日遺跡	前橋市茂木町			○	○			
16	稲荷窪A地点遺跡	前橋市茂木町		○	○			縄文中期住居	
17	稲荷窪B地点遺跡	前橋市茂木町		○		○	○	縄文中・後期住居	
18	山神遺跡	前橋市茂木町		○	○	○	○	縄文後期住居	
19	小林遺跡	前橋市茂木町		○	○	○	○	中・近世道状遺構	
20	茂木山神Ⅱ遺跡	前橋市茂木町		○	○	○		縄文中期住居	
21	藤島家遺跡	前橋市茂木町			○			縄文中期住居	
22	西小路遺跡	前橋市茂木町		○		○		縄文中期住居	
23	上ノ山遺跡	前橋市茂木町		○		○	○		方形周溝墓、古墳7
24	女塚遺跡	前橋市富田町他						未完成の用水跡	
25	箕井八日市遺跡	前橋市小島田町・箕井町		○				As-B下木田	古墳時代中期の方形区画跡
26	今井白山遺跡	前橋市今井町		○	○	○		縄文中期住居	
27	寛紙前田遺跡	前橋市寛口町						平安洪水層下木田	
28	寛紙前田Ⅱ遺跡	前橋市寛口町		○			○	平安洪水層下木田、中世洪水層下木田2面	
29	寛口前原遺跡	前橋市寛口町		○	○				弥生は中期後半
30	寛紙北原遺跡	前橋市今井町		○				縄文前・中期住居	方形周溝墓2
31	寛紙北原Ⅱ遺跡	前橋市今井町						縄文遺物包含層	
32	寛紙北三木堂遺跡	前橋市今井町		○	○	○		縄文前期住居、中世墓坑	円形周溝墓1、古墳1
33	寛紙北三木堂Ⅱ遺跡	前橋市今井町		○			○	旧石器、As-C下木田、As-B下木田・島	
34	今井道上Ⅱ遺跡	前橋市今井町		○				旧石器、縄文前期住居	
35	寛紙大日塚遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○		As-B下木田	
36	鶴ヶ谷遺跡群	前橋市莞子町・寛口町・二之宮町		○	○	○		中世墳墓	
37	寛紙中屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡	前橋市莞子町		○	○			平安小鍛冶	
38	寛紙下押切Ⅰ・Ⅱ遺跡	前橋市莞子町		○	○	○			古墳1
39	今井神社古墳群	前橋市今井町		○	○	○			今井神社古墳(5世紀後半)他、古墳3
40	今井道上・道下遺跡	前橋市今井町		○	○	○	○	平安小鍛冶、中・近世道路状遺構	古代方形区画溝
41	二之宮谷地遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○		奈良・平安層片、As-B下木田	
42	寛紙洗橋遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○		As-B下木田	
43	二之宮洗橋遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○			
44	寛紙宮西遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○			
45	二之宮千足遺跡	前橋市二之宮町			○	○	○	古代小鍛冶、中世墓坑	As-C下木田以降7期の木田
46	寛紙宮川遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○	○	As-C下木田、As-B下木田	古墳1

番号	遺跡名	所在地	住居跡					その他の遺構	遺跡の概要
			弥生	古墳	奈良	平安	中世		
47	荒砥天之宮遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○		As-B下水田、奈良御井	
48	二之宮宮下西遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○	○	中・近世墓坑	
49	二之宮宮下東遺跡	前橋市二之宮町		○	○	○	○	As-C下島、平安島	
50	荒砥宮原遺跡	前橋市下増田町		○					古墳2（5世紀後半）
51	荒砥島原遺跡	前橋市二之宮町	○	○	○	○		As-B下水田	方形周溝墓6、弥生は中期後半
52	荒砥青柳遺跡	前橋市二之宮町			○	○			
53	荒砥宮田遺跡	前橋市荒口町		○	○	○	○	縄文前期住居、As-B下水田	方形周溝墓1、古墳1
54	下船谷遺跡	前橋市鶴が谷町			○	○		縄文前期住居、古代灰窯	
55	柳久保遺跡群	前橋市鶴が谷町		○	○	○		旧石器、縄文早期	古墳2
56	中鶴谷遺跡	前橋市鶴が谷町		○	○	○			古墳1
57	須無遺跡	前橋市荒子町	○	○	○			旧石器	
58	諏訪遺跡	前橋市鶴が谷町						As-B以前の溝	前橋市教委調査
59	荒砥諏訪西遺跡	前橋市荒口町		○			○	As-C下島、As-B下水田	古墳3
60	諏訪西遺跡	前橋市荒口町		○					古墳2（時期不明）
61	荒砥諏訪遺跡	前橋市荒口町						As-B以前の溝	方形周溝墓
62	諏訪遺跡	前橋市荒口町						As-B以前の溝	県教委調査方形周溝墓13基
63	大久保遺跡	前橋市荒子町		○	○	○			
64	荒子小学校校庭遺跡	前橋市荒子町		○	○	○		古代須恵器窯跡	
65	川籠坪戸遺跡	前橋市荒子町				○			円形周溝墓
66	堀東遺跡	前橋市荒子町				○		平安小鍛冶	方形周溝墓2
67	上原遺跡	前橋市下大塚町			○	○		基礎建物、獨立柱建物	勢多部所と付属寺院と推定される遺跡
68	北原遺跡	前橋市泉沢町		○	○				円形周溝墓
69	新山遺跡	前橋市泉沢町							方形周溝墓2、古墳3
70	丸山遺跡	前橋市泉沢町		○					円形周溝墓、古墳時代中期居宅
71	向原遺跡	前橋市泉沢町		○	○	○			
72	東前田北遺跡	前橋市泉沢町		○				中・近世塚	
73	東原西遺跡	前橋市泉沢町		○					
74	寺前遺跡	前橋市泉沢町		○					
75	寺東遺跡	前橋市泉沢町		○					
76	谷津（泉沢谷津）遺跡	前橋市泉沢町		○			○	縄文中期住居	方形周溝墓2、泉沢谷津遺跡と同一遺跡

## 参考文献

「群馬県遺跡大事典」（財団法人群馬県歴史文化財調査事業団）、「荒砥上ノ坊遺跡1」「荒砥諏訪西遺跡」「荒砥下坪切遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡」「荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡」（以上 群馬県教育委員会・財団法人群馬県歴史文化財調査事業団）、「荒砥北部遺跡群」（群馬県教育委員会）、「堂野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡」（群馬県企業局）

地縁にある荒砥島原遺跡や荒砥天之宮遺跡・荒砥大日坂遺跡では、台地内部に住居群の分布が広がる。

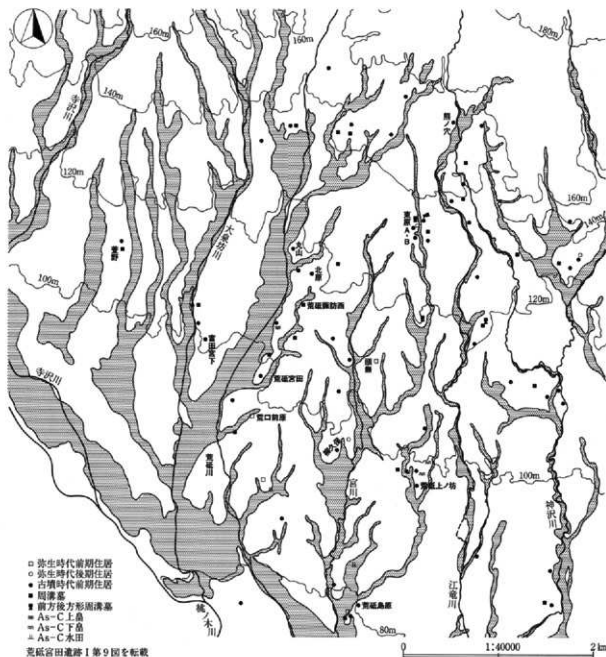
富田細田遺跡およびこれに続く富田宮下遺跡A区で1108(天仁元)年に降下した浅間B軽石で埋没した水田を検出した。本遺跡の周辺においても荒砥宮田遺跡、荒砥前田遺跡で同時期の水田が検出されており、荒砥地域における沖積低地の発掘調査のほとんどで浅間B軽石下水田が確認されている。荒砥諏訪西遺跡では、微高地にも浅間B軽石下水田が確認されていることから、荒砥地域の可耕地の大部分が12世紀初頭には開発されていたことが看取できる。また、荒砥宮田遺跡、荒砥前田遺跡では浅間B軽石

下水田の下位において洪水層に埋没した水田が検出されている。この洪水層は層位や出土遺物の時期から818(弘仁9)年の地震に伴うものと考えられている。

本地域のほぼ中央を東西に延びている女堀は、発掘調査の結果、12世紀代に掘られた大型灌漑用水路で未完成で放棄されていることが判明した。

## 6 中・近世

中・近世の遺構は、奈良・平安時代の遺構と重複して確認されることが多い。住居跡の確認が困難であり、一般農民の居住の実態は不明な点が多い。有力農民や支配者層の住居等と考えられる中世の館は



第9図 弥生時代から古墳時代前期の遺跡分布

上武国道の発掘調査等で報告されている。二之宮宮下東遺跡や二之宮宮下西遺跡では中世の館跡の一部が確認されている。今井道土・道下遺跡では中世以降の道路跡や中世の屋敷跡が確認されている。

荒砥宮田遺跡では約50m四方の区画屋敷が、その北側に隣接する荒砥諏訪西遺跡では約40mの区画屋敷が検出され、区画内から複数の掘立柱建物をはじめ井戸、土坑、土坑墓などが発見されている。これらの遺構群の時期については14・15世紀代にそのビ

ークがあったものと考えられている。

また、本遺跡の東北方、荒砥川右岸台地東縁に位置する東原遺跡では、3つの支群からなる59基の中世墳墓群が検出された。これらは五輪塔や板碑、骨蔵器を伴い、骨片の出土が見られる。出土遺物の時期から本墳墓群の形成は14世紀代のことと考えられている。近世の遺構としては二之宮宮下東遺跡で屋敷や池が確認されたのをはじめ、この時期の遺跡で井戸や溝等が確認されている。

## 第3章 富田細田遺跡と富田宮下遺跡低地部の調査

### 第1節 調査の概要

#### 1 富田細田遺跡

富田細田遺跡では、まず基本土層VI層(As-B軽石層)まで除去して、第1面の中・近世と第2面のAs-B軽石降下以降と第3面の平安時代の調査を行った。次に、VII層(As-B下耕土)～X層(洪水砂)までを除去して、第4・5面の奈良・平安時代の調査を行った。更に、XI層～XIII層までを除去して下位の調査を行った。その結果、概ね下記のような遺構・遺物が確認された。

#### 古墳時代(第6面)

第6面として、XI層(灰褐色土)下を調査した。C区ではXIII層(As-C軽石)下までトレンチ試掘調査を行い、土師器壺が出土したが遺構は確認できなかった。E区ではXIII層(As-C混土)上面で土師器高杯小型壺、須恵器杯が出土したが、奈良・平安時代以前の遺構は確認できなかった。

#### 奈良～平安時代2(第5面)

第5面として、VI層(As-B下耕土)～X層(洪水砂)下を第4面で報告した遺構と同じ面で調査した。確認された遺構は、C区で洪水層下水田跡、E区で土坑1基、擬似島である。C区の洪水層下水田跡には、東西・南北に走る畦畔、水口、耕作痕等が確認できた。D区では洪水層が単独で堆積せず、洪水層下に相当する土層中に畦畔は確認できなかった。E区では、C区で認められた洪水層の堆積はなく、C区の水田跡の続きは確認できなかった。E区では1号土坑から須恵器・碗が出土した。また、E区の一部で擬似島として、耕作時のサクの痕跡を確認した。前述の通りE区ではC区に堆積した洪水層が確認できなかった。E区で確認された土坑、島跡は、C区で確認された洪水層下水田跡とは時間幅があると思われる。更にE区の土坑、島跡は、確認面や出土遺物等から時間幅があると考えられる。

#### 奈良～平安時代1(第4面)

第4面として、VII層(As-B下耕土)～X層(洪水砂)下を調査した。確認された遺構は、C区で土坑5基、溝10条、ピット1本、E区で溝5条である。C区で確認された遺構は、いずれも洪水層に埋もれていた。同一確認面で洪水層に覆われた水田跡を確認したが、これらの土坑・溝は、その水田跡に掘り込まれていることから、それとは時期差があると考えられる。溝10条の内6条は、走行方向から下位の水田跡を意識して掘られたことが推定される。E区で確認した溝5条はC区のそれと時間幅があると考えられる。更に、E区の溝5条は個々に確認面・出土遺物・重複関係から時間幅があると考えられる。

#### 平安時代(第3面)

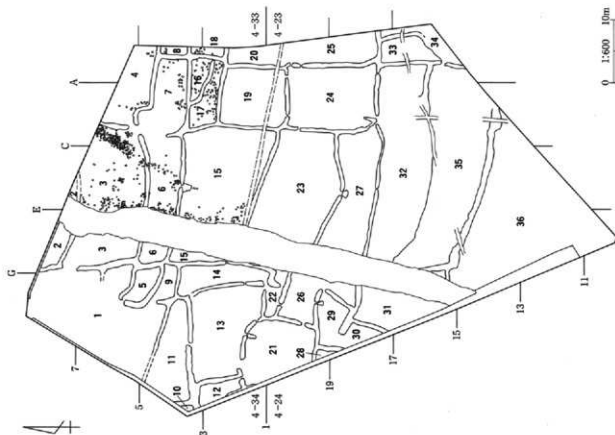
第3面として、VI層(As-B軽石層)下を中・近世面で報告した遺構と同じ確認面で調査した。確認された遺構は、As-B下水田跡である。C・E区のAs-B下水田跡には、東西・南北に走る畦畔、水口等が確認できた。D区ではトレンチ試掘調査を行った。土層中のAs-B下に黒色粘質土が堆積していた。その黒色粘質土をAs-B下水田耕土として利用した可能性が高い。

#### 古代末～中世(第2面)

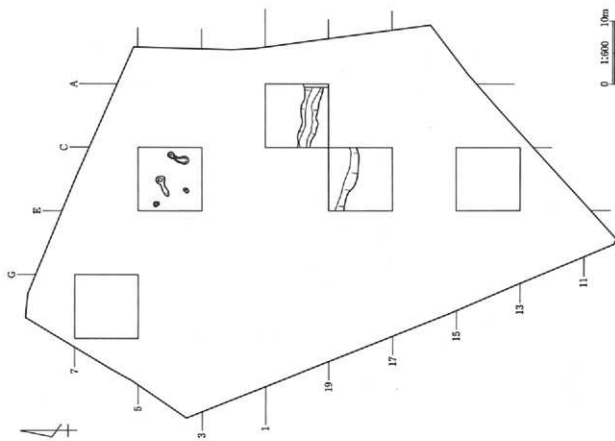
第2面として、VI層(As-B軽石層)下を中・近世面で報告した遺構と同じ確認面で調査した。確認された遺構は、溝6条である。C区で確認された溝6条は、As-B混黒色土で埋もれていた。これらの溝はAs-B降下以降、耕地(水田や島)を復旧するために掘削されたものと考えられる。

#### 中・近世(第1面)

第1面として、VI層(As-B軽石層)下を調査した。確認された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝3条、土坑1基である。As-B下水田(平安時代)の調査と同じ確認面であったが、埋没土・出土遺物等から判断し、中世以降に比定される遺構をここで報告する。

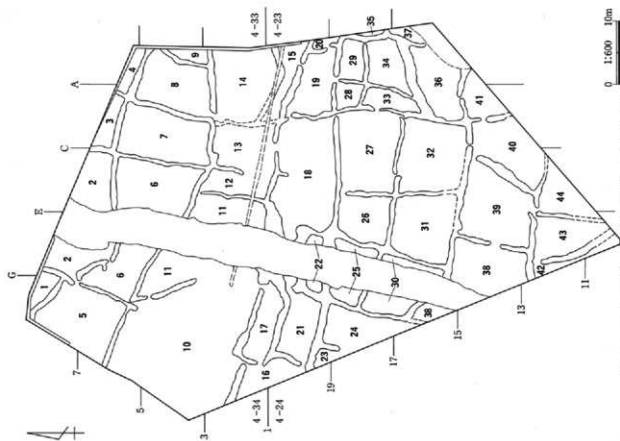


第11図 富田糺田跡C区平享時代(第5面)遺跡平面図

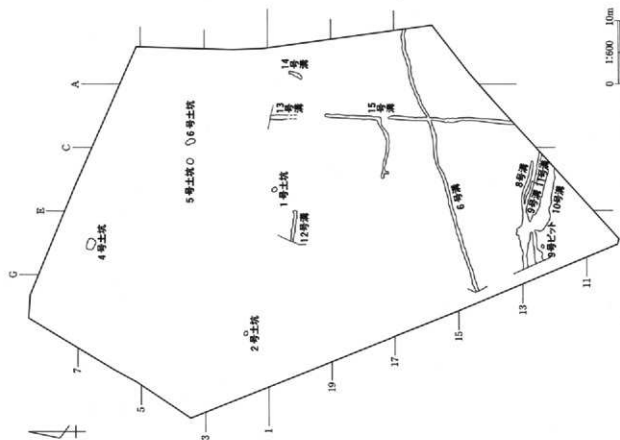


第10図 富田糺田跡C区古墳時代(第6面)遺跡平面図

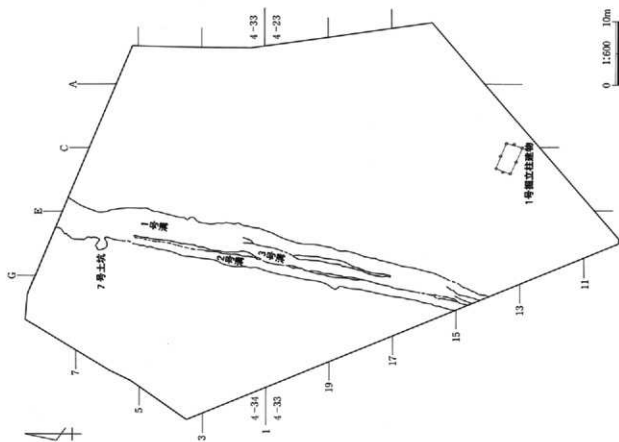




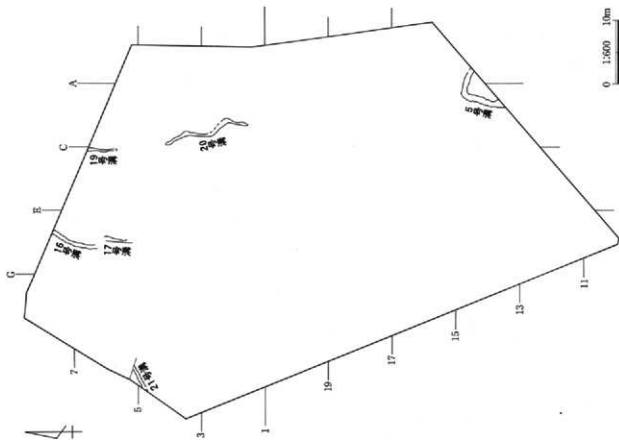
第13図 富田細田遺跡C区平安時代(第3面)遺構概念図



第12図 富田細田遺跡C区奈良~平安時代(第4面)遺構概念図



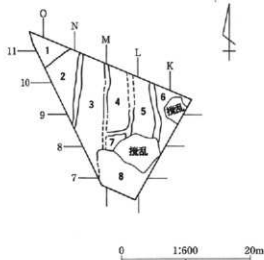
第15図 富田細田遺跡C区中・近世(第1面)遺構概念図



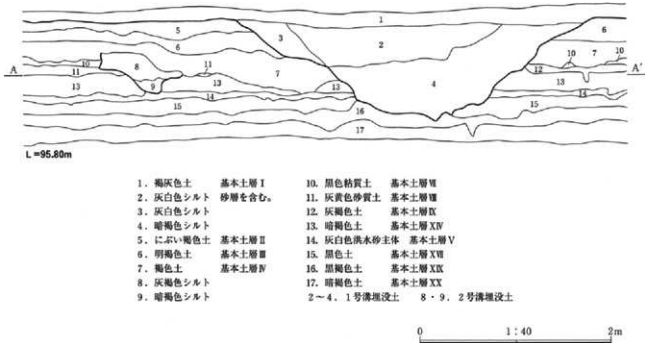
第14図 富田細田遺跡C区古代中～中世(第2面)遺構概念図



第16図 富田細田遺跡E区平安時代(第5面)遺構概念図



第17図 富田細田遺跡E区奈良~平安時代(第4面)遺構概念図



L=95.80m

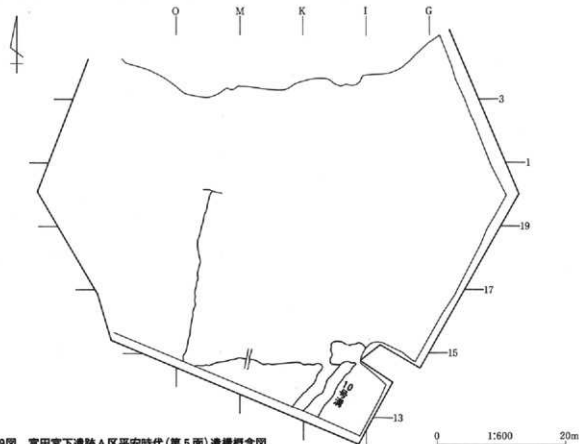
- |           |          |              |             |
|-----------|----------|--------------|-------------|
| 1. 褐灰色土   | 基本土層 I   | 10. 黒色粘質土    | 基本土層 VII    |
| 2. 灰白色シルト | 砂層を含む。   | 11. 灰黄色砂質土   | 基本土層 VIII   |
| 3. 灰白色シルト |          | 12. 灰褐色土     | 基本土層 IX     |
| 4. 暗褐色シルト |          | 13. 暗褐色土     | 基本土層 XV     |
| 5. にぶい褐色土 | 基本土層 II  | 14. 灰白色洪水砂主体 | 基本土層 V      |
| 6. 明褐色土   | 基本土層 III | 15. 黒色土      | 基本土層 XVII   |
| 7. 褐色土    | 基本土層 IV  | 16. 黒褐色土     | 基本土層 XIX    |
| 8. 灰褐色シルト |          | 17. 暗褐色土     | 基本土層 XX     |
| 9. 暗褐色シルト |          | 2~4. 1号溝埋没土  | 8・9. 2号溝埋没土 |

第18図 富田細田遺跡D区土層断面図

C区で確認された掘立柱建物跡は、そのピットから古銭が出土し、近世の遺構と考えられる。C区で確認された溝3条は中世から近代(圃場整備前)まで使用されたと考えられる。砂層とシルト層が幾重にも堆積した状況から溝が連続と使用されていたことが看取できる。D区ではトレンチ試掘調査を行い、土層断面中にC区で確認された溝の続きが確認できた。A・B区ではトレンチ試掘調査を行った。女堀の確認を期待されたが、A・B区は荒砥川の氾濫原のた

め砂層や砂礫層が堆積し、遺構は確認できなかった。なお、近現代の洪水後の復旧痕と判断される土層を確認したが、その復旧痕の単位は判別できなかった。また、トレンチ試掘調査時に陶磁器片が出土した。これらの遺物は近世・近代の洪水により混入したと考えられるため、第4節の遺構外出土遺物で一括して報告する。

第3章 富田細田遺跡と富田宮下遺跡低地部の調査



第19図 富田宮下遺跡A区平安時代(第5面)遺構概念図



第20図 富田宮下遺跡A区中・近世(第1面)遺構概念図

## 2 富田宮下遺跡低地部

富田宮下遺跡で低地部に相当する場所は、A区南側である。まず基本土層VI層(As-B軽石層)までを除去して、第1面の中・近世と第3面の平安時代の調査を行った。次に、VIII層(As-B下耕土)～XVI層(暗褐色土)までを除去して、As-C混土上面で奈良・平安以前の遺構の確認作業を行った。更に、XVII層(As-C混土)を除去して、As-C混土下面で古墳時代の調査を行った。その結果、概ね下記のような遺構・遺物が確認された。

### 古墳時代(第6面)

VI層(As-B下耕土)下を調査した。XVII層(As-C混土)上面・下面で遺構の確認作業を行った。As-C混土中から土師器・高杯が出土したが、奈良・平安時代以前の遺構は確認できなかった。

### 平安時代(第3面)

第3面として、VI層(As-B軽石層)下を中・近世面で報告した遺構と同じ確認面で調査した。確認された遺構は、As-B下水田跡、溝1条である。A区低地部では全体にAs-B軽石の残存状況が悪く、一次堆積の状態をとどめる所は少なかった。そのためか、B下水田跡の区画は判然としなかった。水田の

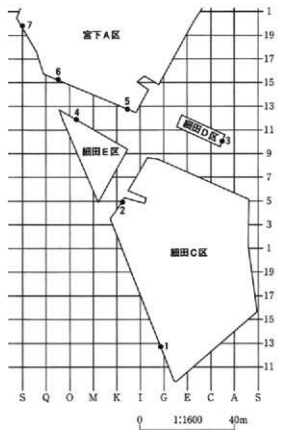
痕跡として、A区西部及び南部で畦畔と、A区南東部で水口を確認する程度であった。VI層下で確認した10号溝は、その走行方向・確認場所からAs-B下水田に伴う溝と考えられる。

### 中・近世(第1面)

第1面として、VI層(As-B軽石層)下を調査した。確認された遺構は、溜井2基、溝9条である。As-B下水田(平安時代)の調査と同じ確認面であったが、埋没土・出土遺物等から判断し、中世以降に比定される遺構をここで報告する。溝9条は、VI層(As-B軽石層)上から掘り込まれ、As-B軽石を多量に含む黒褐色土で埋没していた。溝9条の内6条は、重複関係や走行方向から溜井に伴う用水路と考えられる。発見された溜井2基とそれに伴う溝、その確認場所から判断して、未確認ではあるが中世以降の水田跡の存在が考えられる。

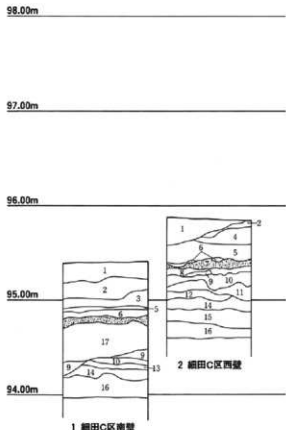
## 第2節 基本土層

富田細田遺跡及び富田宮下遺跡低地部の各調査区の基本土層は、次の通りである。土層の詳細については第1章第5節を参照されたい。



C区南壁・西壁

1. 表土 灰褐色砂壤土。白色軽石(As-A)・黄色軽石(径2mm)を少々含む(基本土層I)。
2. 表土 灰褐色砂壤土。白色軽石を少々含む(基本土層I)。
3. 暗褐色土 As-B軽石を混土。
4. 灰褐色砂壤土 白色軽石。黄色軽石を含む。しまり粘性少々あり(基本土層II)。
5. 黒褐色砂壤土 As-B軽石。白色軽石を含む。ややしまり粘性あり(基本土層IV)。
6. 船川テフラ しぶい褐色(基本土層V)。
7. As-B軽石 一次堆積(基本土層VI)。
8. 黒色粘質土 しまり強い。As-B下水田耕土(基本土層VII)。
9. 洪水砂 しぶい黄褐色土(基本土層X)。
10. しぶい黄褐色砂壤土 白色軽石(Hr-FP)径2mmを含む。9と11の混土層。洪水砂下水田耕土(基本土層XI)。
11. 灰褐色砂壤土 白色軽石(Hr-FP)径2mmを含む。しまり・粘性中位(基本土層XIV)。
12. 灰褐色砂壤土 灰白色洪水砂(奥指大)をブロック状に含む(基本土層XV)。
13. 黒褐色粘質土 しまり強い。
14. As-C軽石 一次堆積。色調は黒褐色。部分的に酸化(基本土層XVII)。
15. 黒褐色砂泥土 粘性弱いがしまり強い(基本土層XIX)。
16. 灰褐色砂泥土 粘性弱いがしまり強い(基本土層XX)。
17. 灰褐色土 川砂がラミナ状に堆積。

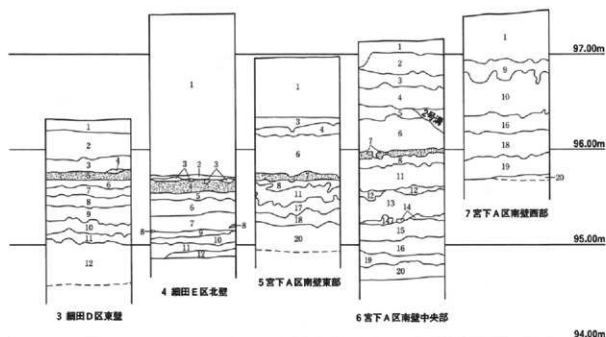


D区東壁

1. 表土 褐灰色土。白色軽石・明黄褐色粒子を含む(基本土層I)。
2. 明褐色土 白色軽石・明黄褐色粒子を含む(基本土層III)。
3. 褐色土 白色軽石・明黄褐色粒子を含む(基本土層IV)。
4. 船川テフラ しぶい褐色土(基本土層V)。
5. As-B軽石 (基本土層VI)。
6. 黒色粘質土 白色軽石径2mmを少量含む。As-B軽石下水田耕土(基本土層VII)。
7. 灰黄色砂質土 洪水に伴う砂・黄色軽石・明黄色粒子を含む(基本土層VIII)。
8. 暗褐色土 白色軽石(Hr-FP)、Hr-FAブロックを含む(基本土層XIV)。
9. 灰白色洪水砂 8層中に灰白色洪水砂ブロックを主体的に含む(基本土層XV)。
10. 黒色土 As-C軽石との混土(基本土層XVII)。
11. 黒褐色土 シルト質(基本土層XIX)。
12. 暗褐色土 シルト質(基本土層XX)。

第21図 富田細田遺跡・富田宮下遺跡A区トレンチの位置と基本土層

98.00m



94.00m

## E区北壁

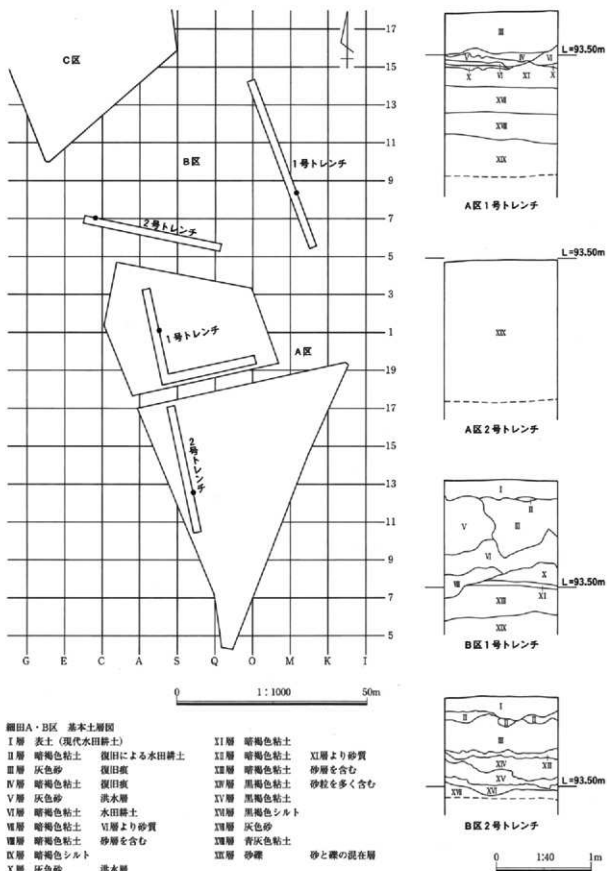
1. 表土 褐色土(基本土層I)。  
 2. 黒褐色砂礫土 As-D軽石・白色軽石を含む(基本土層IV)。  
 3. 柏川テフラ におい橙色火山灰(基本土層V)。  
 4. As-B軽石 純層。最下位に火山灰堆積(基本土層VI)。  
 5. 黒色粘質土 しまり強い。部分的に黒味薄く、灰色味を帯びる(基本土層VII)。  
 6. 灰褐色土 角閃石を含む白色軽石(径1~2mm、わずかに3~5mm)、As-C軽石(径1~2mm)をまばらに含む(基本土層XI)。  
 7. 灰褐色土 6層に色調・内容ともに類するが軽石の混入量が少ない(基本土層XII)。  
 8. 砂粒 やや鉄分を含み、黄褐色味を帯びる(基本土層XIV)。  
 9. 灰褐色土 軽石を含まず、灰色味がやや強くなる(基本土層XIII)。  
 10. 黒褐色土 いわゆるC混じり層。この層中で噴砂の水平方向の堆積を確認(基本土層XVI)。  
 11. 黒褐色砂礫土 粘性はあまりない。軽石を含まない(基本土層XV)。  
 12. 灰褐色砂礫土 粘性はあまりない。軽石を含まない(基本土層XVII)。

## 宮下A区南壁東部・中央部・西部

1. 表土 現代の耕作土(基本土層I)。  
 2. 暗褐色土 白色軽石を含む。全体に砂質(基本土層II)。  
 3. 暗褐色土 2層に類似するが、2層に比して白色軽石の量が少ない(基本土層II)。  
 4. 暗褐色土 全体に砂質(基本土層III)。  
 5. 暗褐色土 4層に類似するが、より黒味が強く砂質感が強い(基本土層III)。

6. 暗褐色土 やや粘性あり(基本土層IV)。  
 7. As-B軽石 二次堆積(基本土層VI)。宮下A区は全体のAs-Bの残りが乏しく、一次堆積の状態をとどめる所は少ない。本土層もAs-Bが集積してはいるが、ユニットがくずれしていることから、一次堆積ではないと考えられる。  
 8. 黒褐色土 粘性あり。いわゆるAs-B下の黒色粘土層(耕作土)(基本土層VII)。  
 9. 黄褐色土 粘性・しまりあり。一見するとロームと認識するほど黄味が強い。洪水堆積層の可能性あり。  
 10. 暗褐色土 9層の土粒を多く含む。粘性・しまりあり。  
 11. 暗褐色土 白色軽石(Hr-FaまたはAs-C)を多く含む。やや粘性あり。綱田C区では本層とAs-B下黒色土との間に砂層(18年の洪水層と考えられる)が確認されているが、宮下A区では、その砂層が認められず、As-B下黒色土の下が直接、本層となる(基本土層XI)。  
 12. 灰白色砂 洪水層と考えられる(基本土層XIII)。  
 13. 暗褐色土 白色軽石(As-CまたはHr-Fa)を多く含む。(基本土層XIV)。  
 14. 灰白色砂 洪水層と考えられる(基本土層XV)。  
 15. 暗褐色土 16層に類似するがAs-Cを含む割合がより低く黒味が弱い(基本土層XVI)。  
 16. 暗褐色土 As-Cを多く含む。粘性あり。いわゆるC混じり層。下層にしたがい硬くしまっている(基本土層XVII)。  
 17. 黒褐色土 上層はしまりなく下層にいくにしたがい硬くしまる。  
 18. 暗褐色土 20層起部の砂粒を多く含む(基本土層XIII)。  
 19. 黒褐色土 下層にいくにしたがい砂質化(基本土層XIV)。  
 20. 灰白色シルト

第3章 富田細田遺跡と富田宮下遺跡低地部の調査





## 第3節 奈良～平安時代の遺構と遺物

## 1 奈良～平安時代

## (1) 細田遺跡C区洪水層下水田

(第23図、PL4・5)

洪水層により埋没した水田跡である。C区の調査区では、洪水層が0.02～0.19m程堆積したことを土層断面中で確認した。洪水層は、にぶい黄褐色土や灰白色砂質土であった。

36区画の水田跡が確認された。そのうち区画がわかるものが18区画で、面積は9.6～232.1㎡である。その平均面積は77.8㎡である。田面の標高は94.60～95.50mで、高低差は0.90mである。

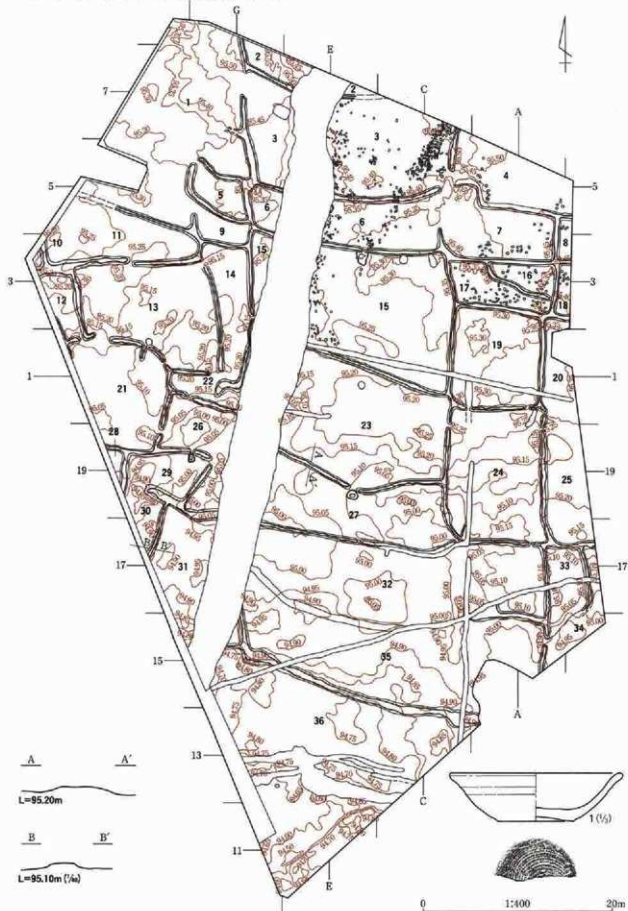
縦畦は11本、横畦は14本確認された。縦畦の方位

は、N-0°～N-8°-Wで、横畦の方位はN-70°～90°-Wである。畦の幅は、0.2～1.8mで、畦の高さは、0.01～0.13mである。水田耕土は、白色軽石を含む黄灰色砂質土や褐色土であった。調査区北東部で多数の耕作痕が確認された。水田面から須恵器杯・破片(1)や土師器破片が出土した。18口の水口を確認できた。用水は水口を通して、北から南の区画へ供給されたと考えられる。

埋没時期については、洪水層の堆積年代が不明なことや、土器などの出土遺物が少ないことから、明確な位置づけを行うことが困難である。耕土に榛名山二ツ岳テフラ(Hr-FA)を含み、この水田上にB軽石水田が確認されている。層位から洪水層下水田のおおよその時期は、古墳時代後期以降、平安時代

第4表 富田細田遺跡洪水層下水田計測表

調査区	区画No	面積 (㎡)	長軸 (m)	短軸 (m)	田面の高低差	水口の有無	畦の様子		備考 (重複関係等)
							高さ (m)	幅 (m)	
C区	1	(240.7)	(14.8)	(12.8)	0.33	○	0.01～0.06	0.4～1.1	複数区画を想定
	2	(31.4)	(14.7)	(3.0)	0.14		0.01～0.02	0.4～0.7	
	3	(204.9)	18.7	11.5	0.10	○	0.02～0.07	0.4～1.1	4号土坑と重複
	4	(61.9)	(12.8)	(5.2)	0.08	○	0.01～0.05	0.4～0.7	
	5	18.2	6.1	3.1	0.07		0.01～0.04	0.4～0.9	
	6	93.8	19.3	4.0	0.08	○	0.01～0.05	0.4～0.9	
	7	63.6	10.9	4.2	0.12		0.01～0.07	0.5～0.7	
	8	(5.5)	(4.2)	(1.0)	0.04		0.01～0.03	0.5～0.8	
	9	14.2	6.2	1.9	0.01		0.01～0.04	0.4～0.9	
	10	(2.9)	(1.9)	(0.8)	0.04		0.01～0.02	0.6～1.4	
	11	(74.4)	15.3	(3.5)	0.11	○	0.01～0.02	0.4～1.1	
	12	(19.2)	6.3	1.6	0.09	○	0.01～0.06	0.7～1.9	
	13	126.9	14.2	7.0	0.09	○	0.01～0.05	0.4～1.0	2号土坑と重複
	14	43.4	18.8	1.3	0.11	○	0.01～0.10	0.4～0.8	
	15	244.7	21.8	8.9	0.10		0.01～0.07	0.2～0.7	5・6号土坑と重複
	16	14.6	6.5	1.7	0.07	○	0.01～0.04	0.5～1.0	
	17	26.9	9.4	1.2	0.06		0.01～0.05	0.5～0.8	
	18	(6.6)	5.0	1.1	0.04		0.01～0.04	0.5～1.0	
	19	89.1	9.5	8.5	0.04	○	0.01～0.08	0.4～0.8	13号溝と重複
	20	(23.1)	9.7	(2.3)	0.13		0.02～0.05	0.4～0.7	
	21	(93.5)	(10.0)	(5.6)	0.09	○	0.01～0.06	0.5～0.8	
	22	9.6	4.5	1.4	0.05	○	0.02～0.09	0.4～0.8	
	23	240.0	8.6	25.0	0.21	○	0.01～0.13	0.4～1.0	1号土坑、12号溝と重複
	24	131.6	13.9	9.0	0.23	○	0.01～0.08	0.4～0.8	14・15号溝と重複
	25	(53.1)	13.1	3.5	0.10		0.02～0.06	0.6～0.8	
	26	29.5	7.2	4.5	0.12	○	0.02～0.10	0.4～0.8	
	27	182.2	28.8	5.9	0.11	○	0.01～0.06	0.4～1.1	
	28	(5.6)	4.0	2.1	0.05		-0.01	0.4～0.8	
	29	29.3	8.2	2.3	0.11	○	0.02～0.08	0.5～0.7	
	30	(19.1)	6.1	4.4	0.14		0.01～0.06	0.4～0.8	
	31	(91.3)	(12.2)	(5.5)	0.16		0.03～0.09	0.4～1.0	
	32	232.1	34.2	7.2	0.24		0.03～0.07	0.3～1.1	6・7・15号溝と重複
	33	29.8	9.4	3.3	0.15		0.01～0.05	0.4～0.6	6号溝と重複
	34	(22.0)	(13.4)	(2.3)	0.15	○	0.01～0.02	0.5～0.8	6号溝と重複
	35	(251.3)	35.8	(5.1)	0.16		0.01～0.13	0.4～1.8	6・7号溝と重複
	36	(280.9)	(34.1)	-	0.43		0.02～0.05	0.5～1.8	6・7号溝と重複



第23図 細田C区洪水層下水田・出土遺物

末以前であると考えられる。

(観P1)

### (2) 細田遺跡C区土坑

#### C区 1号土坑 (第24図、PL7)

位置 24D-20

重複 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

形状 長軸0.75m短軸0.62m、深さ0.18mのほぼ円形を呈している。

方位 N-15°-W

埋没土 灰黄褐色砂質土 (洪水砂)。

遺物 出土しなかった。

所見 時期は奈良～平安時代と考えられる。

#### C区 2号土坑 (第24図、PL8)

位置 34H-1

重複 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

形状 長軸0.70m短軸0.60m、深さ0.09mのほぼ円形を呈している。

方位 N-51°-W

埋没土 灰黄褐色砂質土と黒褐色粘質土 (As-B下耕土)。

遺物 出土しなかった。

所見 時期は奈良～平安時代と考えられる。

#### C区 4号土坑 (第24図、PL7)

位置 34E・F-6

重複 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

形状 長軸1.68m短軸1.22m、深さ0.36mの楕円形を呈している。

方位 N-70°-W

埋没土 灰褐色砂質土 (洪水砂)。

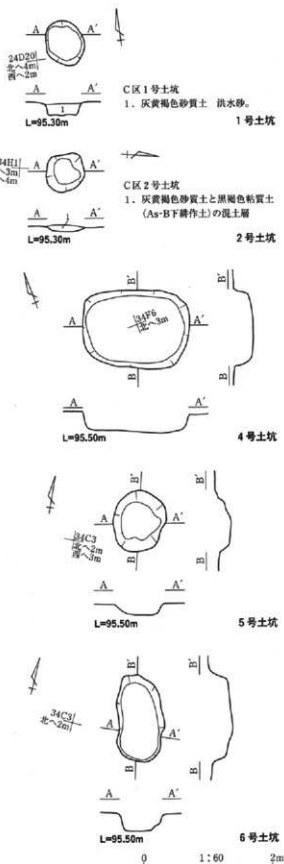
遺物 出土しなかった。

所見 時期は奈良～平安時代と考えられる。

#### C区 5号土坑 (第24図、PL8)

位置 34C-3

重複 洪水層下水田と重複し、畦畔を壊し掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。



第24図 細田C区1・2・4～6号土坑

**形状** 長軸0.96m短軸0.82m、深さ0.19mのほぼ円形を呈している。

**方位** N-6°-W

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

#### C区 6号土坑 (第24図、PL 8)

**位置** 34B-3

**重複** 洪水層下水田と重複し、畦畔を壊し掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

**形状** 長軸1.34m短軸0.65m、深さ0.34mの楕円形を呈している。

**方位** N-14°-W

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

#### (3) 細田遺跡C区ピット

##### C区 9号ピット (第26図)

**位置** 24F-12 **方位** N-11°-W

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

**形状** 長軸0.34m短軸0.30m、深さは不明である。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

#### (4) 細田遺跡C区溝

##### C区 6号溝 (第25図、PL 5)

**位置** 24E-G-14、24A-D-15、24A-16、23S-T-16

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。7号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

**形状** 全長は41.64m、上幅0.34～0.60m、底幅0.12～0.45m、深さ0.07～0.13mである。走行方向は、初めに東から西へ(N-90°-E)、23S-16グリッドで東北東から西南西へ(N-75°-E)向きを変え走行すると想定され、東側と西側ともに調査区外に延びている。

**埋没土** 黒色土(As-B下耕土)と灰褐色砂質土(洪水砂)の2層に分かれていた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

##### C区 7号溝 (第25図、PL 6)

**位置** 24A-16・17、24B-13～17

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。6号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

**形状** 全長は19.53m、上幅0.34～0.52m、底幅0.14～0.29m、深さ0.02～0.12mである。走行方向は、北から南へ走行(N-3°-E)と想定され、南側の調査区外に延びている。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。走行方向から15号溝と同一の遺構である可能性が高い。

##### C区 8号溝 (第25図、PL 6)

**位置** 24C-F-12、24E-13

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。9号・10号溝と重複するが新旧関係は不明である。

**形状** 全長は17.0m、上幅0.30～1.64m、底幅0.13～1.27m、深さ0.08～0.11mである。走行方向は、初めに東南東から西北西へ(N-76°-E)、24D-12グリッドで東から西へ(N-89°-E)向きを変え走行すると想定される。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

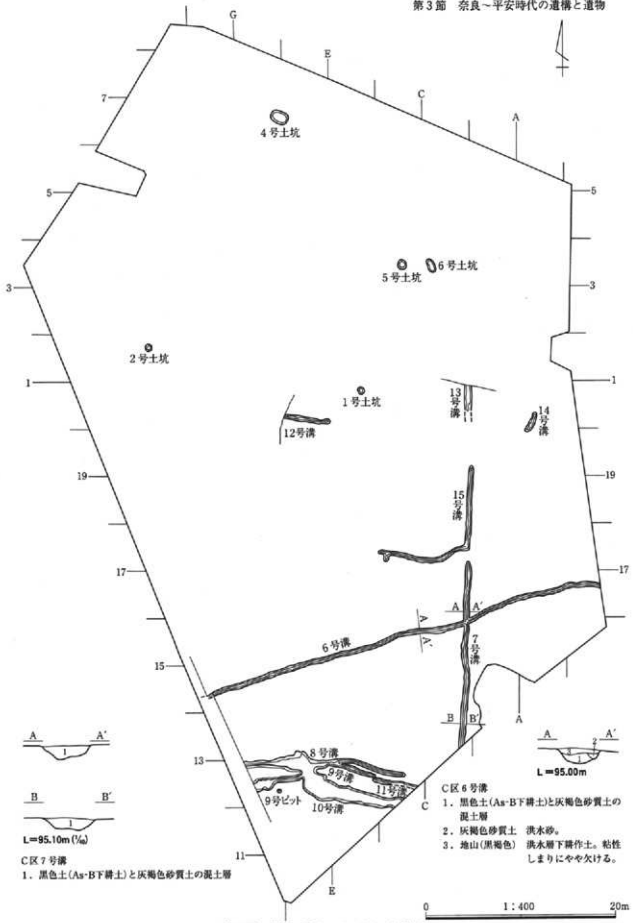
**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

##### C区 9号溝 (第25図、PL 6)

**位置** 24D-12

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。8号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

**形状** 全長は、4.44mが推測される。上幅0.25～0.46m、底幅0.10～0.26m、深さ0.02～0.05mである。走行方向は、東南東から西北西へ走行(N-72°



第25図 細田C区6・7・12～15号溝

—W)と想定される。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

**C区 10号溝 (第26図、PL 7・16)**

**位置** 24C・D-11、24C-F-12・E-13

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。8号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

**形状** 全長は16.16m、上幅0.30～2.30m、底幅0.19～1.88m、深さ0.06～0.38mである。走行方向は、初めに西から東へ(N-79°-E)、24E-12グリッドで北北西から南南東へ(N-25°-W)、更に上記のグリッドで西北西から東南東へ(N-77°-W)向きを変え走行すると想定され、東側と西側ともに調査区外に延びている。

**埋没土** ぶい黄褐色砂質土と川砂の2層に分かれていた。

**遺物** 須恵器杯(1)が出土した。(観P 2)

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。埋没土の下層に川砂が堆積していることから水が流れたと考えられる。

**C区 11号溝 (第26図、PL 6)**

**位置** 24C・D-12・13

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

**形状** 全長は4.80m、上幅0.29～0.41m、底幅0.10～0.26m、深さ0.05～0.06mである。走行方向は、西北西から南南東へ走行(N-73°-W)と想定され、東側の調査区外に延びている。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

**C区 12号溝 (第25図、PL 6)**

**位置** 24E・F-20

**重複** 1号溝により掘り込まれ、新旧関係は本遺構が古い。洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。洪水層下水田より新しい。

**形状** 全長は4.90m、上幅0.30～0.56m、底幅0.10～0.26m、深さ0.03～0.08mである。走行方向は、東から西へ走行(N-82°-W)と想定される。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 奈良～平安時代と考えられる。

**C区 13号溝 (第25図、PL 6)**

**位置** 24A・B-20

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

**形状** 全長は3.10m、上幅0.64～0.76m、底幅0.16～0.52m、深さ0.03mである。走行方向は、北から南へ走行(N-0°)と想定される。

北側は近現代の導水管に壊され、南側は調査区の途中で消滅する。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。走行方向から15号溝と同一な遺構の可能性が高い。

**C区 14号溝 (第25図、PL 7)**

**位置** 23T-19・20

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面に掘られていた。洪水層下水田より新しい。

**形状** 全長は2.20m、上幅0.36～0.54m、底幅0.20～0.37m、深さ0.06～0.07mである。走行方向は、北北東から南南西へ走行(N-25°-E)と想定される。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。

**C区 15号溝 (第25図、PL 7)**

**位置** 24A・B-17-19、24C-17

**重複** 洪水層下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構が洪水層下水田より新しい。

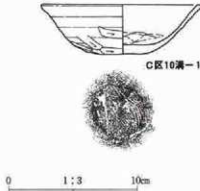
**形状** 全長は18.08m、上幅0.40～0.58m、底幅0.14～0.42m、深さ0.04～0.08mである。走行方向は、初めに北から南へ(N-3°-E)、24B-17グリッドで東北東から西南西へ(N-68°-E)、更に上記のグリッドで東から西へ(N-80°-W)向きを

変え走行すると想定される。

**埋没土** 灰褐色砂質土(洪水砂)。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。走行方向から7号・13号溝と同一の遺構である可能性が高い。



C区10号溝-1

C区8号溝

1. 灰褐色砂質土 洪水砂。

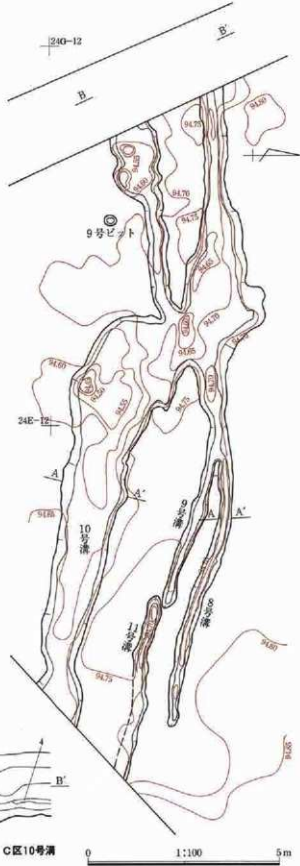
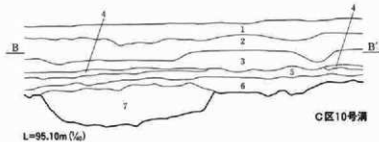
C区10号溝 A-A'

1. に近い黄褐色土と川砂の混土层。

10号溝 B-B'

1. 灰褐色砂礫土 基本土層Ⅰ
2. 褐色土 基本土層Ⅱ
3. 暗褐色土 基本土層Ⅲ
4. A<sub>0</sub>砂礫石 基本土層Ⅳ
5. 褐色粘質土 基本土層Ⅴ
6. 灰白色砂質土 基本土層Ⅵ
7. 灰白色砂礫土と川砂のラミナ状堆積 川底と思われる。

A A'  
L=94.80m  
C区8号溝



第26図 細田C区8～11号溝・9号ピット・出土遺物

(5) 細田遺跡E区土坑

E区 1号土坑 (第27図、PL 8)

位置 34K-7

形状 遺構の東側が調査区外のため全体の形状は確認できないが、調査区範囲で確認した遺構の形状から土坑と推定される。調査区長軸1.23m(調査区東

南壁)短軸0.58m、深さ0.45mである。

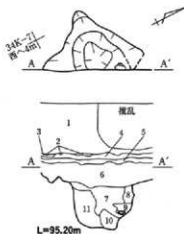
方位 計測不可。

埋没土 5層に分かれ、上層に砂層が堆積していた。

遺物 須恵器高台付碗(1)が1点出土している。

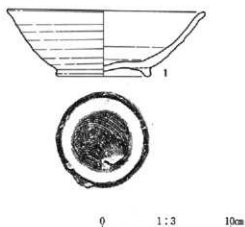
(観P1)

所見 時期は平安時代と考えられる。



- |                  |                           |
|------------------|---------------------------|
| 1. 表土 基本土層I      | 7. 砂層                     |
| 2. 箱川テフラ 基本土層V   | 8. 砂粒を主体とした黒色土の混土層        |
| 3. 注記不明          | 9. 黒色土ブロック やや粘質。          |
| 4. A>B軽石 基本土層VI  | 10. 黒色土を主体とした砂粒との混土層      |
| 5. 黒色粘質土 基本土層VII | 11. 灰色土 細砂質。砂粒をブロックで混入する。 |
| 6. 灰褐色土 基本土層VIII |                           |

0 1:60 2m



第27図 細田E区1号土坑・出土遺物

(6) 細田遺跡E区溝

E区 1号溝 (第28図、PL 8)

位置 34J・K-8・9

重複 2号溝と重複し、新旧関係では本遺構が2号溝より新しい。

形状 全長は4.60m、上幅0.69~0.84m、底幅0.37~0.61m、深さ0.13~0.20mである。走行方向は、北北西から南南東へ(N-17°-W)走行すると想定される。北側は調査区外に延びていて、南側は調査区の中で消滅する。

埋没土 砂層を含む7層に分かれた。

所見 時期は平安時代と考えられるが遺物は出土しなかった。地形と埋没土の砂層により北から南へ水が流れたと考えられる。

E区 2号溝 (第28図、PL 8)

位置 34K-7~9、34J-8

重複 1号溝と重複し、新旧関係では本遺構が1号溝より古い。

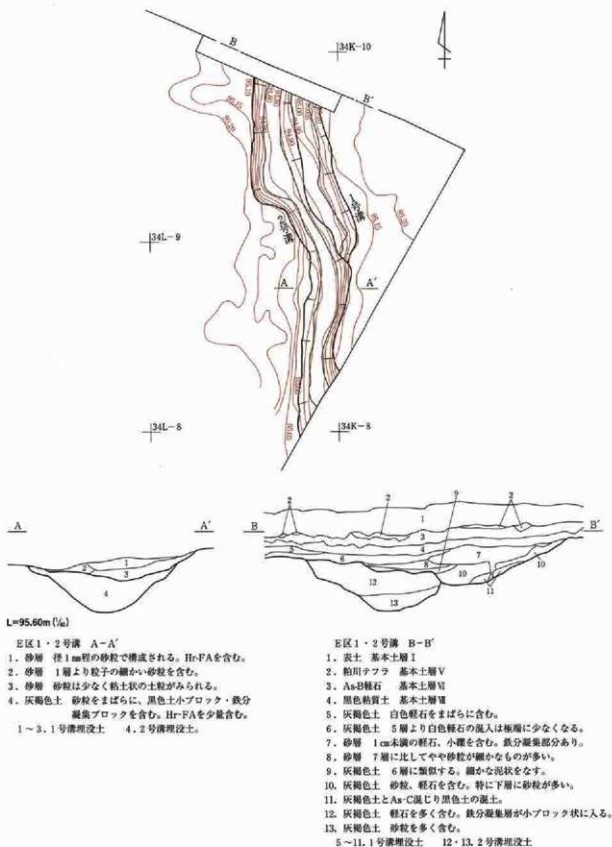
形状 全長は8.79m、上幅0.63~1.40m、底幅0.20~0.65m、深さ0.27~0.37mである。走行方向は、初めに北から南へ(N-10°-W)、34K-9グリッドで北北西から南南東へ(N-23°-W)向きを変え、更に34K-8グリッドで北から南へ(N-5°-E)向きを変え走行すると想定され、北側と南側ともに調査区外へ延びている。

埋没土 2層の灰褐色土に分かれた。

遺物 出土しなかった。

所見 時期は奈良~平安時代と考えられる。





第28図 細田E区1・2号溝

**E区 3号溝 (第29図、PL9・16)**

**位置** 34K-8・9、34L-7・8、34M-7

**重複** 2号溝と重複し、新旧関係では本遺構が2号溝より古い。2号溝の確認面より下位で本遺構は確認された。

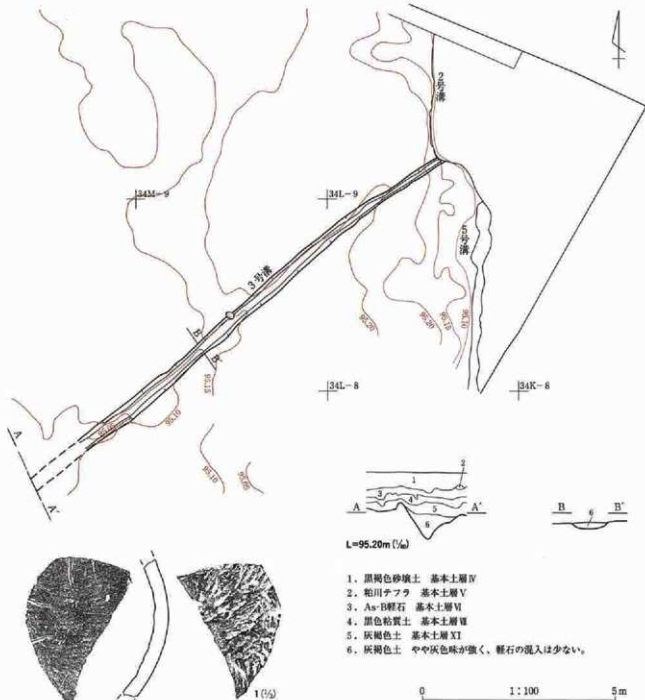
**形状** 全長は12.02m、上幅0.19~0.41m、底幅0.04~0.30m、深さ0.36mである。走行方向は、初めに

東北東から西南西へ(N-56°-E)、34K-8グリッドで北東から南西へ(N-49°-E)向きを変え走行すると想定される。東側は2号溝に切られ、西側は調査区外に延びている。

**埋没土** 白色軽石を含む灰褐色土が堆積していた。

**遺物** 須恵器横溝(1)が出土している。(観P5)

**所見** 時期は奈良~平安時代と考えられる。



1. 黒褐色砂壤土 基本土層IV
2. 粘川テフラ 基本土層V
3. As-B軽石 基本土層VI
4. 黒色粘質土 基本土層VII
5. 灰褐色土 基本土層XI
6. 灰褐色土 やや灰色味が強く、軽石の混入は少ない。

第29図 細田E区3号溝・出土遺物

**E区 4号溝 (第30図、PL9)**

**位置** 34M-9、34N-8・9

**重複** なし。なお、2号溝の確認面より下位で本遺構は確認された。

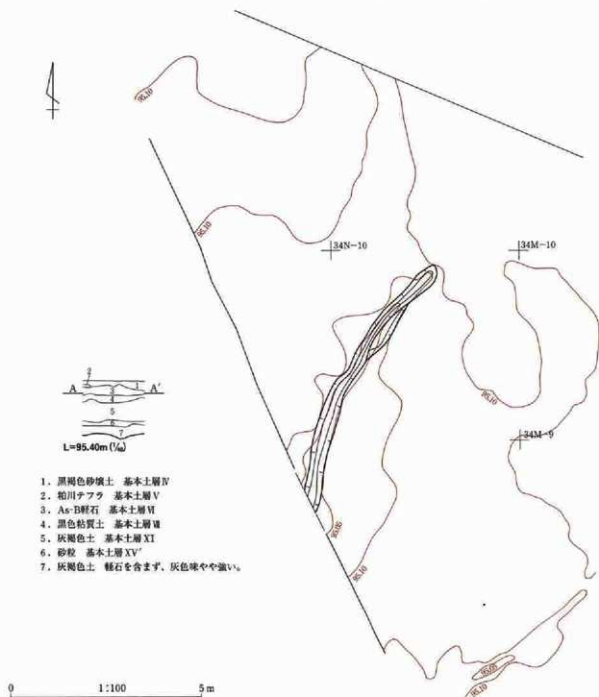
**形状** 全長は7.22m、上幅0.25～0.47m、底幅0.07～0.19m、深さ0.06mである。走行方向は、初めに北東から南西へ(N-45°-E)、34M-9グリッド

で北北東から南南西へ(N-30°-W)向きを変え、更に34M-9グリッドで北北東から南南西へ(N-15°-E)向きを変え走行すると想定され、西側の調査区外に延びている。

**埋没土** 灰褐色土が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は奈良～平安時代と考えられる。



第30図 細田E区4号溝

**E区 5号溝 (第31図、PL9・16)**

**位置** 34K-7・8

**重複** 2号溝と重複し、新旧関係では本遺構が2号溝より古い。2号溝の確認面より下位で本遺構は確認された。

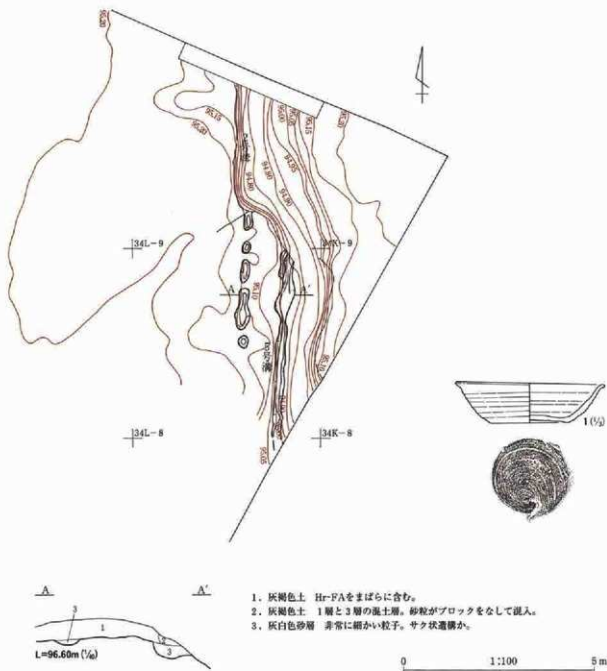
**形状** 全長は4.79m、上幅0.16~0.43m、底幅0.04~0.20m、深さ0.05~0.06mである。走行方向は、

北から南へ(N-5°-E)走行すると想定され、南側の調査区外に延びている。

**埋没土** 灰白色砂層が堆積していた。

**遺物** 須恵器杯(1)が出土している。(観P1)

**所見** 時期は奈良~平安時代と考えられる。地形と埋没土の砂層により北から南へ水が流れたと考えられる。



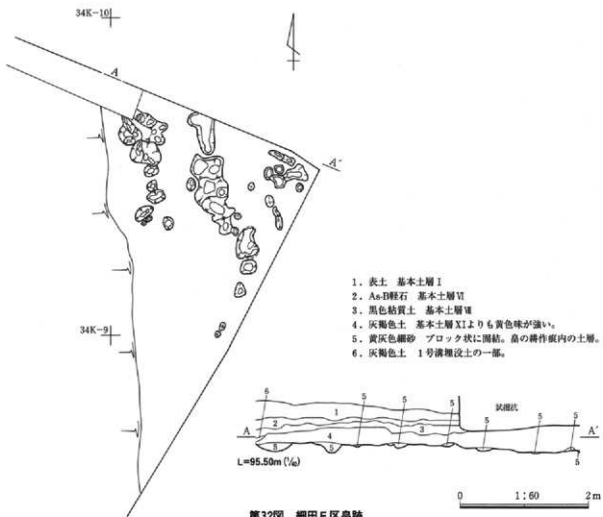
第31図 細田E区5号溝・出土遺物

## (7) 細田遺跡E区畠

## 細田E区 畠跡 (第32図、P.L.9・10)

確認された畠跡の場所は、E区北東部の34J-8・9、1号溝の東側である。確認面はXIV層(灰褐色土)上面である。確認面の標高は95.26～95.47mで、高低差0.21mである。耕作時のサクの痕跡として確

認された。耕作痕は、サクの方向として南北方向に3本が想定される。耕作痕の深さは、0.02～0.16mである。耕作痕の埋没土は、ブロックに固まっている黄灰色細砂であった。南北方向のサクの間隔は芯々で約0.80mである。



第32図 細田E区畠跡

## 2 平安時代

## (1) As-B下水田

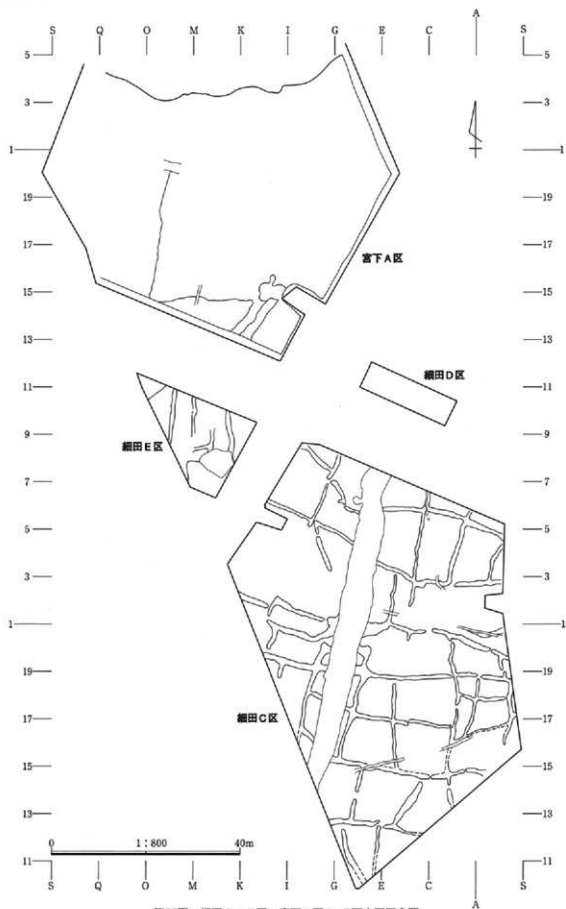
## 細田C区 水田 (第34図、P.L.10～12)

As-Bにより埋没した水田跡である。C区の調査区では、As-B層が0.02～0.11m程堆積していて、44区画の水田跡が確認された。そのうち区画がわかるものが23区画で、面積は15.2～194.3m<sup>2</sup>である。その平均面積は76.7m<sup>2</sup>である。田面の標高は94.60～95.70mで、高低差は1.10mである。

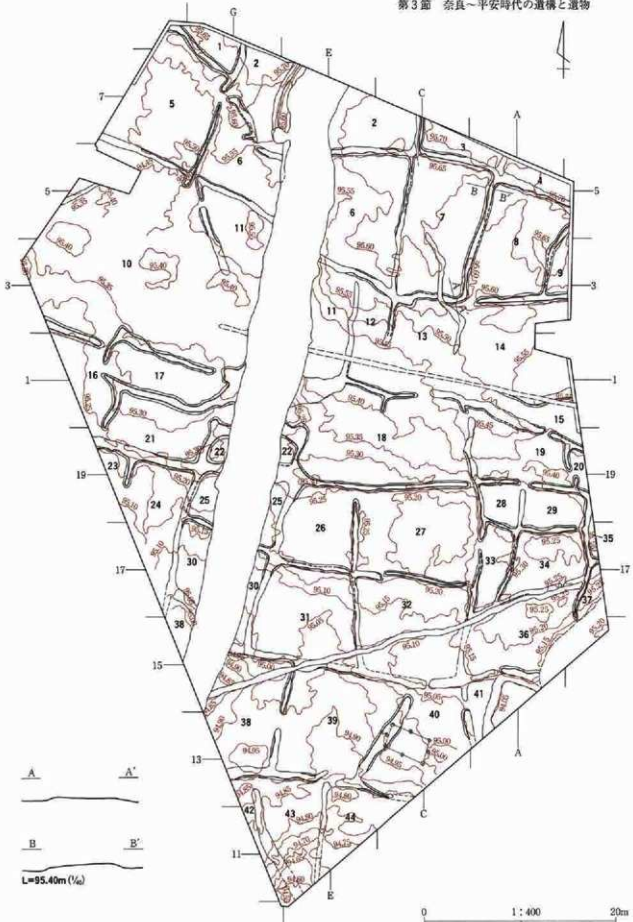
縦畦は9本、横畦は10本確認された。縦畦の方位は、N-20°-W-N-32°-Eで、横畦の方位はN-65°-90°-Wである。畦の幅は、0.3～2.2mで、畦の高さは、0.01～0.10mである。

水田耕土は、黒色粘質土や褐色粘質土であった。21口の水口が確認できた。用水は水口を通過してから南の区画へ供給されたと考えられる。なお、C区・E区のAs-B下水田計測表を本章の終わりに掲載したので、参照されたい。

第3章 富田細田遺跡と富田宮下遺跡低地部の調査



第33図 細田C・E区、宮下A区As-B下水田概念図



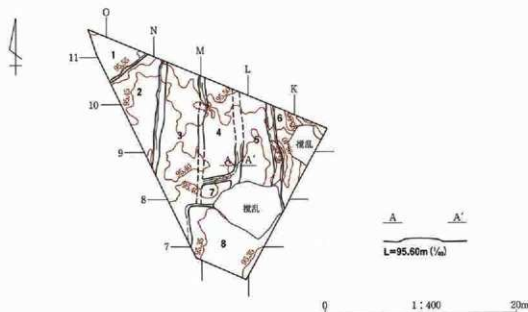
第34図 細田C区As-B下水田

## 第3章 富田細田遺跡と富田宮下遺跡低地部の調査

第5表 富田細田遺跡As-B下水計測表

調査区	区画No	面積(m <sup>2</sup> )	長軸(m)	短軸(m)	田面の高低差	水口の 有 無	畦の様子		備考(重複関係等)
							高さ(m)	幅(m)	
C区	1	(17.0)	(7.1)	(3.0)	0.04		~0.01	0.5~1.0	
	2	(139.0)	16.3	(3.4)	0.14	○	0.01~0.02	0.7~0.9	7号土坑・1・16・17・19号溝と重複
	3	(21.3)	8.1	(2.9)	0.04		~0.01	0.5~0.9	
	4	(15.7)	7.7	(1.5)	0.02		0.02~0.03	0.5~1.2	
	5	(106.0)	10.5	(10.0)	0.17		~0.05	0.5~1.0	
	6	194.3	23.9	8.4	0.09		0.01~0.02	0.5~1.0	1・2・17号溝と重複
	7	102.4	14.5	6.7	0.05		0.01~0.03	0.4~1.4	20号溝と重複
	8	83.8	12.0	7.5	0.07	○	0.01~0.08	0.6~1.2	
	9	(12.0)	(6.8)	(2.1)	0.07		0.01~0.03	0.6~0.9	
	10	(350.6)	19.7	(9.9)	0.24	○	0.01~0.03	0.5~1.2	21号溝と重複
	11	174.0	18.7	10.4	0.19	○	0.01~0.04	0.4~1.0	1・2号溝と重複
	12	34.4	10.3	3.3	0.13		~0.01	0.4~1.0	
	13	65.5	9.3	6.0	0.08	○	0.01~0.04	0.5~1.4	20号溝と重複
	14	(101.4)	(10.5)	6.5	0.07		~0.05	0.4~1.2	
	15	(29.1)	(13.1)	2.5	0.13	○	0.01~0.03	0.6~1.1	
	16	(35.7)	9.1	(6.4)	0.08		0.01~0.05	0.7~1.4	
	17	41.3	12.6	3.2	0.04	○	0.01~0.03	0.7~1.3	
	18	171.9	24.8	8.4	0.20	○	0.01~0.04	0.4~2.2	
	19	55.0	10.8	4.6	0.12	○	0.01~0.02	0.5~1.2	
	20	(5.5)	4.1	(1.3)	0.04		0.03~0.06	0.5~0.7	
	21	49.2	9.8	4.2	0.08	○	~0.01	0.8~1.3	
	22	21.3	8.5	2.2	0.05		0.01~0.04	0.6~2.2	1・2号溝と重複
	23	(9.9)	(5.1)	(3.4)	0.06		0.03~0.07	0.7~1.3	
	24	(63.2)	(14.7)	(5.9)	0.17	○	0.01~0.04	0.5~1.2	
	25	51.7	9.5	4.4	0.10		~0.01	0.6~1.3	1・2号溝と重複
	26	55.2	8.5	5.0	0.06	○	0.01~0.08	0.5~0.9	
	27	114.3	12.4	8.2	0.07	○	0.01~0.10	0.4~0.9	
	28	15.2	4.4	3.1	0.02		0.01~0.04	0.5~0.8	
	29	22.8	5.9	3.1	0.05	○	0.01~0.05	0.5~0.8	
	30	77.3	9.8	9.2	0.16		~0.04	0.4~1.1	1・2号溝と重複
	31	86.1	10.2	7.4	0.14		~0.05	0.4~0.9	
	32	107.7	11.6	9.3	0.10	○	0.02~0.04	0.5~0.9	
	33	22.5	9.4	2.0	0.06		0.02~0.04	0.4~0.9	
	34	41.6	9.2	4.6	0.06		0.03~0.07	0.3~0.9	
	35	(2.5)	(5.6)	(0.5)	0.03		~0.02	0.6~1.1	
	36	66.1	11.4	4.6	0.11	○	0.04~0.07	0.4~1.6	
	37	(18.7)	(9.0)	(0.7)	0.12	○	0.02~0.06	0.4~1.6	
	38	(116.0)	14.5	11.3	0.23		0.01~0.04	0.6~1.5	1・2号溝と重複
	39	110.7	11.9	10.5	0.12	○	0.01~0.09	0.6~1.2	
	40	(74.4)	11.7	(5.7)	0.22	○	0.01~0.05	0.3~1.2	1号縦立柱建物と重複
41	(26.8)	(7.8)	(5.9)	0.03	○	0.03~0.05	0.6~0.9	5号溝と重複	
42	(16.6)	(14.0)	(2.0)	0.32		0.01~0.04	0.7~1.1		
43	(56.6)	(13.4)	7.2	0.30	○	0.02~0.04	0.4~1.1		
44	(41.3)	(9.3)	(8.1)	0.14		0.02~0.03	0.3~0.9		
E区	1	(19.2)	(6.3)	(4.7)	0.03		-	0.4~0.7	
	2	(35.0)	(11.9)	-	0.10		~0.01	0.4~0.9	
	3	(62.2)	(13.6)	-	0.15		~0.03	0.4~0.9	
	4	(34.8)	(10.9)	(3.3)	0.13		-	0.4~0.8	
	5	(41.9)	(13.2)	(3.6)	0.07		~0.03	0.4~1.0	
	6	(29.3)	(10.9)	-	0.23		~0.05	0.7~1.0	
	7	(8.3)	(3.4)	(3.2)	0.04		~0.02	0.4~0.6	
	8	(47.3)	(9.0)	(3.2)	0.02		-	-	





第35図 細田E区As-B下水田

### 細田E区 水田 (第35図、PL9)

As-Bにより埋没した水田跡である。E区調査区では、As-B層が0.02～0.15m程堆積していて、8区画の水田跡が確認された。そのうち区画が完全にわかるものはなかった。確認された範囲での区画面積は8.3～62.2m<sup>2</sup>である。その平均面積は39.3m<sup>2</sup>である。田面の標高は95.34～95.60mで、高低差は0.26mである。

縦畦は5本、横畦2本確認された。縦畦の方位は、N-0°～N-5°-Eで、横畦の方位はN-78°-EとN-90°-Eである。畦の幅は、0.40～1.00mで、畦の高さは、0.01～0.05mである。水口は確認できなかった。

水田耕土は黒色粘質土であった。水田面の高低差から、用水は北から南の区画へ供給されたと考えられる。

### 宮下A区 水田 (第36図、PL12)

As-Bにより埋没した水田跡である。A区低地部ではAs-Bが0.06～0.10m程堆積していたが、全体的にAs-Bの残存状況が悪く、一次堆積の状態をとどめる所は少なかった。そのためか、水田区画は判然とせず区画がわかるものは確認できなかった。水田の総面積は推定で約1,280m<sup>2</sup>である。田面の標高

は95.67～96.23mで、高低差0.56mである。畦畔と思われる痕跡として、縦畦が2本、横畦が1本確認された。縦畦の方位は、N-10°-EとN-42°-Eで、横畦の方位はN-80°-90°-Eである。畦畔の痕跡幅は、0.08～0.65mである。水口の痕跡は、34I-15グリッドで確認された。水田面の段差が、南北方向で認められた。隣接する宮下A区低地部での遺構確認面のレベル等から判断して、A区低地部は水田域として利用した可能性が高いと考えられる。

### (2) 宮下遺跡A区溝

#### 宮下A区 10号溝 (第36図、PL14)

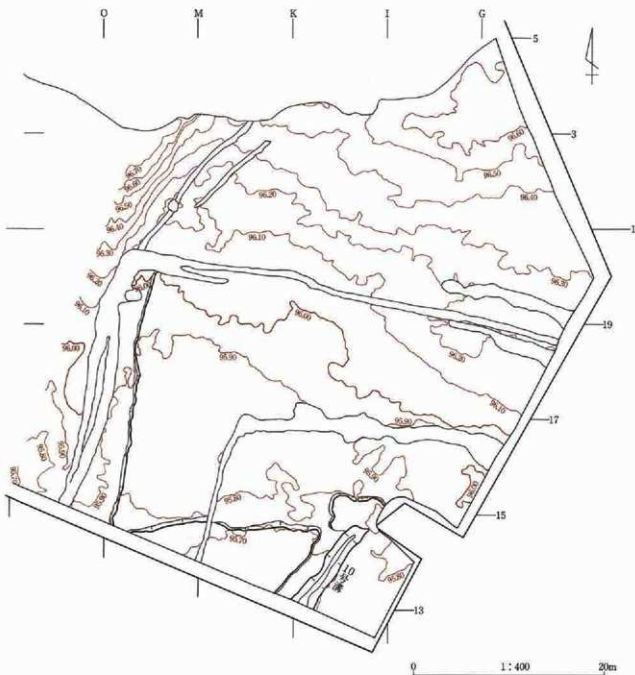
位置 34I-14、34J-12～14、34K-13

重複 As-B下水田と重複し、水田面に掘られていた。

形状 全長は10.22m、上幅1.57～2.48m、底幅0.30～0.86m、深さ0.02～0.12mである。走行方向は、北東から南西へ(N-39°-E)走行すると想定され、南側の調査区外へ延びている。

埋没土 不明。

所見 As-B軽石下から確認されたことから、時期は平安時代と考えられる。As-B下水田に伴う用水路と考えられる。遺物は出土しなかった。



第36図 宮下A区As-B下水田・10号溝

### 3 遺構外出土遺物(平安時代以前)

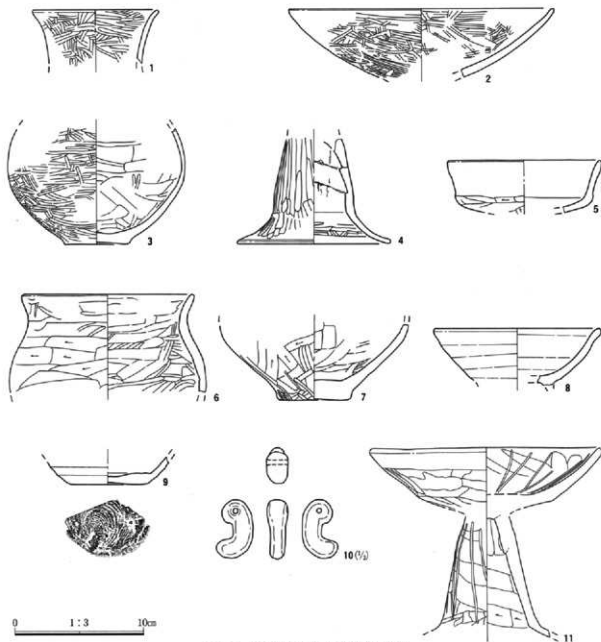
(第37図、PL16)

第1節調査の概要の項でも若干ふれたが、各調査区の調査において、遺構に直接伴わない遺物が少量出土した。ここでは平安時代以前の遺物を選択、掲載した。

1・3の壺は細田遺跡C区のAs-B下水田調査時に出土した。

2・4～10は細田遺跡E区の調査で出土した。2・4・6・7は古墳時代前期から中期に位置づけられる。5は古墳時代後期、8・9の須恵器は平安時代の所産である。10はよろろう石製の勾玉である。出土位置は不明である。

11の高杯は宮下遺跡A区のAs-C泥土層からの出土である。(観P1・2)



第37図 平安時代以前の遺構外出土遺物

## 第4節 中世以降の遺構と遺物

### 1 平安時代末～中世

#### (1) 細田遺跡C区溝

##### C区 5号溝 (第38図、PL13)

位置 23T-14、24A-13・14

重複 As-B下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。

形状 全長は9.53m、上幅0.70～1.06m、底幅0.33～0.66m、深さ0.04～0.09mである。

走行方向は、初めに東南東から西北西へ(N-72°-W)、24A-14グリッドで北北東から南南西へ(N-17°-E)向きを変えると想定され南側の調査区外に延びる。

埋没土 As-B混土。

所見 時期はAs-B降下以降、古代末から中世と考えられる。遺物は出土しなかった。

##### C区 16号溝 (第38図)

位置 34E・F-6・7

重複 As-B下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。7号土坑と重複するが、本遺構が古い。

形状 全長は7.11m、上幅0.46～0.61m、底幅0.12～0.31m、深さ0.04～0.05mである。走行方向は、初めに北北東から南南西へ(N-30°-E)、34E-7グリッド北北東から南南西へ(N-13°-E)向きを変え、更に34F-6グリッドで北から南へ(N-3°-W)向きを変え走行すると想定され、北側の調査区外に延びている。

埋没土 As-B混土。

遺物 出土しなかった。

所見 時期はAs-B降下以降、古代末から中世と考えられる。走行方向から17号溝と同一な遺構と考えられる。

##### C区 17号溝 (第38図)

位置 34E-5

重複 As-B下水田と重複し、水田面に掘られていた。As-B下水田より新しい。7号土坑・1号溝

とも重複するが、本遺構が古い。

形状 全長は4.65m、上幅0.26～1.24m、底幅0.08～0.43m、深さ0.01～0.05mである。走行方向は、北から南へ走行(N-11°-W)と想定される。検出部分ではほぼ直線を指行する。

埋没土 As-B混土。

遺物 出土しなかった。

所見 時期はAs-B降下後、古代末～中世と考えられる。走行方向から16号溝と同一な遺構と考えられる。

##### C区 19号溝 (第38図)

位置 34C-5・6

重複 As-B下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。

形状 全長は4.04m、上幅0.36～0.48m、底幅0.20～0.39m、深さ0.01m(東側畦畔との高低差)である。走行方向は、北から南へ走行(N-0°)と想定され、北側の調査区外に延びている。

埋没土 As-B混土。

遺物 出土しなかった。

所見 時期はAs-B降下以降、古代末～中世と考えられる。

##### C区 20号溝 (第38図)

位置 34B-1～4

重複 As-B下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。

形状 全長は14.09m、上幅0.23～0.82m、底幅0.08～0.61m、深さ0.01～0.02mである。

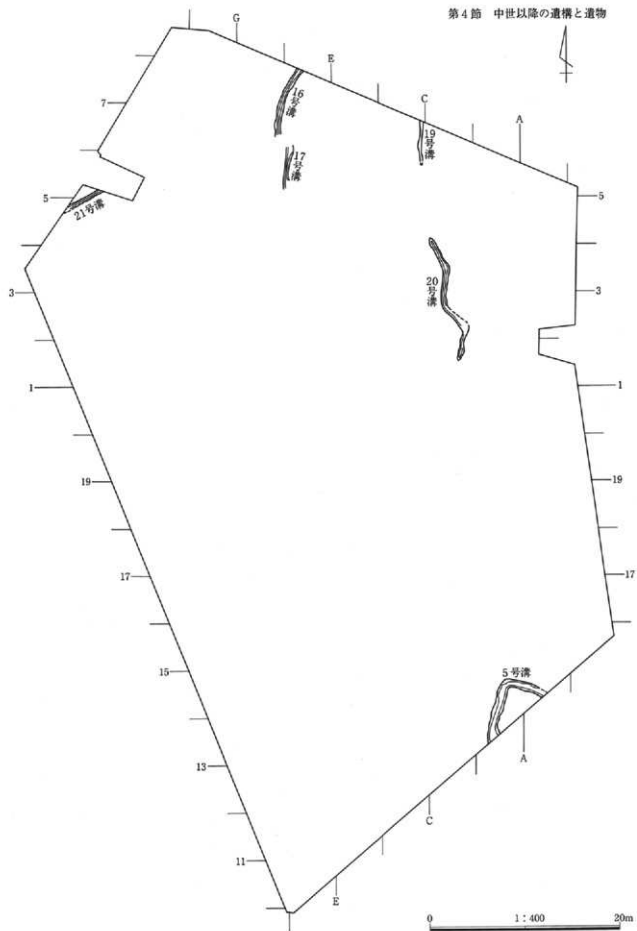
南北方向の溝であるが中位で東西に蛇行する。走行方向は、初めに北北西から南南東へ(N-30°-W)、34B-3グリッドで北から南へ(N-5°-E)、続いて34B-2グリッドで北西から南東へ(N-42°-W)、更に34B-2グリッドで北北東から南南西へ(N-15°-E)向きを変え走行すると想定される。

埋没土 As-B混土。

遺物 出土しなかった。

所見 時期はAs-B降下以降、古代末～中世と考えられる。

第4節 中世以降の遺構と遺物



第38図 細田C区5・16・17・19～21号溝

C区 21号溝 (第38図)

位置 34 I・J-4・5

重複 As-B下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。

形状 全長は3.90m、上幅0.28~0.41m、底幅0.15~0.31m、深さ0.04mである。走行方向は、東北東から西南西へ走行(N-64°-E)と想定される。

埋没土 As-B混土。

遺物 出土しなかった。

所見 時期はAs-B降下以降、古代末~中世と考えられる。

2 中・近世

(1) 細田遺跡C区掘立柱建物

C区 1号掘立柱建物

(第39・40図、PL13・17)

位置 24B・C-12・13 方位 N-19°-E

重複 As-B下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構はAs-B下水田より新しい。

形状 2間×2間。長軸を東西にもつ。東辺と西辺の柱穴は、四隅の柱穴を結ぶ直線上からやや外側にずれる。長軸4.72m、短軸2.66m。

柱穴 柱穴掘り方は、直径0.21~0.30m、深さ0.16~0.42m程度のほぼ円形を呈する。

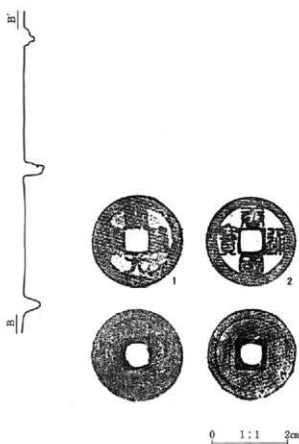
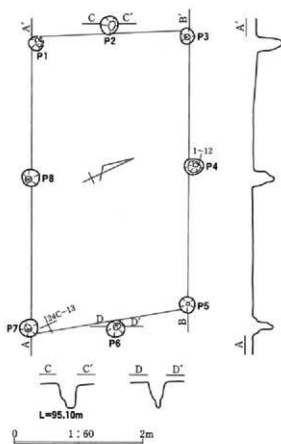
埋没土 As-B軽石粒を含む灰褐色土。

遺物 柱穴埋没土中から古銭12点が出土した。うち北宋銭(3~6)、明銭(7~9)である。(観P2)

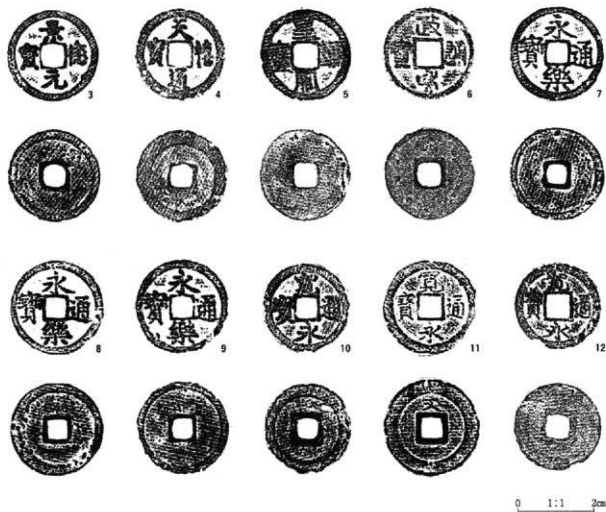
所見 時期は近世以降と考えられる。

第6表 細田C区1号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模		2間×2間		面積		10.43㎡	
主軸方向		N-65°-W		庇		無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)				形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ			
東辺(2.30)	1	23	22	41	円形	1.15	
	2	30	27	38	円形	1.22	
南辺(4.17)	3	25	21	16	円形	2.00	
	4	30	25	33	円形	2.15	
西辺(2.54)	5	26	24	25	円形	1.19	
	6	29	27	42	円形	1.39	
北辺(4.53)	7	29	28	32	円形	2.34	
	8	28	26	37	円形	2.18	



第39図 細田C区1号掘立柱建物・出土遺物(1)



第40図 細田C区1号掘立柱建物出土遺物(2)

(2) 細田遺跡C区土坑

C区 7号土坑 (第41図)

位置 34E・F-5・6

重複 As-B下水田と重複し、水田面に掘られていた。As-B下水田より新しい。16号溝と重複するが、新旧関係では本遺構が新しい。1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

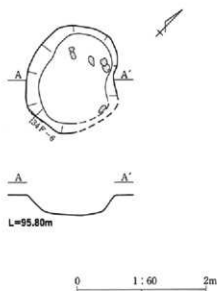
形状 長軸1.74m短軸1.38m、深さ0.31mのほぼ円形を呈している。

方位 N-28°-W

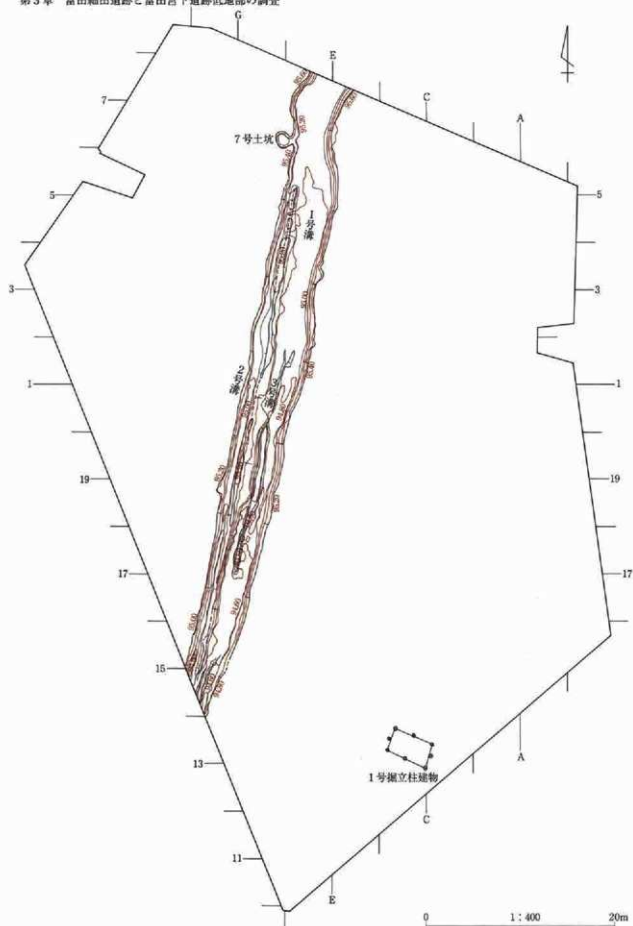
埋没土 不明。

遺物 出土しなかった。

所見 時期は中世以降と考えられる。



第41図 細田C区7号土坑



第42図 細田C区中・近世遺構



**(3) 細田遺跡C区溝****C区 1号溝 (第43~50図、PL13・17~19)**

**位置** 34D-4~7、34E-1~7、24E-20、34F-1~4、24F-15~20、24G-13~20、24H-14・15

**重複** As-B下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構はAs-B下水田より新しい。

**形状** 全長は69.40m、上幅2.36~5.26m、底幅1.44~4.69m、深さ0.13~0.72mである。走行方向は、北北東から南南西へ走行(N-12°-E)と想定され、北側と南側ともに調査区外に延びている。24F-17グリッドを中心に自然石が集積していた。

**埋没土** 砂層やシルト層が堆積していた。

**遺物** 陶磁器(1~16)、軟質陶器焙烙(17・18)・片口鉢(19・20)、焼輪陶器壺(30~33)、古銭3(39~41、うち北宋銭2点)、石製品・砥石等が出土した。(観P3~5)掲載した資料の他に、陶磁器破片209点、軟質陶器破片136点、瓦3点、砥石1点、磨石10点、板碑破片1点、器種不明石製品6点、須恵器破片173点、土師器破片1,563点、弥生土器破片1点、縄文土器破片6点が出土している。

**所見** 時期は中世~近代と考えられる。

**C区 1a号溝**

**位置** 34E-1、24E-20、24F-16~20

**重複** 1号溝・1b号溝と重複し、本遺構が2条の溝に比べ新しい。

**形状** 全長は(24.80m)が推測される。上幅1.81~2.50m、底幅1.00~1.81m、深さは不明である。走行方向は、北北東から南南西へ走行(N-14°-E)と想定される。

**埋没土** 砂層やシルト層が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世~近代と考えられる。

**細田C区 1b号溝**

**位置** 34E・F-1、24F-16~20、24G-16~18

**重複** 1号溝・1a号溝と重複する。新旧関係では本遺構が1号溝より新しく、1a号溝より古い。

**形状** 全長は19.80mが推測される。上幅、底幅、深さは不明である。走行方向は、北北東から南南西へ走行(N-15°-E)と想定される。

**埋没土** 砂層やシルト層が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 時期は中世~近代と考えられる。

**C区 2号溝 (第43~46図、PL13)**

**位置** 34E-3~5、34F-1~5、24F-18~20、24G-14~20、24H-14・15

**重複** As-B下水田と重複し、水田面や畦畔を壊し掘られていた。本遺構はAs-B下水田より新しい。1号溝と重複し、新旧関係では本遺構が古い。

**形状** 全長は54.80m、上幅1.08~1.97m、底幅0.20~0.81m、深さ0.31~0.43mである。走行方向は、北北東から南南西へ走行(N-12°-E)と想定され、南側の調査区外に延びている。

**埋没土** 砂層、シルト層、粘土層が堆積していた。

**遺物** 陶磁器破片4点、軟質陶器破片2点、須恵器破片1点、土師器破片12点、弥生土器破片2点が出土したが、資料化するに足りないものであった。

**所見** 時期は中世~近代と考えられる。

**C区 3号溝 (第43~46・50図、PL13・19)**

**位置** 34E・F-1、24E-20、24F-16~20、24G-16~18

**重複** 1号溝と重複し、新旧関係では本遺構が1号溝より新しい。

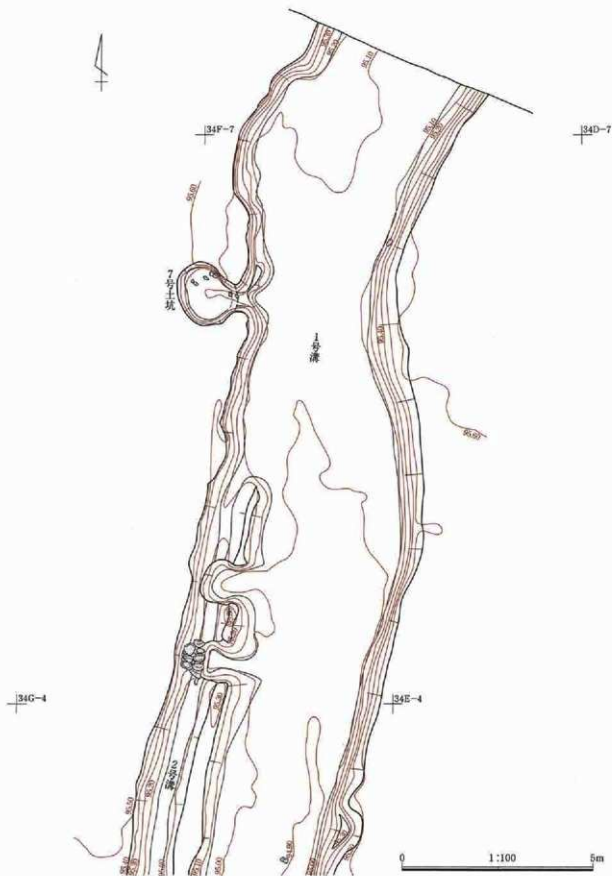
**形状** 全長は25.30m、上幅0.25~1.63m、底幅0.08~1.02m、深さ0.14~0.64mである。走行方向は、北北東から南南西へ走行(N-19°-E)と想定される。

**埋没土** シルト層が堆積し、溝底に小円礫が集積していた。

**遺物** 陶磁器碗(1)、古銭(2、北宋銭)が出土した。(観P5)

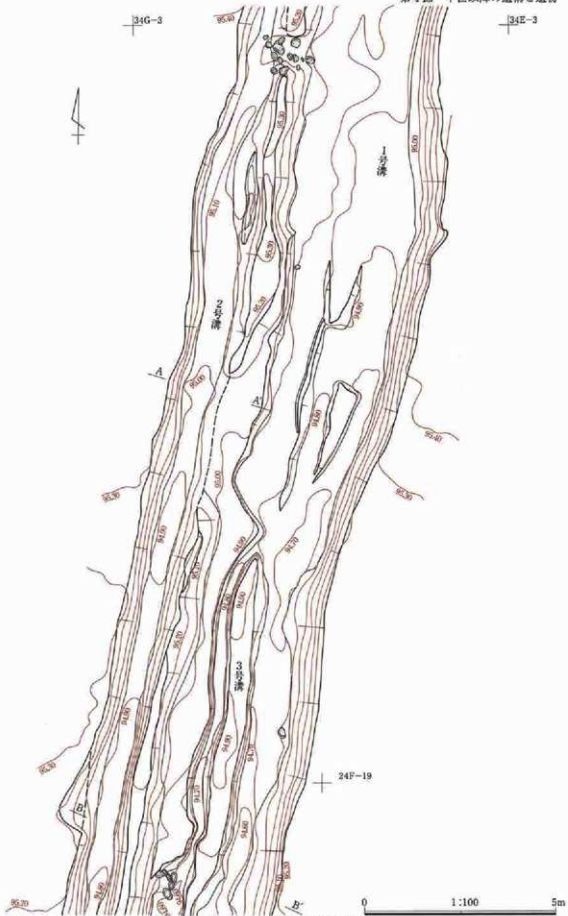
掲載した資料の他に陶磁器破片25点、土師器破片54点、須恵器破片10点、縄文土器破片5点、弥生土器破片2点が出土している。

**所見** 時期は中世~近代と考えられる。

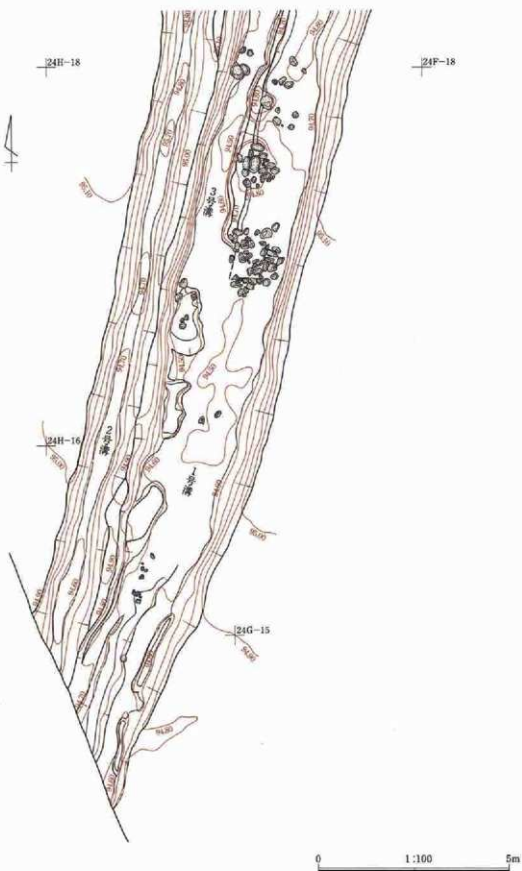


第43図 細田C区1～3号溝(1)

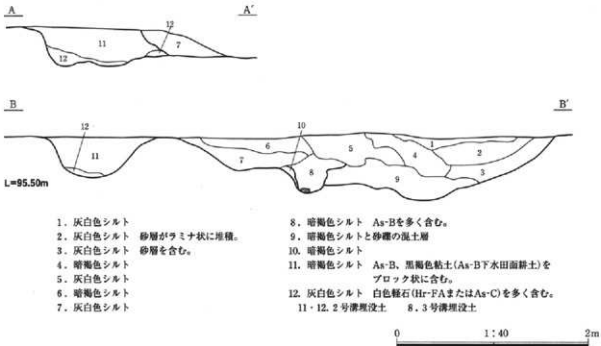
第4節 中世以降の遺構と遺物



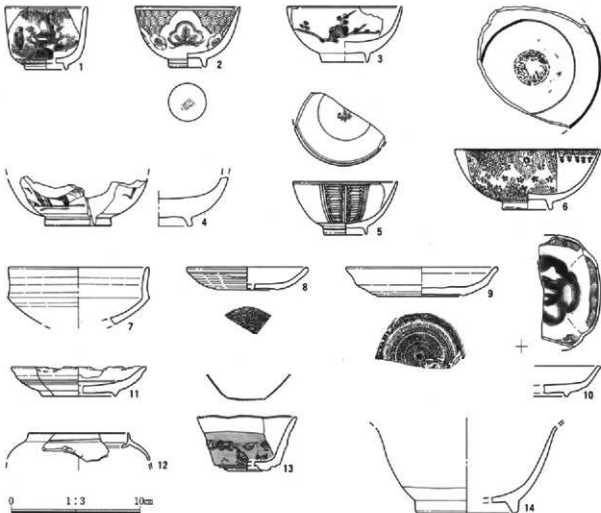
第44図 細田C区1～3号溝(2)



第45図 細田C区1～3号溝(3)

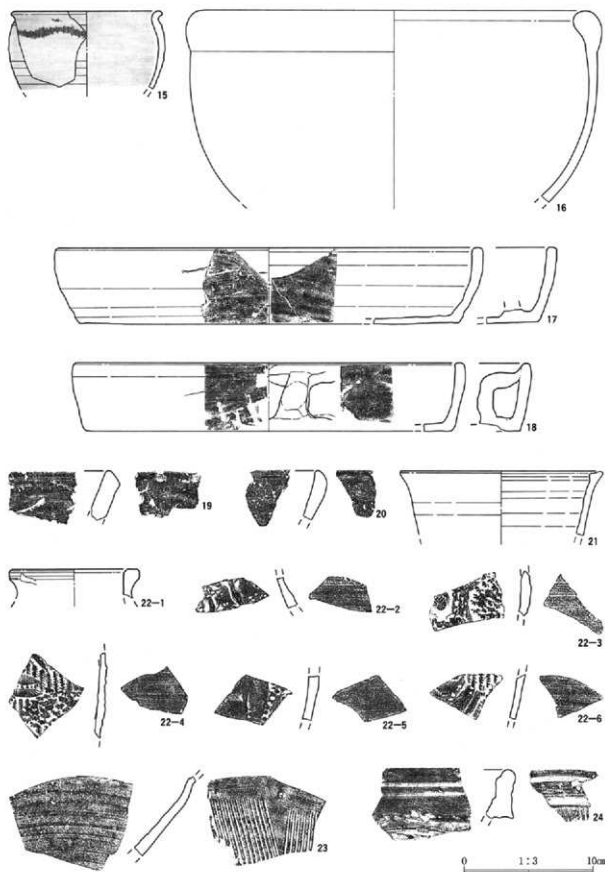


第46図 細田C区1～3号溝(4)

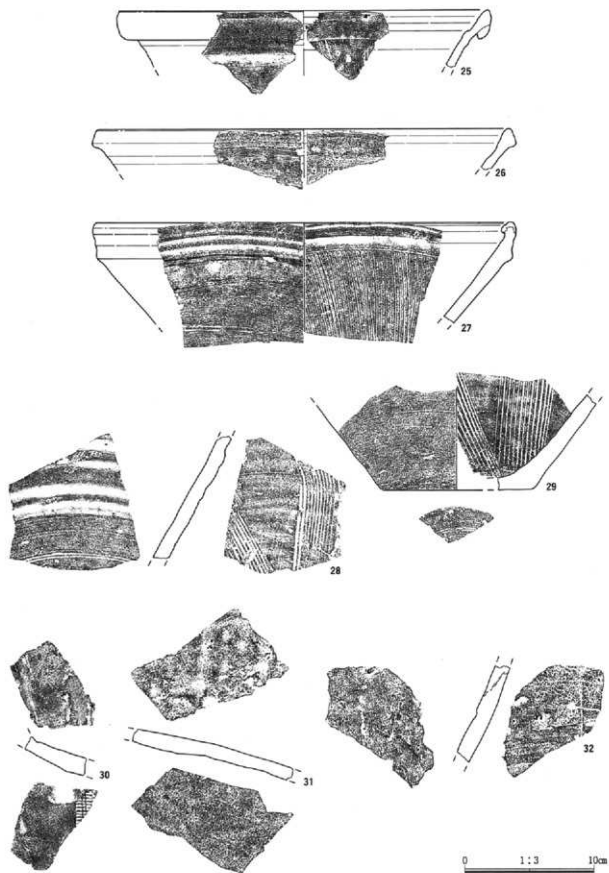


第47図 細田C区1号溝出土遺物(1)

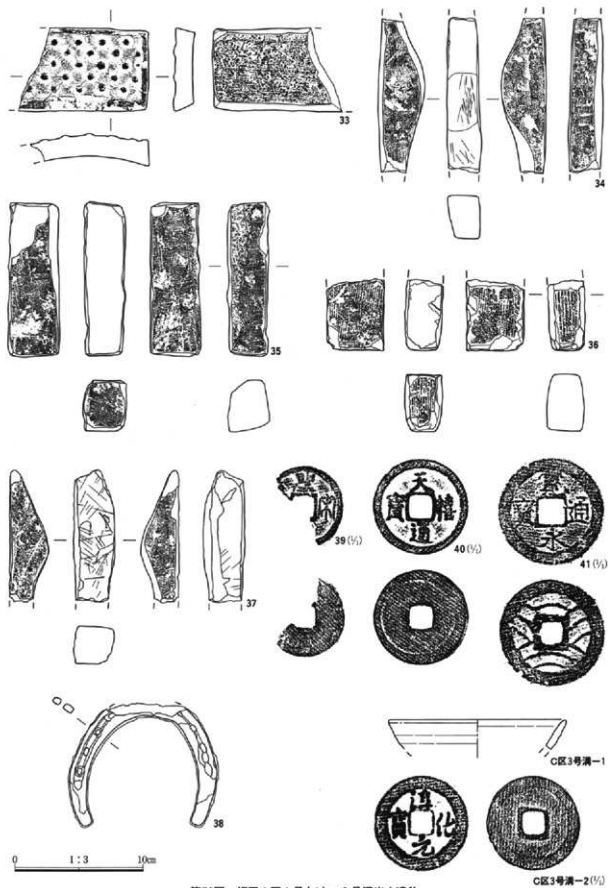
第3章 富田細田遺跡と富田宮下遺跡低地の調査



第48図 細田C区1号溝出土遺物(2)



第49図 網田C区1号溝出土遺物(3)



第50図 細田C区1号(4)・3号清出土遺物



(4) 宮下遺跡A区溜井

A区 1号溜井 (第51~53図、PL15・19・20)

位置 34N-19

重複 As-B下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。1号・2号・3号溝と重複し、本遺構が1号・2号・3号溝を掘り込んでいた。新旧関係では本遺構が1号・2号・3号溝より新しいが、同時期に利用された可能性が高い。

形状 長軸1.80m短軸1.08m、深さ0.83mの楕円形を呈している。

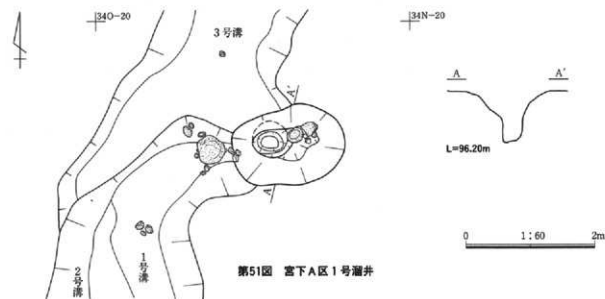
方位 N-90°-W

埋没土 不明。

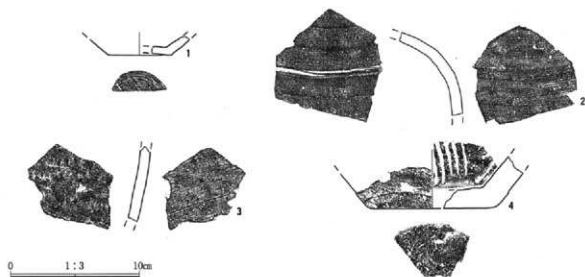
遺物 土師質土器皿(1)、軟質陶器内耳鍋(3)、軟質陶器指鉢(4)、砥石(5)、板碑片(6)、五輪塔水輪(7)等が出土した。(観P6)

掲載した資料の他に土師器破片37点、須恵器破片10点が出土している。

所見 出土遺物から中世の遺構と考えられる。3号・4号溝で送られた水を一旦貯水し、1号溝または2号溝に送水するための施設と考えられる。

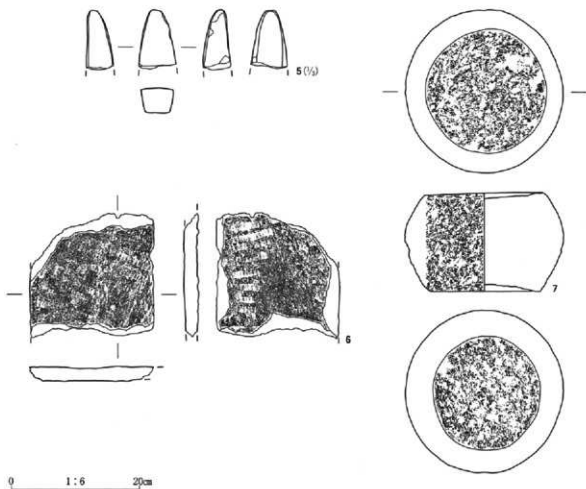


第51図 宮下A区1号溜井



第52図 宮下A区1号溜井出土遺物(1)

第3章 富田細田遺跡と富田宮下遺跡低地の調査



第53図 宮下A区1号溜井出土遺物(2)

A区 2号溜井(第54図、PL15)

位置 44M-1

重複 As-B下水田と重複し、水田面に掘られていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。5号溝と重複し、本遺構が5号溝を掘り込んでいた。新旧関係では本遺構が5号溝より新しいが、同時期に利用された可能性が高い。

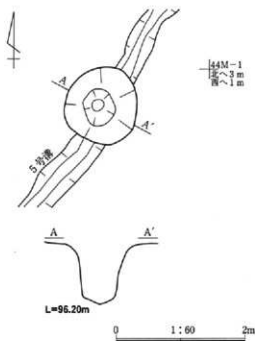
形状 長軸1.30m短軸1.20m、深さ0.96mのほぼ円形を呈している。

方位 N-3°-W

埋没土 不明。

遺物 出土しなかった。

所見 中世の遺構と考えられる。5号溝で送られた水を一旦貯水し、再度、5号溝に送水するための施設と考えられる。



第54図 宮下A区2号溜井

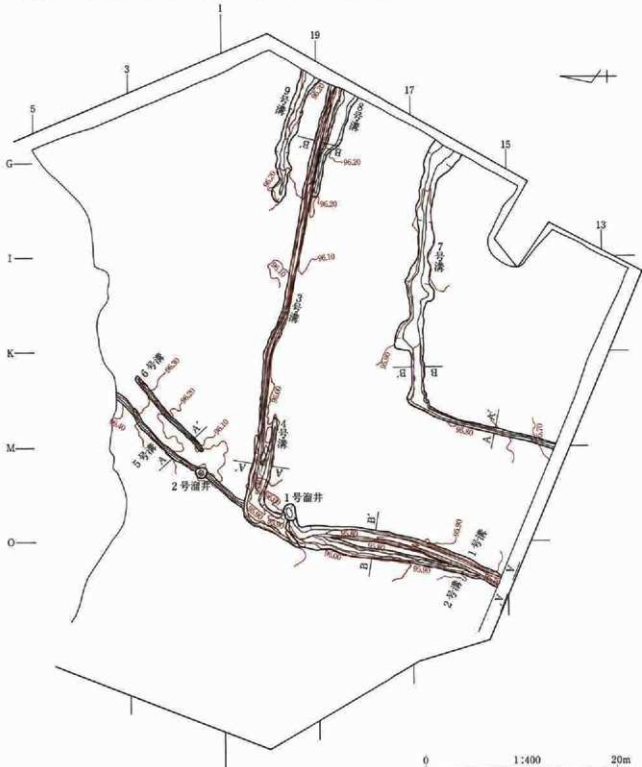
(5) 宮下遺跡A区溝

A区 1号溝 (第56・57図、PL14・15・20)

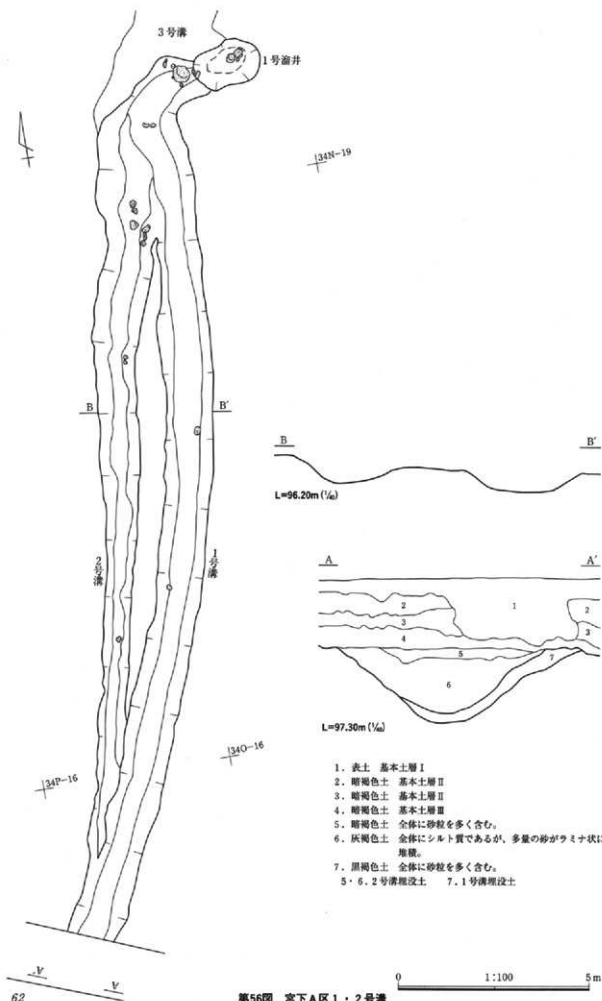
位置 34N-16~19、34O-15~17

重複 As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。2

号・3号溝と重複する。本遺構が2号溝より古い。3号溝との新旧関係は不明であるが、同時期の可能性が考えられる。1号溜井と重複し、本遺構は1号溜井に掘り込まれていたが、同時期に利用された可能性が高い。



第55図 宮下A区1~9号溝、1・2号溜井



第56図 宮下A区1・2号溝

**形状** 全長は24.84m、上幅1.08～1.39m、底幅0.44～0.76m、深さ0.10～0.33mである。走行方向は、初めに東北東から西南西へ(N-73°-E)、34N-19グリッドで北北西から南南東へ(N-20°-W)向きを変え、更に上記のグリッドで北から南へ(N-6°-E)、続いて34O-17グリッドで北北東から南南西へ(N-25°-E)向きを変え走行すると想定され、南側の調査区外へ延びている。

**埋没土** A区南壁付近では砂粒を多く含む黒褐色土が堆積していた。A区低地部ではAs-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 施軸陶器皿(1)、焼締陶器甕(2)、磨石(3)が出土した。(観P 6)

掲載した資料の他に土師器破片54点、須恵器破片6点が出土している。

**所見** 出土遺物から中世の遺構と考えられる。1号溜井に伴う用水路と考えられる。

#### A区2号溝 (第56・57図、PL14・15)

**位置** 34N-18・19、34O-15～19

**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。As-B下水田より新しい。1号・3号溝と重複する。本遺構が1号溝より新しい。3号溝

との新旧関係は不明であるが、同時期の可能性が考えられる。本遺構は1号溜井に掘り込まれていたが、同時期に利用された可能性が高い。

**形状** 全長は23.62m、上幅0.70～1.38m、底幅0.18～0.56m、深さ0.11～0.23mである。走行方向は、初めに東北東から西南西へ(N-72°-E)、34N-19グリッドで北北東から南南西へ(N-17°-E)向きを変え、更に34O-18グリッドで北から南へ(N-9°-E)、続いて34O-17グリッドで北北東から南南西へ(N-25°-E)向きを変え走行すると想定され、南側の調査区外へ延びている。

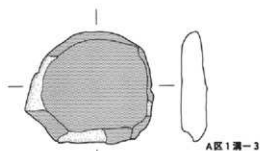
**埋没土** A区南壁付近では暗褐色土、灰褐色シルト質土の2層に分かれていた。A区低地部ではAs-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 須恵器長頸壺(1)が出土している。

(観P 6)

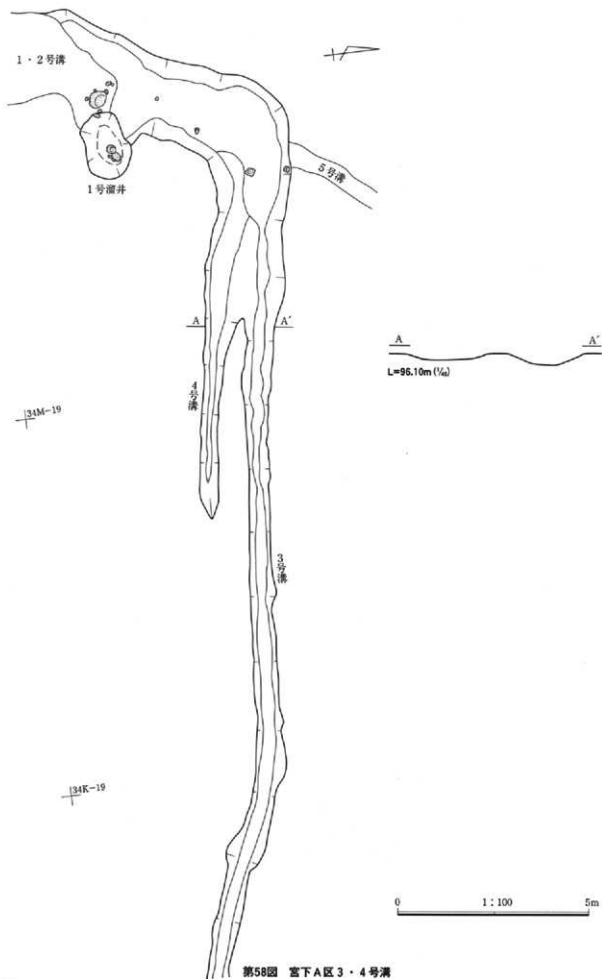
掲載した資料の他に土師質土器破片1点、砥石1点、土師器破片77点、須恵器破片9点、灰軸陶器破片2点が出土している。

**所見** 中世の遺構と考えられる。1号溜井に伴う用水路と考えられる。

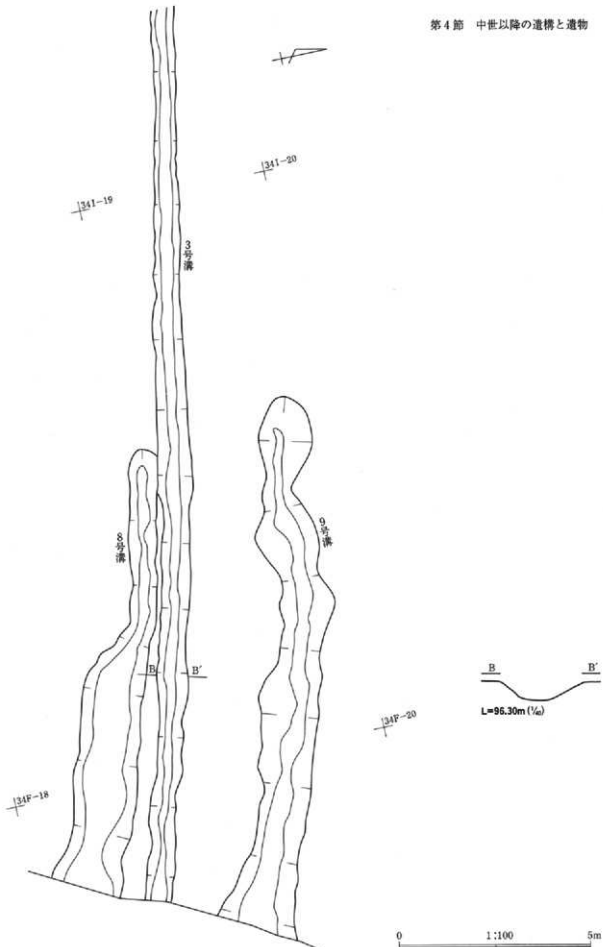


0 1:3 10cm

第57図 宮下A区1・2号溝出土遺物



第58図 地下A区3・4号溝



第59図 宮下A区3・8・9号溝

**A区 3号溝 (第58・59図、PL15)**

**位置** 34E-G-18、34F-K・N・O-19、34J-N-20

**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。As-B下水田より新しい。1号・2号・4号・5号・8号溝と重複する。本遺構が8号溝を掘り込み8号溝より新しい。1号・2号・4号・5号溝との新旧関係は不明であるが、同時期の可能性が考えられる。本遺構は1号溜井に掘り込まれていたが、同時期に利用された可能性が高い。

**形状** 全長は51.94m、上幅0.54~2.46m、底幅0.15~1.82m、深さ0.11~0.21mである。走行方向は、西北西から東南東へ(N-77°-W)走行すると想定され、東側の調査区外へ延びている。

**埋没土** As-Bを多量に含む黒褐色土。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世の遺構と考えられる。1号溜井に伴う用水路と考えられる。

**A区 4号溝 (第58図、PL14)**

**位置** 34L・M-19、34L-N-20

**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。3号溝と重複し新旧関係は不明であるが、同時期の可能性が考えられる。

**形状** 全長は8.52m、上幅0.42~0.99m、底幅0.18~0.58m、深さ0.04~0.08mである。走行方向は、初めに西北西から東南東へ(N-72°-W)、34M-20グリッドで西から東へ(N-80°-W)向きを変え走行すると想定され、調査区の途中で消滅する。

**埋没土** As-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世の遺構と考えられる。1号溜井に伴う用水路と考えられる。

**A区 8号溝 (第59図、PL14)**

**位置** 34E-G-18、34G-19

**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。3

号溝と重複し、新旧関係は不明である。

**形状** 全長は11.74m、上幅0.66~1.67m、底幅0.13~1.15m、深さ0.01~0.06mである。走行方向は、初めに西から東へ(N-80°-W)、34G-18グリッドで西北西から東南東へ(N-67°-W)向きを変え走行すると想定され、東側の調査区外へ延びている。

**埋没土** As-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世の遺構と考えられる。

**A区 9号溝 (第59図、PL14)**

**位置** 34E-18、34E-G-19

**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。

**形状** 全長は14.14m、上幅0.78~2.21m、底幅0.19~1.08m、深さ0.03~0.06mである。走行方向は、初めに西から東へ(N-87°-W)、34F-19グリッドで西北西から東南東へ(N-70°-W)向きを変え走行すると想定され、東側の調査区外へ延びている。

**埋没土** As-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世の遺構と考えられる。

**A区 5号溝 (第60図、PL14)**

**位置** 34M・N-20、44M-1、44L・M-2、44K・L-3

**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれている。本遺構がAs-B下水田より新しい。3号溝と重複し新旧関係は不明であるが、同時期の可能性が高い。本遺構は2号溜井に掘り込まれているが、同時期に利用された可能性が高い。

**形状** 全長は16.72mである。2号溜井北側では、全長11.52m、上幅0.33~0.60m、底幅0.12~0.31m、深さ0.03~0.05mである。2号溜井南側では、全長5.20m、上幅0.46~0.54m、底幅0.10~0.18m、深さ0.04~0.06mである。走行方向は、初めに北東か



ら南西へ(N-49°-E)、44M-2グリッドで北東から南南西へ(N-32°-E)向きを変え、2号溜井(44M-1グリッド)に到達すると想定され、北側は近・現代の堀に壊されている。2号溜井の南側では北東から南西へ(N-42°-E)向きに走行すると想定される。

**埋没土** As-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世の遺構と考えられる。2号溜井に伴う用水路と考えられる。

#### A区 6号溝 (第60図、PL14)

**位置** 44L・M-1、44K・L-2

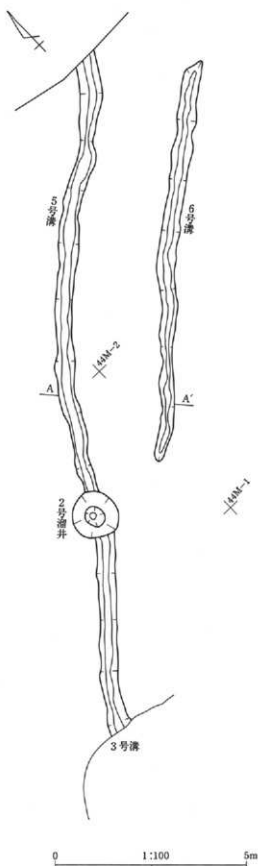
**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。本遺構がAs-B下水田より新しい。

**形状** 全長は10.57m、上幅0.26~1.06m、底幅0.09~0.23m、深さ0.03~0.06mである。走行方向は、初めに北東から南西へ(N-53°-E)、44L-2グリッドで北東から南西へ(N-45°-E)向きを変え走行すると想定される。

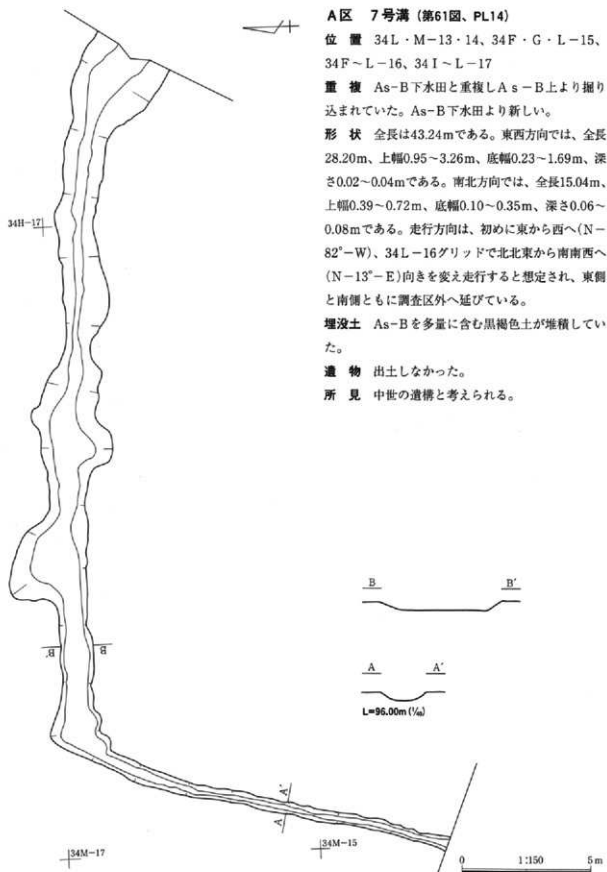
**埋没土** As-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世の遺構と考えられる。走行方向から考え、2号溜井あるいは1号溜井に伴う導水のための用水路と推定される。



第60図 宮下A区5・6号溝



**A区 7号溝 (第61図、PL14)**

**位置** 34L・M-13・14、34F・G・L-15、34F-L-16、34I-L-17

**重複** As-B下水田と重複しAs-B上より掘り込まれていた。As-B下水田より新しい。

**形状** 全長は43.24mである。東西方向では、全長28.20m、上幅0.95~3.26m、底幅0.23~1.69m、深さ0.02~0.04mである。南北方向では、全長15.04m、上幅0.39~0.72m、底幅0.10~0.35m、深さ0.06~0.08mである。走行方向は、初めに東から西へ(N-82°-W)、34L-16グリッドで北北東から南南西へ(N-13°-E)向きを変え走行すると想定され、東側と南側ともに調査区外へ延びている。

**埋没土** As-Bを多量に含む黒褐色土が堆積していた。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 中世の遺構と考えられる。

第61図 宮下A区7号溝

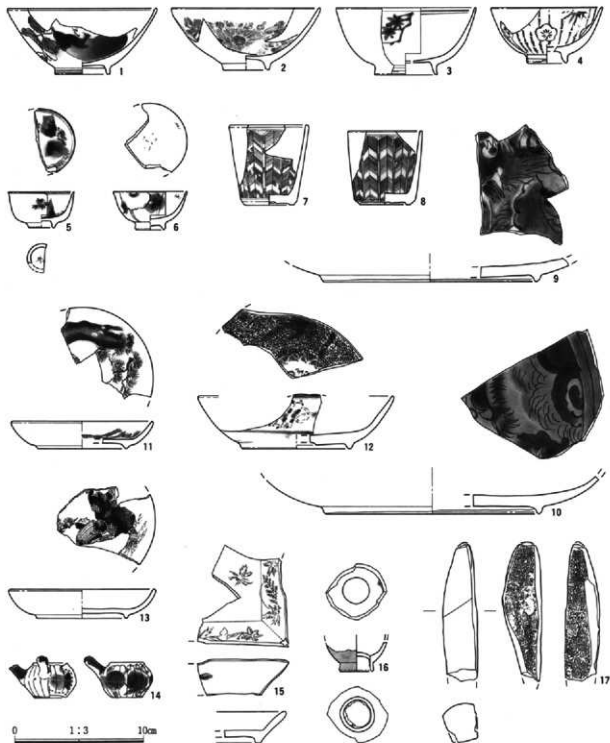
## 3 遺構外出土遺物(中・近世以降)

(第62図、PL20)

ここに報告する遺物は細田遺跡B区の試掘調査を行った際に出土した磁器・砥石の一部を資料化したものである。出土地点の2号トレンチは23P-5グ

リッドから24D-7グリッドにかけて東西方向に設定されていた。

1~16は磁器で飯碗、小碗、蕎麦猪口、杯、皿、角皿などの器種が認められる。時期は近代以降に位置づけられる。17は砥沢石製の砥石である。



第62図 中・近世以降の遺構外出土遺物



1 富田細田遺跡C区洪水層下水田（西から）調査区の上方向、荒砥川を間に建物群の奥に荒砥前田遺跡、その左（北）側に荒砥宮田遺跡が位置する。



2 荒砥前田遺跡洪水層下水田（東から）建物群の奥方向に富田細田遺跡が位置する。



3 荒砥宮田遺跡洪水層下水田（東から）写真上位、遠方が富田宮下遺跡。

## 第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

## 第1節 調査の概要

富田宮下遺跡台地部分の調査においては第7表にあるよう縄文時代から中・近世にかけての遺構が検出された。当該部分の調査面積は約16,900㎡である。立地は、南北方向に伸びる台地の中央から東縁にあたり、確認面の標高は96.40mから100.20mであった。

竪穴住居は、A～Cの各調査区から弥生時代中期2軒、弥生時代後期(一部は古墳時代前期に及ぶ)9軒、古墳時代15件、古墳時代後期26軒、奈良・平安時代51軒、時期不明2軒の合計105軒を検出した。

掘立柱建物のうち、C区で検出した4棟については、伴出する遺物が微量であったため詳細な年代を確定することは困難であったが、奈良・平安時代の所産である可能性が高い。

A・B区で検出した溝は、調査が全体に及んでいないため詳細については把握できなかったが、周囲に溝を廻らした方形区画、屋敷地の存在が推定される。これらの溝は、明治時代初頃の地割り図には記録がないことからその時期には完全に埋没していたものと考えられることから、近世以前の遺構となる。

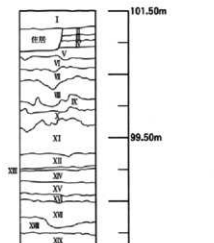
第7表 富田宮下遺跡台地部分の遺構一覧

	A区	B区	C区	合計
縄文時代		土坑 13基	土坑 1基	土坑 14基
弥生時代 ～古墳時代 前期			住居 11軒 遺構址 1基	住居 11軒 遺構址 1基
古墳前・ 中期時代	住居 2軒 遺構址 1基		住居 13軒 遺構址 1基 土坑 1基 側木痕 1基	住居 15軒 遺構址 2基 土坑 1基 側木痕 1基
古墳後期 時代	住居 2軒 溝 1条	住居 8軒	住居 16軒 土坑 1基	住居 26軒 土坑 1基 溝 1条
奈良・ 平安時代	住居 3軒	住居 10軒	住居 38軒 掘立柱 建物 4棟	住居 51軒 掘立柱 建物 4棟
中・近世	掘立柱 建物 2棟 井戸 5基 溝 16条 土坑 2基	掘立柱 建物 1棟 井戸 4基 溝 13条 土坑 9基	井戸 3基 溝 9条 土坑 21基 道状遺構 1基 遺構址 1基 (時期不明)	掘立柱 建物 3棟 井戸 12基 溝 38条 土坑 32基 道状遺構 1条 遺構址 1基

## 第2節 基本土層

第63図は、富田宮下遺跡C区55H-12グリッド付近の土層を参考に作成した台地部分の基本土層模式図である。台地部分では表土が30から50cmほど堆積していただけであった。

C区及びA・B区の44・45グリッドの11ライン以北では表土除去後、Ⅲ層上面で遺構確認を行った。また、縄文時代の土坑、C区33号土坑はもう一層下位の、層上面でその存在が確認された。A区44グリッド11ライン以南ではⅡ層が堆積しており、その上面で遺構確認作業を行った。



- I. 表土  
 II. 黒褐色土 As-Cをゴマ塩状に含む。  
 III. 暗褐色ローム  
 IV. 暗褐色ローム  
 V. 暗褐色ローム  
 VI. 暗褐色ローム  
 VII. 暗褐色ローム  
 VIII. 暗褐色ローム  
 IX. 暗褐色ローム  
 X. 暗褐色ローム  
 XI. 暗褐色ローム  
 XII. Hr-HP  
 XIII. 暗褐色ローム  
 XIV. 暗褐色ローム  
 XV. 暗褐色ローム  
 XVI. 暗褐色ローム  
 XVII. 暗褐色ローム  
 XVIII. 暗褐色ローム  
 XIX. 暗褐色ローム

第63図 富田宮下遺跡台地部分基本土層

### 第3節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 概要

B区で13基、C区で1基、土坑を検出した。いずれも陥し穴と考えられるが伴する遺物がなく、掘削時期は不明である。この他にA区からC区にかけての広範囲から、土器・石器が出土した。いずれも遺構を伴わないもので、竪穴住居や溝の埋没土中や遺構確認作業中に出土した資料である。

#### 2 土坑

##### B区 4号土坑 (第64図、PL22)

位置 45C-12

重複 2号住居に後出する。

形状 底面の平面形は東側で丸味を帯びるもの、西側は隅をなしており、基本は長方形を意識した形状であったと考えられる。断面形は平坦な底面から50cmほど直立気味に立ち上がった後外方に向かって大きく外反している。特に北壁中央はそれが顕著である。長軸3.01m短軸2.05m、深さ1.11mを測る。

方位 N-59°-W

埋没土 黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土がレンズ状に堆積している。

所見 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

##### B区 6号土坑 (第64図、PL22)

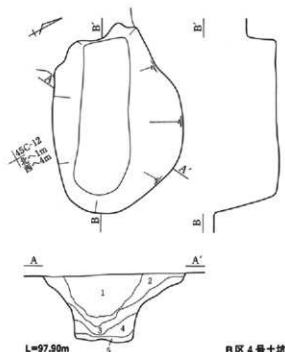
位置 44S-15

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は上端が長円形を呈するに対し、下端は各辺が直線を指向し長方形に近似する。北側は中位でオーバーハングして下端が23cmほど奥へ入り込んでいる。断面形は底面から20cmほど垂直に立ち上がった後、大きく外反して立ち上がっている。長径2.74m短径1.72m、深さ1.12mを測る。底面には小ピットが多数見られた。その中ピット1は底面からの深さが38cm、ピット2は26cmであった。

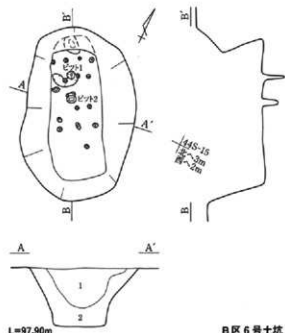
方位 N-27°-W

埋没土 上層に黒色土が、下層に黄褐色土が堆積していた。



B区4号土坑

1. 黒褐色土 しまり強く、ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
3. 黄褐色土 ローム粒を非常に多く含む。
4. 黄褐色土 3層に類似するがより多くローム粒を含む。
5. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



B区6号土坑

1. 黒色砂壤土 黄褐色ローム粒・ブロックを少量含む。
2. 黄褐色土 黄褐色ロームを主体とし黒色土ブロックを多く含む。

0 1:60 2m

第64図 B区4・6号土坑

所見 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

#### B区 9号土坑 (第65図、PL22)

位置 45A・B-13

重複 8号・10号土坑に先出する。

形状 平面形は上端が長円形であるのに対し、中段及び下端は長軸方向の壁面がやや直線を指向している。断面形は上方に向かって外反する立ち上がりであるが北壁、南東隅はオーバーハンクしている部分があった。長軸3.07m短軸1.84m、深さ1.06mである。底面には小ピットが多数見られたが直径は14cm以下、深さ9cm以下であった。

方位 N-47°-W

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から土師器破片1点、須恵器破片2点が出土したが本遺構に直接伴う可能性は低い。

所見 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

#### B区 13号土坑 (第65図、PL23)

位置 44Q-14

重複 24号土坑と重複する。

形状 平面形は長円形を呈する。下端も上端とはほぼ相似形である。直径2.16m短径0.83m、深さ1.07mである。底面からは小ピットは検出されていない。

方位 N-16°-W

埋没土 上層に黒色土、中層に暗褐色土、下層に黄褐色土がほぼ水平に堆積していた。

所見 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

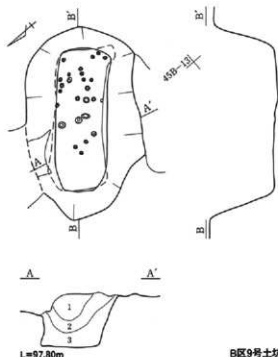
#### B区 15号土坑 (第66図、PL22)

位置 54Q-1・2

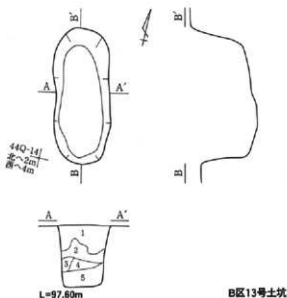
重複 重複する遺構はない。

形状 北端は削平されていた。平面形は長円形を呈するが底面は狭小で、ここから立ち上がった壁面は底面から20~30cmの位置で大きく外反、傾斜面を形成し上端へいたる。上端の残存長2.41m、短径1.10m、底面の短径0.22~0.30m、深さ0.77mである。

方位 N-34°-W



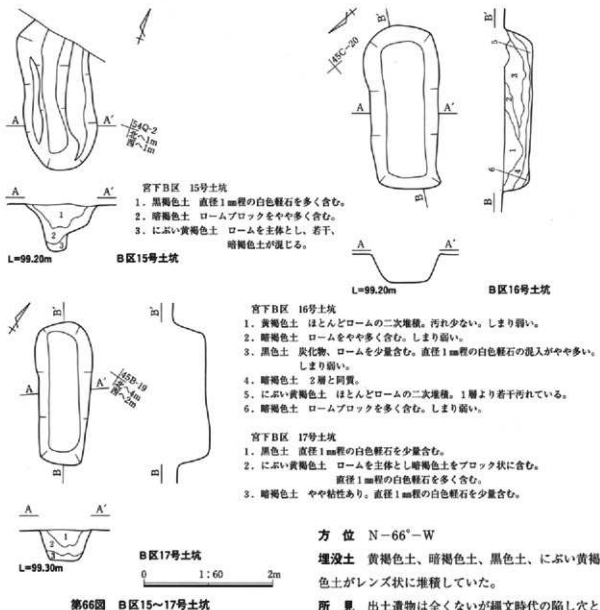
- L=97.80m B区9号土坑
1. 黒褐色土 黄褐色ローム殻を含む。
  2. 暗褐色土 黄褐色ローム土をブロック状に含む。
  3. 暗褐色土 黄褐色ローム土を主体とし黒褐色土ブロックを少量含む。



- L=97.80m B区13号土坑
1. 黒色土 黄褐色ローム殻を少量含む。
  2. 暗褐色土 黄褐色ロームをブロック状に含む。
  3. 暗褐色土 2層より黄色味が強い。黄褐色ロームと黒色土の混泥土層。
  4. 黄褐色土 黄褐色ロームを主体とし黒色土のブロックを含む。
  5. 黄褐色土 縦指爪大の黒色土ブロックを少量含む。

0 1:60 2m

第65図 B区9・13号土坑



第66図 B区15~17号土坑

**埋没土** 上・中層に黒褐色土、暗褐色土が堆積、下層にはロームを主体としたにぶい黄褐色土が見られた。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

**B区 16号土坑 (第66図、PL23)**

**位置** 45C-19・20

**重複** 重複する遺構はない。

**形状** 平面形はやや四隅が丸味をおびるもの長方形を基本としていたと考えられる。壁面は上方に向かってやや開くが、底面は平坦であった。長軸2.62m短軸1.07m、深さ0.50mである。

**方位** N-66°-W

**埋没土** 黄褐色土、暗褐色土、黒色土、にぶい黄褐色土がレンズ状に堆積していた。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

**B区 17号土坑 (第66図、PL23)**

**位置** 45B-19

**重複** 重複する遺構はない。

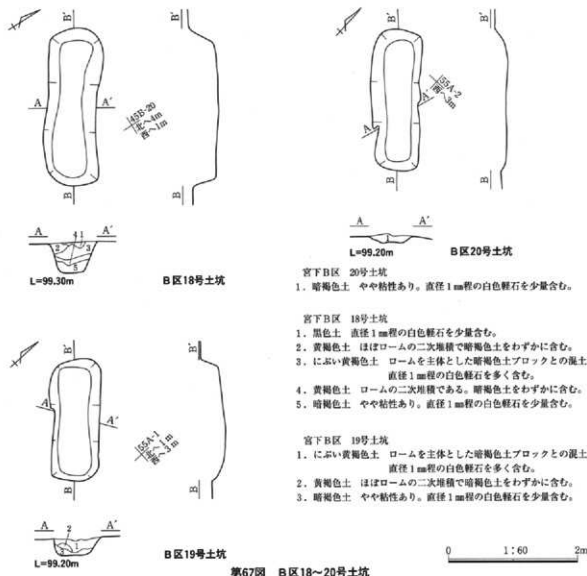
**形状** 平面形は隅丸の長方形であったと考えられる。底面はほぼ平坦であった。長軸2.27m短軸0.74m、深さ0.58mである。

**方位** N-35°-W

**埋没土** 黒色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土の順で堆積している。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。





第67図 B区18～20号土坑

**B区 18号土坑 (第67図、PL23)**

位置 45B-20

重複 重複する遺構はない。

**形状** 平面形は隅丸の長方形をしている。長軸の中央部分で横軸が狭くなる起伏がみられるもののほぼ平坦であった。長軸2.49m短軸0.76m、深さ0.50mである。

方位 N-55°-W

**埋没土** 黒色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土が堆積していた。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

**B区 19号土坑 (第67図、PL24)**

位置 55A-1、45A-20

重複 1号溝と重複、これに先出する。

**形状** 平面形は隅丸の長方形を呈する。底面は北側がやや浅くなるが大きな起伏は見られない。長軸1.93m短軸0.71m、深さ0.41mである。

方位 N-48°-W

**埋没土** 上層に黄褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

**B区 20号土坑 (第67図、PL24)**

位置 55A-1・2

**重複** 重複する遺構はなかったが、上層は攪乱を

宮下B区 20号土坑

1. 暗褐色土 やや粘性あり。直径1mm程の白色軽石を少量含む。

宮下B区 18号土坑

1. 黒色土 直径1mm程の白色軽石を少量含む。
2. 黄褐色土 ほぼロームの二次堆積で暗褐色土をわずかに含む。
3. にぶい黄褐色土 ロームを主体とした暗褐色土ブロックとの混土层。直径1mm程の白色軽石を多く含む。
4. 黄褐色土 ロームの二次堆積である。暗褐色土をわずかに含む。
5. 暗褐色土 やや粘性あり。直径1mm程の白色軽石を少量含む。

宮下B区 19号土坑

1. にぶい黄褐色土 ロームを主体とした暗褐色土ブロックとの混土层。直径1mm程の白色軽石を多く含む。
2. 黄褐色土 ほぼロームの二次堆積で暗褐色土をわずかに含む。
3. 暗褐色土 やや粘性あり。直径1mm程の白色軽石を少量含む。

受け、壁面の残存は不良であった。

**形状** 平面形は隅丸の長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。長軸2.24m短軸0.64m、深さ0.24mである。

**方位** N-44°-W

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

**B区 22号土坑 (第68図)**

**位置** 44S-20、54S-1

**重複** 2号溝と重複、これに先出する。

**形状** 平面形は長円形を呈する。壁面の立ち上がりは外傾著しいものがあった。長径2.10m短径0.96m、深さ0.43mである。

**方位** N-37°-W

**埋没土** 2号溝と同時に調査が進行したため確認はできなかった。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

**B区 23号土坑 (第68図、PL24)**

**位置** 44Q-18・19

**重複** 3号溝と重複、これに先出する。14号・15号住居からも削平を受けている。

**形状** 3号溝との重複により形状がやや乱れているが、平面形は長円形を基本としていたようである。長径2.08m短径0.92m、深さ0.90mである。

**方位** N-14°-W

**埋没土** 黒褐色土、にぶい黄褐色土が堆積していた。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。

**B区 24号土坑 (第68図、PL24)**

**位置** 44Q・R-14

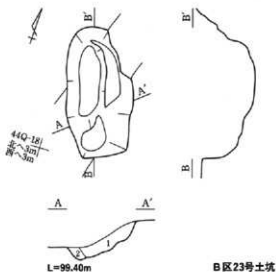
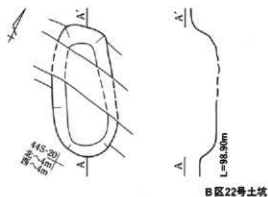
**重複** 1号井戸と重複、これに先出する。

**形状** 平面形は不整形の長楕円形を呈する。長径1.94m短径(最大)1.18m、深さ0.44mである。

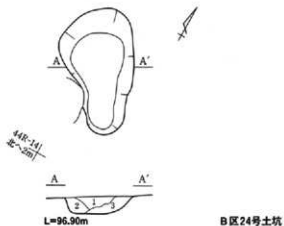
**方位** N-28°-W

**埋没土** 暗褐色土、暗黄褐色土が堆積している。

**所見** 出土遺物は全くないが縄文時代の陥し穴と考えられる。



1. 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。白色軽石の混入やや多い。
2. にぶい黄褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。



1. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
3. 暗黄褐色土 ローム粒を多く含む。

0 1:60 2m

第68図 B区22~24号土坑

## C区 33号土坑 (第69図、PL24)

位置 55 I-15・16

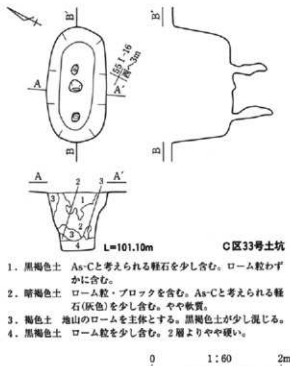
重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.82m短軸0.95m、深さ0.93mを測る。底面はほぼ水平であったが、西壁から25cm、東壁から35cmの位置に合計2本のピットが掘られていた。西壁寄りのピットは深さ60cm、東壁寄りのピットは深さ52cmである。

方位 N-63°-E

埋込土 黒褐色土、暗褐色土、褐色土が堆積、底面のピット内にはローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が堆積、下位はロームの含有が増し、軟質であった。

所見 旧石器の試掘調査過程で検出した。出土遺物はないが形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



C区33号土坑

1. 黒褐色土 As-Cと考えられる軽石を少し含む。ローム粒わずかに含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。As-Cと考えられる軽石(灰色)を少し含む。やや軟質。
3. 褐色土 地山のロームを主体とする。黒褐色土が少し混じる。
4. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。2層よりやや硬い。

0 1:60 2m

第69図 C区33号土坑

## 3 遺構外出土遺物

(第71~74図、PL102~104)

遺物の分布 縄文時代の遺構としてはC区で1基、B区で13基の土坑を検出したがいずれも出土遺物はなく、その構築時期は不明である。また、B区北側部分は圃場整備時に著しく改変を受けており、遺構・遺物の出土はなかった。この部分については前橋市教育委員会により調査が実施された際にも縄文時代関連の遺構・遺物の検出はなかった。

A区からは前期踏碇b式・踏碇c式、中期加曾利E3式・阿玉台式、後期称名寺I式・加曾利B1~2式がそれぞれ少量ずつ出土した。44N・O-9・10グリッドでは遺構確認のためのトレンチを設定して調査を行ったが遺構の検出には至らなかった。

B区では調査区の南端、45A-5グリッド周辺の小調査区から加曾利B1・2式の資料が少量出土した。

C区では65グリッドで前期黒浜式土器が多数出土したが遺構の検出はなかった。他に前期踏碇b式・c式、中期阿玉台II式・加曾利E3式、後期称名寺I式・加曾利B1・2式が少量ずつ出土した。

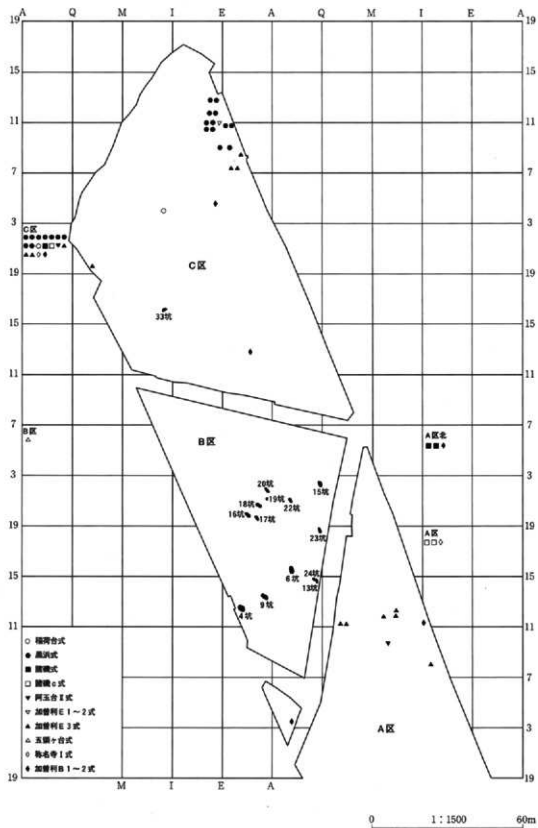
出土土器の観察 個々の土器の出土位置、型式については第8表に記したとおりである。

1は草創期桶荷台式の破片である。残存長は3.7cmである。絡条体Rの捻糸文が施されている。

2~21は前期黒浜式土器の深鉢の破片である。3は弱い波状口縁を呈すると考えられる大型破片で胴部上半まで残存していた。分量は、復元口径29.4cm、残存高14.8cmである。口縁部直下と弱いくびれ部を横方向の2本1単位の平行沈線と連続爪形文で区画している。地文には附加条第1類のRL+L、LR+Rの縄文が羽状に施されている。14~16にも同様の縄文が施文されている。

4は口縁部の小破片、2は胴部破片で、共に平行沈線とコンパス文による施文である。9にもコンパス文が見られる。

5の口縁部破片で、残存高5.0cm、LR縄文を地文に、この上に平行沈線による弧状の文様が表現されている。6の口縁部破片は残存高6.9cmでLR縄文が、7の口縁部破片は残存高5.6cmでRL、LRの結束縄文が施文されている。8は胴部くびれ部の破片でLR、RL縄文の施文である。10の口縁部破片は残存



第70図 縄文時代遺構・遺物分布図

高5.5cm、上位に幅広い無文帯を有しその下に無節のL、R縄文が施されている。11はLR縄文施文の口縁部破片である。残存高は2.8cmである。12・13は3のくびれ部と同じ連続爪形文を施した胴部破片である。

17～21はいずれも胴部の破片である。17はLR縄文、18はRL縄文、19はRL縄文である。20は3と同様の羽状縄文である。21は底部付近の破片でRL縄文を施文する。

22～24は前期諸磯b式の破片である。22・23はLR縄文を地文としその上に半篋竹管による平行沈線を重ねている。22の残存長4.0cmである。24は横方向の平行沈線による文様が描かれている。

25～27は前期諸磯c式の深鉢の破片である。25・26は波頂の高い波状口縁の一部である。地文に集合沈線を施した上に2本一単位の結節浮線文、円形浮文が見られる。26の残存高は9.4cmである。27は条線の上に円形浮文が貼付されている。

28・29は中期阿玉台Ⅱ式の深鉢口縁部破片である。28は肩状突起の一つで鼻高の隆帯が弧状に垂下する。縁部に結節沈線による文様が付けられている。残存高は9.2cmである。29も口縁部の破片である。端部に見られる剥離痕から胴部に向かって隆線が延びている。無文と考えられる。

30は中期加曾利E1～2式の深鉢、胴部破片である。残存高は20.7cmを測る。文様は、LR縄文を地文に縦方向に沈線・突帯による区画をなし、蕨手文を配している。

31～40は中期加曾利E3式の破片である。31・33は口縁部無文帯の破片、32は口縁部破片でRL縄文が見られる。31の残存高は4.5cmである。34も口縁部破片で残存高6.5cmを測り、内嚢して立ち上がる。口縁部直下には沈線が巡り、区画内に円形刺突文が配される。35・36の縄文はLRである。37はLR縄文を擦り消している。

38・39・40は底部の破片である。底部の直径は38が8.2cm、39が7.2cm、40が11.4cmである。

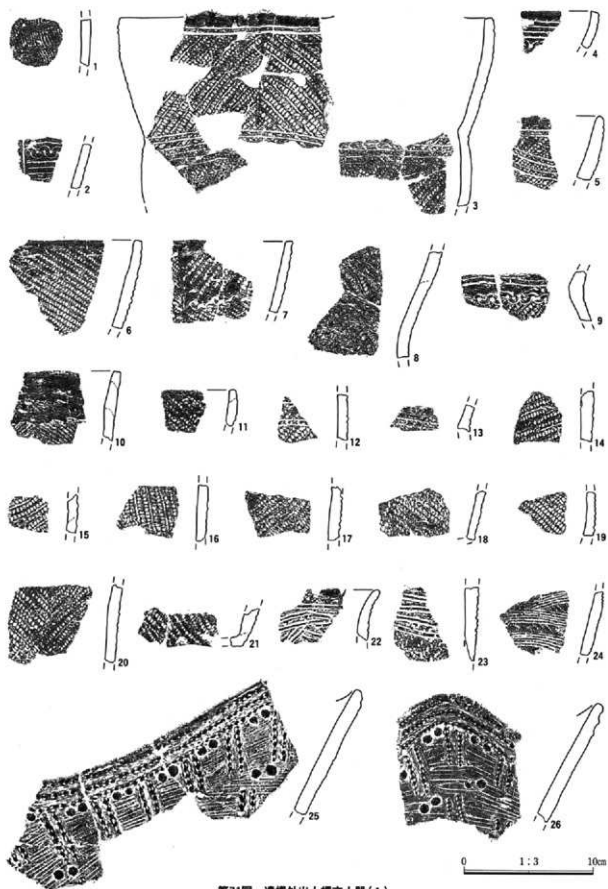
41は中期五領ヶ台式の胴部破片である。くびれ部から外方に向かって立ち上がる。LR縄文を地文にJ字状の沈線文が見られる。

42・43は後期称名寺I式の破片である。縄文は二つともLRである。

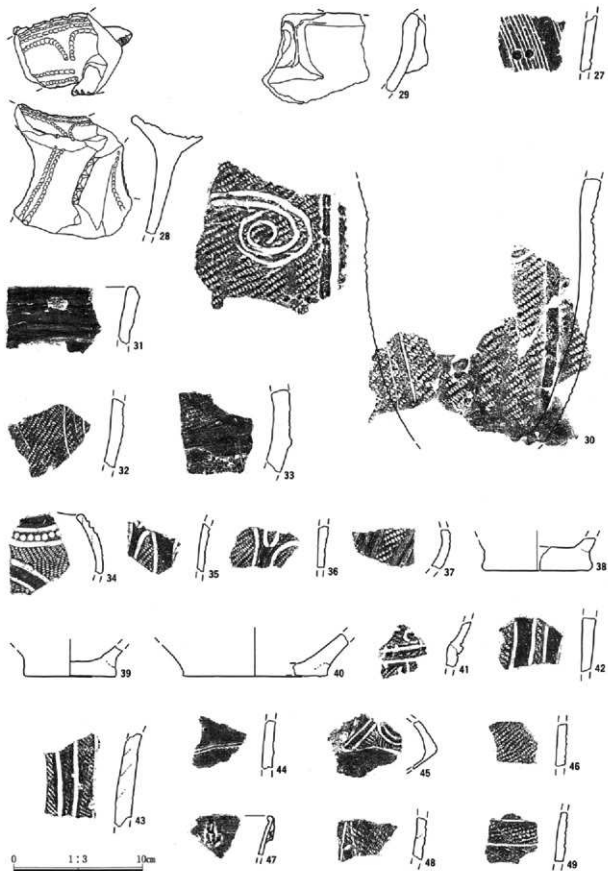
44～49は後期加曾利B1～2式の破片である。44には半篋竹管状の沈線が見られる。45はそろばん玉状に屈曲する胴部に沈線文が施されている。46はLR縄文を施文する。47は口縁部破片で残存高3.1cmである。8の字状貼付文が見られる。48は沈線区画内に縄文が見られる。49はLR縄文である。

第8表 遺構外出土縄文土器一覧

番号	種別	出土位置	番号	種別	出土位置	番号	種別	出土位置
1	草創期編背台式	C区65 I-3	18	黒浜式	C区65D-10	33	加曾利E3式	A区44N-11・12、A区15・16溝
2	前期黒浜式	C区6号住居	19	黒浜式	C区	34	加曾利E3式	C区7号住居
3	黒浜式	C区、C区4号住居、C区65E-11ピット1	20	黒浜式	C区	35	加曾利E3式	C区8号住居
4	黒浜式	C区	21	黒浜式	A区北	36	加曾利E3式	C区8号住居
5	黒浜式	C区65E-11ピット1	23	諸磯b式	A区北	37	加曾利E3式	CK550-19、ブ区15
6	黒浜式	C区65E-12	24	諸磯b式	C区	38	加曾利E3式	CK区
7	黒浜式	C区5号住居	25	前期諸磯c式	A区、A区ローム層上黒色土中、C区	39	加曾利E3式	CK区
8	黒浜式	C区4号住居	26	諸磯c式	C区	40	加曾利E3式	CK区
9	黒浜式	C区	27	諸磯c式	A区ローム層上黒色土中	41	中期五領ヶ台式	B区
10	黒浜式	C区	28	中期阿玉台Ⅱ式	CK区	42	後期称名寺I式	CK区
11	黒浜式	C区	29	阿玉台Ⅱ式	A区12溝	43	称名寺I式	A区
12	黒浜式	C区	30	中期加曾利E1～2式	CK区4号住居	44	後期加曾利B1～2式	A区北
13	黒浜式	C区	31	中期加曾利E3式	A区1号住居	45	加曾利B1～2式	A区7号住居
14	黒浜式	C区	32	加曾利E3式	A区44N-11・12、A区15・16溝	46	加曾利B1～2式	B区44T-3
15	黒浜式	C区				47	加曾利B1～2式	C区40号住居
16	黒浜式	C区				48	加曾利B1～2式	C区65E-4
17	黒浜式	C区65D-10				49	加曾利B1～2式	C区



第71図 遺構外出土縄文土器(1)



第72図 遺構外出土縄文土器(2)

#### 第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

出土石器の観察 50～69は遺構外出土の縄文時代石器である。個々の法量、石材については第9表のとおりである。

50は有舌尖頭器である。A区7号住居の柱穴埋没土中からの出土である。法量は、全長6.20cm、基部長1.4cm、最大幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。重量は7gである。両側縁に押圧剥離が施され、鋸歯状を呈する。石材はチャートである。縄文時代草創期の所産と考えられる。

51～57は石鏃である。いずれも無茎である。51は全長と幅の比率がほぼ等しい形状である。基部の挟り込みは浅い。52は全長に比して幅の狭い形状で逆V字状の挟り込みである。56・57は挟り込みが極めて浅い形状である。53～55は石材の性質のためか剥離面が不明瞭である。58は有茎石鏃の未製品である。片側面にのみ細かな剥離が見られる。

59～63は打製石斧である。59は撮形を呈し、表面に自然面を多く残している。表裏両面とも刃部近く

の器面が磨耗を受けている。60・61は分銅形を呈する。60は側面に深い挟り込みが形作られるが装着による磨耗痕などは見られない。61の刃部は平坦で粗い剥離面からなる。62は短冊形を呈するが刃部が欠損している。両側縁に細かな調整が施されている。裏面、刃部寄りの一部がわずかに磨耗している。63も短冊形を呈する。刃部側は一度欠損した後、この部分に再度調整を加えている。

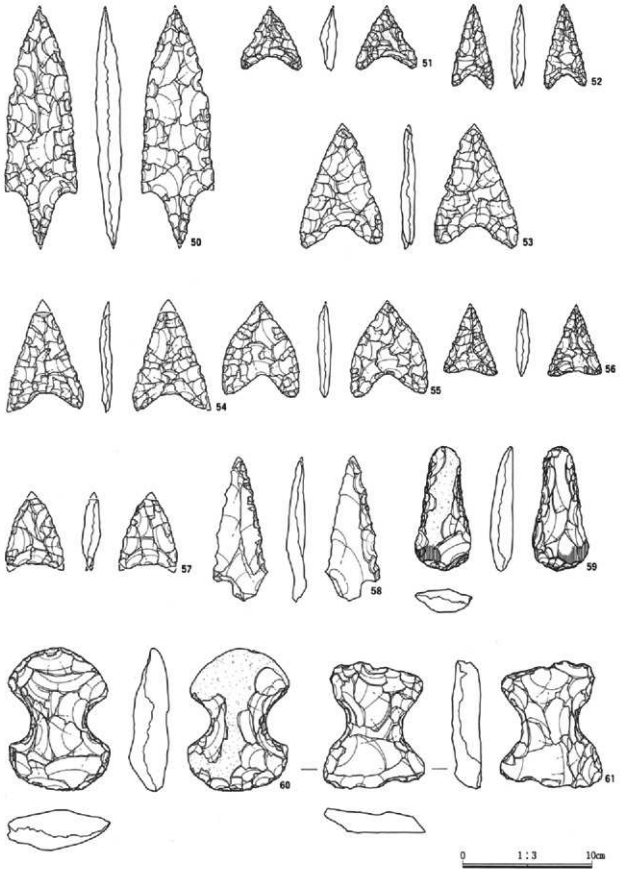
64～66はスクレイパーである。64は半月形を呈し、下端に加工痕を有する。65は半月形あるいは木の葉状を呈した製品の欠損品と考えられる。周縁部に細かな加工痕が見られる。66も半月形を呈する。表面はやや磨耗している。67は剥片である。

68・69は打製石斧の未製品と考えられる。68は上下両端に剥離面が多数見られる。左側面にも自然面(旧時に剥離)を残している。69は厚さ5.15cmを測る。片面に剥離痕が集中しているが、自然面は両面に残されている。

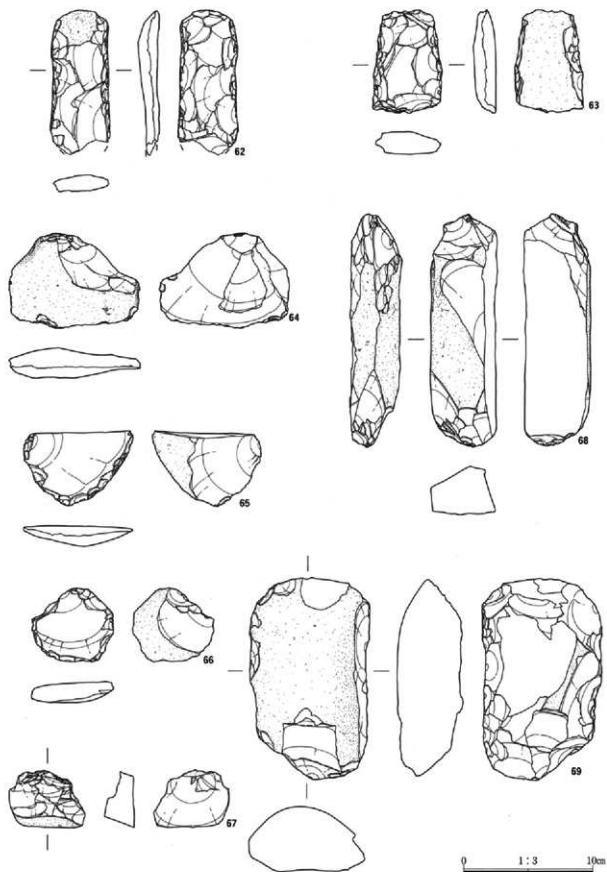
第9表 遺構外出土縄文石器一覧

No.	種別	出土位置	残存状態	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	種類
50	有舌尖頭器	A区7号住居柱穴1	完形	6.20	1.90	0.65	7	チャート
51	石鏃	B区表土	一部欠損	1.60	1.60	0.45	1	黒曜石
52	石鏃	C区19号住居埋没土	完形	2.25	1.10	0.40	1	チャート
53	石鏃	C区65T-3	一部欠損	3.30	2.20	0.40	2	チャート
54	石鏃	C区71号住居埋没土	一部欠損	2.60	1.95	0.30	1	黒色安山岩
55	石鏃	C区74号住居埋没土	一部欠損	2.45	2.00	0.35	1	黒色安山岩
56	石鏃	C区1号溝	一部欠損	1.80	1.40	0.35	1	チャート
57	石鏃	C区表土	一部欠損	1.85	1.50	0.50	1	黒色安山岩
58	石鏃未製品	C区65C-19	一部欠損	3.70	1.45	0.50	2	黒色安山岩
59	打製石斧	B区表土	完形	9.80	4.40	1.80	75	黒色頁岩
60	打製石斧	A区表土	完形	11.20	8.00	3.20	270	黒色頁岩
61	打製石斧	B区10号住居表土	完形	10.00	7.90	2.30	308	砂岩
62	打製石斧	C区1号溝	一部欠損	11.30	4.70	1.70	105	黒色頁岩
63	打製石斧	A区ローム層上黒色土	完形	8.10	5.40	1.80	107	黒色頁岩
64	スクレイパー	B区表土	完形	7.40	10.25	2.40	169	黒色頁岩
65	スクレイパー	B区1号溝西埋没土	完形	5.90	8.60	1.60	74	黒色頁岩
66	スクレイパー	B区1号溝西埋没土	完形	5.80	6.40	1.70	66	黒色頁岩
67	剥片	B区1号溝西埋没土	完形	4.50	6.00	2.40	67	黒色頁岩
68	打製石斧未製品	A区7号住居埋没土	完形	18.20	15.30	4.10	169	黒色頁岩
69	打製石斧未製品	A区22号溝埋没土	一部欠損	15.80	9.40	5.15	1,196	変輝緑岩





第73図 遺構外出土縄文石器(1)



第74図 遺構外出土縄文石器(2)

## 第4節 弥生時代の遺構と遺物

## 1 概要

C区から11軒の住居を検出した。C区11号・16号・19号住居は中期、その他は後期、終末期から古墳時代前期の住居である。C区26号・27号・73号・77号住居では埋没土中にAs-Cが純層で堆積していた。

## 2 住居

**C区 11号住居 (第75～77図、PL25・104)**

**位置** 65D・E-5・6, 65F-6

**重複** 10号住居と重複し、本遺構が10号住居より掘り込まれていた。

**形状** 南東部分が10号住居と重複するが、東西を長軸とする長方形を呈すると推定される。規模は長軸の残存5.06m、短軸3.58mである。

**面積** (15.15)<sup>2</sup>m<sup>2</sup> **方位** N-39°-E

**床面** 遺構確認から16cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** 上層はAs-Cを含む黒色土で埋まっていた。床面直上層から多量の炭化物が出土した。

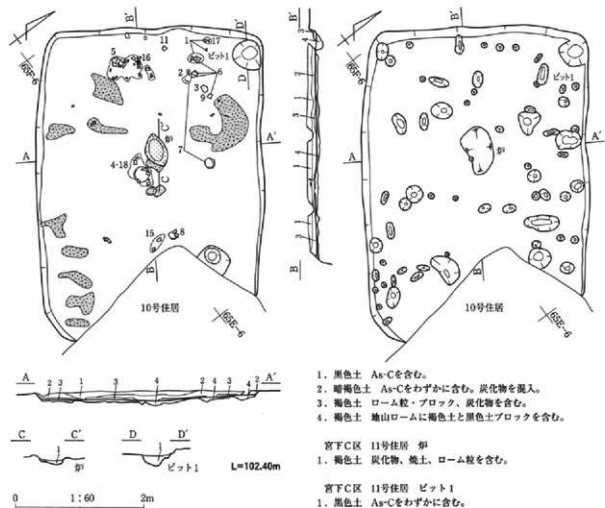
**炉** 床面中央やや北寄りに設けられていた。規模は長径42cm短径32cmである。

**周溝** 掘られていなかった。

**柱穴** 主柱穴は検出できなかった。北西隅にピット1本が掘られていた。規模は長径48cm短径43cm、深さ19cmである。貯蔵穴の可能性も考えられる。

**貯蔵穴** 確認できなかった。

**遺物** 住居の残存状態が悪く完形資料は得られなかった。床面出土の資料は以下のとおりである。中央、炉の東側から壺(4)の下半部が、その東側110cm



1. 黒色土 As-Cを含む。
2. 暗褐色土 As-Cをわずかに含む。炭化物を混入。
3. 褐色土 ローム粒・ブロック、炭化物を含む。
4. 褐色土 埴山ロームに褐色土と黒色土ブロックを含む。

宮下C区 11号住居 炉

1. 褐色土 炭化物、焼土、ローム粒を含む。

宮下C区 11号住居 ピット1

1. 黒色土 As-Cをわずかに含む。

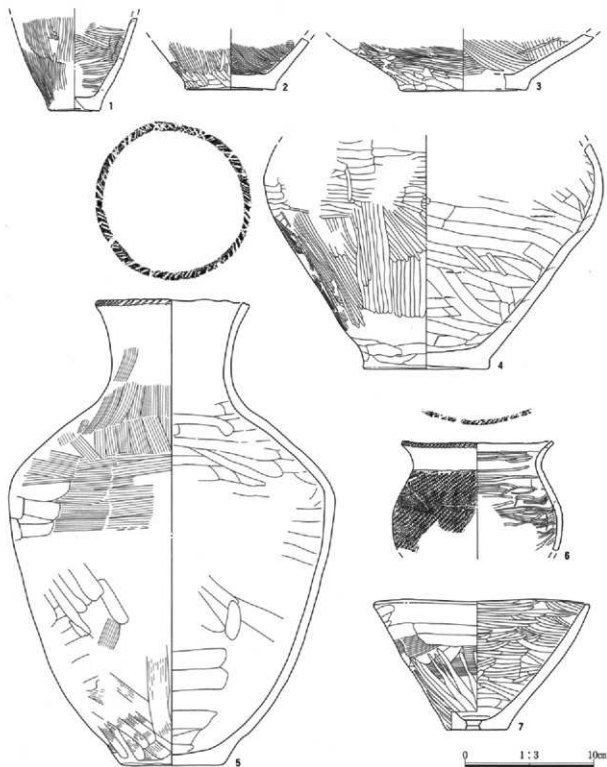
第75図 C区11号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

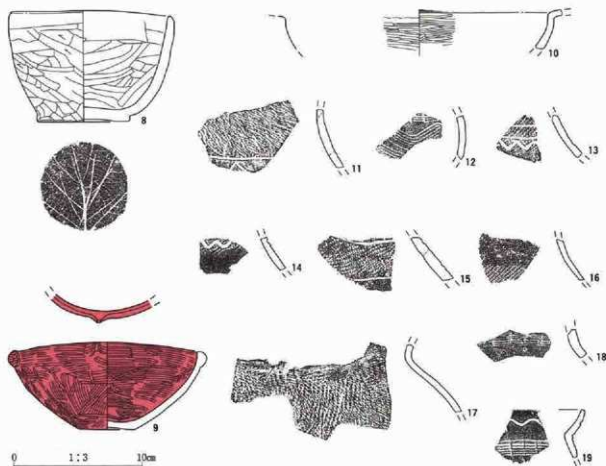
から鉢(8)が出土した。北壁寄りの床面からは壺(5)が小破片の状態で検出された。北西部分からは小型甕(6)、壺(1)、赤色塗彩で飾られた鉢(9)が出土した。炉と北壁の中間の位置からは有孔鉢(7)が出土

した。

掲載した資料の他に弥生土器破片36点、土師器破片40点、陶磁器破片1点が出土した。(観P9)  
所見 弥生時代中期後半の住居と考えられる。



第76図 C区11号住居出土遺物(1)



第77図 C区11号住居出土遺物(2)

## C区 16号住居

(第78～82図、PL25・26・105)

位置 65F・G-3-5

重複 15号住居、1号溝と重複する。本遺構が南西部で15号住居により掘り込まれ、1号溝により床面の高さ程度まで掘り込まれていた。新旧関係は16号住居→15号住居→1号溝である。また、風倒木痕とも重複し、本遺構の南壁面の一部が壊されていた。

形状 南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸7.91m、短軸6.08mである。

面積 45.25㎡ 方位 N-31°-W

床面 遺構確認面から18cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 As-Cと多くのロームを含む黄黒色土。

炉 炉2基が設けられ、地山のロームまで掘り込まれていた。炉1は床面中央に設けられ、直径61cmである。炉2は床面中央やや南寄りに設けられ、

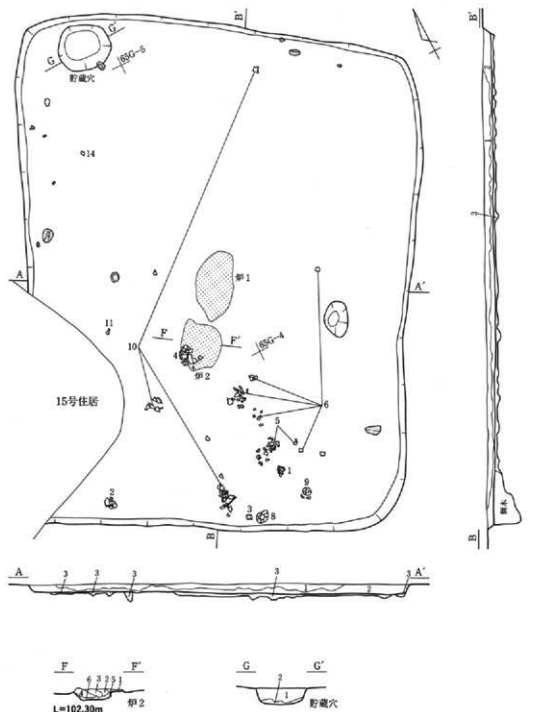
長径83cm短径76cmである。新旧関係は不明である。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 北西隅に掘られていた。規模は長径82cm短径74cmで床面からの深さは24cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 壁面の残存深度が低かったのに対し、残存状況の良好な土器が多く出土した。炉2から壺(4)が潰れた状態で出土した。他に床面から出土した資料としては炉の南東100cm前後から壺(6)が、さらにその南側から壺(5)、壺(9)の下半部が出土している。南西部からは壺(10)が出土した。また、貯蔵穴に近い北西寄りの床面上からは小型壺(7)が出土した。(19・20)は土器片を再利用した土製円板と考えられる。掲載した資料の他に土師器破片145点、弥生土器破片22点、縄文土器破片24点が出土した。(観P10・11)

所見 弥生時代中期後半の住居と考えられる。



1. 黒色土 ロームブロックと上位に多くのAs-Cを含む。
2. 黄黒色土 1層よりロームを多く、As-Cを少量含む。
3. 黄黒色土 ローム主体、黒色土ブロックを混入。

宮下C区 16号住居 貯蔵穴

1. 黄黒色土 ローム主体、焼土を少量含む。
2. 茶褐色土 全体に褐色土を混入。
3. 褐色土 焼土主体、黒色土を少量含む。

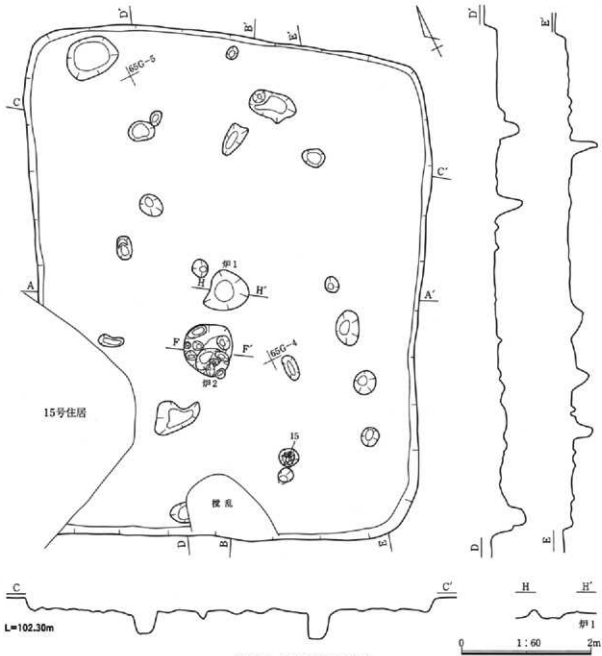
宮下C区 16号住居 貯蔵穴

1. 黒色土 ロームを少量、炭化物粒1点含む。
2. 黄黒色土 ロームを混土。

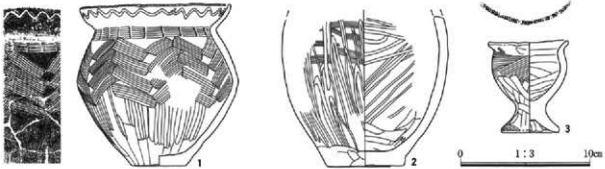
4. 黄黒色土 灰色土、焼土、ロームブロックを含む。
5. 黄黒色土 ロームと黒色土の混土。
6. 暗黄色土 焼土を含む。上位は焼土化している。

0 1:60 2m

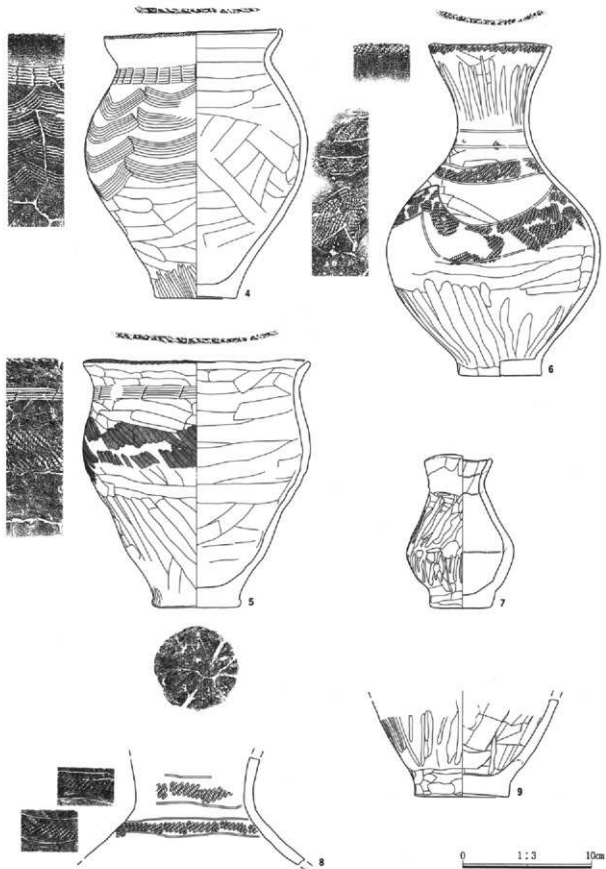
第78図 C区16号住居(1)



第79図 C区16号住居(2)

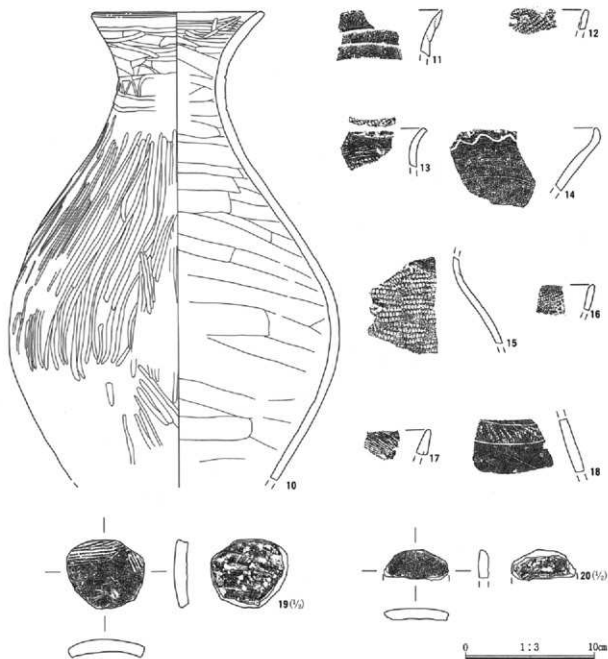


第80図 C区16号住居出土遺物(1)



第81図 C区16号住居出土遺物(2)





第82図 C区16号住居出土遺物(3)

## C区 19号住居 (第83~85図、PL26・106)

位置 65D-1~3、65E-2・3

重複 南側で20号住居、3号・4号土坑、1号溝と、北西隅で9号土坑と、東側で2号溝と重複する。本遺構が上記の遺構により掘り込まれていた。新旧関係は南側で、19号住居→20号住居→3号土坑である。

形状 住居の残存部分では東西を長軸とする長方形を呈する。残存部分の規模は東西長4.20m、南北

長3.78mである。

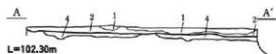
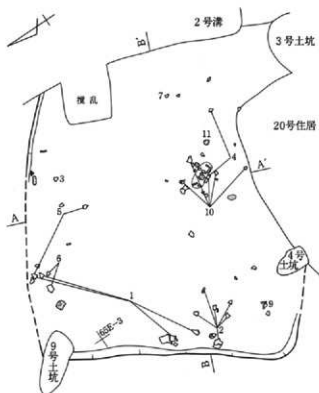
面積 計測不能 方位 N-26°-E

床面 遺構確認面から16cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 As-Cを少量含む黒色土で埋まっていた。焼土痕掘り方の調査時、住居は中央で焼土を確認した。

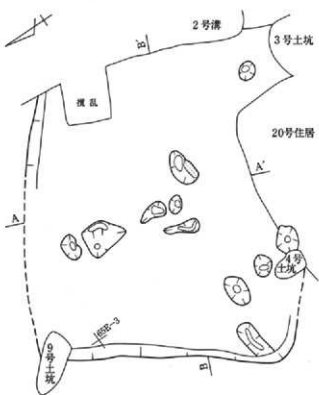
周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物 炉の周辺の床面から甕(10)の破片が多数出



1. 暗灰色土 As-Cの混土。中央層As-Cが多い。黒色土を混入。
2. 黒色土 As-Cを少量含む。ローム粒を混入。
3. 暗褐色土 4層に焼土粒を含む。
4. 暗褐色土 黒色土にロームブロック、地山ロームを含む。

0 1:60 2m

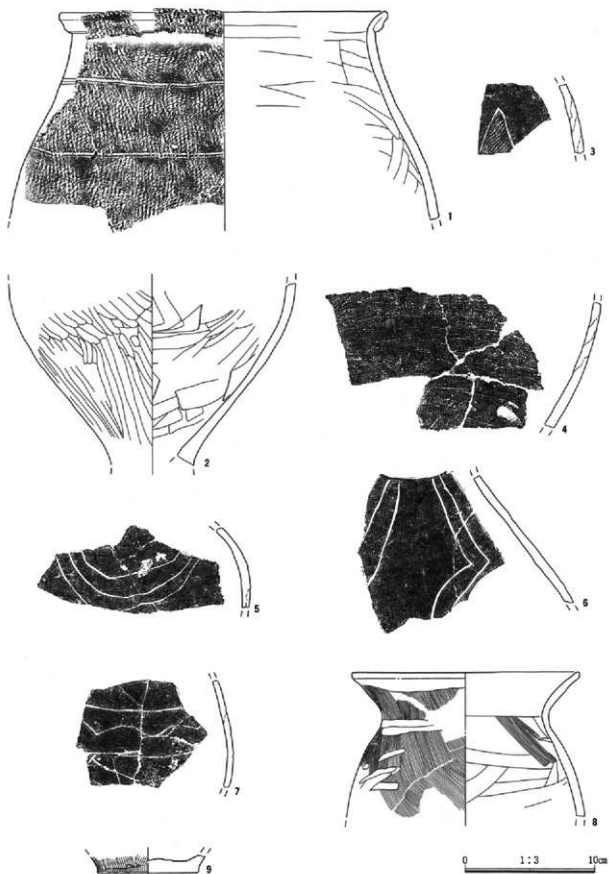


第83図 C区19号住居

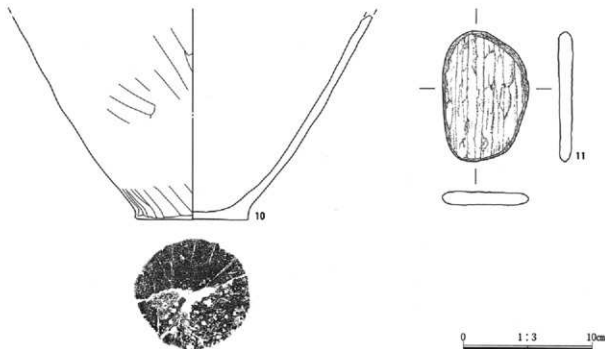
土している。西寄りから西壁際にかけての床面上からは壺(2)が出土、その北側、壁際から出土した短頸壺(1)は北西、壁際から出土の破片と接合した。

掲載した資料の他に土器器破片165点が出土している。(観P12)

所見 弥生時代中期後半の住居と考えられる。



第84図 C区19号住居出土遺物(1)



第85図 C区19号住居出土遺物(2)

### C区 26号住居

(第86~89図、PL26・27・106・107)

**位置** 55L・M-18~20、55N-19・20

**形状** 南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸8.86m、短軸6.90mである。

**面積** 57.66㎡ **方位** N-35°-W

**床面** 遺構確認面から65cm程掘り込んで床面となる。床面中央部はほとんど平坦であった。東西両側に床面より5cm程度高い部分がある(いわゆるベッド状遺構と考えられる)。南西隅は幅を狭め貯蔵穴の位置に折れ曲がっていた。東側のそれも南東隅で鋸の手状に延びていた。

**埋没土** 床面直上層は部分的に切れる部分があるがAs-C純層で埋まっていた。B-B'の土層断面に見られるよう壁際には一部黄褐色土の堆積があった箇所も認められる。As-C純層の厚さは4~16cmである。As-C除去後、多量の炭化物が出土した。

**炉** 床面中央北寄りに設けられていた。柱穴1と4を結ぶ線上から北壁寄りにある。長軸は住居の長軸と同一方向におかれていた。規模は長径146cm短径67cmである。

**周溝** 壊された北西部分や東側の一部を除き、ほ

ぼ全面にわたり壁面下に掘られていた。幅は6~20cmで、深さは1.5~10.5cmである。

**柱穴** 4本掘られていた。柱穴の位置は住居の四隅の対角線上にはなく、東西両長辺寄りに掘り込まれていた。よって各柱穴間を結ぶ距離は梁・桁方向で大差が生じていない。

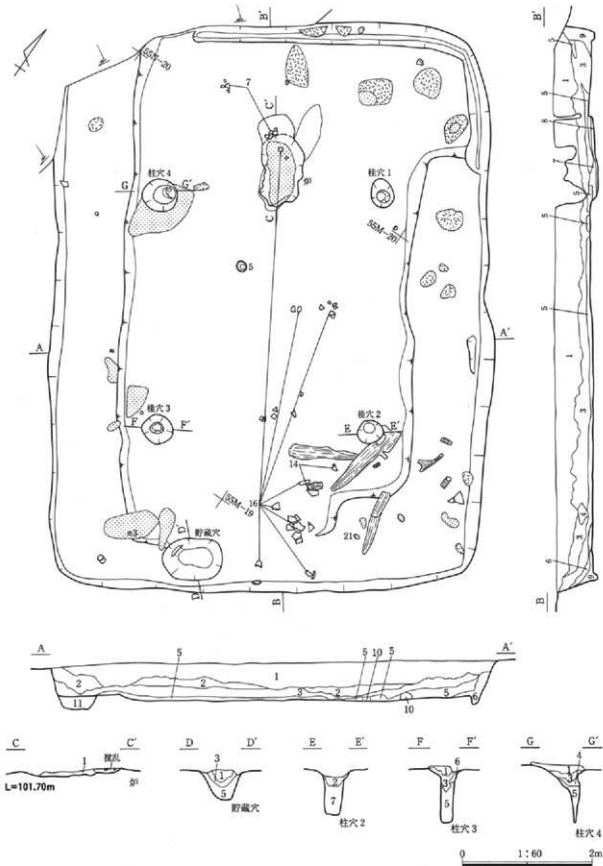
柱穴1は長径46cm短径35cm、深さ78cm。柱穴2は長径43cm短径36cm、深さ69cm。柱穴3は長径49cm短径45cm、深さ85cm。柱穴4は長径55cm短径53cm、深さ54cmである。いずれの柱穴も埋没土の上位から第1層あるいは第2層にAs-Cを多量に含んでいる。

**ピット** 床面下の精査で南壁寄り中央、壁面から70cm内側に長径57cm短径37cm、深さ16cmのピット1が検出された。これと壁際をめぐる周溝は上幅43cm、深さ9cmの間仕切り状の溝で接続していた。

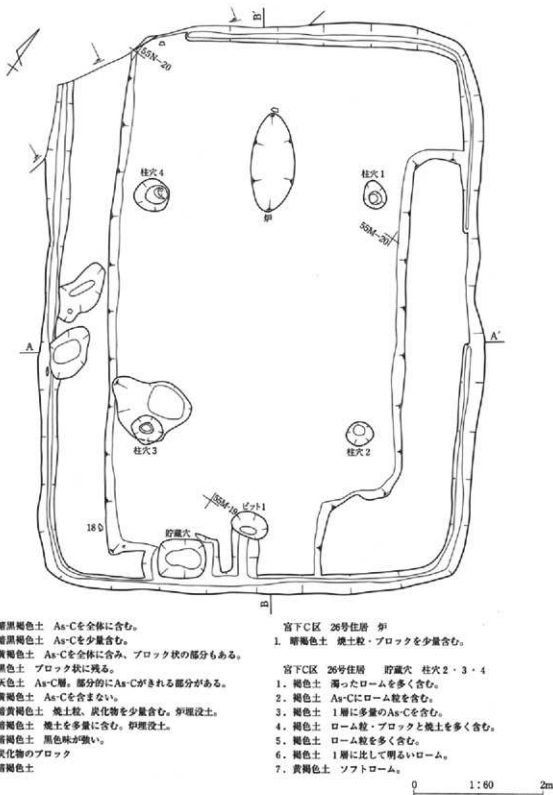
これらは炉と反対側の壁際にあたることから入り口施設に関わる掘り込みの可能性が考えられるが断定するにはいたらなかった。

**貯蔵穴** 南壁面際の西寄りに掘られていた。規模は長径94cm短径67cmで床面からの深さは52cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

**遺物** 遺物は住居の埋没に伴いAs-Cの上下の土



第86図 C区26号住居(1)



第87図 C区26号住居(2)

層中から出土している。As-C下においても全体的には破片の状態で出土したものが多数である。その中、壺(6)の下半部は住居の南部分と中央から出土し

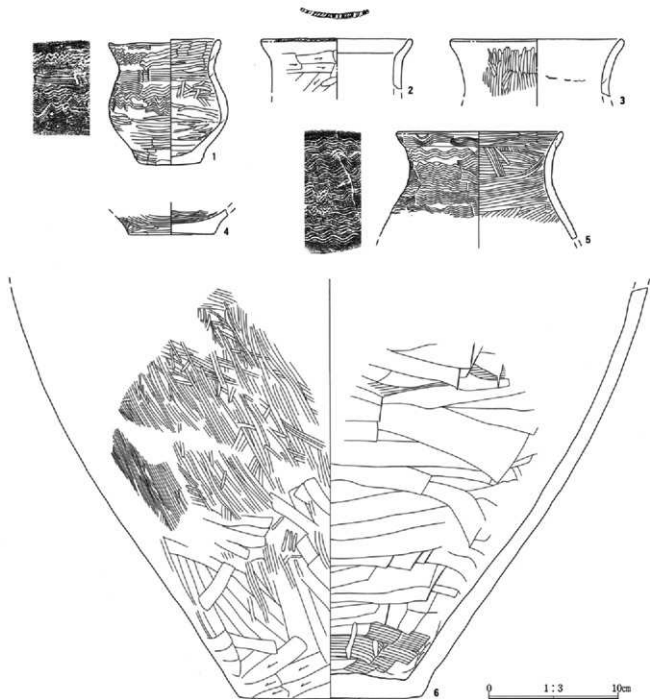
た破片が接合した大型品である。壺(5)は上半部が床面中央やや炉に寄った直上から出土したものである。小型壺(1)は南西隅のいわゆるベッド状遺構の面から

出土した。堯(7)は下半部の残存で炉の北端、一部上位からの攪乱が及んだ位置からの出土であるが、原位置からあまり移動したものではないようである。

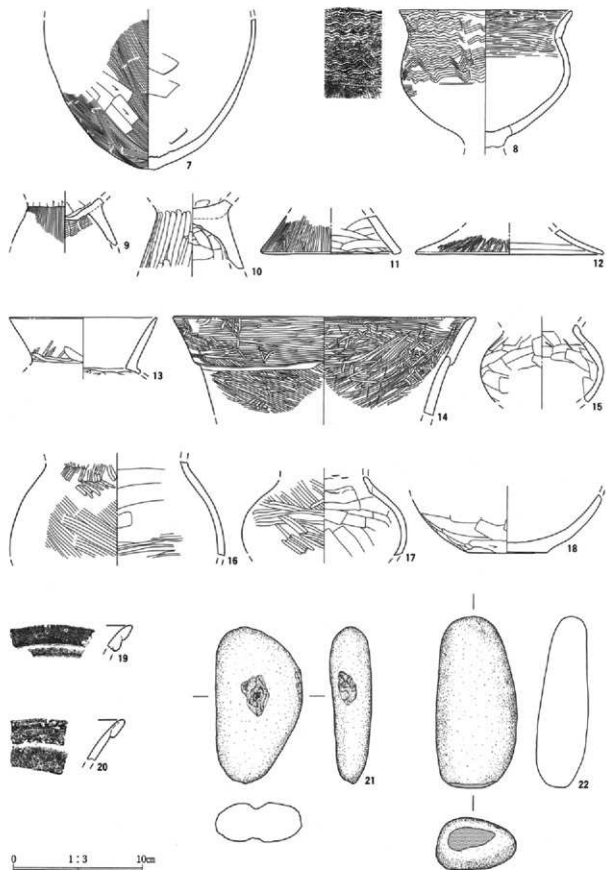
掲載した資料の他に土師器破片537点、須恵器破片9点、弥生土器破片40点が出土している。(観P 12~14)

所見 弥生時代の住居と考えられる。

備考 本住居は焼失家屋と考えられる。床面のほぼ全面が炭化材、炭化物で覆われていた。柱穴2を中心として南東部分では幅15~20cm、長さ100cmを越える炭化材が多数検出された。出土した炭化材は樹種同定の分析を実施した。第5章を参照されたい。



第88図 C区26号住居出土遺物(1)



第89図 C区26号住居出土遺物(2)



## C区 27号住居 (第90・91図、PL27・107)

位置 55M-13・14

重複 なし。住居西側の一部は調査区域外である。

形状 住居範囲が調査区域外に広がるため、全体の形状は不明である。住居残存範囲での規模は南北長4.02m、東西長2.78mである。

面積 計測不能 方位 N-21°-W

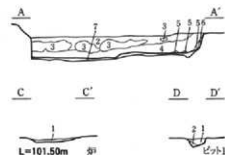
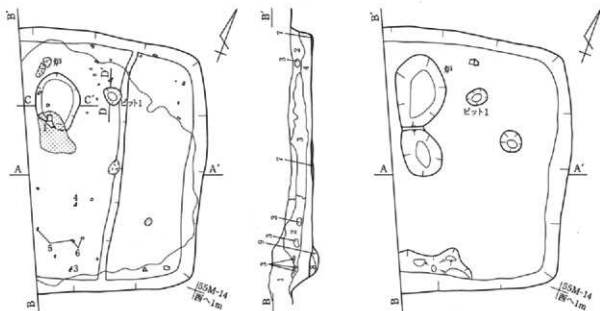
床面 遺構確認面から18cm程掘り込んで床面となる。床面中央と想定される部分は、ほとんど平坦であった。東側に中央部より7cm程度高い部分がある(いわゆるベッド状遺構と考えられる)。

埋没土 上層にはAs-Cを全体に含む黒色土が堆積

していた。As-Cの純層は床面中央寄りでは厚さ5~10cmほどの堆積状態であったが、住居の壁面に近づくにつれ層位を高くし、上層の黒色土中にブロック状に含入していた。床面直上層はローム粒を含む暗黒褐色土で埋まっていた。

炉 炉の範囲は不確定であった。規模は東西長70cmである。炉の床面南側に焼土が広がっており、掘り方面の精査では焼土の層を受けるように浅い皿状の掘り込みが検出された。また最終使用面では範囲外に位置していた礎石も炉を構築した当初は掘り方内にあったものであることが確認された。

周溝・柱穴 掘られていなかった。



宮下C区 27号住居 ピット1

1. 暗褐色土 ローム粒、黒色土を含む。
2. 黒褐色土 黒色土にロームを含む。

1. 暗灰色土 表土。
2. 黒色土 As-Cの埋土。全体にAs-Cを含む。
3. 灰色土 As-Cの純層。2層にブロック状に入る。
4. 暗黒褐色土 ローム粒を含む。
5. 褐色土 ロームブロックを含む。
6. 褐色土 ロームを多量に含む。
7. 褐色土 地山ロームに黒色土を混入。
8. 褐色土 ロームブロックを多く含む。
9. 褐色土 地山ロームを多く含む。

宮下C区 27号住居 炉

1. 褐色土 焼土、黒色土を含む褐色。

0 1:60 2m

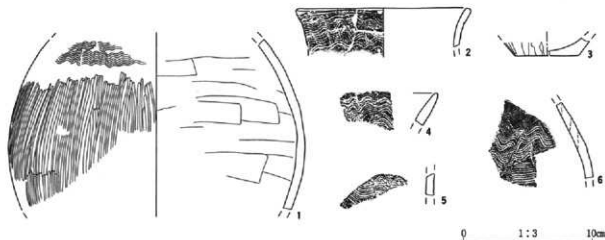
第90図 C区27号住居

貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 炉の南縁から壺(1)の大型破片が出土した。他に埋没土中から小破片が少量出土している。掲載

した資料の他に弥生土器破片24点が出土した。(観P14)

所見 弥生時代後期の住居と考えられる。



第91図 C区27号住居出土遺物

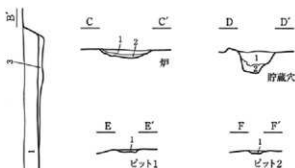
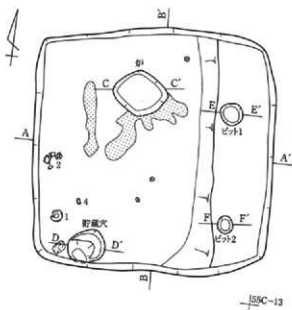
C区 53号住居 (第92~95図、PL28・107)

位置 55B・C-13

重複なし。

形状 南北を長軸とする方形を呈する。規模は長軸3.86m、短軸3.78mである。

面積 12.51m<sup>2</sup> 方位 N-5°-W



宮下C区 53号住居 炉

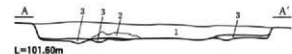
1. 黒褐色土 焼土粒、炭、ローム小ブロック、As-Cを少量含む。
2. 赤褐色土 焼土化している部分あり。

宮下C区 53号住居 貯蔵穴

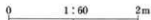
1. 黒褐色土 しまりなし。
2. 黄褐色土 ローム主体。

宮下C区 53号住居 ピット1・2

1. 黄褐色土 ローム主体、黒色土を含む。



1. 黒褐色土 As-Cと少量のローム小ブロックを含む。
2. 黒褐色土 焼土ブロック、ローム小ブロックを含む。
3. 黄褐色土 ロームを主体とした暗褐色土との混土層。



第92図 C区53号住居(1)

**床 面** 遺構確認面から24cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であるが、東側と西側とでは段差があり、東側が幅80cm程にわたり5cm程高くなっており、硬くしまった黄褐色土がおかれていた。  
**埋没土** As-Cと少量のローム小ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

**炉** 床面北側やや西寄りに設けられていた。炉は地山ロームまで掘り込まれていた。規模は長径88cm短径68cmである。炉の南東及び西側に焼土が広がっていた。

**周 溝** 掘られていなかった。

**ピット** ピット3本が掘られていた。ピット1は直径36cm、深さ4cm。ピット2は長径30cm短径24cm、

深さ4cm。ピット3は床面下の精査で確認した。長径34cm短径24cm、深さ22cmである。

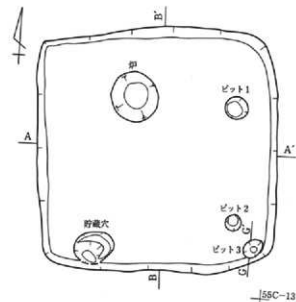
**貯蔵穴** 南西隅に掘られていた。規模は長径60cm短径50cm、床面からの深さ41.5cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。貯蔵穴の西側床面上からは灰のまとまりが検出された。

**遺 物** 遺物の出土は少量であったが、西壁寄りの床面から3cm程離れた高さで口縁部を下位にした状態で壺(1)口縁部と壺(2)胴部上位が出土した。また、北東隅の床面上からは土製紡錘車(3)が出土した。

掲載した資料の他に弥生土器破片1点が出土した。

(観P15)

**所 見** 弥生時代後期の住居と考えられる。



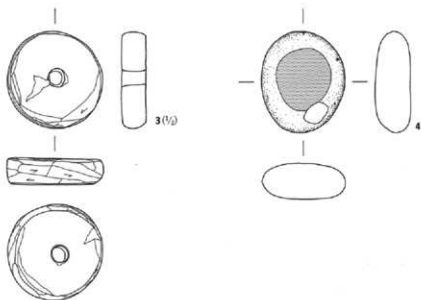
宮下C区 53号住居 ピット3  
 1. 黒色土 As-C, ローム粒を含む。



第93図 C区53号住居(2)

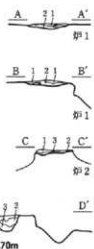
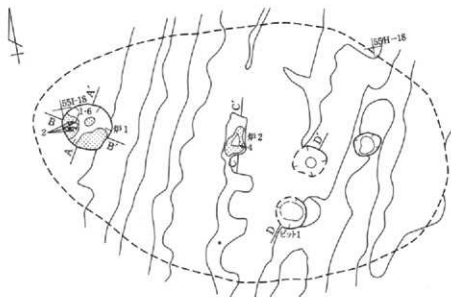


第94図 C区53号住居出土遺物(1)



第95図 C区53号住居出土遺物(2)

0 1:3 10cm



宮下C区 58号住居 炉1

1. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒、黒褐色土を混入。
2. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。黒褐色土を一部に混入。

宮下C区 58号住居 炉2

1. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。黒褐色土を一部に混入。
2. 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土を混入。
3. 褐色土 地山ローム主体。黒褐色土を少量混入。

宮下C区 58号住居 ビット1

1. 黒褐色土 多量のAs-Cと少量のローム粒を含む。
2. 暗褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを含む。
3. 暗褐色土 2層よりローム粒・ブロックを多く含む。As-Cはなし。

0 1:60 2m

第96図 C区58号住居

C区 58号住居

(第96・97図、PL28・29・107)

位置 55G・H・I-17・18

重複 本遺構の範囲が不確定で78号住居の一部と重複する可能性がある。新旧関係は、炉を持つ本遺

構が78号住居跡より古いと考えられる。

形状 攪乱により遺構の大部分が壊されていて、遺構の範囲や形状は不明である。他住居の事例から四角形を基本としていたと考えられる。

面積 (20.34)㎡ 方位 計測不可

床面 確認できなかった。

埋没土 本遺構に伴うピットが残っていた。そのピットはAs-Cやローム粒・ブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

炉 2基が設けられていた。両者とも焼土の堆積が見られた。炉1は住居西側に掘り込まれ、規模が長径75cm短径71cmである。

炉2は住居中央付近に掘り込まれ、後世の擾乱により壊され、その規模・形状が不明である。

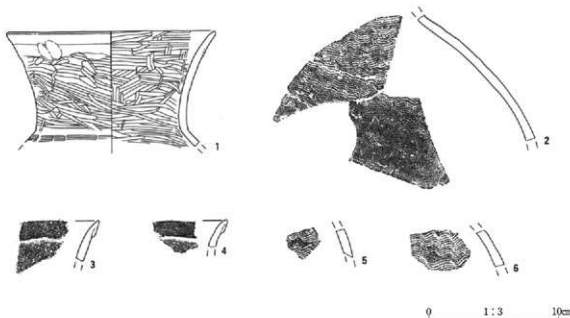
周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

ピット 1本掘られていた。規模は推定で長径52cm短径44cm、深さ12cm程である。

遺物 炉1から壺(1・2・6)、炉2から壺?(4)が出土したがいずれも破片である。

掲載した資料の他に土師器破片19点、須恵器破片3点、軟質陶器破片1点、弥生土器破片1点が出土した。(観P15)

所見 弥生時代後期の住居と考えられる。



第97図 C区58号住居出土遺物

#### C区 59号住居 (第98・99図、PL29・108)

位置 55E-15・16、55F-15

重複 北西部分で60号住居と、東側で4号溝と重複し、本遺構が両遺構により掘り込まれていた。北東の一部分は後世の擾乱等により壊されていた。

形状 他遺構との重複部分があるが、南北を長軸とする不整形を呈すると想定する。確認した範囲での残存は南北長6.75m、東西長3.71mである。

面積 計測不能 方位 N-38°-E

床面 遺構確認面から29cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 上層はAs-Cを多く含む黒褐色土で、床面直上層はロームを多く含む褐色土で埋まっていた。掘り方上層には少量のAs-Cが含まれていた。

炉・周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

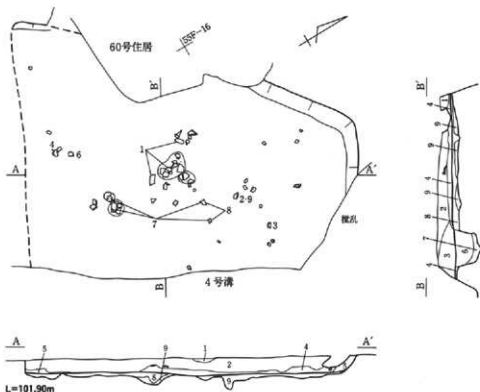
ピット 床面下の精査時に検出した4本について記録する。ピット1は長径40cm短径27cm、深さ30cm、ピット2は長径65cm短径60cm、深さ28cmである。ピット3とピット4は重複する。ピット3は深さ33cm、ピット4は推定で短径40cm、深さ31cmである。

遺物 全体に床面からやや離れた高さで破片が出土している。壺(7)は下半部が床面直上から20cmほどの高低差の中で出土している。その北側から壺(1)が出土。

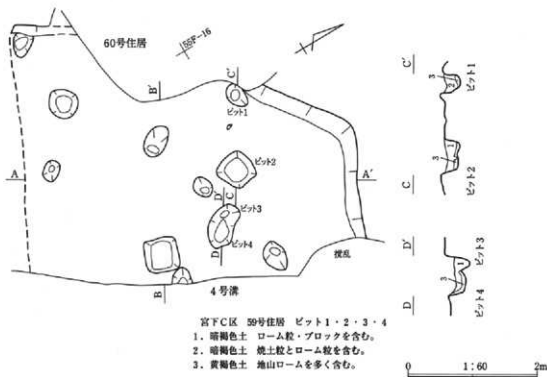
掲載した資料の他に土師器破片125点、須恵器破片11点、軟質陶器破片16点、陶磁器破片2点弥生土器破片6点が出土した。(観P15・16)

所見 弥生時代後期の住居と考えられる。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



- |                                    |                                   |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 暗褐色土 2層に比してAs-Cが小さい。            | 6. 黒褐色土 多量のAs-Cとロームブロックを含む。       |
| 2. 黒褐色土 As-Cを多く含む。                 | 7. 黒褐色土 6層に比してAs-Cは少なく、ローム粒を多く含む。 |
| 3. 暗褐色土 1層に比してAs-Cは少なく、ロームブロックを含む。 | 8. 暗褐色土 わずかなAs-Cと多くのローム粒を含む。      |
| 4. 褐色土 ロームを多く含む。                   | 9. 黄褐色土 地山ロームを多く含む。               |
| 5. 褐色土 地山ロームを多く含む。                 |                                   |

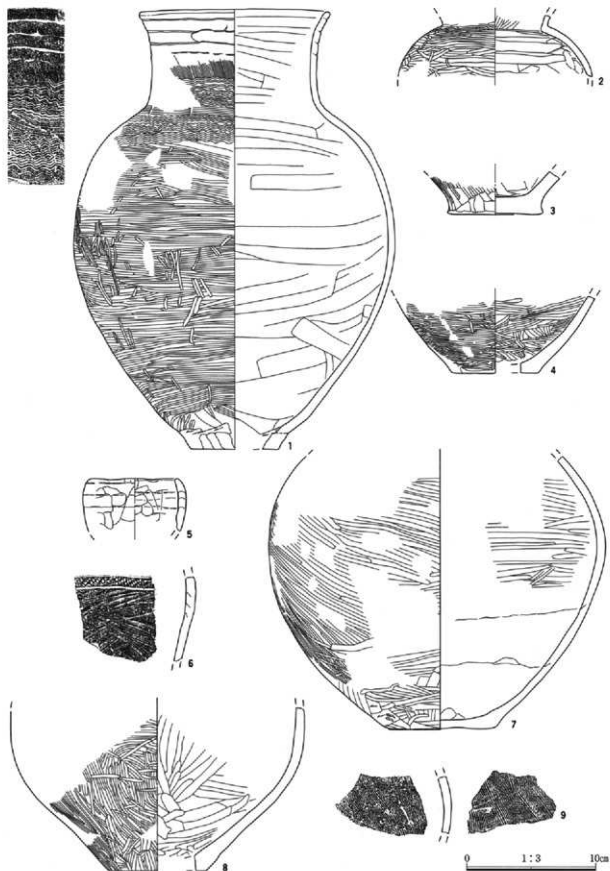


宮下C区 59号住居 ピット1・2・3・4

1. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
2. 暗褐色土 焼土粒とローム粒を含む。
3. 黄褐色土 地山ロームを多く含む。

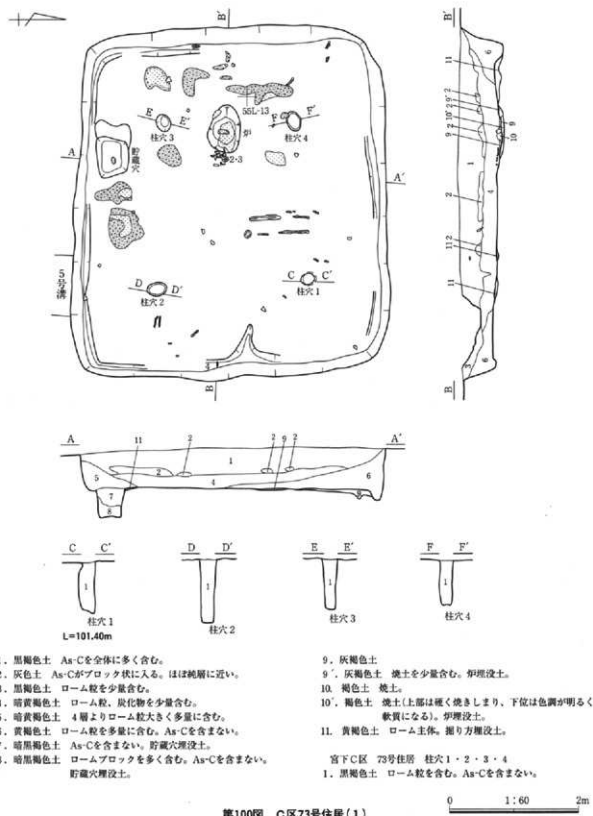
第98図 C区59号住居

第4節 弥生時代の遺構と遺物



第99図 C区59号住居出土遺物

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



C区 73号住居 (第100~102図、PL30・108)

位置 55K・L-12・13

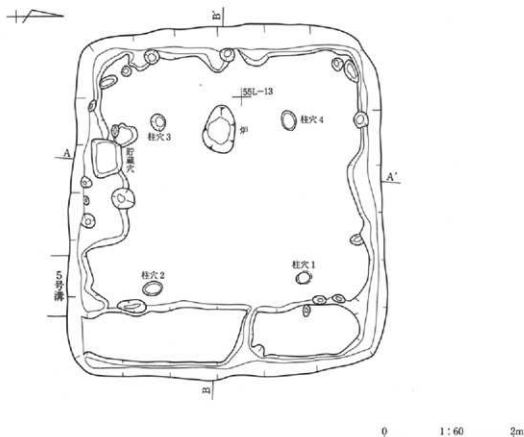
重複 5号溝と重複し、本道構が5号溝により掘

り込まれていた。

形状 他遺構により壊されている部分があるが、

東西を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸





第101図 C区73号住居(2)

5.50m、短軸4.99mである。

**面積** 22.77㎡ **方位** N-2°-W

**床面** 遺構確認から62cm程掘り込んで床面となる。床面下の精査により東壁寄りの床面は幅95～110cmほどが帯状に高まり、それ以外の床面と最高8cm程の段差を有していた(いわゆるベッド状遺構が存在していたと考えられる)。また、南東隅から北方向へ260cmの位置にはこの高まりを切断するように、壁面下の周溝から延びる細い溝が検出された。間仕切りがなされていたのであろうか。

**埋没土** 上層はAs-C混土。中層はAs-Cがブロック状に入る灰色土でほぼ純層に近い。床面直上層はローム粒を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

**炉** 床面中央西寄り柱穴3と4を結ぶ線上に設けられていた。炉は地山ロームまで掘り込まれていた。規模は長径75cm短径51cmである。中央に棒状礫を長軸に直行させて置いていた。使用時に堆積した焼土が残り、その上部は硬く焼きしまっていた。

**周溝** 壁面下ではほぼ全体に掘られていた。幅は16～42cmで深さが1～9cmである。

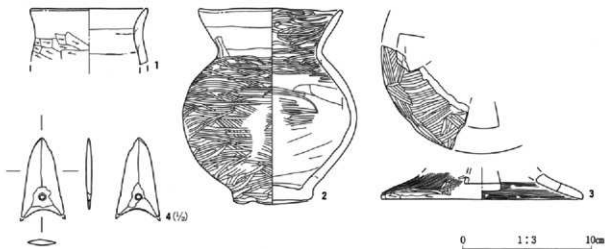
**柱穴** 4本掘られていた。柱穴1は長径23cm短径19cm、深さ66cm。柱穴2は長径28cm短径23cm、深さ70cm。柱穴3は長径24cm短径23cm、深さ66cm。柱穴4は長径28cm短径19cm、深さ68cmである。

**貯蔵穴** 南壁面際やや西寄りに掘られていた。規模は長軸58cm短軸50cm、床面からの深さ47cm程である。上端の形状は台形を呈する。

**遺物** 炉の東縁から壺(2)と高杯(3)の破片が出土している。磨製石鏃(4)は東壁際から出土。

掲載した資料の他に土器破片155点、須恵器破片4点、陶磁器破片2点、弥生土器破片11点、縄文土器破片1点が出土した。(観P16)

**所見** 弥生時代後期の住居と考えられる。As-C除去後、床面直上に炭化物が多量に残っていたことから、本遺構は焼失住居跡と考えられる。



第102図 C区73号住居出土遺物

### C区 77号住居

(第103～106図、PL31～33・108・109)

位置 55M・N-15・16

重複 なし。

形状 南北を長軸とする方形を呈する。規模は長軸5.15m、短軸5.00mである。

面積 22.31㎡ 方位 N-30°-W

床面 遺構確認から67cm程掘り込んで床面となる。床面中央部はほとんど平坦であった。東側及び北西部分は中央部に比べ一段高い。東側で10cm程度、北西部分で5cm程度高い(いわゆるベッド状遺構と考えられる)。

埋没土 上・中層はAs-Cを多く含む埋没土。床面直上層はAs-C純層がレンズ状に堆積し、下位に灰色火山灰と思われる部分があった。As-C純層の厚さは1～14cmである。

炉 床面北側中央柱穴1と4を結んだ線よりも外側に設けられていた。規模は長径60cm短径52cmである。炉の南側に焼土が広がっていた。

溝 掘られていなかった。

柱穴 4本掘られていた。いずれも掘り方は小径であったが、深さは50cmを超え良好であった。柱穴1は長径19cm短径12cm、深さ53cm。柱穴2は長径24cm短径22cm、深さ57cm。柱穴3は長径22cm短径21cm、深さ56cm。柱穴4は長径25cm短径16cm、深さ62cmである。また、柱穴1の南側にあるピット1は長径20

cm短径15cm、深さ57cmを測る。柱穴1の掘り返しあるいは補助をしたものであろうか。

貯蔵穴 南壁面際の西寄りに掘られていた。規模は長径67cm短径57cmで床面からの深さは43cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

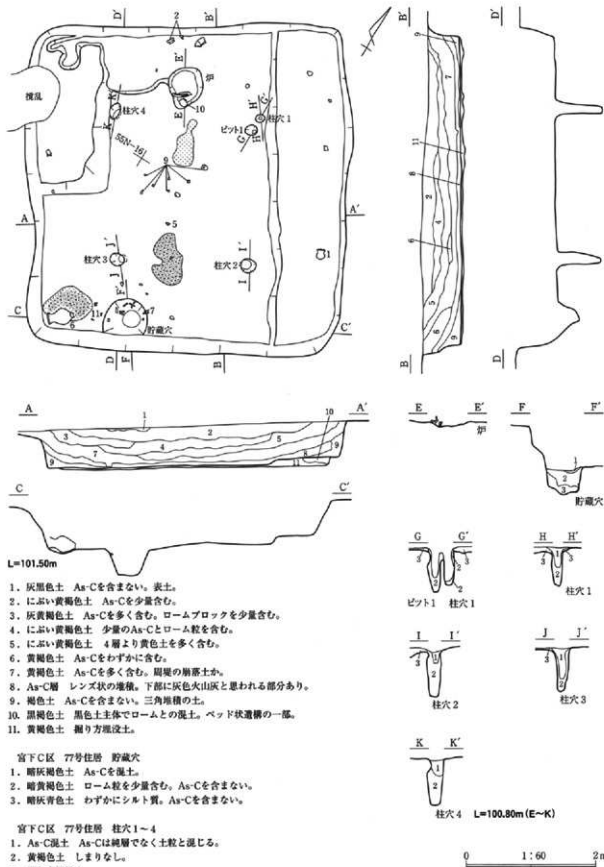
壁面 床面下の精査にあわせ壁面の精査をおこなったところ、東壁は掘り方床面から9～15cm上位で、外方に15cmほどの幅で段差をなしていた。また各壁面の上位には直径10cmほどの小ピットが横方向に掘られているのを確認した。

遺物 南西隅の床面直上から壺(6)が横転した状態で出土した。南東部分のベッド状遺構の上面からは壺(1)が出土した。炉の南縁からは高杯(10)の脚部が出土し、その南側、床面中央部からは高杯(9)の脚部が検出された。貯蔵穴内には甕(7)が破片の状態で入り込んでいた。

土製勾玉(12)は埋没土中から出土、下端は欠損していた。

掲載した資料の他に土師器破片78点が出土した。(観P17・18)

所見 弥生時代後期の住居と考えられる。As-C除去後、床面直上に炭化物や焼土粒が出土したことから、本遺構は焼失住居跡と考えられる。



L=101.50m

1. 灰褐色土 As-Cを含まない。表土。
2. にぶい黄褐色土 As-Cを少量含む。
3. 灰黄褐色土 As-Cを多く含む。ロームブロックを少量含む。
4. にぶい黄褐色土 少量のAs-Cとローム粒を含む。
5. にぶい黄褐色土 4層より黄色土を多く含む。
6. 黄褐色土 As-Cをわずかに含む。
7. 黄褐色土 As-Cを多く含む。周壁の崩落土か。
8. As-C層 レンズ状の堆積。下部に灰色火山灰と思われる部分あり。
9. 褐色土 As-Cを含まない。三角堆積の土。
10. 黒褐色土 黒色土主体でロームとの混土。ベッド状遺構の一部。
11. 黄褐色土 掘り方埋没土。

宮下C区 77号住居 貯蔵穴

1. 暗灰褐色土 As-Cを混土。
2. 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む。As-Cを含まない。
3. 暗灰青色土 わずかにシルト質。As-Cを含まない。

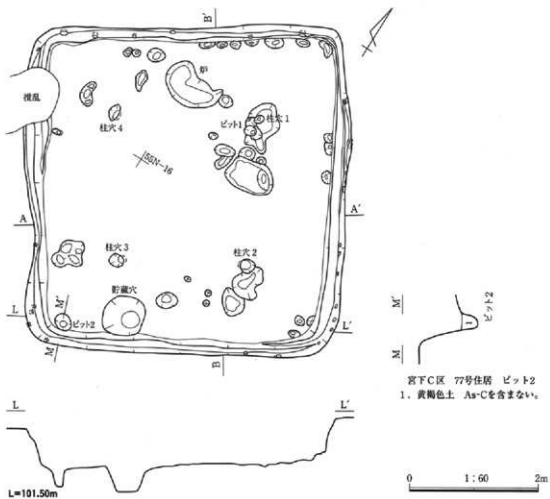
宮下C区 77号住居 柱穴1~4

1. As-C混土 As-Cは純層でなく土粒と混じる。
2. 黄褐色土 しまりなし。
3. 掘り方埋没土

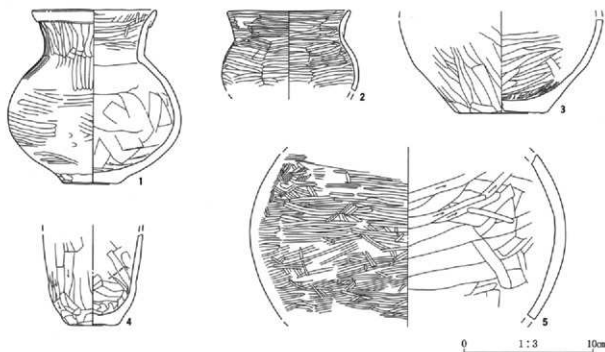
柱穴4 L=100.80m(E-K)

0 1:60 2m

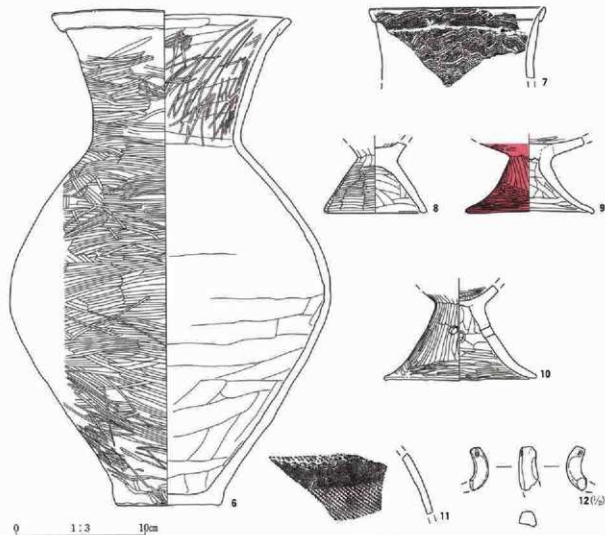
第103図 C区77号住居(1)



第104図 C区77号住居(2)



第105図 C区77号住居出土遺物(1)



第106図 C区77号住居出土遺物(2)

**C区 80号住居 (第107～109図、PL33・109)**

**位置** 55 J・K-15・16

**重複** 北東部分で74号住居と重複し、本遺構が74号住居により掘り込まれていた。

**形状** 他遺構と重複する部分があるが、ほぼ正方形を呈する。規模は南北4.84m、東西4.83mである。

**面積** 19.75㎡ **方位** N-13°-W

**床面** 遺構確認面から48cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸があった。

**埋没土** 上・中層はAs-C混土。床面直上層はロームブロックを多く含む黄黒色土で埋まっていた。

**炉** 床面北側中央に設けられていた。規模は長径67cm短径55cmである。

**周溝** 掘られていなかった。

**柱穴** 柱穴4本とピット2本が掘られていた。柱穴1は長径95cm短径75cm、深さ30cm。柱穴2は長径58cm短径55cm、深さ64cm。柱穴3は長径59cm短径43cm、深さ69cm。柱穴4は長径83cm短径56cm、深さ65cmである。

ピットは床面下精査時に検出した。ピット1は長径38cm短径35cm、深さ53cm。ピット2は長径41cm短径31cm、深さ40cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に掘られていた。規模は長径65cm短径64cmで床面からの深さは18cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

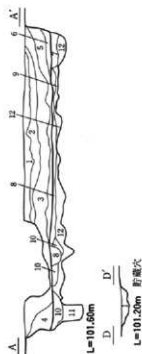
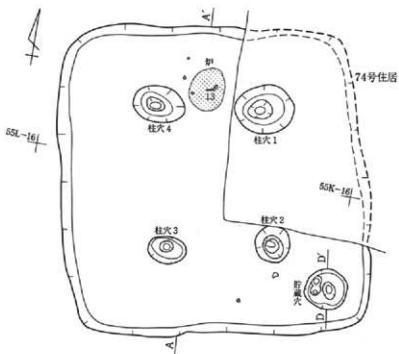
**遺物** 炉の掘り込み中に壺(15)の大型破片が据えられていた。他は埋没土中出土の破片であった。

掲載した資料の他に土師器破片70点、瓦1点、弥

生土器破片8点、縄文土器破片1点が出土した。

所見 弥生時代後期の住居と考えられる。

(観P18・19)

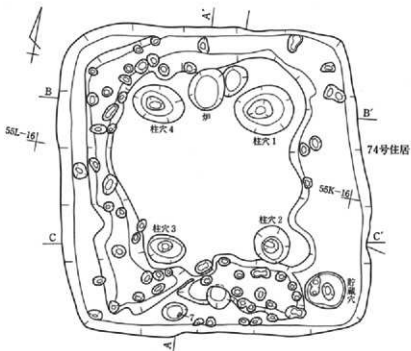


1. 灰色土 As-C層。中央ほど堆積量が多い。
2. 灰黒色土 As-Cを混土。
3. 暗黄黒色土 黒色土主体でローム粒を少量含む。
4. 暗黄黒色土 3層よりロームが多く混入。
5. 黄褐色土 ロームブロックを含む。

6. 暗灰黒色土 少し粘性あり。
7. 暗褐色土 黒色土にロームを混入。
8. 褐色土 ロームを多く含む。
9. 褐色土 機土粒を含む(印)。
10. 褐色土 9層よりロームを多く含む。
11. 褐色土 9層より暗褐色土が多い。
12. 黄褐色土 地山ロームを多く含む。

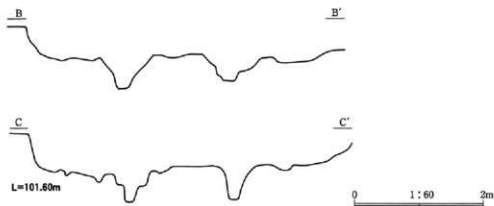
宮下C区 80号住居 貯蔵穴

1. 黄黒色土 ロームと黒色土の混土。

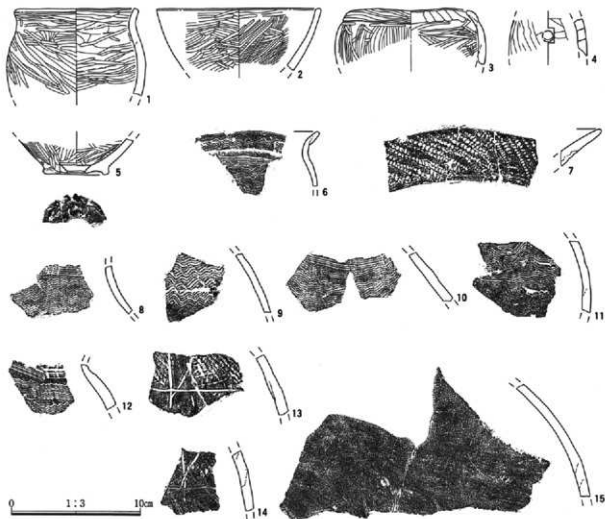


0 1:60 2m

第107図 C区80号住居(1)



第108図 C区80号住居(2)



第109図 C区80号住居出土遺物

### 3 遺構址

C区 1号址 (第110・111図、PL33・109)

位置 65G-1

重複 なし。

形状 遺構の残存状況が悪く、壁面等の検出には

いたらなかった。全体の形状は不明である。炉を検出したことから竪穴住居の存在が推定される。

面積 計測不能 方位 計測不可

床面 確認できなかった。

埋没土 As-Cとロームを含む黒褐色土・暗褐色土

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

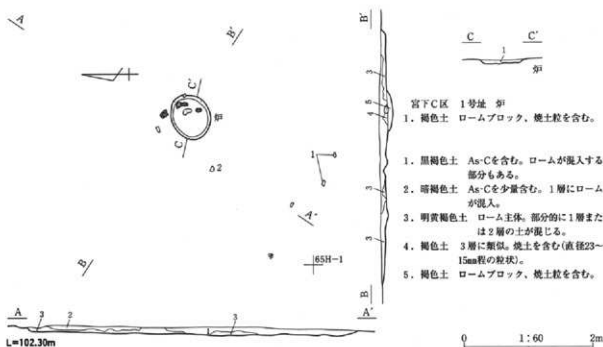
とローム主体の明黄褐色土で埋まっていた。残存した埋没土の厚さは5cm～14cmである。

炉 1 基確認できた。規模は長径67cm短径63cmである。炉内及びその周辺の3箇所て炭の塊が出土した。

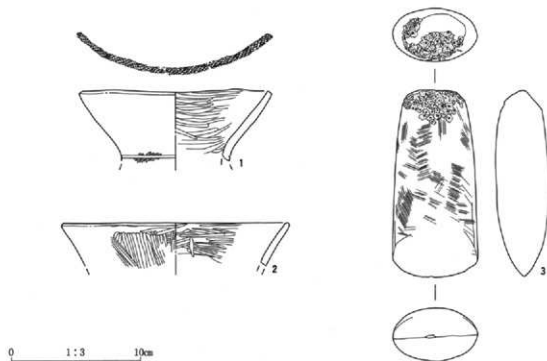
周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 弥生土器の壺口縁部(1・2)、磨製石斧(3)を出土した。(観P19)

所見 弥生時代の遺構と考えられる。



第110図 C区1号址



第111図 C区1号址出土遺物



## 4 遺構外出土遺物

(第113～117図、PL109～111)

遺物の分布 A区、B区からの出土はわずかであった。栗林式の資料は、比較的良好な組合せの土器群を出土したC区16号住居、これと同時期と考えられる11号住居、19号住居の周辺となるC区中央部東半分を中心にその分布が見られた。

他の北島・大塚・荒口前原系、川原町口式併行、赤井戸・吉ヶ谷式の資料の分布も栗林式土器の分布と同様の傾向にあった。ただし、川原町口式併行はC区北東から南西部分に帯状の分布が見られる。

赤井戸・吉ヶ谷式の資料は、櫛播波状文を施した土器を出土したC区80号住居をはじめとした同時期の住居が多数検出された西側部分からの出土は認められなかった。

個々の土器の出土位置と型式については第10表に記したとおりである。

出土土器の観察 1～3と5～53は中期後半、栗林式に比定される資料である。器種は1～30が壺、31～49が甕、50・52・53が鉢、51が鉢または高杯の破片である。

1は頸部から胴部上半部の破片である。器面は棒状工具によるミガキに近いナガが施されている。残存高は11.0cmを測る。頸部に横方向の平行沈線を施す。胎土には白色軽石の含入が顕著である。2は口縁部の残存で、復元口径15.0cm、残存高12.0cmを測る。口縁部先端と頸部の沈線区画内にR L縄文を充填する。胎土には輝石の含入が顕著である。3は頸部から胴部上半部の残存で高さ18.2cmを測る。胴部が大きく張る形状である。器面にはヘラナア・ヘラミガキが施されるが無文である。胎土には輝石、軽石の含入が見られる。

5はラッパ状に外反する口縁部破片である。残存高は4.6cmである。端部にL R縄文を施文する。6・7は受け部状を呈する口縁部である。6の残存高は2.5cmである。先端にはL R縄文を施文し、この上に波状の沈線を重ねている。両資料の胎土には白色鉱物粒の含入が顕著である。8～11は沈線文と縄文の

組み合わせである。8はRの直前段反摺の縄文、9～11はL R縄文を地文とする。10・11には平行沈線文の下位に波状文が沿っている。色調は他の資料と比較して白味を帯びている。12はR L縄文が見られる。

13～20は沈線文を施文するもので、13・14は同一個体で、横方向の沈線を挟んで波状の沈線が巡っている。15は横方向の沈線直下に山形の沈線文が巡るものである。16～18は平行沈線が見られる。19・20は沈線による鋸歯文が表現されている。

21～24は等間隔止めの櫛播波状文が施文されている。23は5本1単位の波状文が、23には3段の波状文が見られる。21には刺突を伴う円形浮文が貼付されている。

25～30にも沈線文が施されている。25・26・30は区画内に縄文が見られる。27と28は波状文との組み合わせである。27は平行する2本の波状文である。29は細い沈線が垂下する。

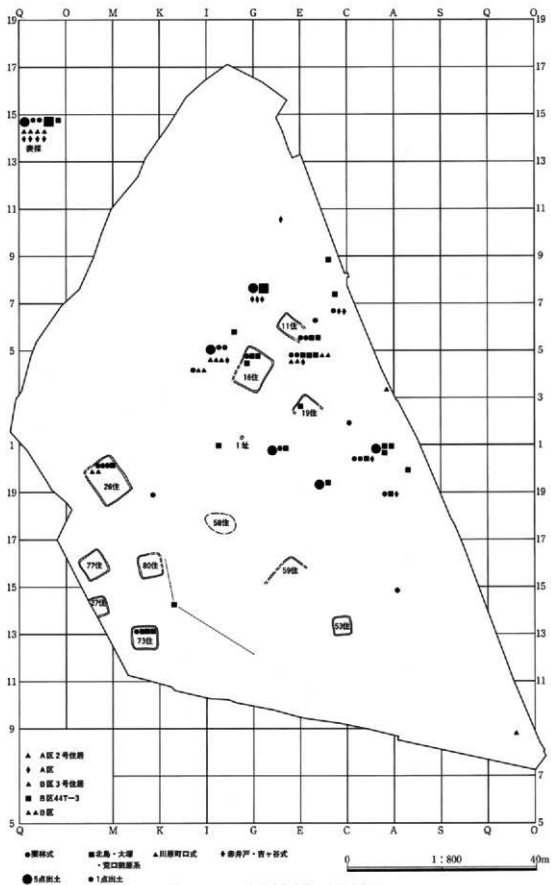
31・32は頸部に波状文が施文されている。31は口縁部に山形状の波状文が、胴部には櫛播羽状文が見られる。残存高は5.3cmである。32は口縁部端部に縄文が、胴部には4本1単位の櫛播波状文が見られる。残存高は6.1cmである。

33は口縁部端部に刻目文が施される。残存高は3.9cmである。

34～40は波長の高い4本1単位の櫛播波状文が見られる。34・35では櫛播波状文も見られる。

41は等間隔止波状文が見られる。42はハケメによる羽状の文様が施されていたと考えられる。43・44は5本1単位の櫛播羽状文である。45は沈線による入れ子文で円形浮文が貼付される。46は沈線が垂下する。47・48は間隔を開けてハケメを施文する。49は波状の沈線文である。50は先端が揃まれるように外反、51の端部は波状を呈する。残存高は5.3cmである。52は折り返し口縁である。残存長は3.4cmである。53はR L縄文が施される。

4・54～93は、中期後半、北島・大塚・荒口前原系に比定される土器である。器種は4・54～58・67



第112図 C区弥生時代遺構・遺物分布図

第10表 遺構外出土弥生土器一覽

番号	種別	器種	出土位置	番号	種別	器種	出土位置
1	Ⅱ期栗林式	壺 頸部破片	C区15号住居	60	Ⅱ期北島・大塚 ・克口前原系	甕 口縁部破片	C区
2	Ⅱ期栗林式	壺 口縁～頸部破片	C区12号住居	61		甕 口縁部破片	C区10号住居
3	Ⅱ期栗林式	壺 頸～胴部破片	C区55号住居	62		甕 口縁部破片	C区12号住居
4	Ⅱ期北島・大塚 ・克口前原系	壺 胴部破片	C区55号住居	63		甕 口縁部破片	C区8号住居
5	Ⅱ期栗林式	壺 口縁部破片	C区	64		甕 口縁部破片	C区66・74号住居
6		壺 口縁部破片	C区26号住居	65		杯 底部破片	B区44T-3
7		壺 口縁部破片	C区10号住居	66		甕 口縁部破片	C区55号住居
8		壺 頸部破片	C区10号住居	67		壺 口縁部破片	C区12号住居
9		壺 頸部破片	C区12号住居	68		壺 胴部破片	C区18号住居
10		壺 頸部破片	C区26号住居	69		壺 胴部破片	C区13号住居
11		壺 頸部破片	C区17号住居	70		壺 胴部破片	C区
12		壺 頸部破片	C区3号住居	71		壺 胴部破片	C区
13		壺 頸部破片	C区25号住居	72		壺 胴部破片	C区18号住居
14		壺 頸部破片	C区25号住居	73		壺 胴部破片	C区23号住居
15		壺 頸部破片	C区	74		壺 胴部破片	C区15号住居
16		壺 頸部破片	C区55号住居	75		壺 胴部破片	C区12号住居
17		壺 頸部破片	C区9号住居	76		壺 胴部破片	C区14号住居
18		壺 頸部破片	C区25号住居	77		壺 胴部破片	C区
19		壺 頸部破片	C区24号住居	78		壺 胴部破片	C区
20		壺 頸部破片	C区12号住居	79		壺 胴部破片	C区1号住居
21		壺 頸部破片	C区12号住居	80		壺 胴部破片	C区24号住居
22		壺 頸部破片	C区23号住居	81		壺 胴部破片	C区10号住居
23		壺 頸部破片	C区15号住居	82		壺 胴部破片	C区16号住居
24		壺 頸部破片	C区16号住居	83		壺 胴部破片	C区
25		壺 頸部破片	C区15号住居	84		壺 胴部破片	C区
26		壺 胴部破片	C区15号住居	85		壺 胴部破片	C区12号住居
27		壺 胴部破片	C区12号住居	86		壺 胴部破片	C区16号住居
28		壺 胴部破片	C区	87		壺 胴部破片	C区16号住居
29		壺 胴部破片	C区24号住居	88		壺 胴部破片	C区24号住居
30		壺 胴部破片	C区25号住居	89		壺 胴部破片	C区18号住居
31		甕 胴部破片	C区	90		鉢 口縁部破片	C区73号住居
32		甕 胴部破片	C区24号住居	91		鉢 口縁部破片	C区73号住居
33		甕 胴部破片	C区24号住居	92		鉢 口縁部破片	C区73号住居
34		甕 胴部破片	C区	93		鉢 口縁部破片	C区73号住居
35	甕 胴部破片	C区35号住居	94	Ⅱ期川原町口式 併行	壺 口縁部破片	C区3号住居	
36	甕 胴部破片	C区	95		壺 口縁部破片	C区3号住居	
37	甕 胴部破片	C区24号住居	96		壺 胴部破片	C区15号住居	
38	甕 胴部破片	C区18号住居	97		壺 胴部破片	C区15号住居	
39	甕 胴部破片	C区28号住居	98		壺 胴部破片	C区15号住居	
40	甕 胴部破片	C区55号住居	99		壺 胴部破片	C区26号住居	
41	甕 胴部破片	C区25号住居	100		壺 胴部破片	C区26号住居	
42	甕 胴部破片	C区73号住居	101		壺 胴部破片	C区65A-3	
43	甕 胴部破片	C区56号住居	102		壺 胴部破片	C区	
44	甕 胴部破片	C区	103		Ⅱ期樽式	壺 口縁部破片	C区
45	甕 胴部破片	C区15号住居	104	壺 口縁部破片		A区2号住居	
46	甕 胴部破片	C区26号住居	105	壺 口縁部破片		C区18号住居	
47	甕 胴部破片	C区15号住居	106	壺 口縁部破片		C区18号住居	
48	甕 胴部破片	C区15号住居	107	壺 口縁部破片		B区	
49	甕 胴部破片	C区18号住居	108	壺 口縁部破片		C区	
50	鉢 口縁部破片	C区75号住居	109	壺 口縁部破片		C区	
51	鉢又は高杯 口縁部破片	C区22号住居	110	甕 胴部破片		C区43号住居	
52	鉢 口縁部破片	C区23号住居	111	甕 胴部破片		C区18号住居	
53	鉢 底部破片	C区25号住居	112	甕 胴部破片		C区18号住居	
54	Ⅱ期北島・大塚 ・克口前原系	壺 口縁部破片	C区28号住居	113	杯 底部破片	B区	
55		壺 口縁部破片	C区26号住居	114	杯 底部破片	B区3号住居	
56		壺 口縁部破片	C区12号住居	115	壺 胴部破片	C区	
57		壺 口縁部破片	C区25号住居	116	Ⅱ期赤井戸一古 ヶ谷式	壺 口縁部破片	C区28号住居
58		壺 口縁部破片	C区19号住居	117		壺 口縁部破片	C区
59		壺 口縁部破片	C区7号住居	118		壺 口縁部破片	C区23号住居
				119		壺 胴部破片	C区4号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

番号	種別	器種	出土位置
120	V期赤井戸~百	変 胴部破片	C区15号住居
121	谷式	変 胴部破片	C区9号住居
122		変 胴部破片	C区
123		変 胴部破片	C区9号住居
124		変 胴部破片	C区18号住居
125		変 胴部破片	C区74号住居
126		変 胴部破片	C区
127		変 胴部破片	C区12号住居
128		変 胴部破片	C区
129		変 口縁部破片	A区
130		変 胴部破片	C区12号住居
131		変 胴部破片	C区12号住居

~81が壺、59~64・82~89が甕、6が杯、66・90~93が鉢である。

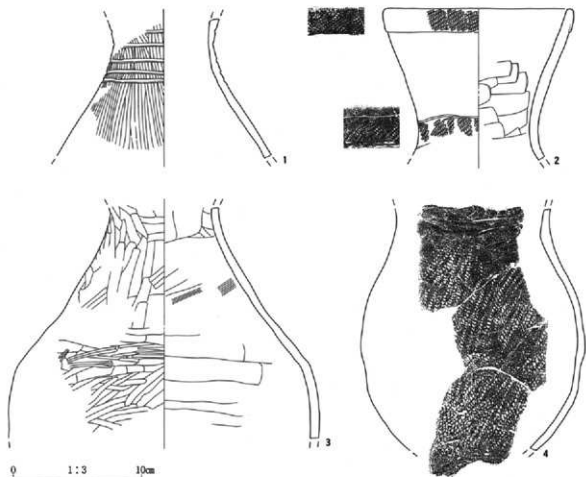
4は頸部から胴部の大型破片である。残存高は19.0cmである。頸部のしまりが弱い形状で、胴部一面に横位のR L縄文が施文される。

54~56の口縁部は先端を折り返し、R LあるいはL R縄文を転がす。54の残存高は3.5cmである。

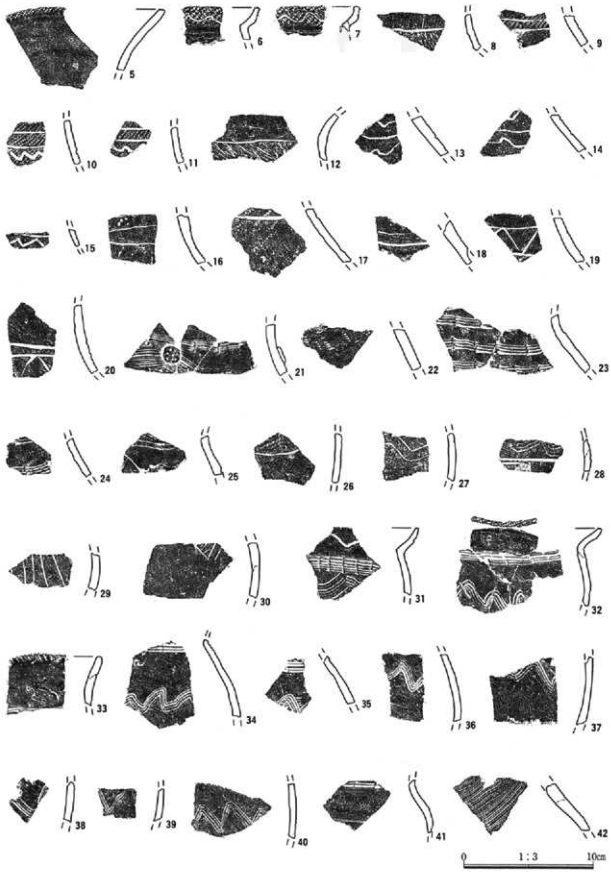
57は単純口縁の先端にL R縄文による文様帯が巡る。58は口縁部端部に刻目文を施す。59は折り返し口縁の端部にR L縄文を施す。60は中位に横方向の簾状文が見られる。61は頸部に半截竹管による連続刺突文が巡る。66の鉢もL R縄文を施文する。残存長は6.0cmである。67は端部にL R縄文を施文する。

68~81は沈線区画と縄文施文の資料である。80・81はRの前々段反摺の縄文である。82・90~93はRの直前段反摺りである。90は端部直下に2箇所、焼成前の穿孔が施されている。83は無節のL縄文が、84は異束のL R縄文が施されている。85~88はL R縄文である。89もL R縄文であるが原体に燃紐が使用されている可能性が考えられる。

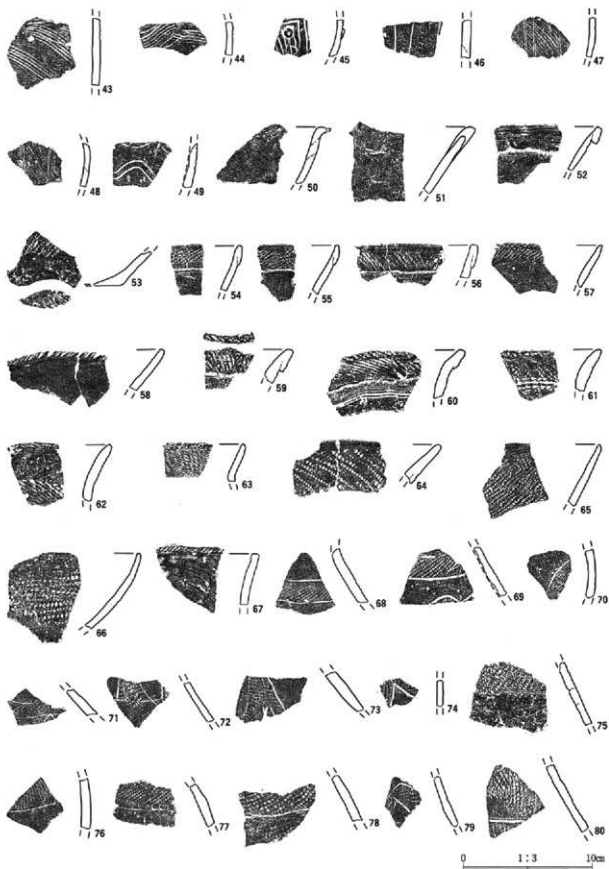
94~102は中期後半、川原町口式併行の資料である。器種は94~103・115が壺、104~112が甕、113・114が杯である。94は内彎気味に立ち上がる口縁部破片



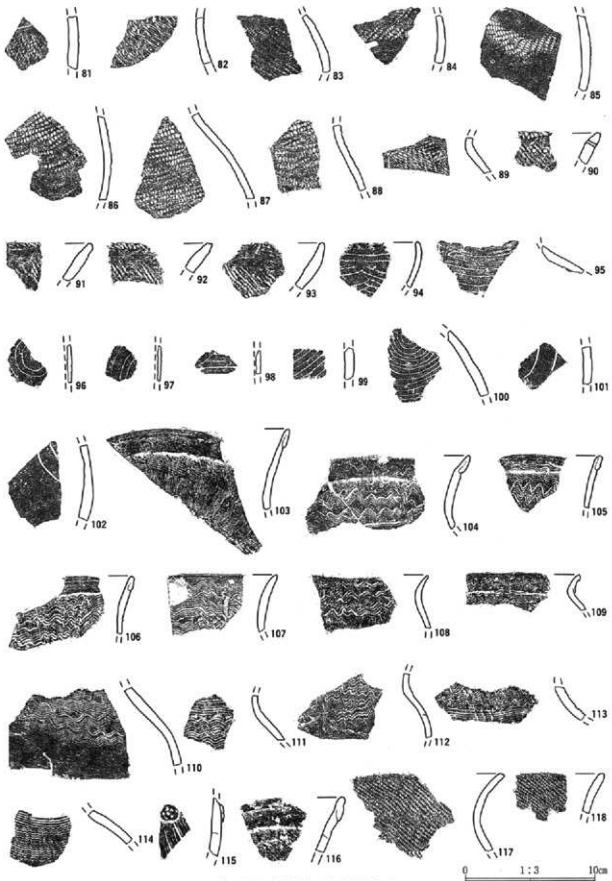
第113図 遺構外出土弥生土器(1)



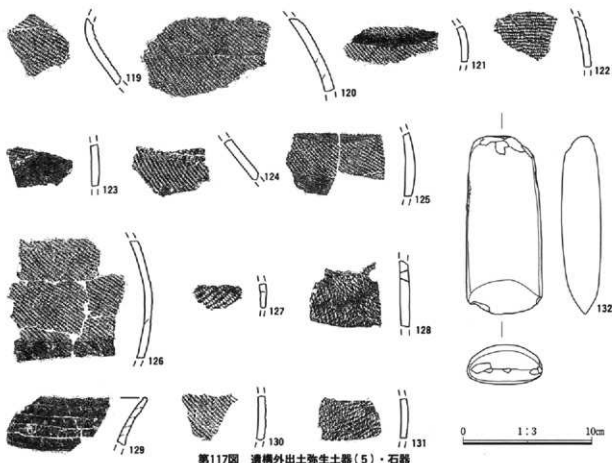
第114図 遺構外出土弥生土器(2)



第115図 遺構外出土弥生土器(3)



第116図 遺構外出土弥生土器(4)



第117図 遺構外出土土器(5)・石器

で重連弧文を、95～100は同心円文を施す。94の残存高は3.1cmである。101・102は弧状あるいは円文状の平行沈線である。色調は94～98が浅黄色、99・100が橙色である。

103～115は後期樽式の資料である。103は折り返し口縁の破片である。残存高は6.3cmである。104～106も折り返し口縁で6条1単位の波状文を複数段重ねる。104の残存長は5.8cmである。107・108は単純口縁で波状文を施している。109は輪積み状に粘土紐の接合痕を残している。110～114は頸部から胴部の破片で、櫛指波状文と篋状文が施されている。110と113の篋状文は3連止めである。115では刺突文を伴う円形浮文を貼付している。

116～131は後期赤井戸・吉ヶ谷式の資料である。器種はいずれも甕で器面に縄文が充填されている。116は折り返し口縁である。残存高は4.4cmを測る。117・118は単純口縁で肩部にR L縄文を施文する。117の残存高は6.1cmである。119～128は胴部破片で

R L縄文を施している。126の残存高は9.2cmを測る。128の穿孔は焼成後に施されている。129は口縁部の破片で外面に粘土紐の輪積み痕を残している。残存高は3.3cmである。131はL R縄文を施している。

117・120・126の3点は色調が淡黄色で、胎土に赤色粘土粒を含有することが特徴的である。

出土石器の観察 132は磨製石斧でB区の表採品である。基部・刃部とも一部が欠損するが、ほぼ完形である。法量は、長さ14.05cm、幅6.0cm、厚さ3.15cmである。重量は470gである。石材は変はんれい岩である。形状を見ると基部と刃部の幅に大きな変化はない。刃部は平面形が外彎する形状で明確に研ぎ出されている。両刃ではあるが、刃縁は背面側に位置する。胴部の横断面も凸レンズ状で表面側が強く弧状を呈するのに対し、背面側は張り出しが弱く平坦面をなす。基端面と基部寄りの両側縁には敲打状の使用痕が認められる。



## 第5節 古墳時代前期・中期の遺構と遺物

### 1 概要

古墳時代前期の遺構としては竪穴住居を15軒検出した。調査区別の内訳はA区2軒、C区13軒である。B区においても前橋市教育委員会の調査で弥生時代後半から古墳時代初頭の住居が検出されており、台地のほぼ全域が居住域として利用されていた。

C区においては調査区西側寄りでは弥生時代後半以降の住居が、東側寄りで古墳時代前期の住居が検出された。

住居の他に遺構址2軒、土坑1基の調査を行った。

A区1号遺構址は古墳時代中期の所産である。

### 2 住居

#### A区 4号住居 (第118図、PL34・112)

位置 44L・M-8・9

重複 3号住居、12号溝と重複しこれに先出する。

形状 他遺構との重複により全体形状を確認できなかった。規模は南北方向で5.53mを測った。東西方向の残存長は2.36mであった。

面積 (23.75)m<sup>2</sup> 方位 N-14°-W

埋没土 褐色土を主体としていた。

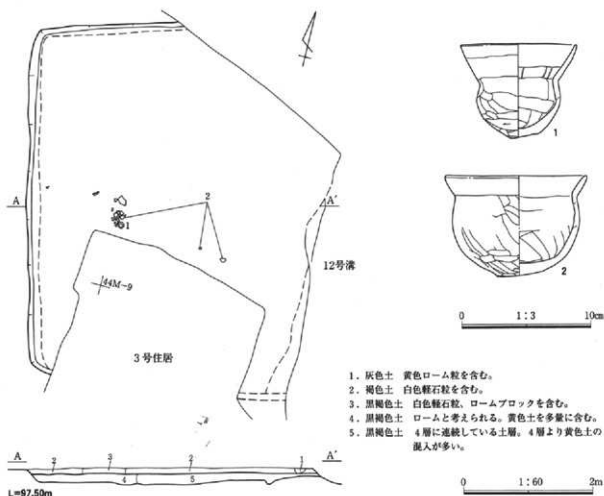
床面 遺構確認面から15cm程掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で大きな起伏はなかった。

炉 検出されなかった。

周溝・柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

床下 床面下10~15cm程下位に掘り方基底面を有していた。黄色土を多量に含む黒褐色土が堆積して



第118図 A区4号住居・出土遺物

いたが、土坑・ピット状の掘り込みは検出されなかった。

**遺物** 西側部分の床面直上から埴(1)、鉢(2)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片14点、須恵器破片1点が出土した。(観P19)

**所見** 古墳時代前期住居と考えられる。

**C区 4号住居**

(第119～122図、PL34・35・112)

**位置** 65D-10・11、65E-9-11

**重複** なし。

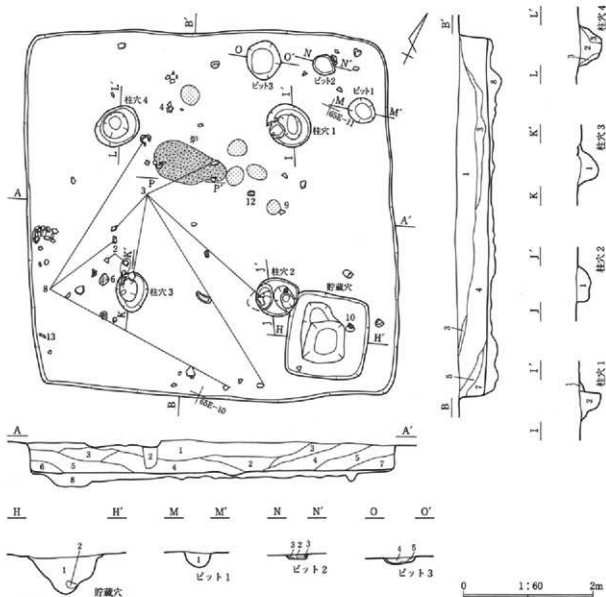
**形状** ほほ正方形を呈する。規模は南北5.78m、東西5.77mである。

**面積** 31.69m<sup>2</sup> **方位** N-27°-W

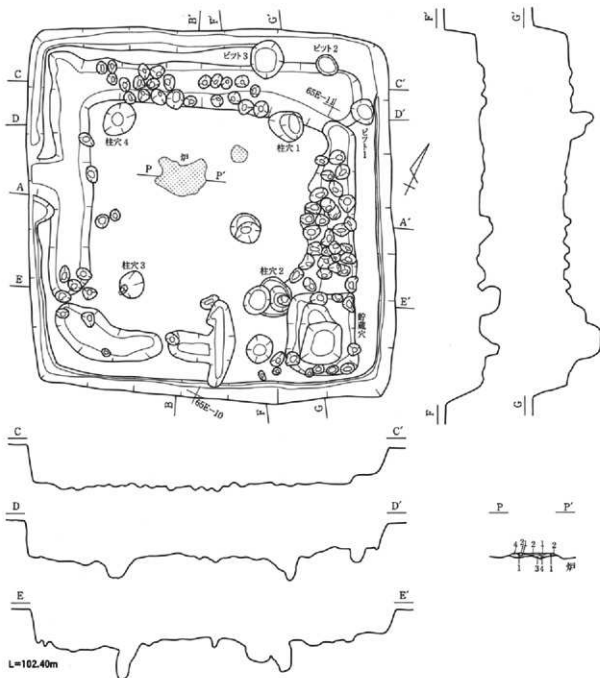
**床面** 遺構確認面から48cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** As-Cを含む黒色土とロームの混土で埋まっていた。

**炉** 床面中央やや北寄りに確認した。規模は長径74cm短径48cmである。上位に4.5cmの厚さで焼土が堆積していた。また、炉周辺の床面上には直径20~30cmの範囲で5箇所、焼土ブロックが散在していた。



第119図 C区4号住居(1)



1. 黒色土 As-Cを多く含む。
2. 黒色土 1層に比してやや明るい。
3. 暗褐色土 ロームとAs-Cを含む黒色土の混土。
4. 暗褐色土 ロームとAs-Cを含む黒色土の混土(3層よりロームが多)。
5. 暗褐色土 ロームとAs-Cを含む黒色土の混土(3層よりロームが少)。
6. 黒色土 As-Cをわずかに含む。
7. 暗褐色土 4層に比してやや暗い。
8. 褐色土 As-Cとロームブロックを多く含む混土。

宮下C区 4号住居貯蔵穴

1. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
2. 黒褐色土 ロームを少量混入。

宮下C区 4号住居 炉

1. 暗褐色土 2層に混じる土。
2. 雑土 軽くしまっている。全体的に赤色味おびる。
3. 暗褐色土 灰を含まない。
4. ローム主体 軽くしまっている。

宮下C区 4号住居 柱穴1・2・3・4 ピット1・2・3

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 ロームを主体に含む。
3. 明黄褐色土 ローム主体で1層が少量混入。
4. 暗褐色土 シルト質の砂。ロームブロックを少量含む。
5. 明黄褐色土 シルト質の砂。ロームを多く含む。

第120図 C区4号住居(2)

0 1:60 2m

**周溝** 北東隅部分を除き、ほぼ全面にわたり壁面下に掘られていた。幅は16~46cmで、深さは1~17.5cmである。

**柱穴** 柱穴4本とピット3本掘られていた。

柱穴1は長径66cm短径64cm、深さ41cm。柱穴2は長径66cm短径61cm、深さ57cm。柱穴3は長径64cm短径45cm、深さ53cm。柱穴4は長径70cm短径62cm、深さ39cmである。柱穴2は2本の掘り方が近接、西側のそれは傾斜が著しかった。いずれの柱穴も柱痕は確認できなかった。

また、ピット1は長径43cm短径41cm、深さ25cm。ピット2は長径35cm短径33cm、深さ9cm。ピット3は長径60cm短径53cm、深さ12cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に掘られていた。上端の形状は方形を呈する。規模は長軸132cm短軸128cmで、床面からの深さは67cm程であるが、掘り込みは2段で上端から5~9cmの深さで平坦面を有し、その後底面に至

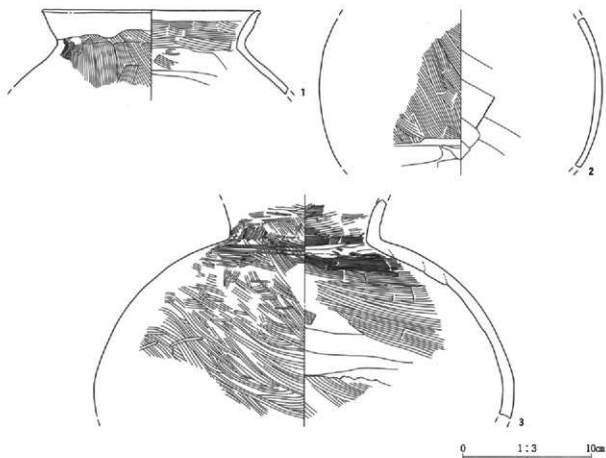
る形状である。

**床下** 壁面と主柱穴間の床面下には幅40~60cm、深さ10cm前後の掘り方が帯状にめぐることが確認された。これと重なるように幅20cmほどの小さな凹凸が多数検出された。これらは掘り方時の掘削痕と考えられる。

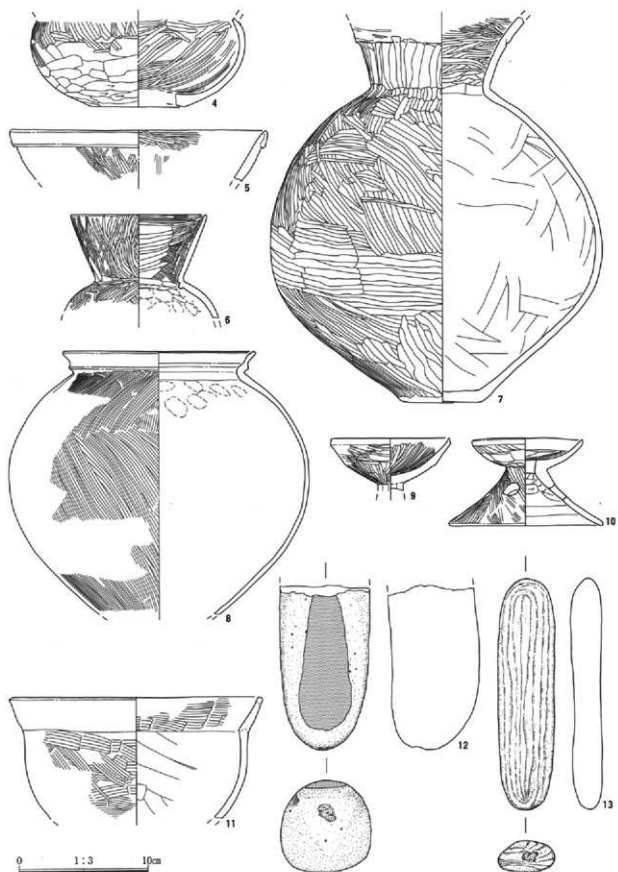
**遺物** 土師器壺、S字状口縁台付甕、甕、鉢、器台などが出土しているが、床面直上から出土したもので資料化できるものはなかった。壺(7)は柱穴1の掘り方内で床面から3cm離れて出土、器台(10)は貯蔵穴内からの出土である。この他に中央床面直上から磨石(12)が、南西隅の埋没土中から敲石(13)が出土した。掲載した資料の他に土師器破片283点、須恵器破片2点、弥生土器破片2点が出土している。

(観P19・20)

**所見** 古墳時代前期の住居である。



第121図 C区4号住居出土遺物(1)



第122図 C区4号住居出土遺物(2)

**C区 6号住居 (第123~125図、PL36・112)**

**位置** 65C・E-8、65D-7~9

**重複** 西側部分で5号住居と、南東部分で7号住居と重複し、本遺構が5号・7号住居により覆られていた。

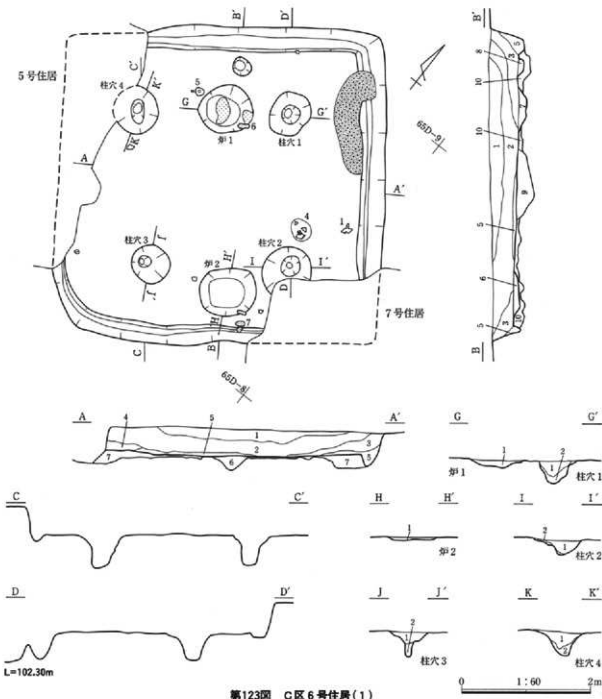
**形状** ほぼ正方形を呈する。規模は南北5.00m、東西4.96mである。南西隅は丸みを有していた。

**面積** (19.91㎡) **方位** N-34°-W

**床面** 遺構確認面から42cm程掘り込んで床面となる。南側が北側に比べ5cm程低い。

**埋没土** 多量のAs-Cとロームを含む黒色土で埋まっていた。

**炉** 炉1は北側柱穴1と4を結んだ中間に掘り込まれ、規模が長径86cm短径74cm、深さ6~11cmである。炉2は南側に掘り込まれ、規模が長径88cm短径76cm、深さ3~8cmである。



第123図 C区6号住居(1)

**周溝** 他住居との重複部分は未確認であるが、全面にわたり掘られていた。幅は20~40cmで、深さは6~13cmである。

**柱穴** 4本掘られていた。柱穴1は長径67cm短径64cm、深さ43cm。柱穴2は長径80cm短径78cm、深さ45cm。柱穴3は直径60cm、深さ53cm。柱穴4は直径72cm、深さ52cmである。

**貯蔵穴** 確認できなかった。

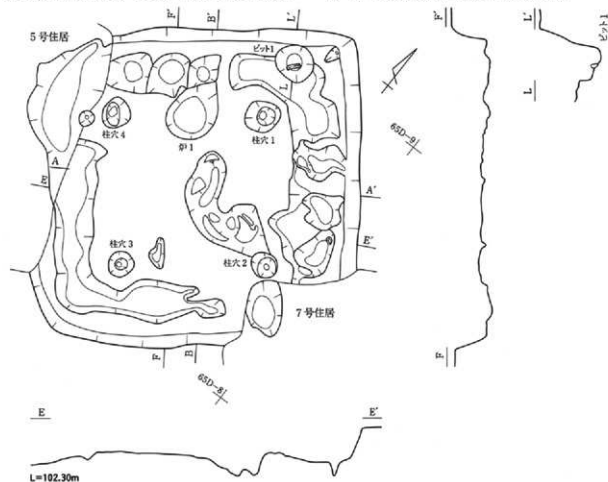
**床下** 床面下の精査により、帯状あるいは皿状の掘り方が確認された。その中、北東隅で検出された

ピット1は長径60cm短径55cm、深さ43cmであった。

**遺物** 土器の出土量は少量であったが、東壁際の床面直上から高杯(1)が、その西側70cmの位置から有孔鉢(4)が出土している。床面北側、炉1に近接する位置からは有孔鉢(5)が出土した。また、炉内出土の礫は磨石(6)として利用されていた。南壁際の埋没土中からも磨石(7)が出土している。掲載資料の他に土師器破片32点、弥生破片1点が出土している。

(観P21)

**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。



1. 黒色土 土粒の半分以上がAs-Cである。
2. 黄黒色土 黒色土主体でローム混入。As-Cを多く含む。
3. 黒褐色土 ロームを少量含む。土粒の半分がAs-Cである。
4. 黒色土 ロームを少量含む。2層より少量のAs-Cを含む。
5. 黒色土 ロームを含む。As-Cをわずかに含む。
6. 暗褐色土 ローム粒を含む。
7. 暗褐色土 ローム粒、黒色土を含む。
8. 黒色土 小ピット内の埋没土。
9. 暗褐色土 ローム粒を均質に含む。
10. 暗褐色土 ローム粒・ブロック、黒色土を含む。

宮下C区 6号住居 炉1  
1. 黒色土 ローム粒・焼土粒・ブロックを含む。堆山は焼けている。

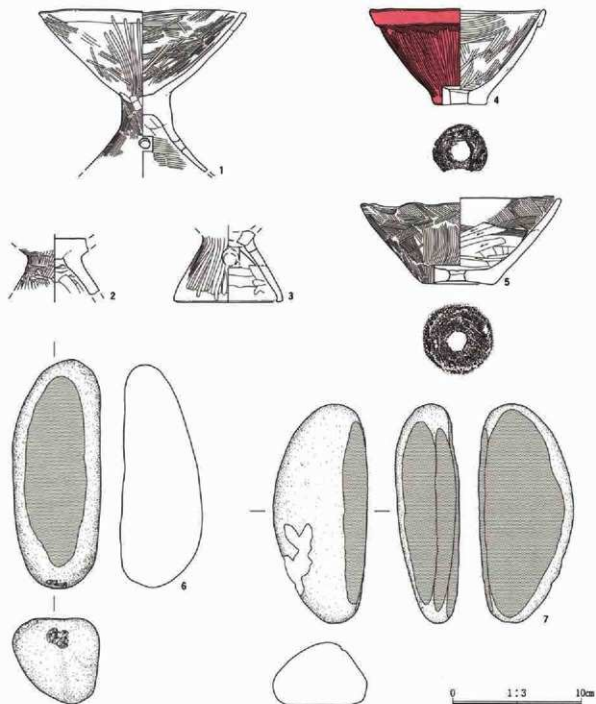
宮下C区 6号住居 炉2  
1. 黄黒色土 炭粒を少量含む。

宮下C区 6号住居 柱穴1・2・3・4

1. 黒色土 ロームブロックを含む。
2. 黄黒色土 ロームと黒色土の混土。

0 1:60 2m

第124図 C区6号住居(2)



第125図 C区6号住居出土遺物

C区 12号住居

(第126~129図、PL36・37・113)

位置 65E・F-6・7、65G-7

重複 なし。

形状 東西を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.32m、短軸5.13mである。

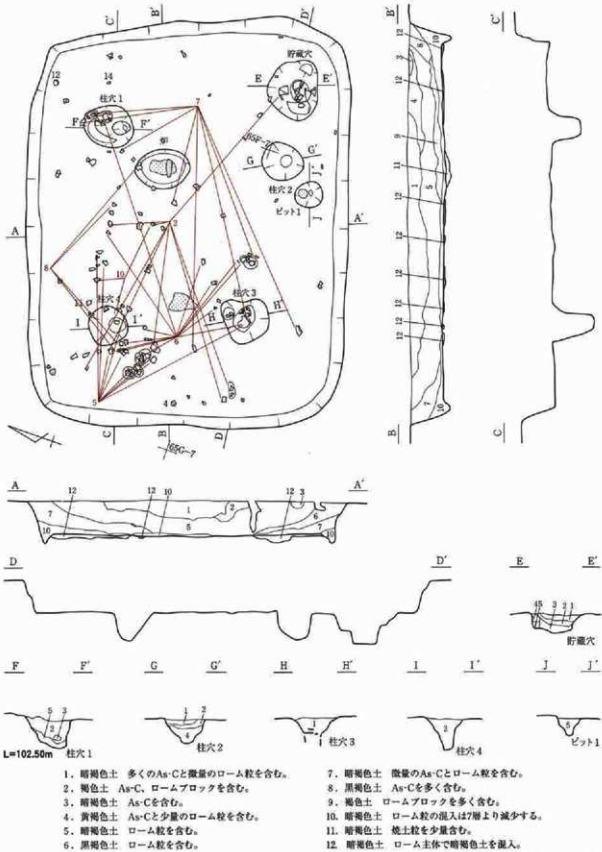
面積 (27.06)m<sup>2</sup> 方位 N-20°-W

床面 遺構確認面から54cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 上・中層はAs-Cを含む暗褐色土で、床面直上層はロームを含む褐色土で埋まっていた。

炉 床面中央やや東寄りに造られていた。規模は長径87cm短径61cm、深さは10cmである。中央やや南側寄りに長さ30cm弱の棒状礎を置いていた。焼土は





L=102.50m

- |                             |                            |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1. 暗褐色土 多くのAs-Cと微量のローム粒を含む。 | 7. 暗褐色土 微量のAs-Cとローム粒を含む。   |
| 2. 褐色土 As-C、ロームブロックを含む。     | 8. 黒褐色土 As-Cを多く含む。         |
| 3. 暗褐色土 As-Cを含む。            | 9. 褐色土 ロームブロックを多く含む。       |
| 4. 黄褐色土 As-Cと少量のローム粒を含む。    | 10. 暗褐色土 ローム粒の混入は7層より減少する。 |
| 5. 暗褐色土 ローム粒を含む。            | 11. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。         |
| 6. 黒褐色土 ローム粒を含む。            | 12. 暗褐色土 ローム主体で暗褐色土を混入。    |

第126図 C区12号住居(1)

掘り方中央に形成されていた。

また、柱穴3と4を結ぶ床面上にも掘り方をもたないが焼土塊が検出された。

**周溝** 壁面下全面に掘られていた。幅は36~51cmで、深さは11~15cmである。

**柱穴** 柱穴4本とピット1本が掘られていた。柱穴2を除く3本の柱穴は住居の対角線上に位置するが、柱穴2は貯蔵穴からの関係からやや南寄りに掘削されている。深さも他よりやや浅い。柱穴1・3・4の埋没土中からは土師器破片が多数出土している。

柱穴1は長径78cm短径65cm、深さ56cm。柱穴2は長径63cm短径60cm、深さ39cm。柱穴3は長径72cm短径64cm、深さ61cm。柱穴4は長径61cm短径59cm、深さ64cmである。ピット1は長径44cm短径38cm、深さ38cmである。

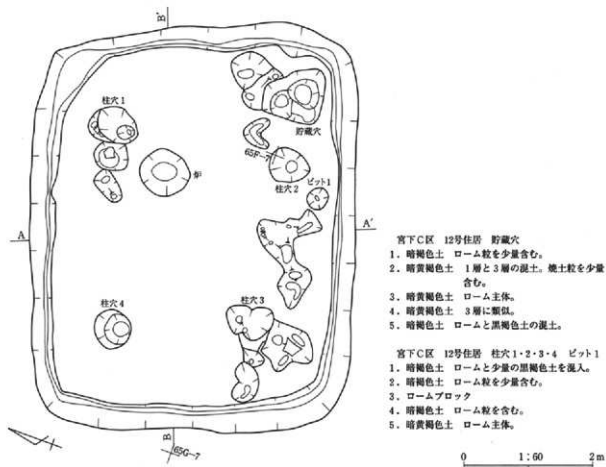
**貯蔵穴** 南東部分に掘られていた。規模は長径92cm短径78cmで床面からの深さは48cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

**遺物** 遺物はレンズ状に堆積した土層の状況に沿って出土しており、形状を保ったまま床面から出土した資料はミニチュア(12)だけである。壺(5)や台付壺(7)に代表されるよう大半は破片となり床面直上から出土、貯蔵穴内からは鉢(9)の一部、壺(2)の一部が出土した。接合状況から出土状況は広範囲にわたることが確認される。

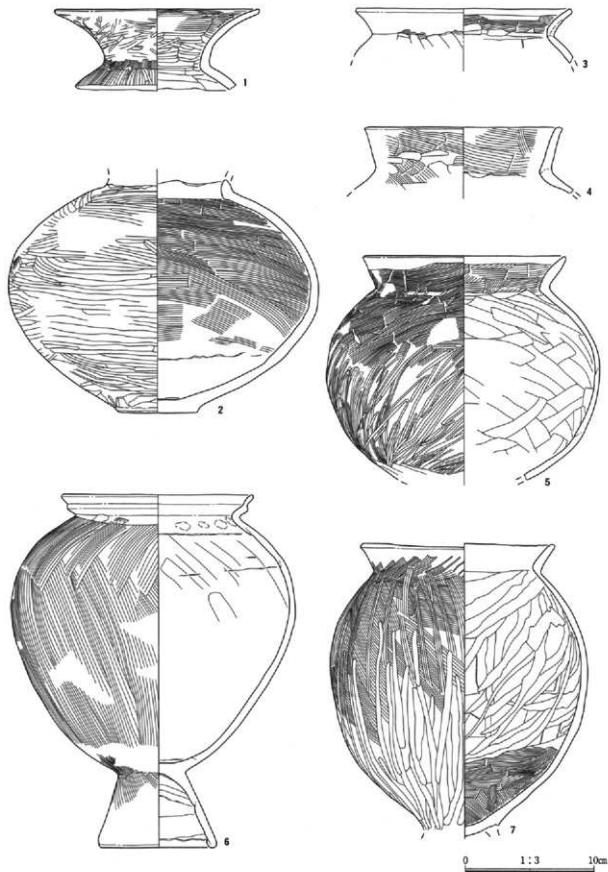
また、柱穴1からはS字台付壺(6)の一部が、柱穴3からは台付壺(7)や壺(5)の一部が、柱穴4からは鉢(10)の一部がそれぞれ出土している。

掲載した資料の他に土師器破片327点、須恵器破片3点、軟質陶器破片1点、縄文土器破片20点、弥生土器破片18点が出土している。(観P21~23)

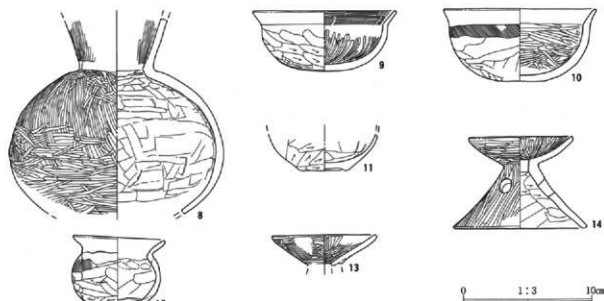
**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。



第127図 C区12号住居(2)



第128図 C区12号住居出土遺物(1)



第129図 C区12号住居出土遺物(2)

**C区 15号住居 (第130~135図、PL38・114)**

**位置** 65G・H-3~5、65I-4

**重複** 16号住居と1号溝と重複する。本遺構が南東部分で16号住居を掘り込んでいた。1号溝により本遺構の北西・南東壁面の一部が壊されていた。新旧関係は16号住居→15号住居→1号溝である。

**形状** 南北を長軸とする隅丸方形を呈すると考えられる。規模は長軸6.76m、短軸6.52mである。

**面積** 38.20㎡ **方位** N-31°-W

**床面** 遺構確認面から61cm程掘り込んで床面となる。西側は中央部に比べ8cm程低い。

**埋没土** 上・中層はAs-Cを含む暗褐色土で、床面直上層はローム主体の褐色土で埋まっていた。

炉床面北側柱穴1と4を結ぶ線の内側に設けられていた。規模は長径105cm短径86cmである。炭化物や焼土粒の混入は少量であった。

**周溝** 掘られていなかった。

**柱穴** 柱穴4本とビット1本が掘られていた。柱穴は住居の四隅の対角線上に位置しているが、いずれも壁面寄りに掘られており、床面中央に広いスペースが確保されている。柱穴3・4は掘り方2本が重なっており、建て替え、あるいは補強材の存在が想定される。

柱穴1は長径112cm短径71cm、深さ75cm。柱穴2

は長径77cm短径72cm、深さ75cm。柱穴3は長径99cm短径89cm、深さ73cm。柱穴4は長径88cm短径74cm、深さ95cmである。

ビット1は長径51cm短径44cm、深さ22cmである。  
**貯蔵穴** 南東隅に掘られていた。規模は長径119cm短径115cmで床面からの深さは82cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

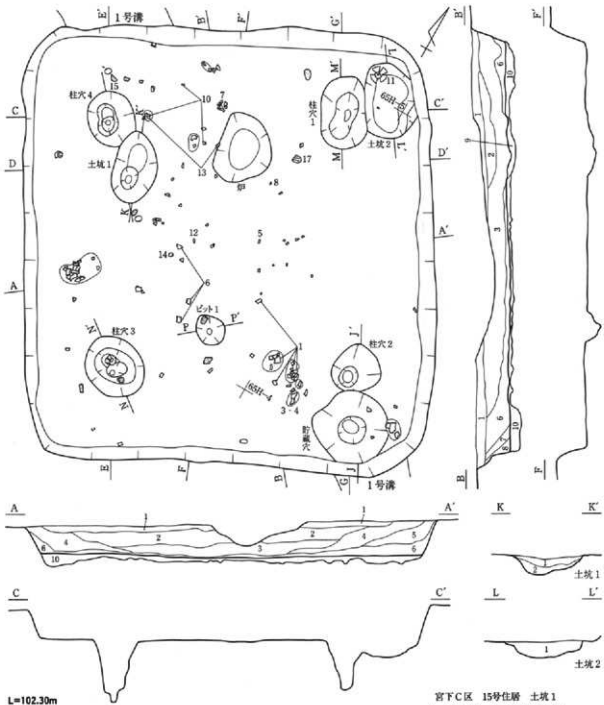
**土坑** 土坑2基が掘られていた。土坑1は長径113cm短径69cmで床面からの深さは41cm程である。

土坑2は長径117cm短径68cmで床面からの深さは27cm程である。土坑2基の形状はともに楕円形を呈する。

**遺物** 床面直上から出土した土器は床面南側からS字台付甕(1)が、床面北側から器台(9・10)がある。また、北東隅土坑2掘り方内床面とはほぼ同レベルから高杯(11)が倒立状態で出土している。柱穴3の掘り方内においても甕の上半部が床面と同等レベルから出土している。また、北西部分、床面から6cm離れて砥石(15)が、北部分の床面から14cm離れて砥石(17)が出土した。

掲載した資料の他に土師器破片862点、須恵器破片17点、陶磁器破片2点、弥生土器破片67点が出土した。(銀P23・24)

**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。



L=102.30m

1. 暗褐色土 As-Cを含む。
2. 暗褐色土 As-Cをやや多く含む。
3. 黒褐色土 As-Cを1層より少量含む。
4. 暗褐色土 As-Cをやや多く含む。
5. 褐色土 As-C、ロームブロックを少量含む。
6. 褐色～明褐色土 ローム主体。ローム粒・ブロックを含む。
7. 暗褐色土 2層に類似。As-Cを多く含む。
8. 暗褐色土 6層に類似。ローム主体。
9. 暗褐色～明褐色土 ローム主体で炭化物粒、焼土粒を微量含む。  
和層没土。
10. 褐色土 As-Cを少量含む。ロームを多く混入。掘り方埋没土。

宮FC区 15号住居 土坑1

1. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
2. 黄褐色土 ローム主体。

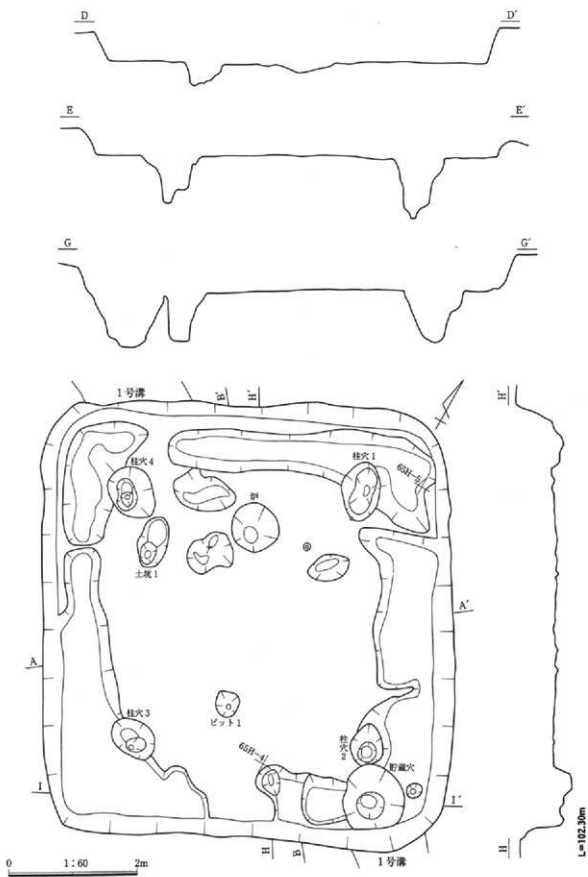
宮FC区 15号住居 土坑2

1. 明黄褐色土 ローム主体。ローム粒・ブロックを含む。

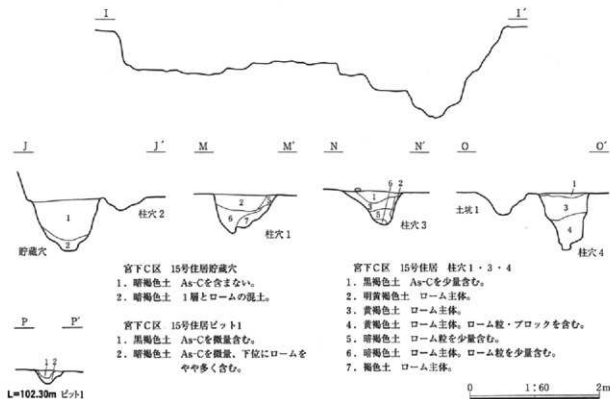
0 1:60 2m

第130図 C区15号住居(1)

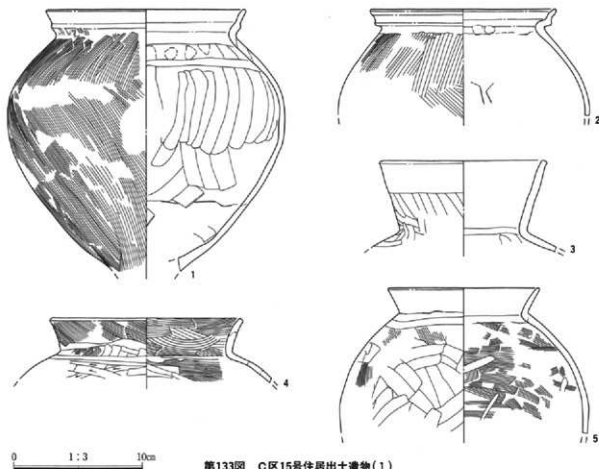
第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



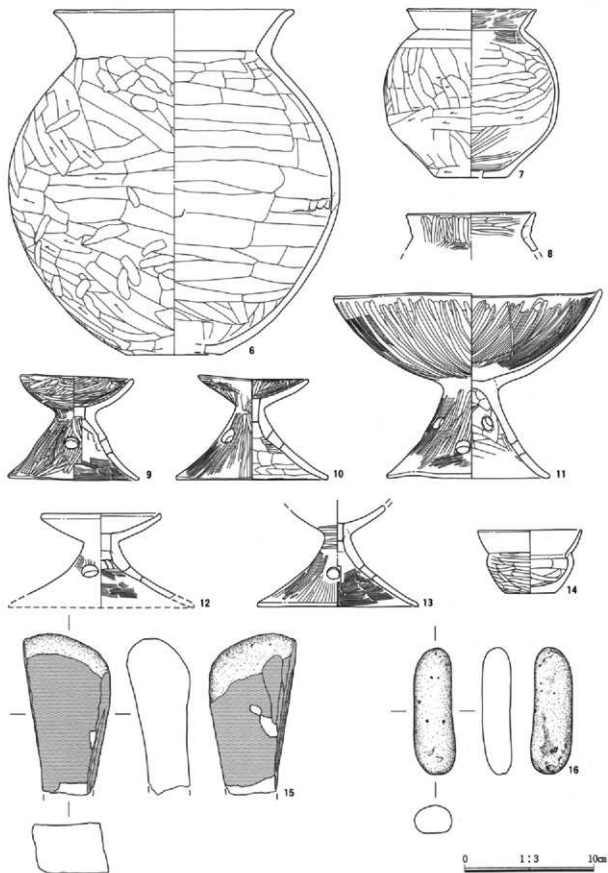
第131図 C区15号住居(2)



第132図 C区15号住居(3)

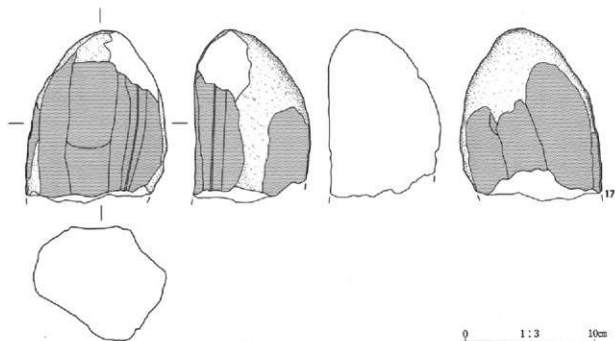


第133図 C区15号住居出土遺物(1)



第134図 C区15号住居出土遺物(2)





第135図 C区17号住居出土遺物(3)

**C区 17号住居 (第136~138図、PL39・115)**

位置 65C・D-5・6

**重複** 北東部分で8号・9号住居と、南西部分で10号住居と重複し、本遺構が8号・9号・10号住居により掘り込まれていた。北東部分での新旧関係は17号住居→9号住居→8号住居である。

**形状** 他遺構と重複する部分があるが、東西を長軸とする隅丸方形を呈すると推定される。規模は東西長6.17m、南北長6.12mである。

面積 (32.42)<sup>2</sup>m<sup>2</sup> 方位 N-12°-W

**床面** 遺構確認面から14cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** As-Cを含む黒褐色土とロームを含む暗褐色土で埋まっていた。掘り方はAs-Cを含む黒色土と褐色土・ロームの混土で貼床が施されていた。

**炉** 床面南西部分に設けられていた。規模は長径105cm短径78cmである。

**周溝** すべての壁面下に掘られていたと想定される。幅は18~43cm、深さは7~18cmである。

**柱穴** 柱穴3本とピット4本が掘られていた。柱穴1は長径64cm短径46cm、深さ78cm。柱穴2は長径44cm短径28cm、深さ78cm。柱穴3は長径58cm短径51

cm、深さ72cmである。柱穴1本は9号住居により壊された可能性が高い。

ピット1は長径40cm短径33cm、深さ8cm。ピット2は長径64cm短径43cm、深さ12cm。ピット3は長径59cm短径51cm、深さ14cm。ピット4は南北長52cm、深さ8cmである。ピット4の埋没土には焼土が堆積していた。

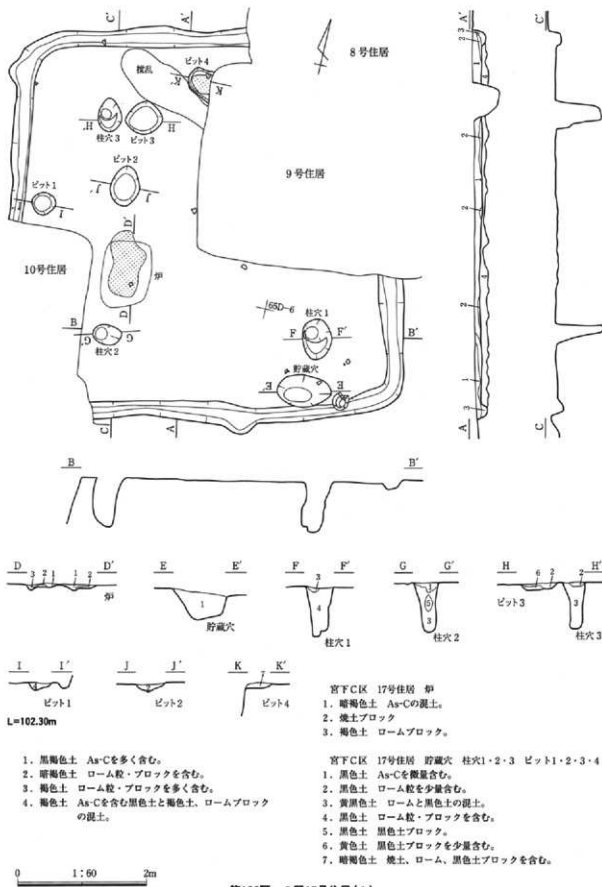
**貯蔵穴** 南東部分に掘られていた。規模は長径88cm短径49cmで床面からの深さは46cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

**床下** 住居の掘り方構築時の掘削痕と考えられる深さ2~4cmの小穴が北西部に残っていた。

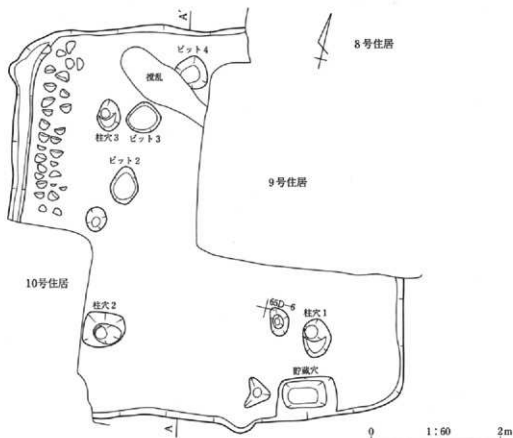
**遺物** 遺物の出土は少量であった。南東隅の床面上から壺(1)が口縁部を上にして出土した他は埋没土中からの出土である。

掲載した資料の他に土師器破片175点、弥生土器破片7点が出土した。(観P25)

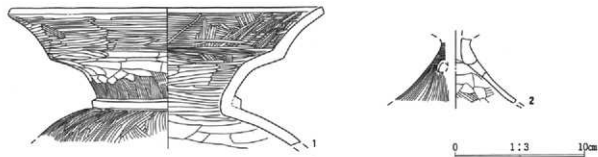
**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。



第136図 C区17号住居(1)



第137図 C区17号住居(2)



第138図 C区17号住居出土遺物

**C区 21号住居 (第139図、PL39・115)**

**位置** 65G-9

**形状** 現地形(斜面)により住居範囲の大部分が壊されているため全体の形状は不明である。残存した範囲の規模は東西長2.10m、南北長1.18mである。

**面積** 計測不能 **方位** 計測不可

**床面** 遺構確認面から30cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

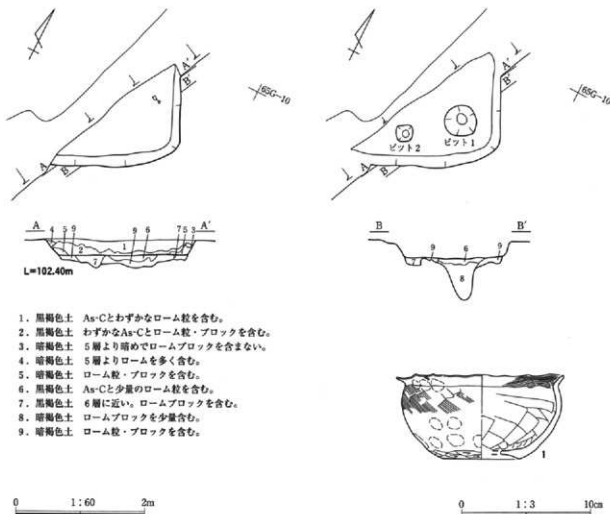
**埋没土** As-Cとローム粒・ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

**床下** ピット2本が掘られていた。ピット1は長径52cm短径50cm、深さ57cm。ピット2は直径26cm、深さ24cmである。

**炉・周溝・柱穴・貯蔵穴** 確認できなかった。

**遺物** 床面から出土した土器はなかった。埋没土中から鉢(1)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片70点、須恵器破片2点、弥生土器破片3点、縄文土器破片3点が出土した。(観P25)

**所見** 古墳時代の前期の住居の可能性が考えられる。



第139図 C区21号住居・出土遺物

**C区 24号住居 (第140・141図、PL39・115)**

**位置** 54T-19・20、55A-19・20

**重複** 南西部分で23号住居と、南東部分で1号溝と、東側で11号溝と重複する。本遺構が上記の遺構により掘り込まれていた。

**形状** 他遺構と重複したため本遺構の残存状態は不良であった。東西を長軸とする隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長軸5.34m、短軸4.26mである。

**面積** (22.05)㎡ **方位** N-40°-W

**床面** 遺構確認面から20cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** 上層はAs-Cを多量に含む黒色土で、床面直上層はローム粒を少量含む黒色土で埋まっていた。

**炉** 床面中央に設けられていた。規模は長径82cm

短径61cmである。長軸は住居の長軸と直交する方向にある。炉中央部に裸2点が置かれていた。掘り込みの痕跡は浅く、床面で直接、火を使用したと考えられる。周辺に被熱の状況は確認できるが、焼土化はしていない。

**周溝** 掘られていなかった。

**ピット** 主柱穴と考えられる掘り込みは検出されなかった。ピットが4本掘られていた。ピット1は長径36cm短径30cm、深さ24cm。ピット2は長径26cm短径23cm、深さ53cm。ピット3は長径27cm短径25cm、深さ29cm。ピット4は長径34cm短径24cm、深さ61cmである。

**貯蔵穴** 掘られていなかった。

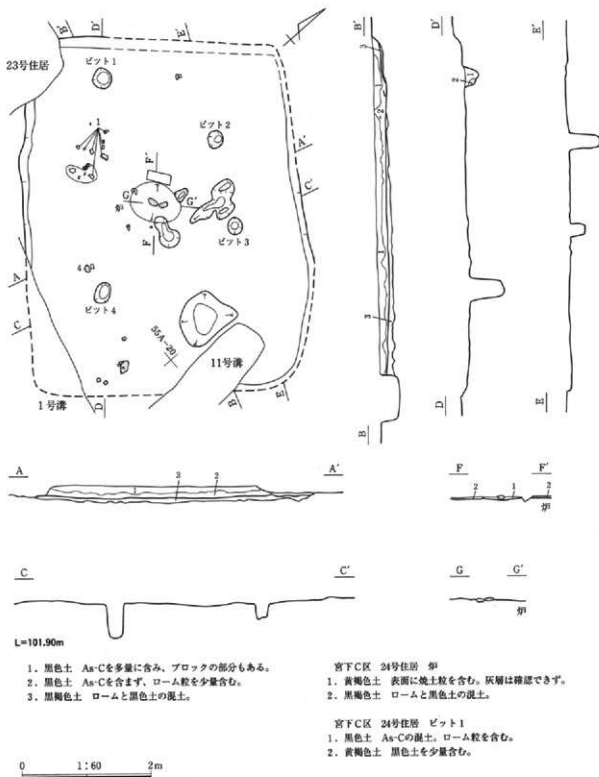
**遺物** 破片となった資料が少量出土しただけで全体形状を知り得るような資料は検出されていない。

凹石(4)は南側の床面直上からの出土である。

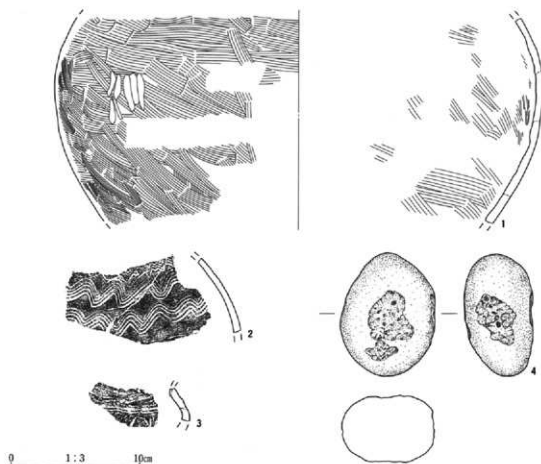
掲載した資料の他に土器器破片55点、須恵器破片3点、軟質陶器破片1点、陶磁器2点、弥生土器破

片63点出土した。(観P 25)

所見 弥生時代後期あるいは古墳時代前期の住居と考えられる。



第140図 C区24号住居



第141図 C区24号住居出土遺物

**C区 25号住居 (第142~145図、PL40・115)**

**位置** 55D-20、55E・F-19・20、65E・F-1

**形状** 東西を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸7.17m、短軸5.88mである。

**面積** 36.38㎡ **方位** N-7°-W

**床面** 遺構確認面から18cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で周溝は見られなかった。

**埋没土** 上層はAs-Cを多く含み、床面直上層はAs-C・ローム粒を少量含む、いずれもシルト質の砂で埋まっていた。

**炉** 床面中央北寄り柱穴1と4を結ぶ線上に設けられ、炉下層は焼土化していた。規模は長径85cm短径64cmである。柱穴1と北東隅の間の床面上では焼土の散布が確認された。

**柱穴** 全体形状の四隅を結ぶ対角線上に4本が掘られていた。柱穴1は長径63cm短径62cm、深さ81cm。柱穴2は長径65cm短径59cm、深さ69cm。柱穴3は

長径64cm短径56cm、深さ70cm。柱穴4は長径62cm短径54cm、深さ79cmである。

柱穴1に北接するピット1は深さ50.5cm、柱穴3の南西に位置するピット2は深さ49cm、柱穴4に西接するピット3は深さ38cmを測る。性格は不明であるが柱穴を補助する柱の掘り方であった可能性も考えられる。その他にも深さ20~30cmの小ピットが複数確認できたが性格は不明である。

**貯蔵穴** 南東隅の南壁面際に掘られていた。規模は長径86cm短径77cmで床面からの深さは39cm程である。上層の形状は不定形を呈する。

**土坑** 西側に掘られていた。規模は長径112cm短径100cmで床面からの深さは62cm程である。上層の形状は不定形を呈する。

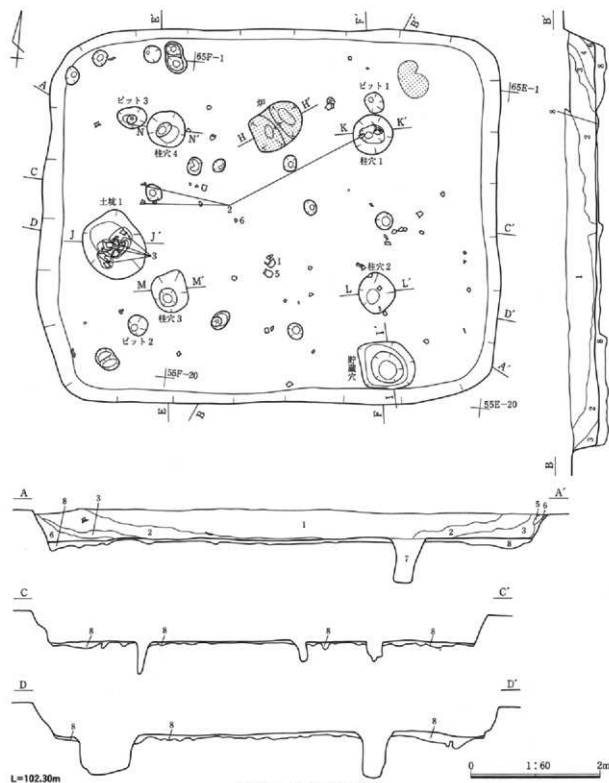
**遺物** 埋没土中に破片となって含入する資料が多数で、床面直上から出土したものは床面中央の壺(1)の口縁部破片のみである。小型壺(埴)(5)は床面か

ら約10cm離れての出土である。柱穴1の掘り方埋没土中からは埴形の有孔鉢(10)が出土した。また、西壁際で検出した土坑中からは埋没土の中層から下層にかけて壺(3)の下半部が割れた状態で出土した。

掲載した資料の他に土師器破片461点、須恵器破片3点、弥生土器破片35点が出土した。

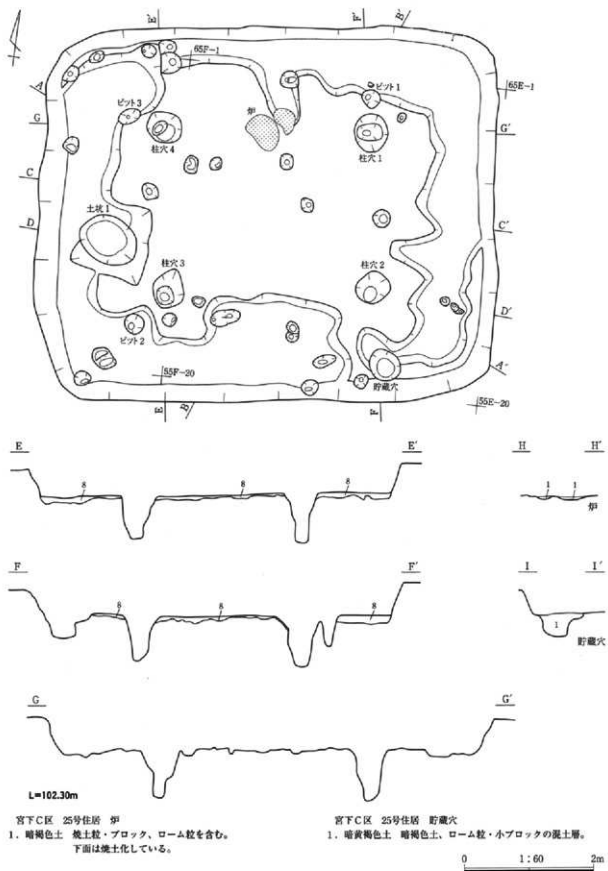
(観P25・26)

所見 古墳時代前期の住居と考えられる。



第142図 C区25号住居(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

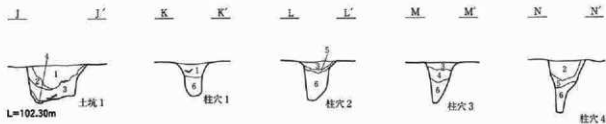


宮下C区 25号住居 伊  
 1. 暗褐色土 焼土粒・ブロック、ローム粒を含む。  
 下面は焼土化している。

宮下C区 25号住居 貯蔵穴  
 1. 暗黄褐色土、暗褐色土、ローム粒・小ブロックの混土層。

第143図 C区25号住居(2)





L=102.30m

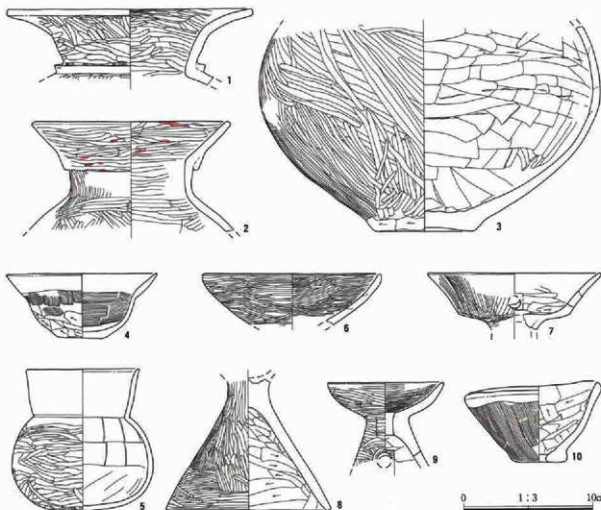
1. 暗灰黒色土 シルト質の砂。As-Cを多く含む。
2. 暗灰黄色土 シルト質の砂。As-C、ローム粒を少量含む。
3. 灰黄色土 シルト質の砂。ロームを多く含む。
4. 灰黒色土 シルト質の砂。焼土、炭を少量含む。
5. 黄色土 シルト質の砂。黒色土を少量含む。
6. 灰黄色土 シルト質の砂。整面ロームの崩落土。
7. 柱穴埋没土
8. 灰黄色土 シルト質の砂。As-Cを少量含む。掘り方埋没土。

- 宮下C区 25号住居 土坑1
1. 黒色土 ローム粒・小ブロック、As-Cを少量含む。
  2. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む。
  3. 黄褐色土 ローム主体。
  4. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土を少量含む。

- 宮下C区 25号住居 柱穴1・2・3・4
1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。
  2. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む。
  3. ロームと黒褐色土の混土層 黒褐色土ブロックを含む。
  4. 黄褐色土 ロームと黒褐色土の混土。
  5. ローム主体 黒褐色土を含む。
  6. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土を少量含む。

0 1:60 2m

第144図 C区25号住居(3)



0 1:3 10cm

第145図 C区25号住居出土遺物

C区 29号住居 (第146~149図、PL41・115)

位置 54T-17・18, 55A-17・18

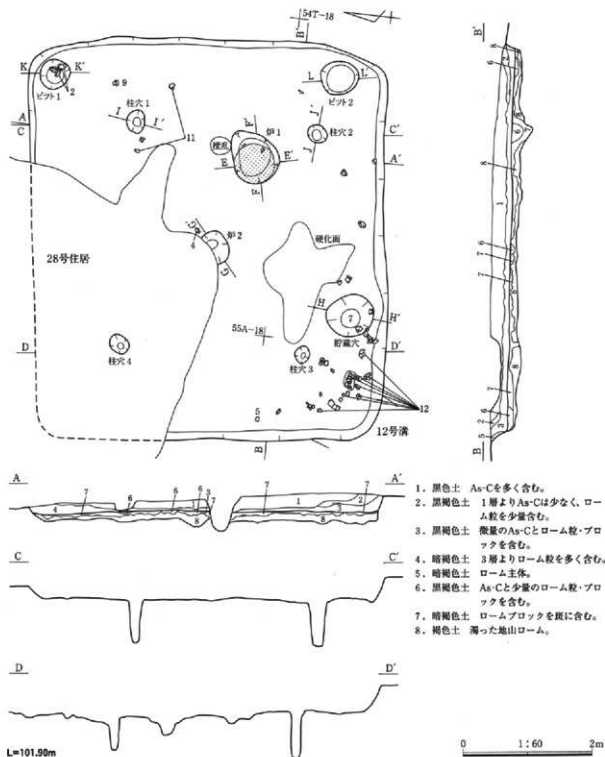
重複 28号住居、12号溝と重複し、本遺構が両遺構により掘り込まれていた。

形状 北西部分で他遺構と重複するが、東西を長

軸とする長方形を呈すると推定される。規模は長軸6.24m、短軸5.60mである。

面積 (31.24)㎡ 方位 N-4°-W

床面 遺構確認面から31cm程掘り込んで床面となる。東側が西側に比べ8cm程低い。床面は南側の一



1. 黒色土 As-Cを多く含む。
2. 黒褐色土 1層よりAs-Cは少なく、ローム粒を少量含む。
3. 黒褐色土 微量のAs-Cとローム粒・プロックを含む。
4. 暗褐色土 3層よりローム粒を多く含む。
5. 暗褐色土 ローム主体。
6. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・プロックを含む。
7. 暗褐色土 ロームプロックを混に含む。
8. 褐色土 薄った地山ローム。

第146図 C区29号住居(1)

部で硬化していた。

**埋没土** 上層はAs-Cを含む黒色土で、床面直上層はローム粒・ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。掘り方上層にはAs-Cが含まれていた。

**炉** 2基が確認された。炉1は床面中央南東、柱穴1と2を結ぶ線より中央寄りに掘り込まれ、規模は長径90cm短径71cmである。炉2は床面中央に掘り込まれ、28号住居に一部が壊され、規模は東西長52cmである。

**周溝** 掘られていなかった。

**柱穴** 柱穴4本とピット2本が掘られていた。柱穴1は長径36cm短径29cm、深さ69cm。柱穴2は長径31cm短径28cm、深さ76cm。柱穴3は長径28cm短径24cm、深さ76cm。柱穴4は長径34cm短径27cm、深さ54

cmである。

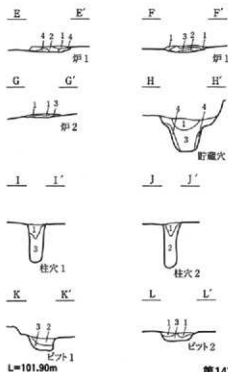
ピット1は長径48cm短径46cm、深さ27cm。ピット2は長径61cm短径54cm、深さ16cmである。

**貯蔵穴** 南壁面際の内西寄りに掘られていた。規模は長径76cm短径64cmで床面からの深さは58cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

**遺物** 貯蔵穴から南西隅にかけて破片が出土したがS字台付甕(12)をはじめ床面直上から出土した土器はほとんどみられなかった。

掲載した資料の他に土師器破片506点、須恵器破片1点、軟質陶器破片1点、弥生土器破片5点が出土した。(観P26・27)

**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。



第147図 C区29号住居(2)

宮下C区 29号住居 炉1・2

1. 黒褐色土 少量の焼土粒とAs-Cを含む。
2. 暗褐色土 焼土粒・ブロック、ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土 2層に近い。ローム粒・ブロックがやや多い。
4. 褐色土 ローム主体。焼土粒・ブロックを含む。

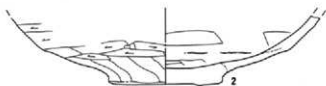
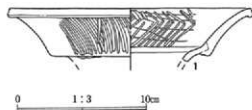
宮下C区 29号住居 貯蔵穴 ピット1・2

1. 黒色土 As-Cを含む。住居埋没土。
2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。住居埋没土。
3. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
4. 黄褐色土 ロームブロックの汚れた土層。

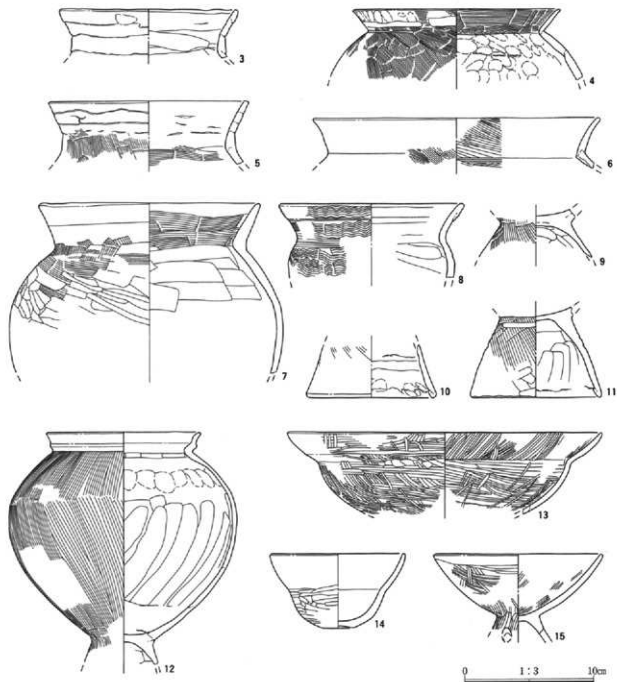
宮下C区 29号住居 柱穴1・2

1. 暗褐色土 少量のAs-Cとローム粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を含む。
3. 暗褐色土 2層に近い。ロームブロックを含む。

0 1:60 2m



第148図 C区29号住居出土遺物(1)



第149図 C区29号住居出土遺物(2)

**C区 32号住居 (第150図)**

**位置** 55A・B-17

**重複** 33号住居と重複し、本遺構が33号住居により掘り込まれていた。

**形状** 他遺構と重複する部分があり、全体の形状は不明である。残存部分での規模は、東西長2.23m、南北長1.70mである。

**面積** 計測不能 **方位** 計測不可

**床面** 残存した遺構確認面から24cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** 上層はAs-Cを含む黒褐色土で、床面直上層はロームを含む暗褐色土で埋まっていた。掘り方上層の一部にAs-Cが少量含まれていた。

**炉・竈・周溝・柱穴・貯蔵穴** 確認できなかった。

**遺物** 出土遺物は掲載した1点のみである。

(観P28)

**所見** 33号住居に先行するので奈良・平安時代以前の住居であるがその時期を確定することは困難である。

**備考** 図はC区33号住居と合わせて掲載した。

**C区 34号住居 (第151・152図、PL42・116)**

**位置** 54S・T-15・16

**重複** 北東部分で27号土坑および後世の溝と重複し、本遺構が27号土坑により掘り込まれていた。

**形状** 他遺構と重複するが、南北を長軸とする方形を呈する。規模は長軸3.86m、短軸3.60mである。

**面積** (10.84)㎡ **方位** N-10°-W

**床面** 遺構確認面から44cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で硬くしまっていた。

**埋没土** As-Cを含む黒褐色土で埋まっていた。掘



第150図 C区32号住居出土遺物

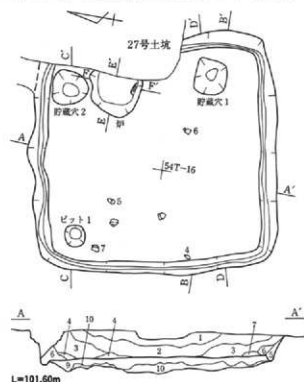
り方上層にはAs-Cが微量に含まれていた。

**炉** 北東部分貯蔵穴の南側に設けられていた。規模は南北長83cmで、東側は27号土坑により壊されていた。

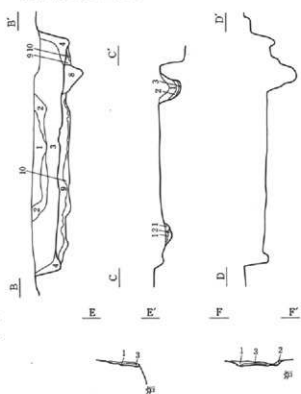
**周溝** 他遺構との重複部分以外、全面にわたり壁面下で検出され、幅は16~30cmで、深さは6~19cmである。

**柱穴** 掘られていなかった。

**ピット** 1本掘られていた。規模は長径34cm短径32cm、深さ10cmである。



1. 黒色土 As-Cを多く含む。
2. 黒色土 As-Cを含む。
3. 暗褐色土 わずかなAs-Cと少量のロームブロックを含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を混入。
5. 暗褐色土 ロームブロックを混入。
6. 黒褐色土 As-Cをわずかに含む。
7. 暗褐色土 4層より色調がやや淡い。
8. 貯蔵穴埋没土。
9. 黒褐色土 微量のAs-Cと多くのロームブロックを含む。
10. 黄褐色土 ロームブロック主体、黒褐色土混入。



宮下C区 34号住居 炉

1. 黒褐色土 As-C、焼土粒、少量のロームブロックを含む。
2. 黒褐色土 混入物ほとんどなし。石の抜き取り穴か。
3. 暗褐色土 少量のAs-Cとローム粒・ブロックを含む。

宮下C区 34号住居 貯蔵穴2 ピット1

1. 黒褐色土 ロームブロックをわずかに含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
3. 暗褐色土 焼土を混入。

第151図 C区34号住居

#### 第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

**貯蔵穴** 調査時の所見から2基存在していたと考えられる。共存・新旧関係は不明である。

貯蔵穴1は南東部分に掘られていた。その規模は長径54cm短径48cm、深さ41cm程であり、上端の形状が隅丸長方形を呈する。貯蔵穴2は北東部分に掘られていた。その規模は長径58cm短径53cm、深さ35cm程であり、上端の形状が楕円形を呈する。

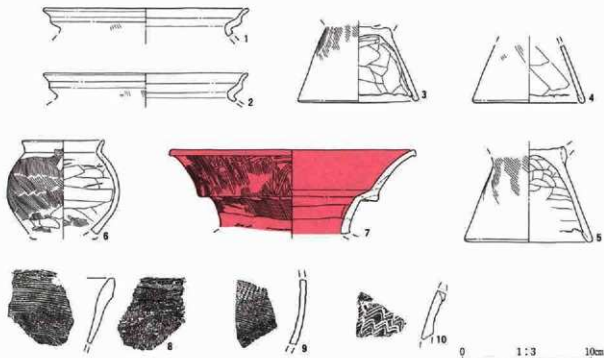
**遺物** 西側を中心に少量の土器が出土したが床面

直上出土の資料としては小型甕(6)が床面中央やや南側から、台付甕(4)の脚台部が西側から出土した。

掲載した資料の他に土師器破片124点、須恵器破片5点、軟質陶器破片1点、陶磁器破片11点、弥生土器破片11点、縄文土器破片1点が出土した。

(観P28)

**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。



第152図 C区34号住居出土遺物

#### C区 43号住居

(第153・154図、PL42・43・116)

**位置** 540・P-8・9

**重複** 北東部分で後世の溝と重複し、本遺構が溝により掘り込まれていた。後世の攪乱により南東隅と南西部が壊されていた。

**形状** 南北を長軸とする長方形を呈すると推定される。規模は長軸3.28m、短軸2.70mである。

**面積** (8.32)㎡ **方位** N-39°-W

**床面** 遺構確認面から6cm程掘り込んで床面となる。東側が9cm程低く、平坦な部分があった。南西部の床面は硬化していた。

**埋没土** 床面直上層はAs-Cを多く含む黒色土とロ

ーム粒・ブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。掘り方上層にはAs-Cが含まれていた。

**炉** 3基が設けられていた。炉1は床面北側ほぼ床面中央に掘り込まれ、規模が長径40cm短径37cmである。炉2は床面中央やや東寄りに掘り込まれ、規模が長径71cm短径67cmである。炉3は床面北西部に掘り込まれ、規模が長径62cm短径58cmである。炉下面の一部は弱く焼土化していた。

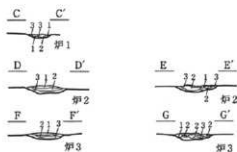
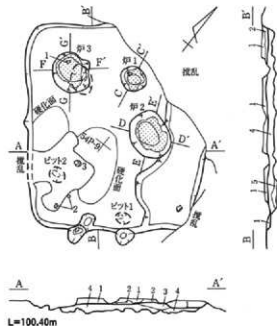
**周溝・柱穴・貯蔵穴** 確認した範囲では掘られていなかった。

**ピット** 2本掘られていた。ピット1は長径24cm短径20cm、深さ51cm。ピット2は長径27cm短径24cm、深さ69cmである。

**遺物** 壺(2)は南西部分の床面直上出土の破片である。埋没土中から破片が少量出土した。掲載した資料の他に土師器破片90点、須恵器破片65点、弥生

土器破片31点、縄文土器破片1点が出土している。(観P28・29)

**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。



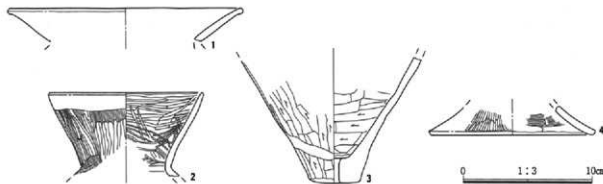
1. 黒色土 As-Cを多く含む。
2. 暗褐色土 多くのローム粒・小ブロックを含む。
3. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
4. 暗褐色土 As-C, ローム粒・ブロックを含む。
5. 褐色土 ロームブロックを少量含む。

宮下C区 43号住居 竈1・2・3

1. 黒褐色土 焼土粒を少量含む。ローム粒を少量混入。
2. 赤褐色土 焼土主体。
3. 暗褐色土 ロームに黒褐色土を少量混入。上位には弱く焼土した部分あり。

第153図 C区43号住居

0 1:60 2m



第154図 C区43号住居出土遺物

### C区 57号住居 (第155図, PL43・116)

**位置** 55E・F-17・18

**重複** なし。後世の擾乱により本遺構が部分的に壊されている。

**形状** 東西を長軸とする隅丸方形を呈する。規模は長軸4.34m、短軸4.08mである。

**面積** 15.37㎡ **方位** N-17°-W

**床面** 遺構確認面から20cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** 軽石と少量のローム粒を含む黒色土で埋ま

っていた。掘り方では黒色土とロームの混土で貼床が施されていた。

**炉** 確認できなかった。

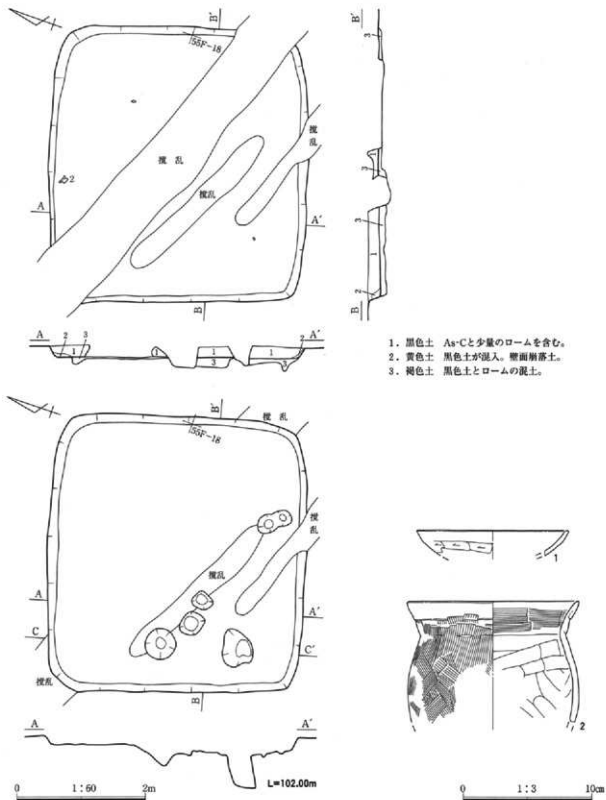
**周溝・柱穴・貯蔵穴** 掘られていなかった。

**遺物** 床面から出土した遺物は全くなかった。壺(2)は北部分、床面から9cm離れての出土である。

掲載した資料の他に土師器破片49点、須恵器破片5点、軟質陶器破片4点、陶磁器破片4点、弥生土器破片2点が出土した。(観P29)

**所見** 古墳時代前期の住居と考えられる。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第155図 C区57号住居・出土遺物

A区 5号住居 (第156・157図、PL34・116)

位置 44P・Q-2・3

重複 中央部分を北西から南東方向に延びる用水

路により削平を受けている。

形状 南東隅の形状が丸味をおび不明瞭となっていた他、北西隅が用水路、試掘坑により削平されて



いたため全体形状を明らかにすることはできなかった。規模は東西方向で5.04m、南北方向で4.96mを測った。

面積 (20.84) m<sup>2</sup> 方位 N-7°-W

埋没土 褐灰色土が堆積していた。

床面 確認面から28cmほど掘り込んで床面となる。調査時の所見では床面は明瞭な状況で把握されなかったとされる。

炉 検出されなかった。

周溝・柱穴 検出されなかった。

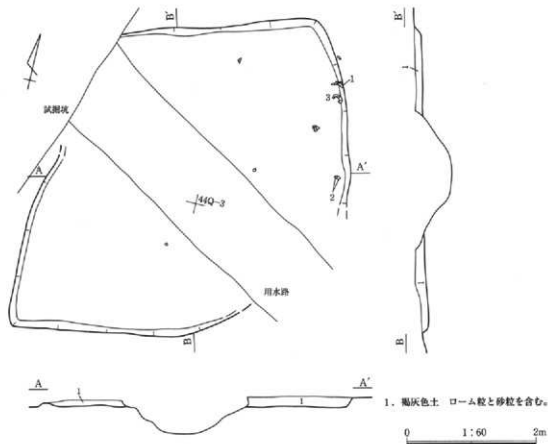
貯蔵穴 検出されなかった。

床下 土坑状・ピット状の掘り込みは検出されなかった。

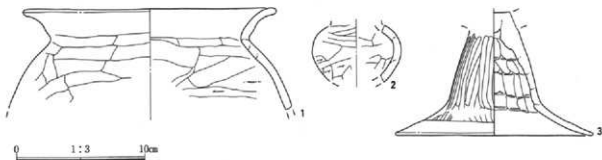
遺物 床面直上からの出土はない。南壁際の床面からやや離れた位置から埴(2)、高杯(3)、甕(1)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片32点、須恵器破片2点が出土した。(観P29)

所見 古墳時代中期の住居と考えられる。



第156図 A区5号住居



第157図 A区5号住居出土遺物

3 遺構址

C区 2号址 (第158・159図、PL44)

位置 65G・H-5・6

重複 なし。

形状 東西を長軸とする隅丸台形を呈する。規模は長軸4.50m、短軸3.92mである。

面積 16.92㎡ 方位 N-3°-E

床面 確認できなかった。このため遺構の性格を住居と確定するにはいたらなかった。

埋没土 ほとんど残っていなかった。

焼土 2箇所を確認した。焼土1は掘り込みの中央やや東寄りにあり、規模は長径60cm短径48cmであ

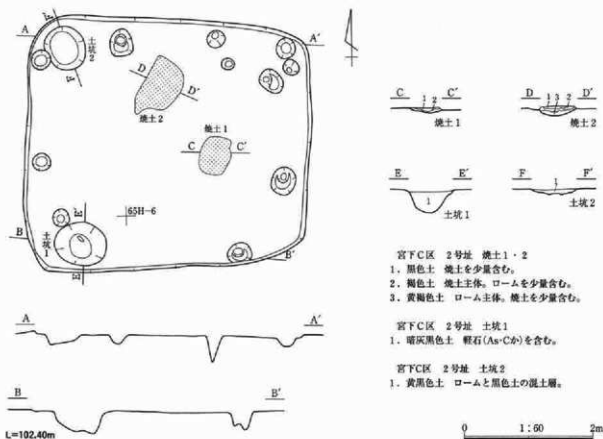
る。焼土2は床面中央北寄りにあり、規模は長径100cm短径58cmである。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

土坑 2基掘られていた。土坑1は南西隅に掘られ、規模は長径82cm短径69cmで床面からの深さは37cm程である。土坑2は北西隅に掘られ、規模は長径70cm短径63cmで床面からの深さは12.5cm程である。土坑2とともに上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 埋没土中からS字状台付甕(1・2)をはじめ破片資料が出土した。掲載した資料の他に高杯(3)の破片が出土した。(観P29・30)

所見 古墳時代前期の遺構と考えられる。



第158図 C区2号址



第159図 C区2号址出土遺物

A区 1号址 (第160~162図、PL44・116)

位置 44I-10・11

重複 7号住居、26号~28号溝と重複、いずれの遺構より後出である。

形状 隅丸長方形を呈する掘り込みと考えられるが、他遺構により削平を受け、全体形状については不明である。西側の残存部分5.40m、北壁の残存部分1.40mとこれに続く底面を検出した。遺構確認面から33cm程で底面にあった。住居の床面のような硬化面は検出されなかった。

面積 計測不能 方位 N-22°-W

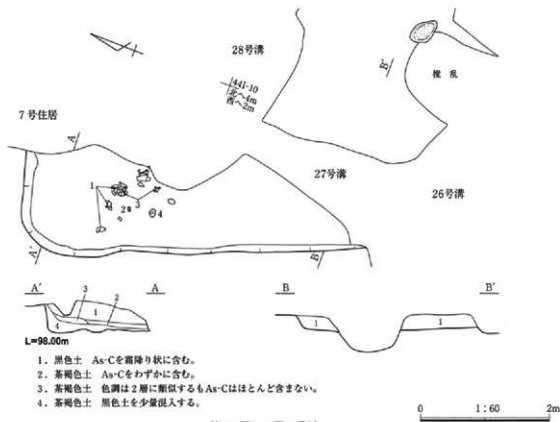
埋没土 上層にAs-Cを霜降り状に含む黒色土が、

下位に茶褐色土が堆積していた。

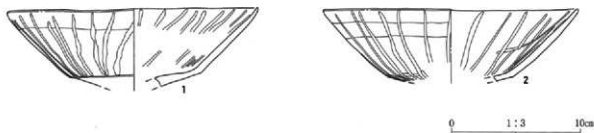
遺物 北西隅から南方向1m程の地点から土師器が集中して出土した。高杯4点(1~4)と壺(5)を資料化した。

この他に埋没土中から土師器破片12点、須恵器破片2点が出土している。(観P30)

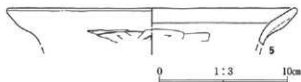
所見 住居の可能性が高いが、住居と認定する要件を満たしていないため、C区の調査例に則して遺構址として報告する。古墳時代中期の遺構と考えられる。



第160図 A区1号址



第161図 A区1号址出土遺物(1)



第162図 A区1号址出土遺物(2)

#### 4 土坑

##### C区 6号土坑 (第163図、PL44・116)

位置 55L-16

重複 重複する遺構はない。

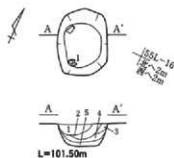
形状 平面形は長円形を基本としていたと考えられる。規模は長径1.11m短径0.79m、深さ0.36mを測る。

方位 N-26°-W

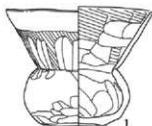
埋没土 暗褐色土を主体に黒褐色土・黄褐色土が5~10cm程の厚さで堆積している。

遺物 南西壁際から土師器埴(1)が出土した。他に土師器破片12点が北西壁際をはじめ埋没土中から出土している。(観P30)

所見 古墳時代前期の土坑と考えられる。



1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
3. 暗褐色土 1層に同じ。
4. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
5. 黄褐色土 ロームを主体とし黒色土粒を多く含む。



第163図 C区6号土坑・出土遺物

#### 5 倒木痕

##### C区 1号倒木痕 (第164図、PL44・116)

位置 54T-13・14

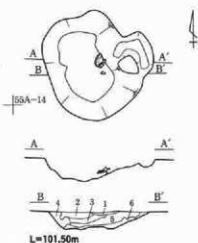
重複 重複する遺構はない。

形状 根鉢の規模は長軸1.73m短軸1.69m、深さ0.26mを測る。東縁中央部分は小さく突出している。

方位 N-4°-W

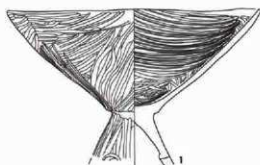
遺物 埋没土中、底面からやや離れた高さから高杯(1)が出土した。他に土師器破片2点も出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 As-Cの堆積・混入状況から古墳時代前期の倒木痕と考えられる。埋没土の状況から樹木は西側方向に転倒したと推定される。(観P30)



1. As-C ブロック状に堆積。純厚膜か。
2. 黒色土 As-Cを多く含む。
3. 黒褐色土 ロームを斑状に含む。As-Cを少し含む。
4. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
5. 暗褐色土 ローム、黒褐色土が塊に混じる部分含む。
6. 褐色土 やや汚れたローム粒である。

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第164図 C区1号倒木痕・出土遺物

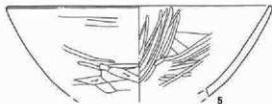
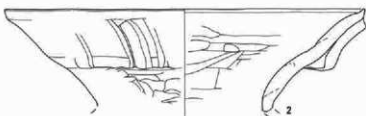
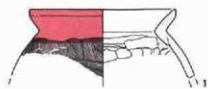
## 6 遺構外出土遺物 (第165図、PL116)

ここでは遺構外出土の資料の中で住居出土資料中には認められなかったものを中心に報告する。

1は壺である。口縁部が、くの字状に屈曲して立ち上がり、先端の外側がそがれていることが特徴的である。口縁部外面を中心に赤色塗彩が見られる。

2は壺の口縁部破片である。二重口縁の上半に棒状浮文が貼付されている。単位は不明である。3・4は鉢である。4は大型品である。5は高杯の口縁部破片である。深みを有し、碗状を呈する形状である。

(観P31)



0 1:3 10cm

第165図 古墳時代前・中期の遺構外出土遺物

## 第6節 古墳時代後期の遺構と遺物

### 1 概要

古墳時代後期の遺構としては、竪穴住居26軒、土坑1基、溝1条が検出された。

竪穴住居はA・B・Cの各区で検出された。構築時期は6世紀後半から7世紀前半が中心である。調査区内の分布からは、南北方向に延びる台地全域に広がっている。B区で重複関係が見られる他は全体に散在傾向にある。7世紀代になるとその傾向はより顕著になるようである。

A区23号溝は、埋没土の特徴から当該時期の所産と考えられるが流水の痕跡は認められなかった。

### 2 住居

#### A区 1号住居 (第166・167図、PL45)

**概要** 調査区東南部分に広がる沖積地を臨む台地縁辺に位置する。

**位置** 44G・H-6・7

**重複** 重複する遺構はない。

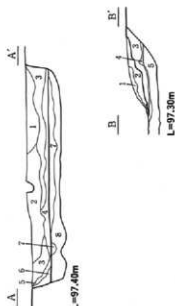
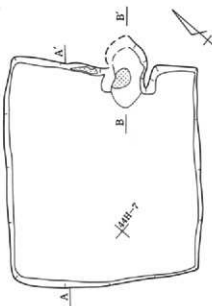
**形状** 長軸を南北に有する長方形を呈する。規模は長軸3.57m、短軸3.16mである。

**面積** 9.45㎡ **方位** N-48°-E

**埋没土** 軽石と地山の灰色土ブロックを含む黒褐色土が上・中層に堆積していた。下層には暗褐色土が堆積していた。

**床面** 遺構確認面から41cm程掘り込んで床面となる。床面は竈突口部前がやや浅いが、大きな起伏はなかった。床面下に深さ20cmほどの掘り方を有していた。中央および東壁寄りの3箇所でピットを検出した。

**竈** 北壁の中央からやや東寄りに造られていた。住居の壁面を一部掘り込み燃焼部とし、住居の掘り込み内に左右の袖部が延び、突口部を形成していた。左袖部は残存状態が悪悪であった。全長91cm、燃焼部幅50cm、突口部幅59cmである。燃焼部内には焼土が見された。



1. 黒褐色土 白色軽石を多く含む。地山の灰色土をブロック状に多く含む。
2. 黒褐色土 1層に類似するが、白色軽石を含む割合が少ない。
3. 黒褐色土 2層に類似するが白色軽石の含有率がより低い。
4. 暗褐色土 地山灰色土の小ブロックを多く含む。
5. 黒褐色土 焼土ブロックを多く含む。
6. 黒褐色土 白色軽石をごく少量含む。
7. 暗褐色土 白色軽石を少し含む。しまりあり。
8. 黒褐色土 白色軽石を少し含む。しまりあり。

#### 宮下A区 1号住居 竈

1. 暗灰黄色土 炭化物は少量である。
2. 黒褐色土 焼土を含む。炭が少量入る。
3. 黒褐色土 焼土ブロック、灰を含む。
4. 黒色土 炭が層状に入る。
5. 褐灰色土 上層部分はしまりあり。

0 1:60 2m

第166図 A区1号住居(1)

本住居において竈は掘り造り変えられており、旧竈は新竈の北側に設置されていたが、燃焼部の一部と焼土塊を散見したに止まった。

**周溝・柱穴** 掘られていなかった。

**貯蔵穴** 床面下精査時に南東隅でピットを検出した。これが貯蔵穴の可能性を有する。規模は長軸50cm短軸40cm、深さ18cmである。

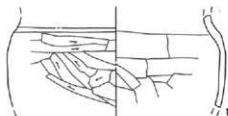
**床下** 床面下で20~25cmに基底面を有するが大きい



な起伏はない。床面中央に1本、東壁寄りに2本ピットが検出された。

**遺物** 床面からの出土はない。埋没土中から出土した甕(1)を資料化した。掲載した資料の他に土師器破片17点、弥生土器破片1点、縄文土器破片1点を出土した。(観P31)

**所見** 古墳時代後期の住居と考えられる。



第167図 A区1号住居(2)・出土遺物

#### B区 2号住居(第168・169図、PL45・117)

**位置** 45C・D-12

**重複** 1号溝、4号土坑と重複し、これに前出する。

**形状** 南西調査区域域に位置している。これに加え1号溝・4号土坑との重複により北東隅を中心とする一部分の検出に止まった。残存規模は東西長2.50m、南北長2.37mである。

**面積** 計測不能 **方位** N-27°-E

**埋没土** 黒褐色土が堆積していた。

**床面** 遺構確認面から11cm程掘り込んでいた。

床面に大きな起伏は認められなかった。

**竈** 北壁に造られていたが、壁面の検出が一部に止まったため、北壁全体における位置は不明である。

住居の壁面を掘り込んで燃焼部が設けられており、掘り方面における規模は長さ69cm、焚口部幅23cm、燃焼部幅32cmであった。

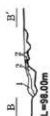
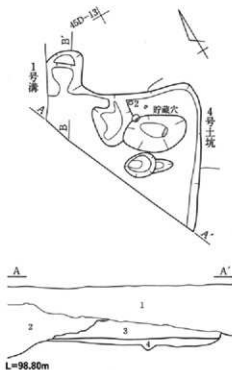
**周溝・柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 北東隅に掘られていた。規模は長径102cm短径59cm、深さ45cmを測り、上端の形状は東西に長軸を有する円形を呈する。

**床下** 10~15cm程で掘り方基底面にいたった。暗褐色土が堆積していた。

**遺物** 東隅の床面上、貯蔵穴の上端に接する位置から杯(1)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片20点が出土した。(観P31)

**所見** 古墳時代後期の住居と考えられる。

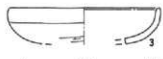


宮下B区 2号住居 竈

1. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を多く含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む、焼土粒を少量含む。

1. 表土
2. 1号溝埋没土
3. 黒褐色土 白色軽石、ローム小ブロックを多く含む。
4. 暗褐色土 ローム小ブロックを非常に多く含む。

第168図 B区2号住居



第169図 B区2号住居出土遺物

### B区 3号住居 (第170・171園、PL44・117)

位置 45B・C-13・14

重複 重複する遺構はなかった。

形状 南北を長軸とする長方形を呈する。南西隅はやや丸味を帯びるが他は精美な形状である。規模は長軸4.47m、短軸2.99mを測る。

面積 11.61㎡ 方位 N-53°-E

埋没土 中央部分に黒褐色土、壁際に暗褐色土が堆積していた。

床面 遺構確認面から24cm程掘り込んで床面となる。床面に大きな起伏は認められなかった。

竈 全長140cm、焚口部幅68cm、燃焼部幅23cmで北壁中央から西寄り位置する。住居内に燃焼部をおき、緩やかな段をなして煙道部へと移行している。

左右の袖部は黄褐色ローム粒を多く含む暗褐色土を構築材としていた。左袖部はその先端に壺(6)を倒

立させて、右袖部の先端には角閃石安山岩の加工石材を据え、補強していた。焚口部中央からは台付壺(9)の台部のみが倒立状態で出土している。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 北東隅に掘られていた。長径65cm短径56cm、深さ44.5cmを測り、上端は円形を呈していた。

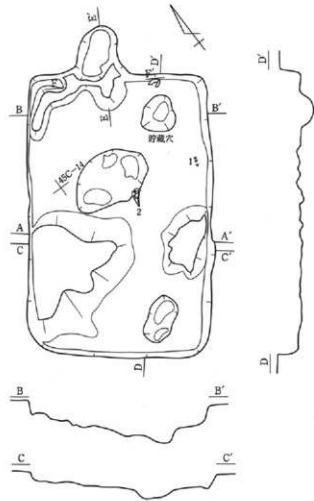
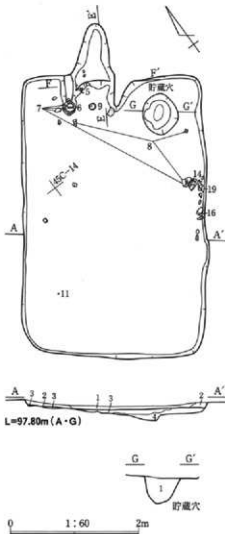
床下 南西隅を除いて全体的に5~16cm程下位に掘り方基礎面を有していた。

遺物 竈燃焼部内や東壁際から破片が出土した。須恵器高杯(8)は左袖部前、床面南部分、掘り方南東部分から出土した破片が接合した。支脚(10)は埋没土から出土した破片である。また、南西床面上から石製丸玉(11)1点が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片76点が出土した。(観P31~33)

所見 古墳時代後期の住居と考えられる。





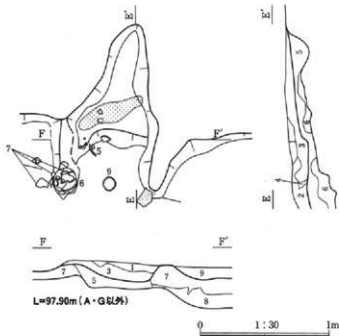
1. 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
3. 黒褐色土 ローム粒、白色軽石を多く含む。
4. 黄褐色土 黄褐色ローム主体、暗褐色土ブロックを少量含む。

宮下B区 3号住居 貯蔵穴

1. 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを多く含む。

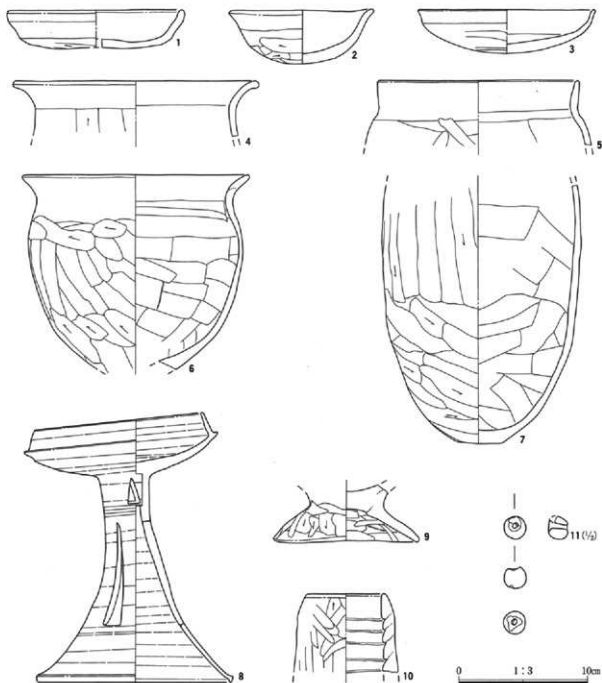
宮下B区 3号住居 竈

1. 黄褐色土 黄褐色粘土を主体とし、焼土粒を多く含む。
2. 暗褐色土 粘土小ブロックと焼土粒を少量含む。
3. 黒褐色土 粘土ブロックと焼土粒を多く含む。
4. 灰褐色粘土層 竈の一部と考えられる粘土である。
5. 黒褐色土 粘土ブロックを少量含む。
6. 黄褐色土 黄褐色粘土を主体、暗褐色土を含む。
7. 暗褐色土 竈縁部、黄褐色ローム粒を多く含む。
8. 黄褐色土 黄褐色粘土主体、黒色土を少量含む。
9. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。



第170図 B区3号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第171図 B区3号住居出土遺物

B区 4号住居

(第172~175図、PL46・117・118)

位置 45C・D-14・15

重複 5号・6号・7号住居、1号溝と重複し、6号・7号住居、1号溝よりは前出である。5号住居より後出と考えられるが、直接切り合い関係は確認できなかった。

形状 他遺構との重複関係から全体形状を把握す

ることはできなかった。東西の残存長は5.76m、南北長は3.52mを測った。

面積 計測不能 方位 N-53°-E

埋没土 暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。

床面 遺物確認面から40cm程掘り込まれて床面となる。壁際がやや高くなっていたが、全体的にはほぼ平坦で大きな起伏はなかった。東部分の床面上からは炭化物片を出土している。

**竈** 1号溝東側の突出部分にその可能性があるが判然としなかった。

**周溝・柱穴** 確認できなかった。

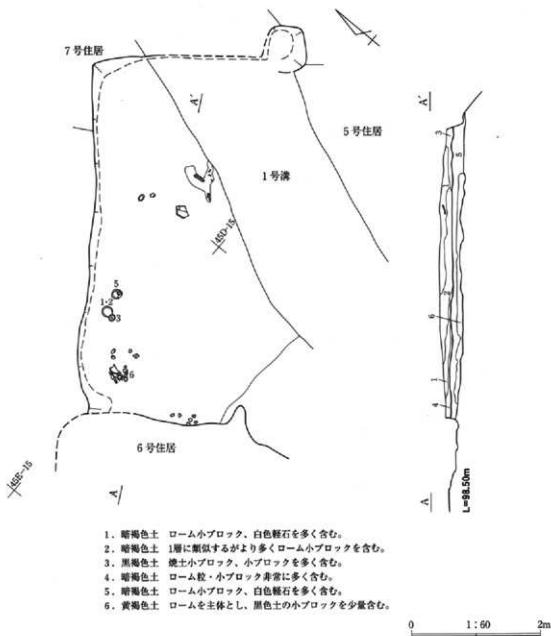
**貯蔵穴** 確認できなかった。

**床下** 全体的に床面下10~20cm下位で掘り方基底面にいたった。

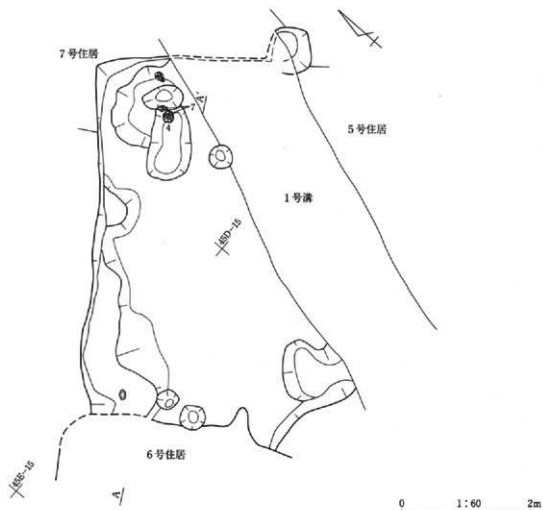
**遺物** 北西隅を中心に出土している。北西部の北壁寄り床面上からは甕(6)、須恵器蓋(3)、これに

近接、床面からわずかに離れて杯(1・2)が入り子状態で出土、さらにその東側から甕(5)の上半部が口縁部を下にして出土している。6号住居との重複部分近くからは礫が6点まとまって出土している。掲載した資料の他に土師器破片20点が出土した。(観P33・34)

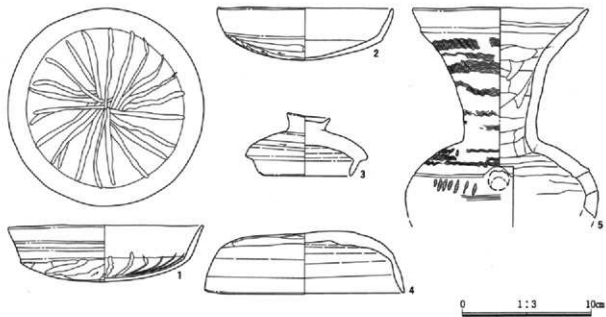
**所見** 古墳時代後期の住居であると考えられる。



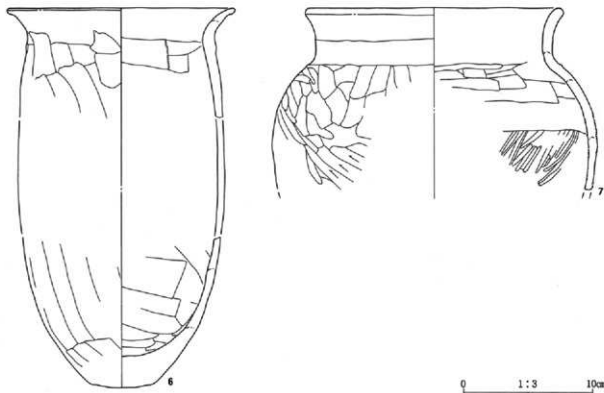
第172図 B区4号住居(1)



第173図 B区4号住居(2)



第174図 B区4号住居出土遺物(1)



第175図 B区4号住居出土遺物(2)

**B区 5号住居 (第176・177図、PL46・118)**

**位置** 45B・C-14、45C-15

**重複** 4号住居、1号溝と重複、両遺構より先出と考えられる。

**形状** 北側を1号溝で削平されており、全体形状を把握できなかったが、南北に長軸を有する長方形を呈していたと考えられる。規模は南北の残存長が4.18m、東西長4.00mである。

**面積** 計測不能 **方位** N-30°-W

**床面** 東壁北半部分で遺構確認面から8~14cm程掘り込んで床面となっていたが、他はほとんど削平を受けていた。

**竈** 南壁中央からやや西寄りに位置する。削平を受け詳細は不明であるが住居内に熱焼部を有し、奥壁の立ち上がり住居壁面の一部を掘り込む状況にあった。残存長は38cm、幅は66cmである。

**周溝・柱穴・貯蔵穴** 確認されなかった。

**床下** 精査の結果、床面下20~32cmで掘り方基底面に達する。上層に黒褐色土、中・下層に黄褐色土が堆積していた。基底面は、南壁に沿って1段、さ

らに南・東壁から約60~150cm内側で、L字状に1段深く掘り込まれていた。柱穴は確認できなかった。ピットは中央からの北側寄りで7本検出された。規模は大小の差が大きく、最大のものが長径67cm短径65cm、深さ38cm、最小のものが長径20cm短径18cm、深さ26cmである。

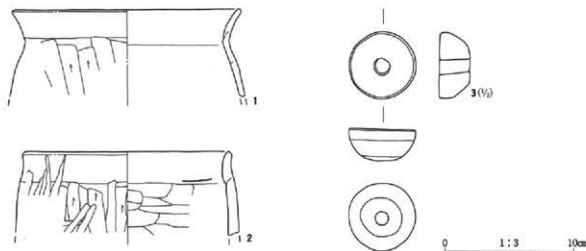
**遺物** 東壁中央壁際の床面上からは石製紡錘車(3)が出土している。他に床面直上から良好な資料の出土はなかった。甕の破片(1・2)は東壁際1号溝端の出土で、4号住居に帰属する可能性も考えられる。

竈右前の位置からは長径28cmの扁平な礫が深さ7cmの浅いピット内に据えられたような状態で出土した。台石として使用されたか。

掲載した資料の他に土器器破片20点が出土した。(観P34)

**所見** 古墳時代後期の住居と考えられる。





第177図 B区5号住居出土遺物

## B区 10号住居

(第178~184図、PL46・118・119)

位置 45A-16、45B・C-15~17

重複 1号・2号溝、7号・11号・12号住居と重複する。いずれの遺構よりも前出と考えられる。

形状 南北に長軸を有するがほぼ正方形に近い形状である。中央部分の床面を欠くが四隅、各辺とも精美な形状である。規模は長軸8.02m、短軸7.89m。

面積 (55.45) m<sup>2</sup> 方位 N-48°-W

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が10~20cmの厚さでレンズ状に堆積していた。

床面 遺構確認面から70cm掘り込んでいた。竈前の北側から南壁に向かって緩やかに下がっていた。北壁際と南壁際の比高差は約30cmであった。

竈 北壁のはほぼ中央に造られていた。規模は全長193cm、焚口部幅47cm、燃焼部幅42cm、煙道部長89cmである。

燃焼部は住居内に位置し、粘性を有するロームを主体とした黄褐色土を用材に天井部や袖部を造り付けていた。左右の袖部の先端には角閃石安山岩の加工材を直立させ補強材としていた。調査時、焚口部手前の床面上から深さ60cmの角閃石安山岩の加工材が出土していたが、これは焚口部の天井に鳥居状にわたされていた可能性が考えられる。

燃焼部中央には壺(10)の上に台付壺の脚台部(13)が重なって出土した。土器を再利用した支脚と考え

られる。煙道部は燃焼部底面との間に段差を有することなく住居の壁を掘り込んで壁外に延びていた。立ち上がり部分から壺(19)が出土している。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 3本掘られていた。北東部分は未検出であったが、1号溝により削平されたものと考えられる。柱穴1は長径114cm短径86cm、深さ83cm。柱穴2は長径98cm短径90cm、深さ89cm。柱穴3は長径98cm短径71cm、深さ84cmである。いずれの柱穴も埋没土中から土師器の大型破片が出土している。柱穴2からは壺(21・14)が、柱穴3からは壺(17)が出土した。

貯蔵穴 確認できなかった。

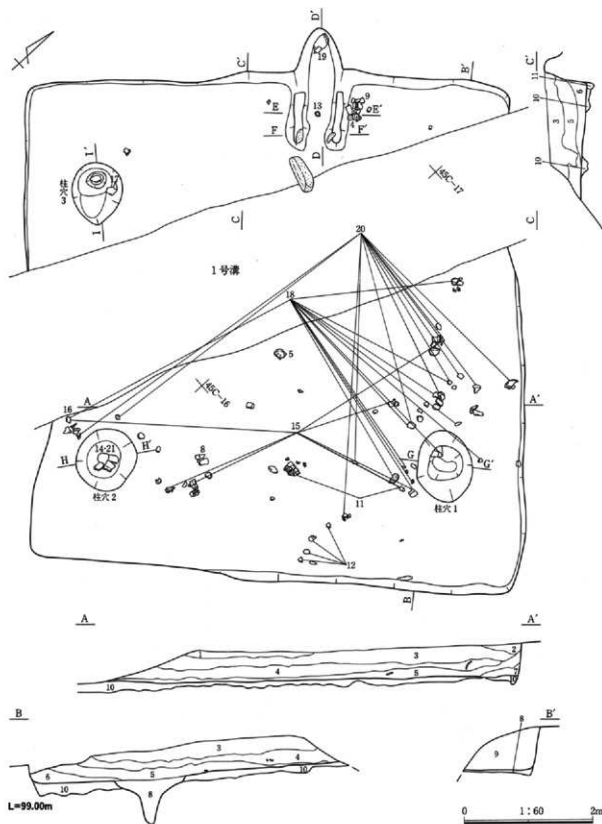
床下 床面下5~10cmで掘り方基底面にいたる。中央やや南側に床下土坑1を検出した。長径140cm短径130cm、深さ60cmで埋没土中に土器片を多数含んでいた。ビット1は深さ60cm。位置的には貯蔵穴の位置であるが直径がやや小さいか。ビット2は深さ44cm、ビット3は深さ50cmである。

遺物 右袖外側から台付壺(9)と二次利用された須恵器高杯の杯部(4)が出土している。南側床面上では広範囲にわたり土器が出土したが、壺(15・19・20)は床面各所から出土した破片が接合したものである。また、中央部出土の二次利用した須恵器高杯(5)、南部分出土の台付壺(11)も床面直上の出土である。

掲載した資料の他に土師器破片201点、須恵器破片8点、弥生土器破片8点が出土した。(観P34~

36)

所見 古墳時代後期の住居であると考えられる。



第178図 B区10号住居(1)





- 柱穴1  
L=98.40m (G・H)
1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
  2. 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
  3. 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
  4. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。ローム粒を少量含む。
  5. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
  6. 黒褐色土 白色軽石、ローム小ブロックを多く含む。
  7. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
  8. 暗褐色土 柱穴1の埋没土
  9. 暗褐色土 4層に類似する。
  10. 黄褐色土 ロームを主体とし黒色土小ブロックを少量含む。
  11. 暗褐色土 ローム粒を非常に多く含む。

宮下B区 10号住居 柱穴1

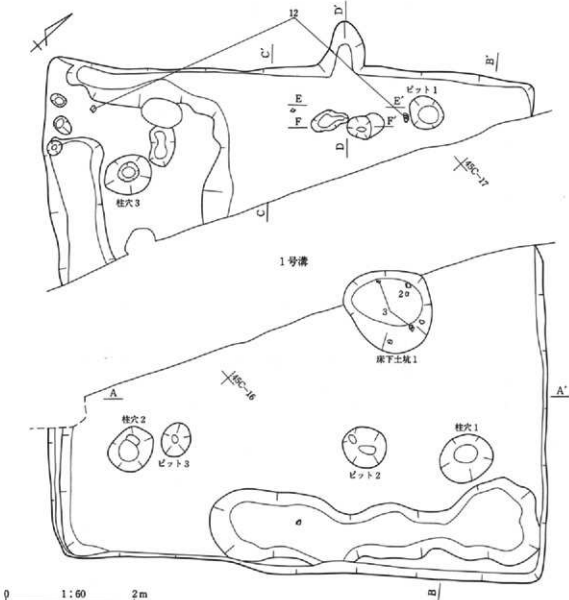
1. 暗褐色土 白色軽石、ローム小ブロックを多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを非常に多く含む。
3. 黄褐色土 ロームを主体とし黒色土小ブロックを多く含む。

宮下B区 10号住居 柱穴2

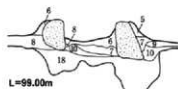
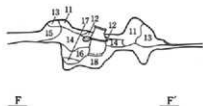
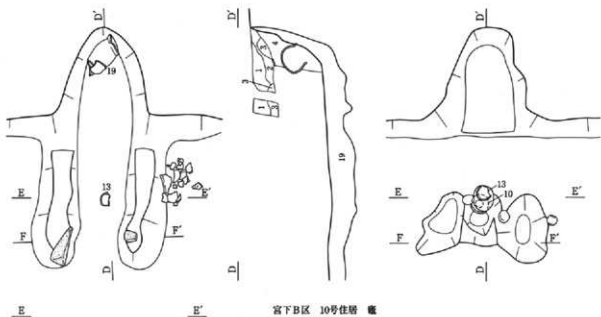
1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを非常に多く含む。

宮下B区 10号住居 柱穴3

1. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
2. 暗褐色土 1層に類似するがロームを含む割合が少ない。



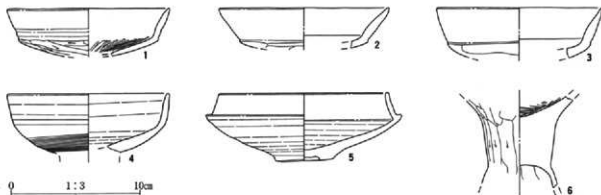
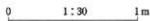
第179図 B区10号住居(2)



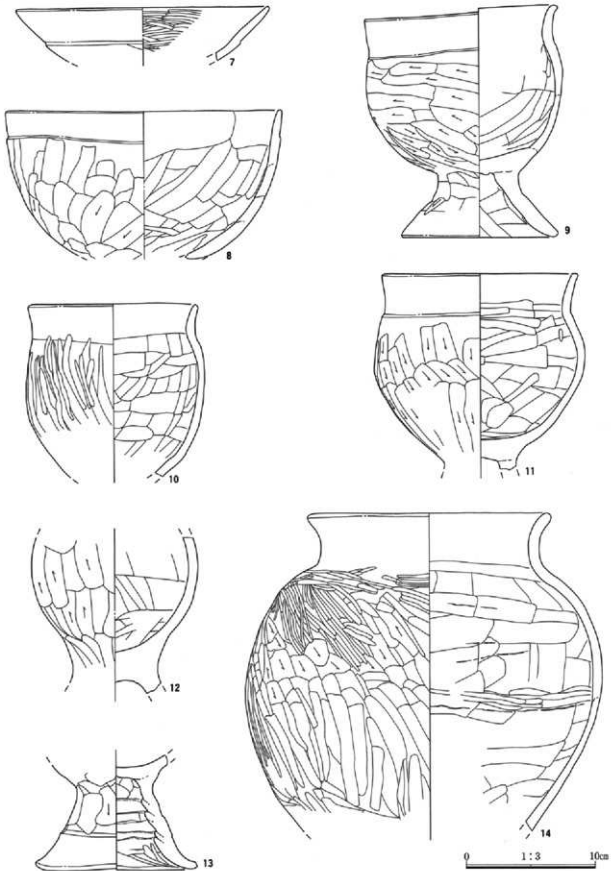
宮下B区 10号住居 概

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 焼土粒、ローム小ブロックを多く含む。
3. 赤褐色土 焼土粒・小ブロックを非常に多く含む。
4. 黒褐色土 焼土小ブロックを多く含む。
5. 黄褐色土 ロームを主体とし焼土粒を多く含む。
6. 黄褐色土 焼土粒・小ブロックを非常に多く含む。
7. 暗褐色土 焼土小ブロック、ローム小ブロックを少量含む。
8. 黄褐色土 ロームを主体とし黒色土粒を少量含む。
9. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
10. 黄褐色土 ロームを主体とし焼土小ブロックを少量含む。
11. 赤褐色土 焼土小ブロックを非常に多く含む。
12. 灰色土 灰色土を主体とする。
13. 黄褐色土 粘性のあるロームを主体とする。
14. 暗褐色土 焼土小ブロックを多く含む。
15. 暗褐色土 焼土小ブロック、ローム小ブロックを少量含む。
16. 黄褐色土 ロームを主体とし焼土小ブロックを少量含む。
17. 暗褐色土 焼土小ブロックを少量含む。
18. 黄褐色土 ロームを主体とし焼土小ブロック、黒色土小ブロックを少量含む。
19. 黒褐色土 ロームブロック、焼土小ブロックを少量含む。

第180図 B区10号住居(3)

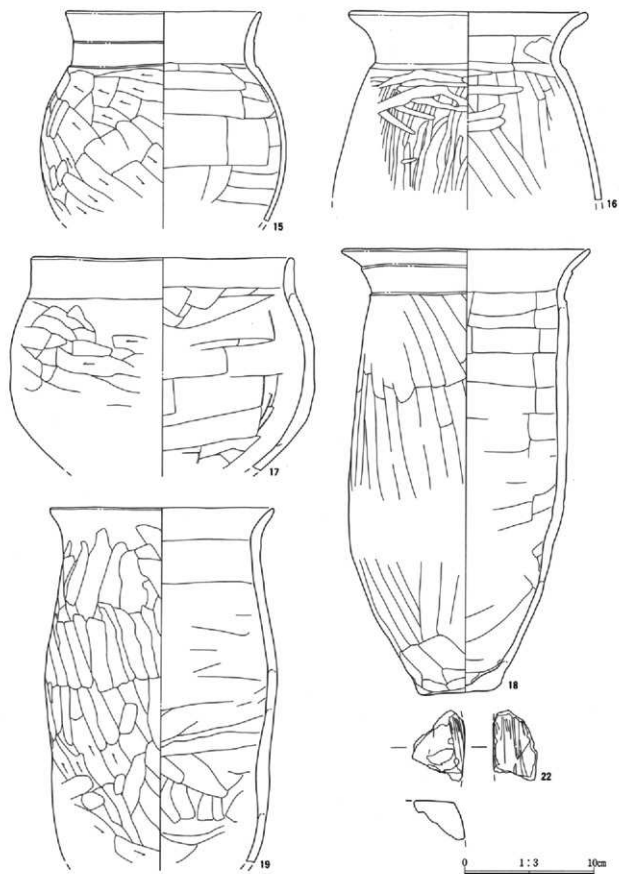


第181図 B区10号住居出土遺物(1)

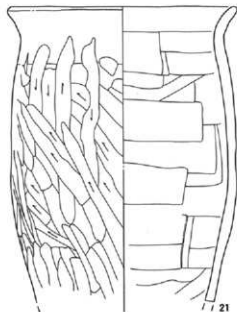
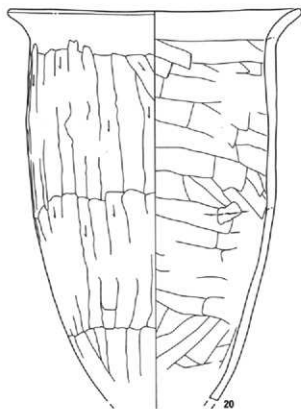


第182図 B区10号住居出土遺物(2)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第183図 B区10号住居出土遺物(3)



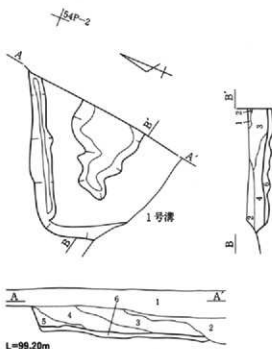
0 1:3 10cm

第184図 B区10号住居出土遺物(4)

**B区 13号住居 (第185・186図、PL47)**

位置 54P-1・2

重複 1号溝と重複し、これに先出する。



形状 大半が調査区域外に及び北西隅の一部を検出するに止まった。検出した規模は東西長2.68m、南北長1.00mであった。

面積 計測不能 方位 N-23°-W

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が堆積していたがいずれもAs-Cの混入が認められた。

1. 表土
2. 1号溝埋没土
3. 黒褐色土 As-Cを多く含む、炭化物を少量含む。
4. 暗褐色土 As-Cをやや多く含む。
5. 暗褐色土 しまり割い、ロームブロックを多く含む、As-Cを少量含む。
6. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。明確な貼り床は認められないが、上面は硬くしまっており床と考えられる。

0 1:60 2m

第185図 B区13号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

**床 面** 遺構確認面から25~35cm程掘り込んで床面となる。明確な貼り床は認められなかったが、床面は硬くしまっていた。

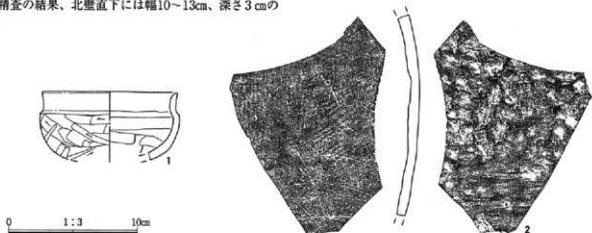
**竈・周溝・柱穴・貯蔵穴** 確認できなかった。

**床 下** 床面下6~12cm程で掘り方基底面に達する。精査の結果、北壁直下には幅10~13cm、深さ3cmの

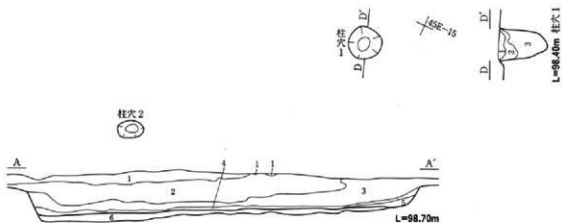
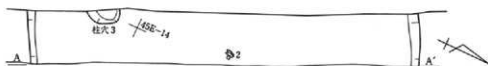
周溝状の落ち込みを検出した。

**遺 物** いずれも埋没土中からの出土である。掲載した資料の他に土師器破片9点、軟質陶器破片1点が出土した。(観P36)

**所 見** 古墳時代後期の住居であると考えられる。



第186図 B区13号住居出土遺物



1. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
2. 黒褐色土 黄褐色ローム土をブロック状に含む。白色軽石を少量含む。
3. 黒褐色土 2層より黒色味が強い。黄褐色ローム粒を含む。
4. 黒色土 黄褐色ロームを少量含む。しまりあり。
5. 黒色土 4層よりもロームの混入量が多い。
6. 黄褐色ローム土 黒色土をブロック状に含む。

宮下B区 16号住居 柱穴1

1. 暗褐色土 黄褐色ロームブロック、白色軽石を少量含む。
2. 黄褐色土 暗褐色土ブロック、白色軽石、黄色ローム粒を少量含む。
3. 黄褐色土 2層より黄色味が強い。白色軽石、黄色ローム粒、暗褐色土ブロックを微量含む。

0 1:60 2m

第187図 B区16号住居(1)

## B区 16号住居 (第187~189図、PL47)

位置 45D・E-13・14

重複 6号住居と重複するが、前後関係は判然としなかった。

形状 西側調査区域際で検出したが混乱を受け東西方向に幅80cm程の範囲で壁面・床面を検出したに止まった。南北方向の規模は6.18mである。

面積 計測不能 方位 計測不可

埋没土 暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。

床面 遺構確認面から北壁で41cm、南壁で44cm掘り込んで床面になる。北壁から南側に向かって徐々に下がっている。比高差は30cmである。

竈 確認されなかった。

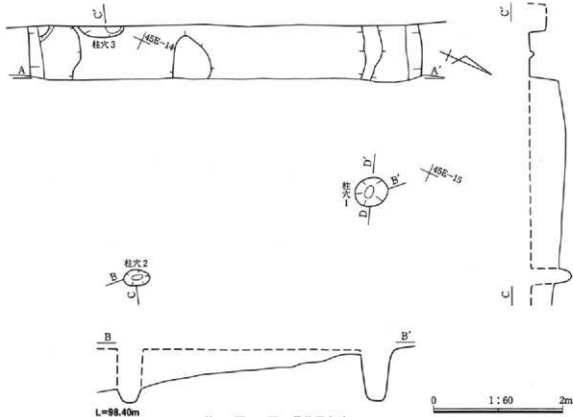
周溝・貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 調査時の所見から3本を確認した。柱穴1は長径54cm短径51cm、深さ81cm。柱穴2は削平著しく、長径43cm短径27cm、深さ27.5cmであった。柱穴3は東側半分程の検出で、直径53cm、深さ30.5cmである。

床下 床面下5~10cmで掘り方基底面にいたる。基底面は小さな起伏を有していたが、全体的には北側から南側に徐々に低くなっていた。

遺物 床面直上からの出土遺物はなかった。掲載した資料の他に土師器破片25点、須恵器破片1点、弥生土器破片1点が出土した。(観P36)

所見 古墳時代後期の住居であると考えられる。



C区 3号住居 (第190・191図、PL47・120)

位置 65H-3、65I-3・4

重複 なし。

形状 東西を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸3.39m、短軸2.46mである。

面積 6.01㎡ 方位 N-23°-W

床面 遺構確認面から46cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 As-Cとローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。掘り方上位にAs-Cが微量に混入していた。

竈 北壁中央に造られていた。煙道部は地山を掘

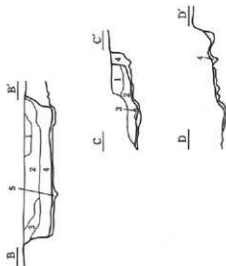
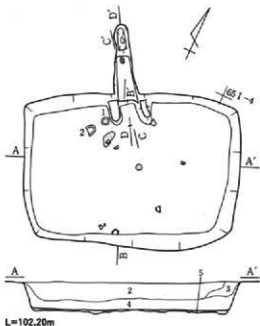
り込んで壁外に延びていた。右袖は壁面から48cm、左袖は壁面から47cmが残存していた。全長163cm、燃焼部幅24cm、焚口幅51.5cmである。

周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

床下 床下精査時に南西隅から長径48cm、深さ29cmのピットを検出した。

遺物 住居の北寄り、竈左袖部外側近くの床面から土師器杯(1・2)が出土した。これら掲載資料の他に土師器破片83点、弥生土器破片10点、縄文土器破片11点が出土した。(観P36)

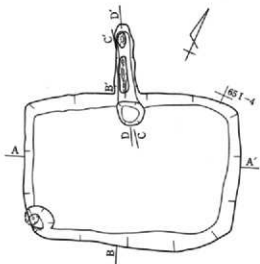
所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



1. 淡褐色土 As-Cを上位に、ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 As-Cを含む。部分的にロームを混入。
3. 暗褐色土 ローム主体。
4. 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
5. 褐色土 ローム主体。上位にAs-Cを微量混入。

宮下C区 3号住居 竈

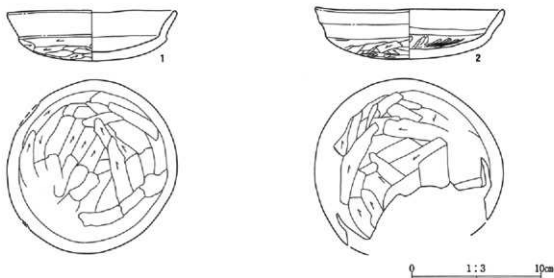
1. 暗褐色土 ロームを含む。
2. 褐色～黄褐色土 ロームを多く含む。
3. 黄土を多く含む土
4. 黄褐色土 2層よりロームが多い。



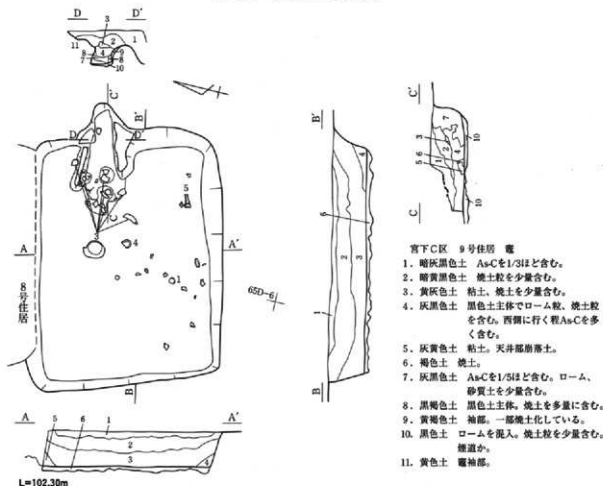
第190図 C区3号住居

0 1:60 2m





第191図 C区3号住居出土遺物



宮下C区 9号住居 概

1. 暗灰黒色土 As-Cを1/3ほど含む。
2. 暗黄黒色土 焼土粒を少量含む。
3. 黄灰色土 粘土、焼土を少量含む。
4. 灰黒色土 黒色土主体でローム粒、焼土粒を含む。西側に行く程As-Cを多く含む。
5. 灰黄色土 粘土、天井部崩落土。
6. 褐色土 焼土。
7. 灰黒色土 As-Cを1/5ほど含む。ローム、砂質土を少量含む。
8. 黒褐色土 黒色土主体。焼土を多量に含む。
9. 黄褐色土 袖部。一部焼土化している。
10. 黒色土 ロームを混入。焼土粒を少量含む。縁道か。
11. 黄色土 襦袖部。

L=102.30m

1. 茶黒色土 As-Cをあまり含まない。
2. 黒色土 As-Cの混入。
3. 暗黄黒色土 As-Cを少量含む。
4. 黄黒色土 ローム粒を少量含む。壁面崩落土。
5. 灰黒色土 As-Cを含まない。
6. 黄黒色土 黒色土主体でロームが混入。壁付近に焼土を少量含む。As-Cは含まない。

第192図 C区9号住居(1)

**C区 9号住居 (第192~195図、PL48・120)**

**位置** 65C・D-9

**重複** 北側で8号住居の南壁部分と重複し、住居主要部分で17号住居と重複する。本遺構が8号住居により掘り込まれ、17号住居を掘り込んでいた。3軒の新旧関係は17号住居→9号住居→8号住居である。

**形状** 東西を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸4.04m、短軸2.97mである。

**面積** 9.38㎡ **方位** N-78°-E

**床面** 遺構確認面から60cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** As-Cを少量含む暗黄黒色土で埋まっていた。

**竈** 東壁中央やや北寄りに造られていた。燃焼部から煙道部への移行部分は壁外の地山を掘り込んで立ち上がっていた。袖部は地山ロームを利用していった。右袖部は壁面から76cm、左袖部は壁面から80cmが残存していた。規模は全長137.5cm、燃焼部幅40cm、焚口幅72cmである。

**周溝** 掘られていなかった。

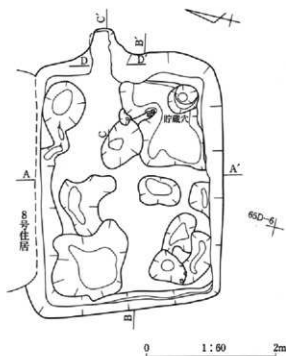
**柱穴** 確認できなかった。

**貯蔵穴** 南東部分に掘られていたものを床下精査時に検出した。規模は長径46cm短径42cmで床面からの深さは51cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

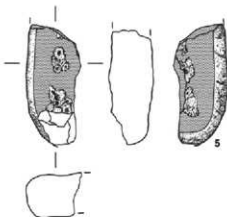
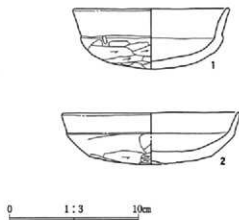
**床下** 床面から5~10cm程で掘り方基底面に達する。不整形な土坑状の掘り込みが連続していた。

**遺物** 甕(3)は、竈燃焼部内から焚口部手前の床面上に広い範囲に破片となって散在していた。その他杯(1・2)などが出土しているが、いずれも埋没土中からの出土である。同様に埋没土や掘り方埋土中から古墳時代前期の土師器が多数出土している。掲載した資料の他に土師器破片605点、弥生土器破片19点が出土している。(観P37)

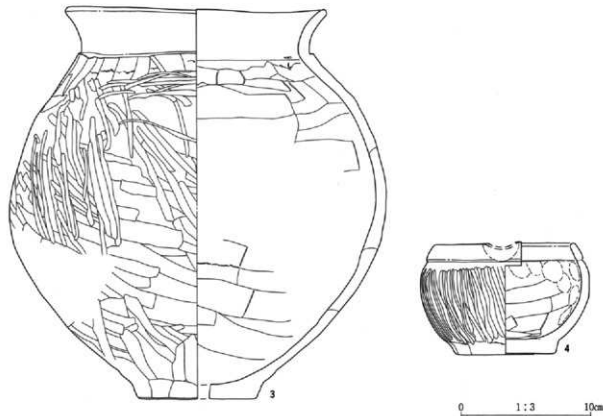
**所見** 古墳時代後期の住居と考えられる。



第193図 C区9号住居(2)



第194図 C区9号住居出土遺物(1)



第195図 C区9号住居出土遺物(2)

**C区 13号住居(第196~199図、PL48・120)**

位置 65F・G-5

重複 なし。

形状 東西を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.50m、短軸2.64mである。

面積 9.58㎡ 方位 N-80°-E

床面 遺構確認面から43cm程掘り込んで床面となる。南東部分がやや低い。

埋没土 上・中層はAs-Cを含む暗灰黒色土で、床面直上層はロームブロックを含む黄黒色土で埋まっていた。

竈 東壁の北寄りに造られていた。右袖部は壁面から73cm、左袖部は壁面から64cm残存していた。燃焼部を住居内におき、ここから横幅をあまり狭めることなく、また、底面に段差もつけず、地山を掘削、壁外に向かって長い煙道部が設けられている。断面の観察所見から、袖部は地山を一部掘り残して芯としたものに黒褐色土を貼っていることが認められる。全長177cm、燃焼部幅36cm、焚口幅60cmである。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東部分に掘られていた。規模は長径63cm、短径54cmで床面からの深さは58cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 床面上からの出土は少量である。竈焚口部前では右袖部先端で甕(6)が口縁部を南方向に向け、横倒した状態で検出され、その下位に杯(1)が重なっていた。甕(6)の北、焚口部からは甕(5・7)が出土している。竈最奥部からは土製支脚(3)の破片が出土しているが原位置とは考えられない。埋没土中出土土器の中では須恵器高杯(4)の脚部破片が目される。

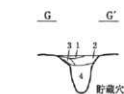
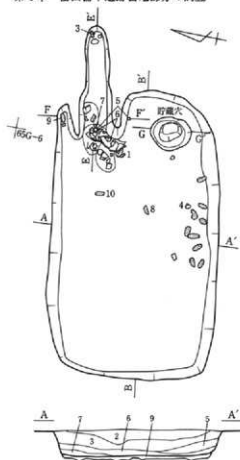
また、埋没土中からこもあみ石状の礫が多数出土したが、床面から離れての出土である。

掲載した資料の他に土師器破片125点、弥生土器破片4点、縄文土器破片1点が出土している。

(観P37・38)

所見 古墳時代後期の住居と考えられる。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

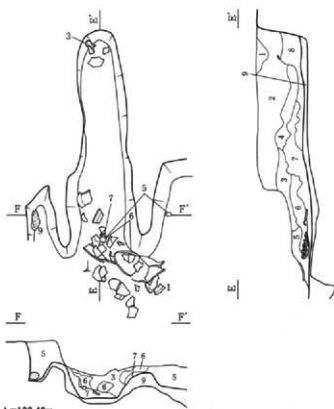


宮下C区 13号住居 貯蔵穴

1. 暗褐色土 焼土粒、炭化物をわずかに含む。
2. 褐色土 ローム粒、焼土粒、As-Cをわずかに含む。
3. 褐色土 ローム粒、焼土粒を含む。
4. 褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。

1. ロームブロック
2. 暗灰黒色土 As-Cを含む。
3. 暗黄黒色土 As-Cを少量含む。全体的にロームを混入。
4. 明黄黒色土 As-Cを少量含む。
5. 灰黒色土 As-Cをわずかに含む。
6. 黄黒色土 ロームブロックを含む。AsCを含まない。
7. 灰黒色土 ロームを少量含む。
8. 灰黒色土 壁面にロームブロックを、下位に焼土粒を含む。
9. 黄黒色土 ロームと黒色土の混土。掘り方埋没土。

0 1:60 2m



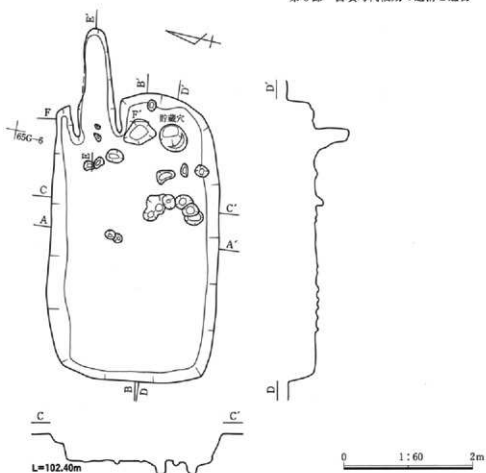
宮下C区 13号住居 竈

1. 灰黒色土 粘土粒を少量含む。
2. 暗灰黒色土 As-Cを少量含む。下位にロームを混入。
3. 暗灰黄色土 焼土、As-Cを少量含む。
4. 灰黄色土 焼土粒を少量含む。
5. 暗灰黒色土 ロームを少量含む。住居埋没土。
6. 灰青色土 粘土。焼土を少量含む。天井部崩落土。
7. 黄褐色土 全体に焼土を含む。天井部崩落土。
8. 灰黒色土 焼土。灰を含む。煙道部底部。
9. 黒褐色土 煙道部は焼土粒を含む。ロームの混土。

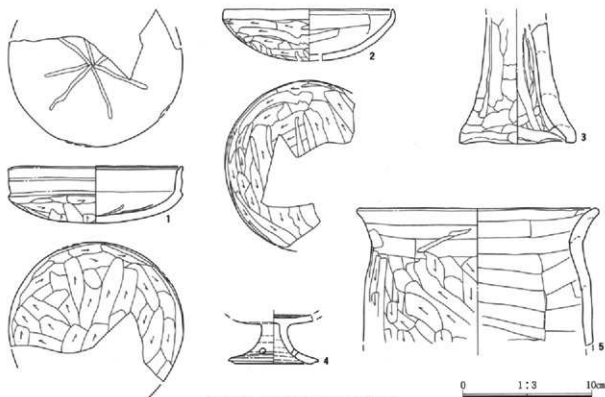
0 1:30 1m

L=102.40m

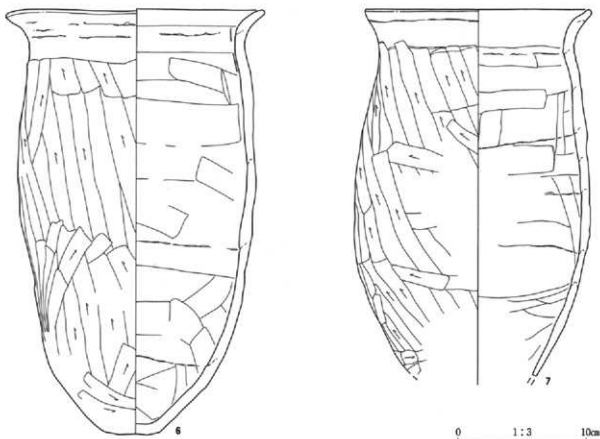
第196図 C区13号住居(1)



第197図 C区13号住居(2)



第198図 C区13号住居出土遺物(1)



第199図 C区13号住居出土遺物(2)

### C区 14号住居

(第200~205図、PL49・121・122)

**位置** 54T-19・20

**重複** 1号溝と重複し、1号溝により本遺構の西・南壁面の一部が壊されていた。

**形状** 東西を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.16m、短軸2.74mである。

**面積** 6.08㎡ **方位** N-75°-E

**床面** 遺構確認面から42cm程掘り込んで床面となる。床面に凹凸が幾らかあった。

**埋没土** As-Cを少量含む灰黒色土で埋まっていた。

**竈** 東壁中央に造られていた。右袖部は壁面から58cm、左袖部は壁面から60cm残存していた。袖部は褐色土を構築材としたものであるが、検出時は既に崩壊が進行していた。

煙道部は地山を掘り込み壁外に長く突出していた。底面は約10cmの段差を有して燃焼部から煙道部へと移行している。

全長165cm、燃焼部幅32cm、焚口幅69cmである。

**柱穴** 調査時の所見から1本掘られていた。柱穴1は長径34cm短径26cm、深さ44cmである。

**周溝・貯蔵穴** 掘られていなかった。

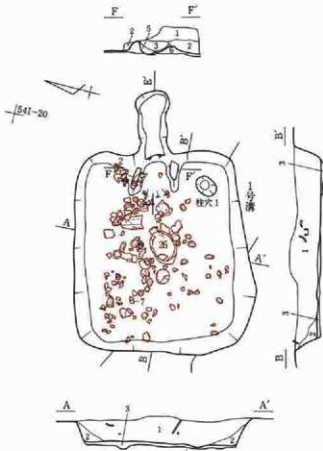
**床下** 床下精査によりピット状の落ち込みを検出したが性格は不明である。

**遺物** 埋没土中から土師器杯(9~11)、小型甕(16)、壺(26)、甕(17・19)をはじめ、完形あるいはほぼ完形の土器が多数出土したが、床面直上から出土したものは皆無であった。

磨石(27・28)、敲石(29)も埋没中からの出土である。混入品の可能性が考えられるが、本住居出土資料として掲載した。

掲載した資料の他に土師器破片510点、軟質陶器破片1点、陶磁器破片1点、弥生土器破片5点が出土した。(観P38~40)

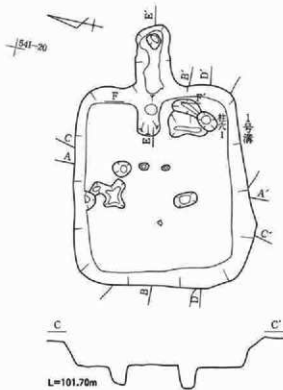
**所見** 古墳時代後期の住居と考えられる。



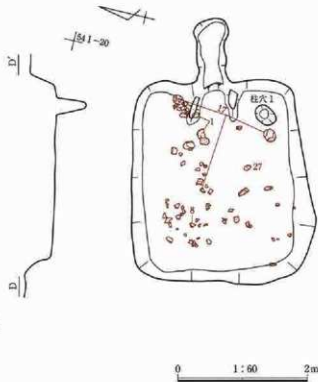
1. 灰黒色土 As-Cを少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ロームを多く含む。

宮下C区 14号住居 竈

1. 黒褐色土 As-Cを均質に含む。
2. 暗褐色土 As-C、焼土粒、ローム小ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 焼土を多量に含む。
4. 暗褐色土 散点の焼土ブロックと少量のローム粒を含む。
5. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を少量含む。
6. 褐色土 焼土と粘土の混土。黒色土を少量含む。竈幹部。
7. 黒褐色土 炭、ローム粒を少量含む。
8. 灰褐色土 焼土粒、ローム粒を少量含む。

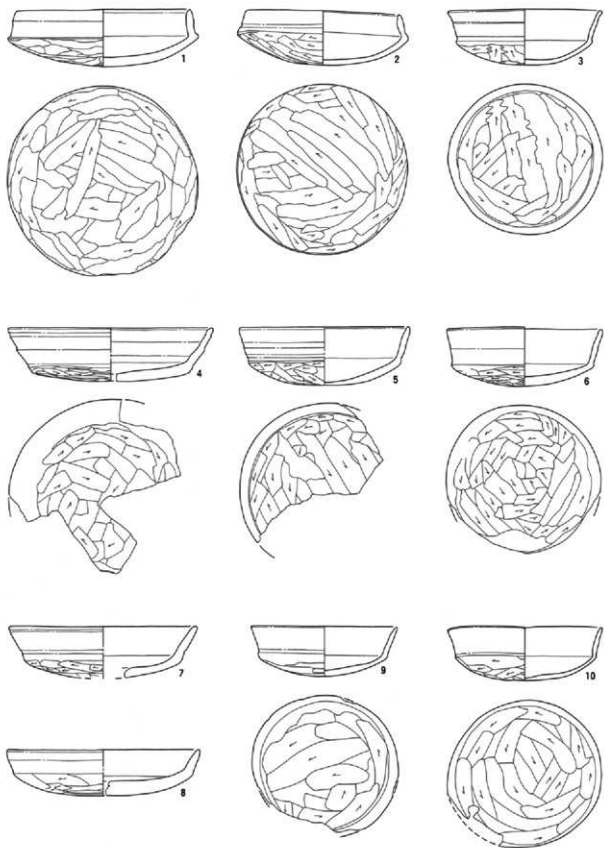


L=101.70m



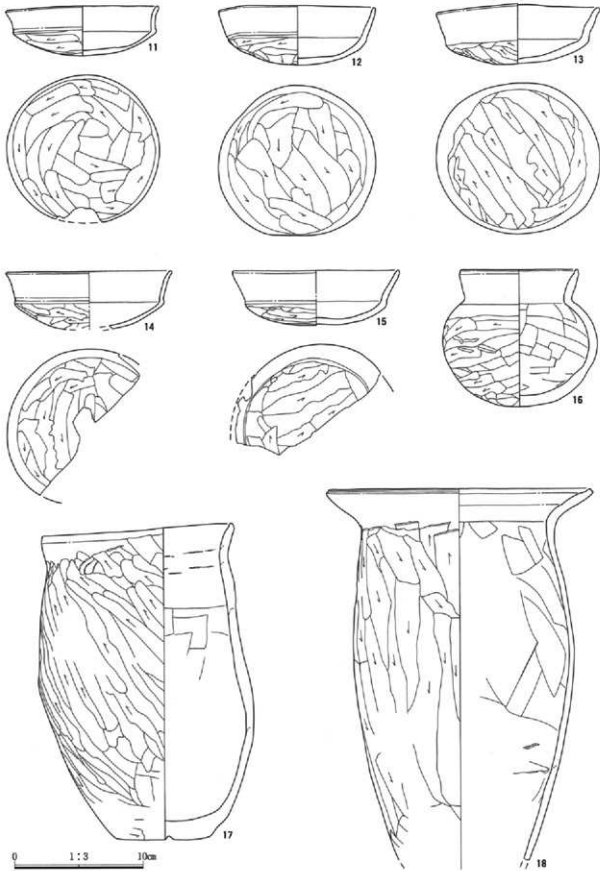
0 1:60 2m

第200図 C区14号住居

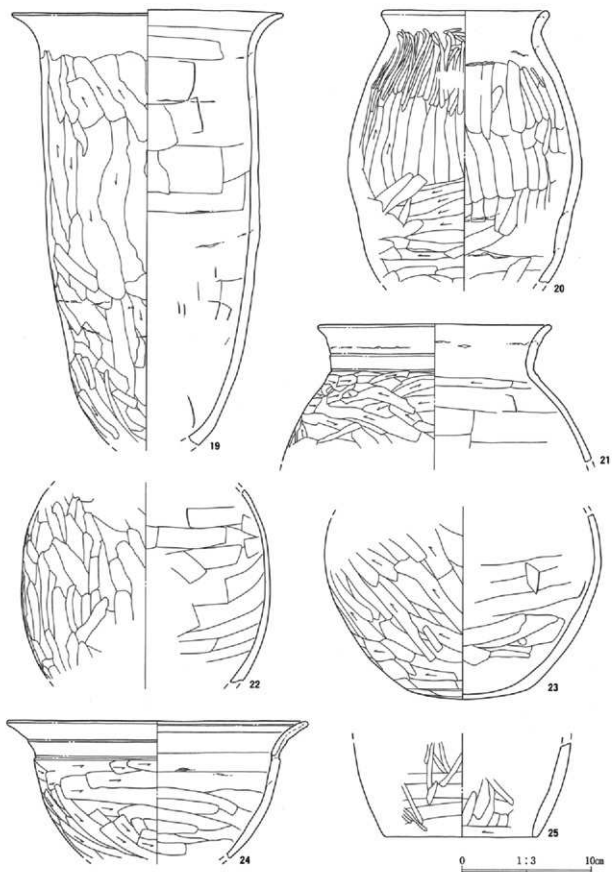


第201図 C区14号住居出土遺物(1)

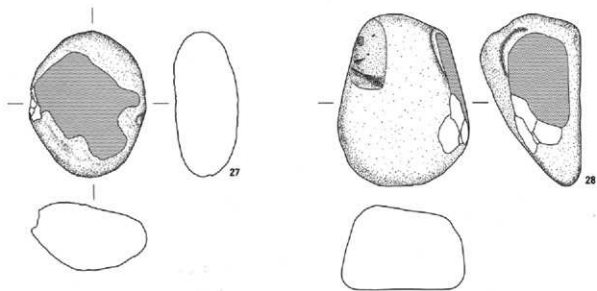
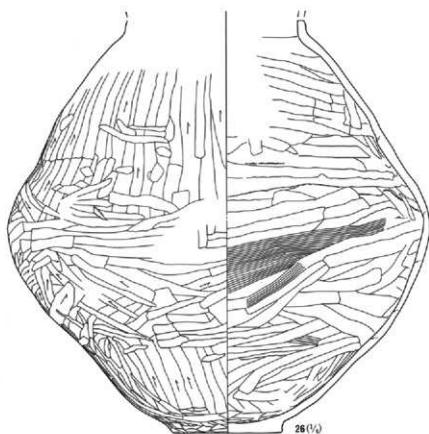




第202図 C区14号住居出土遺物(2)

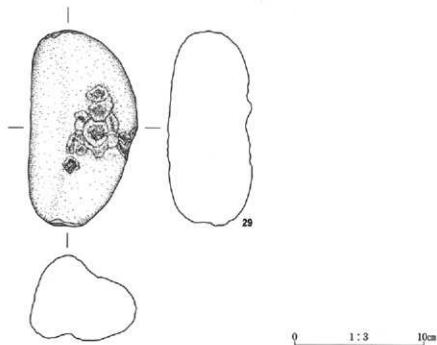


第203図 C区14号住居出土遺物(3)



0 1:3 10cm

第204図 C区14号住居出土遺物(4)



第206図 C区14号住居出土遺物(5)

**C区 18号住居 (第206~209図PL50・123)**

**位置** 65D・E-3・4

**重複** なし。北東の一部分が後世の攪乱により壊されていた。

**形状** 南北を長軸とする方形を呈する。規模は長軸6.60m、短軸6.32mである。

**面積** 33.57㎡ **方位** N-25°-W

**床面** 遺構確認面から41cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

**埋没土** As-Cとロームブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 北壁中央に造られていた。右袖部は壁面から57cm、左袖部は壁面から47cm残存していた。その構造は住居内に両袖部分の地山を掘り残し、燃焼部を設けるもので、右袖部はその先端に甕を倒立、埋置し、補強するものであった。

燃焼部から煙道部へは底面に大きな段差を有することなく移行、地山を掘り込み、煙道部は壁外に長く突出するものであった。全長208cm、燃焼部幅38cm、焚口幅54cmである。

**周溝** 攪乱により壊された部分を除き、全ての壁面下に掘られていた。幅は17~44cm、深さは4~11

cmである。

**柱穴** 柱穴3本とビット6本が検出された。柱穴1は長径74cm短径57cm、深さ72cm。柱穴2は長径76cm短径59cm、深さ75cm。柱穴3は長径73cm短径72cm、深さ81cmである。柱穴は4本が想定され、そのうち1本は攪乱により壊されたと考えられる。ビット1は長径50cm短径45cm、深さ54cm。ビット2は長径48cm短径46cm、深さ39cm。ビット3は長径67cm短径54cm、深さ54cm。ビット4は長径60cm短径56cm、深さ33cm。ビット5は長径35cm短径32cm、深さ31cm。ビット6は長径43cm短径41cm、深さ56cmである。

**貯蔵穴** 確認できなかった。

**遺物** 住居が埋没する過程で礫とともに多数の土器が破片状態で土砂中に入り込んでおり、むしろ床面上からの出土は少量であった。また、古墳時代前期の土器の混入も多かった。

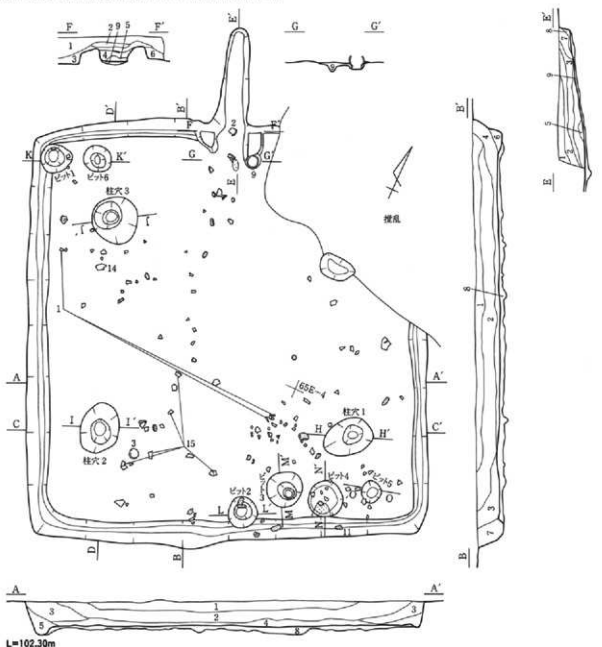
甕(9)は甕の補強材として右袖部先端に据えられていた。竈燃焼部内から杯(2)が出土、焚口部の手前40cmほどの床面上からは須恵器脚台付の広口壺(10)が出土している。南西部分からは須恵器杯(3)が床面から5cm離れて出土した。また、南東壁際か

ら砥石(11)が出土した。

掲載した資料の他に土師器破片1,229点、須恵器破片16点、陶磁器破片2点、弥生土器破片15点、縄

文土器破片30点が出土した。(観P41)

所見 古墳時代後期の住居と考えられる。

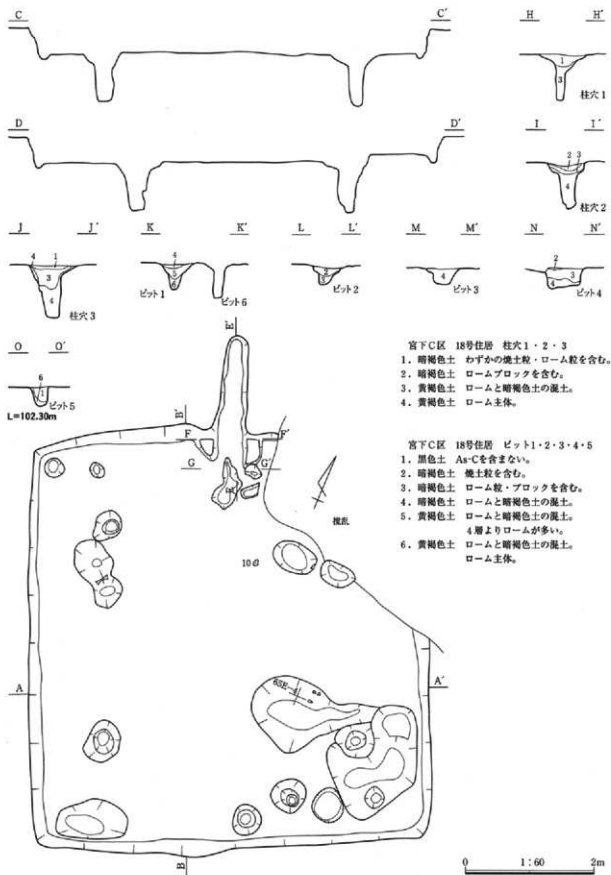


L=102.30m

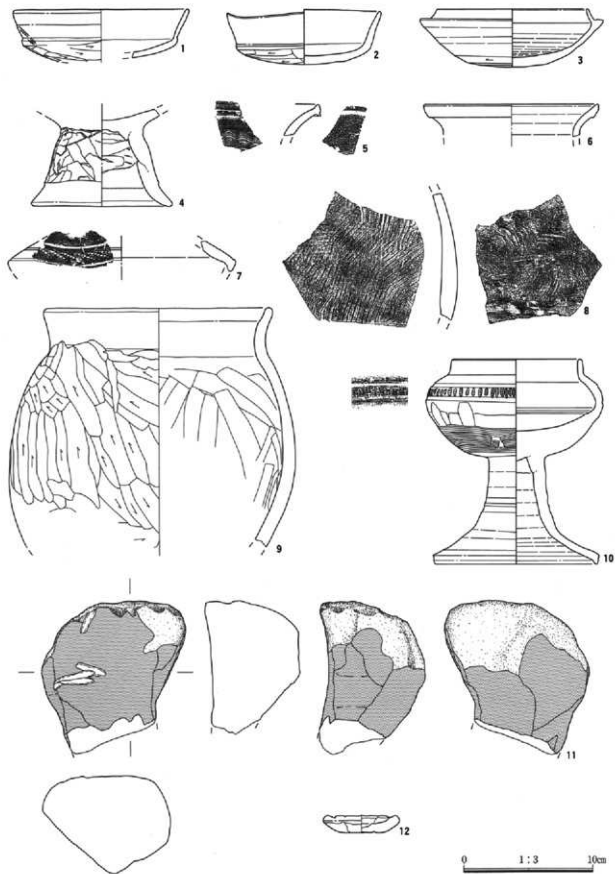
- 宮下C区 18号住居 竈
1. 暗褐色土 As-Cの混土。褐色土を多く含む。
  2. 暗褐色土 As-Cの混土。黒色土を多く含む。
  3. 暗褐色土 As-Cを少量含む。
  4. 暗褐色土 微量のAs-Cとロームブロックを含む。
  5. 黄褐色土 ロームを多量に含む。
  6. 暗褐色土 焼土、炭化物を含む。
  7. 暗褐色土 焼土、炭化物、灰を含む。
  8. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多量に含む。
  9. 茶褐色土 燃焼部は焼土、炭を含む。

0 1:60 2m

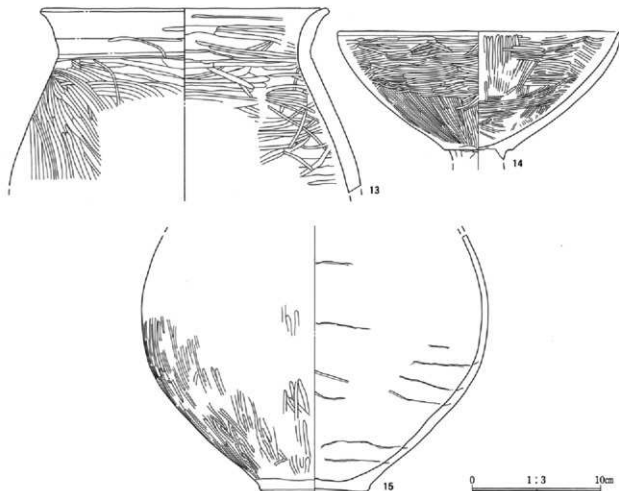
第206図 C区18号住居(1)



第207図 C区18号住居(2)



第208図 C区18号住居出土遺物(1)



第209図 C区18号住居出土遺物(2)

**C区 38号住居 (第210図、PL50・123)**

**位置** 55A-12

**重複** 北西部分で40号住居(竈部分)と重複し、本遺構の一部が40号住居により掘り込まれていた。後世の攪乱により本遺構の南東隅が壊されていた。

**形状** 南北を長軸とする方形を呈する。規模は長軸3.10m、短軸2.96mである。

**面積** 7.40㎡ **方位** N-60°-E

**床面** 遺構確認面から30cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が幾らかあった。

**埋没土** 上層は上位ほどAs-Cを多く含む黒褐色土で、床面直上層はロームブロックを多く含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 東壁中央やや南寄りに造られていた。煙道部は住居内に設けられた燃焼部から一段上がり、壁外の地山を細長く水平に掘り込んでいた。全長157cm、

燃焼部幅38cm、焚口幅60cmである。

燃焼部の大部分は良く焼けて焼土化していた。右袖部の先端には扁平な礫を直立して据え置き、補強材としていた。袖部の構築材には焼土粒が混入しており、補修や造り直しがあったことが推定される。

**周溝・柱穴** 掘られていなかった。

**貯蔵穴** 南東隅に掘られていた。規模は直径42cm、床面からの深さ39cm程である。上端の形状は円形を呈する。

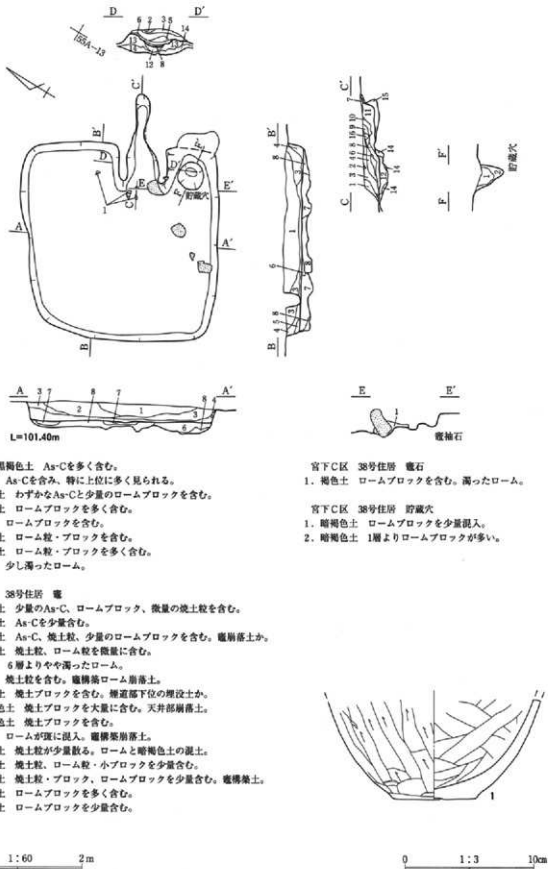
**遺物** 形状を知ることの可能な土器はほとんど出土していない。壺(1)は竈周辺からの出土である。

掲載した資料の他に土師器破片9点、須恵器破片1点、弥生土器破片3点が出土している。

(観P42)

**所見** 古墳時代後期の住居である可能性が考えられる。





第210図 C区38号住居・出土遺物

C区 42号住居 (第211・212図、PL51・123)

位置 54N・O-8、54O-9

重複 なし。後世の乱乱により北西隅が壊されている。

形状 遺構の東側が調査区域外のため全体の形状は把握できなかったが、東西を長軸とする隅丸長方形を呈すると推定される。確認した範囲での規模は南北長2.63m、東西の残存長2.76mである。

面積 計測不能 方位 計測不可

床面 遺構確認面から45cm程掘り込んで床面となる。確認範囲での床面はほとんど平坦で、南東部分の一部が硬化していた。

埋没土 As-Cとローム粒・ブロックを含む暗褐色土及び黒褐色土で埋まっていた。

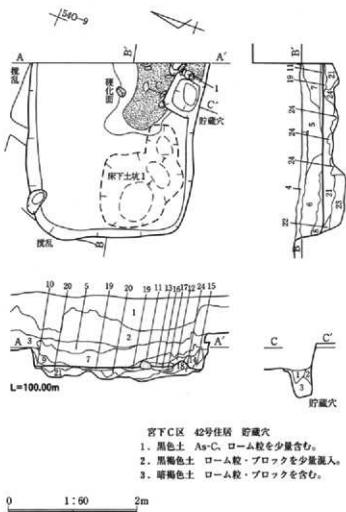
竈 本体部分は確認されなかったが、調査区境界部分における土層観察から、袖部の先端や構築材の崩落土や焼土の散布が確認された。境界附近に焚口部が位置していたものと考えられる。

周溝・柱穴 確認範囲では掘られていなかった。

貯蔵穴 確認範囲での南東部分に掘られていた。規模は長径64cm短径49cm、床面からの深さ44cm程である。上端の形状は長方形を呈し、床面との段差が3cm程あり、蓋をした痕跡と想定される。

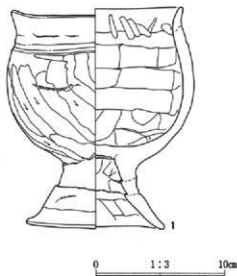
遺物 竈の右側貯蔵穴の上端にかかって台付甕(1)が出土した。掲載した資料の他に土師器破片50点、須恵器破片5点が出土した。(観P42)

所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



1. 表土 横風。
2. 暗褐色土 As-Cと少量のローム粒が混入。
3. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
4. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
5. 暗褐色土 As-Cとわずかなローム粒・ブロックを含む。
6. 暗褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを含む。
7. 黒褐色土 As-Cと少量の焼土粒を含む。砂の混入。
8. 黒褐色土 7層よりAs-Cが少ない。ローム粒・ブロックを少量含む。
9. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
10. 暗褐色土 9層よりローム粒が多い。
11. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を均質に含む(以下19層まで埋没土)。
12. 赤褐色土 焼土粒・ブロック主体。
13. 暗赤褐色土 焼土粒を多く含む。
14. 黒褐色土 焼土粒が少量混入。
15. 暗褐色土 ローム粒が多い。
16. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を混入。灰を含む。
17. 暗褐色土 ローム粒を含む。粘質土(壺溝埋土)を混入。
18. 褐色土 やや淡色の粘質土のロームを主とする。
19. 暗褐色土 粘土質ローム、灰色粘土を含む。ローム粒・ブロックを含む。
20. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
21. 暗褐色土 23層に比べ粘土・粘土質のロームは含まない。20層よりやや暗い。
22. 褐色土 22層よりやや暗い。
23. 褐色土 ローム主体。暗褐色土が少量混入。
24. 明褐色土 地山ロームとほぼ同様。

第211図 C区42号住居



第212図 C区42号住居出土遺物

C区 44号住居(第213~215図、PL51・123)

位置 54P・Q-7・8

重複 なし。後世の擾乱により東・西・北の各壁面の一部が壊されている。

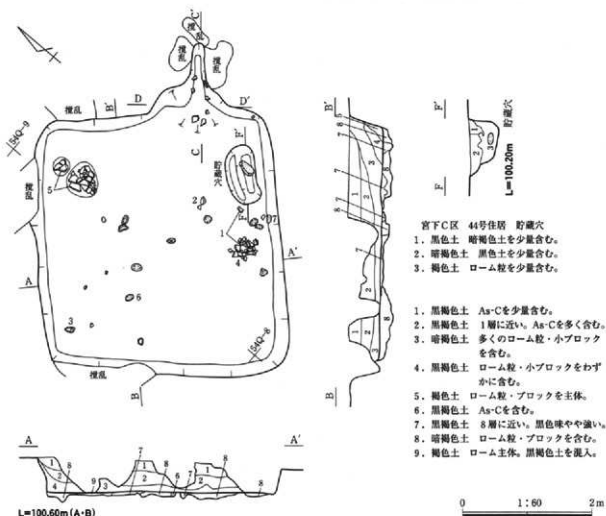
形状 東西を長軸とする方形を呈する。規模は長軸4.10m、短軸3.87mである。

面積 13.03㎡ 方位 N-46°-E

床面 遺構確認面から53cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が幾らかあった。

埋没土 上層はAs-Cを含む黒褐色土で、床面直上層は多くのローム粒・小ブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央南寄りに造られていた。燃焼部・煙道部とも地山を掘り込み壁外に構築していた。燃焼部と煙道部の底面に段差を有しない構造である。全



第213図 C区44号住居(1)

宮下C区 44号住居 貯蔵穴

1. 黒色土 暗褐色土を少量含む。
2. 暗褐色土 黒色土を少量含む。
3. 褐色土 ローム粒を少量含む。

1. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
2. 黒褐色土 1層に近い。As-Cを多く含む。
3. 暗褐色土 多くのローム粒・小ブロックを含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・小ブロックをわずかに含む。
5. 褐色土 ローム粒・ブロックを主体。
6. 黒褐色土 As-Cを含む。
7. 黒褐色土 8層に近い。黒色味やや強い。
8. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
9. 褐色土 ローム主体。黒褐色土を混入。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

長99cm、燃焼部幅17.5cm、焚口幅34cmである。燃焼部下面に灰層が堆積していた。掘り方を精査した際左右軸部に軸石を据えていたと想定される小穴を確認した。土層の観察から軸石を据えた後ロームを主体とした褐色土を貼り、壁面を整えていたことが理解できた。埋没土中に天井部や軸部を構成していた土粒が含有していないことから住居廃棄時に先立ち、竈の破壊・整理を行ったものと推定される。

**周溝・柱穴** 掘られていなかった。

**貯蔵穴** 南壁際南東隅からやや中央寄りに掘られていた。規模は長径92cm短径47cm、床面からの深さ50

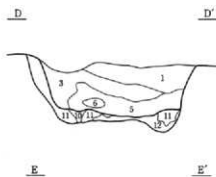
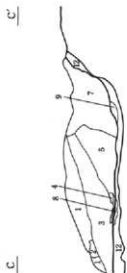
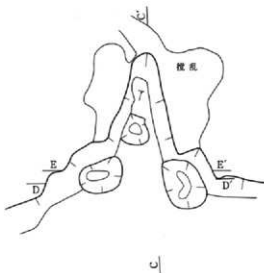
cm程である。上端の形状は不定形を呈する。

**遺物** 貯蔵穴の西側、床面上から甕(4)が潰れて出土した。また、北東部分からは甕(5)が床面からわずかに離れて出土した。

床面上から長軸20cmほどの礫が複数個出土しているが、特に一箇所に集中する傾向は認められなかった。

掲載した資料の他に土師器破片255点、弥生土器破片2点が出土した。(観P42)

**所見** 古墳時代後期の住居であると考えられる。

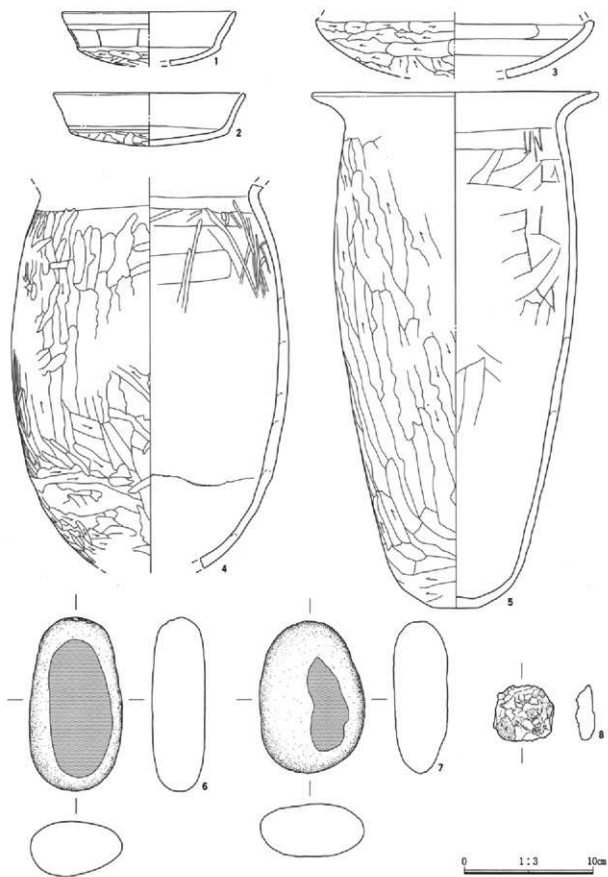


宮下C区 44号住居 竈

1. 暗褐色土 少量のローム粒とわずかな焼土粒を含む。
2. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。
3. 黒褐色土 多くの黒色土とローム粒・小ブロックを含む。
4. 赤褐色土 多くの焼土粒・ブロックを含む。
5. 暗褐色土 多くのローム粒・小ブロックとわずかな焼土粒を含む。
6. 黒褐色土 3層に近いが、3層より多くの黒色土を含む。
7. 赤褐色土 多くの焼土粒・小ブロックを含む。
8. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。灰だまりあり。
9. 黒褐色土 8層に近い。焼土粒なし。
10. 褐色土 12層に近い。やや黒色味強い。
11. 褐色土 12層に近い。特に黒色味強い部分。
12. 褐色土 ローム主体。黒褐色土を少量混入。礫質粘土。



第214図 C区44号住居(2)



第215図 C区44号住居出土遺物

C区 55号住居 (第216~220図、PL52・124)

位置 55C・D-17-19

重複 なし。後世の擾乱により本遺構の主要部分を壊されていた。

形状 後世の擾乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈すると推定される。規模は長軸6.14m、短軸5.28mである。

面積 (28.90)㎡ 方位 N-20°-W

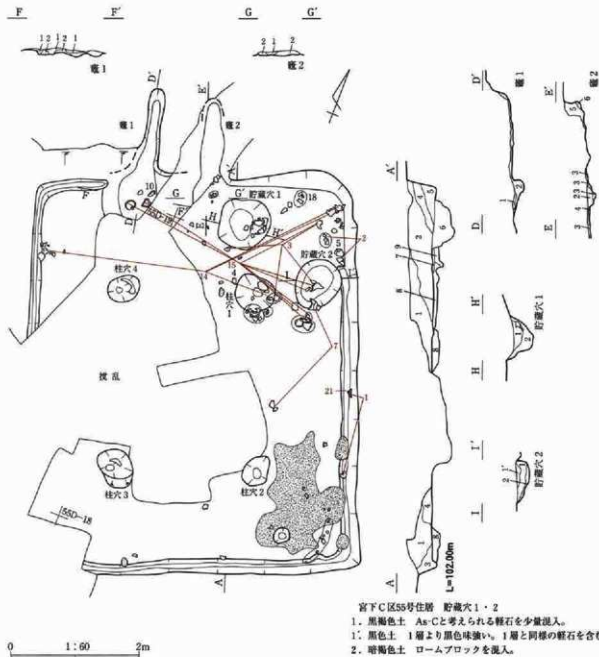
床面 遺構確認面から42cm程掘り込んで床面とな

る。床面には凹凸が多少あった。

埋没土 As-Cを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 竈2基が設けられていた。2基とも擾乱により一部が壊されていた。

竈1は北壁中央やや西寄りに設けられていた。燃焼部を住居壁内に設け、地山を掘削し、煙道部が水平に屋外に延びる構造を成していた。袖部は基底の痕跡が認められたただけであった。規模は全長213cm、燃焼部幅62cm、焚口幅52cmである。



宮下C区55号住居 貯蔵穴1・2

- 1. 黒褐色土 As-Cと考えられる軽石を少量混入。
- 1'. 黒色土 1層より黒色味強い。1層と同様の軽石を含む。
- 2. 暗褐色土 ロームブロックを混入。

第216図 C区55号住居(1)

竈2は竈1の東側、北壁中央やや東寄りに設けられ、こちらもその大半が削平されていた。構造は竈1と同様と考えられ、壁外に延びる長い煙道部の一部が検出された。全長182cm、燃焼部幅60cmであり、燃焼部下面及び地山が焼土化していた。新旧関係で

は竈1が竈2より新しい。

周溝 確認した範囲で北東壁面を除き、壁面下ではほぼ全体に掘られていた。幅は13~30cmで深さが3~8cmである。

1. 黒褐色土 As-Cを含む。
2. 黒褐色土 1層よりAs-Cが少ない。
3. 暗褐色土 As-Cをわずかに混入。
4. 暗褐色土 しまりよし。
5. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
6. 貯蔵穴1埋没土
7. 黒色土 焼土粒を少量含む。竈2の灰混じりか。
8. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
9. 暗褐色土 8層と比較してロームブロックがやや少なくなる。

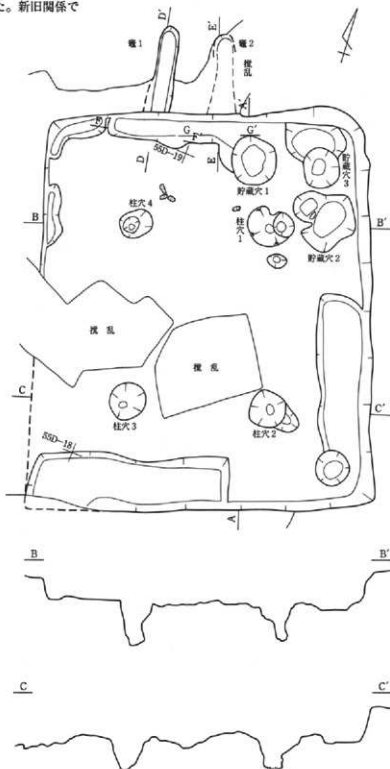
宮下C区 55号住居 竈1

1. 暗褐色土 灰と少量の焼土粒、ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。

宮下C区 55号住居 竈2

1. 暗褐色土 少量の焼土、ロームブロックと岩片を含む。
2. 暗褐色土 1層よりロームブロックは少ない。焼土を部分的に含む(2層下部及び下面の地山がよく焼けている)。
3. 褐色土 ローム主体。
4. 黄褐色土 ロームブロック。
5. 褐色土 ロームブロックを含む。
6. 黄褐色土

0 1:60 2m



第217図 C区55号住居(2)

**柱 穴** 4本掘られていた。柱穴1は長径63cm短径56cm、深さ37cm。柱穴2は長径43cm短径40cm、深さ47cm。柱穴3は長径60cm短径53cm、深さ63cm。柱穴4は長径50cm短径38cm、深さ58cmである。各柱穴とも底面は硬くしまっていた。柱穴1・3・4は浅い掘り込みが重複しており、柱の補助あるいは抜き取りなどにかかわったものである可能性がある。

**貯蔵穴** 北東部分に3基が掘られていた。

貯蔵穴1は北壁際やや東寄りに掘られ、規模は長径80cm短径77cmで床面からの深さは40cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

貯蔵穴2は東壁際北寄りに掘られ、規模は長径82cm短径68cmで床面からの深さは25cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

貯蔵穴3は床下精査時に検出された。検出時の規模は長径63cm短径56cm、深さ68cmである。

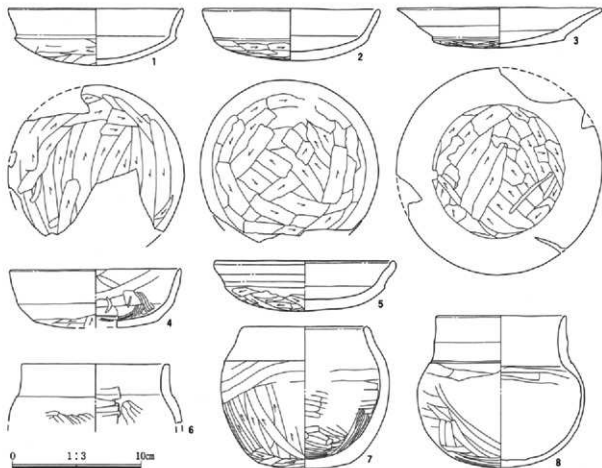
3基の貯蔵穴の存在は竈の移動に伴うものと考え

られ、新旧は3→2→1の順で新しくなる。貯蔵穴3が竈2に伴うものと考えられる。

**遺 物** 床面上から出土した土器で形状を保っていたものは少量であった。竈1の燃焼部から出土した甕(15)は貯蔵穴2周辺出土の破片と接合した。短頸壺(7)は貯蔵穴2周辺出土、短頸壺(8)はその西側、柱穴1周辺の出土である。甕(14)は北東隅・北西壁際出土の破片が接合したものである。貯蔵穴1からは甕(17)が出土している。柱穴1の埋没土からは甕(19)が発見された。また、東壁際中央から紡錘車(21)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片716点、須恵器破片45点、軟質陶器破片21点、陶磁器破片10点、瓦1点、弥生土器破片16点が出土している。

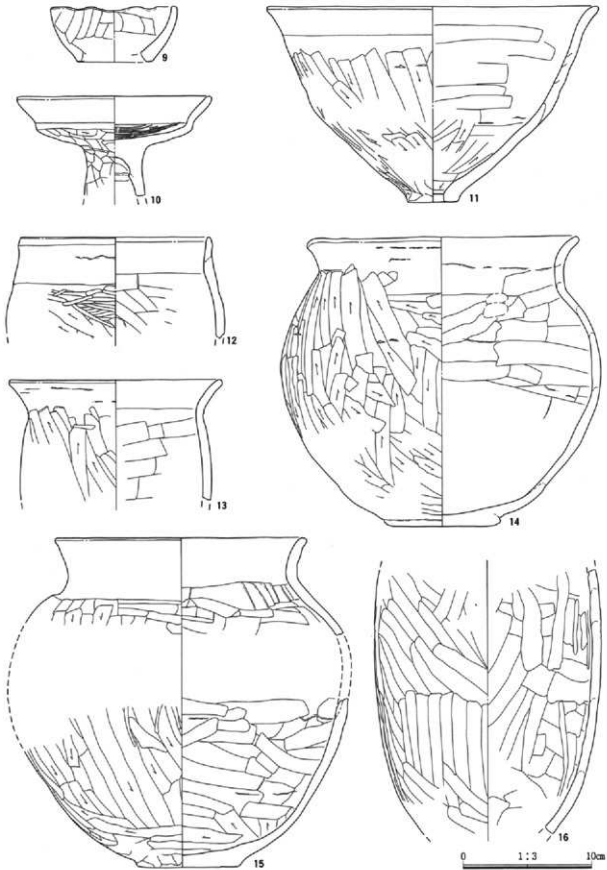
(観P43~45)

**所 見** 古墳時代後期の住居と考えられる。

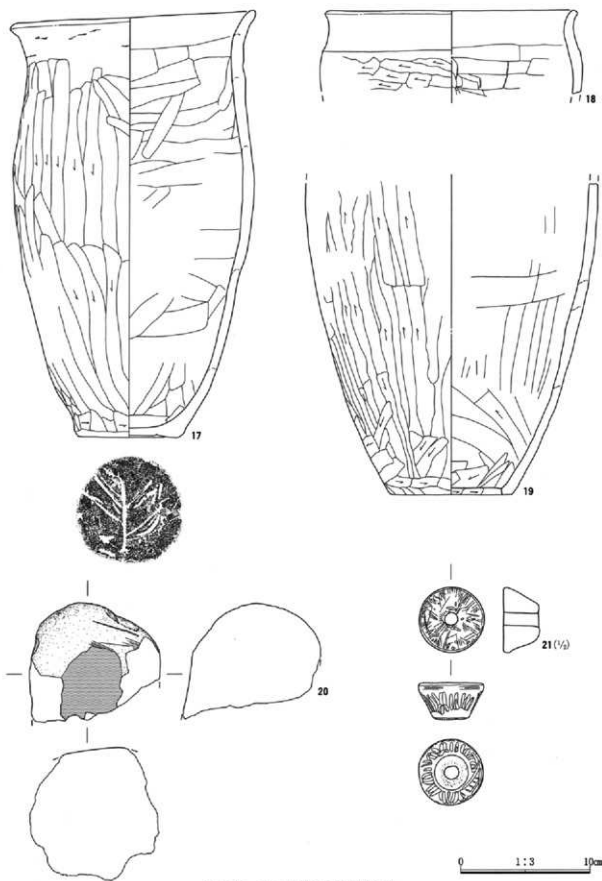


第218図 C区55号住居出土遺物(1)





第219図 C区55号住居出土遺物(2)



第220図 C区55号住居出土遺物(3)

## C区 62号住居 (第221・222図、PL51・124)

位置 55D-11・12

重複 なし。後世の擾乱により本遺構の北西部分が壊されていた。

形状 後世の擾乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする隅丸方形を呈する。規模は長軸3.46m、短軸3.20mである。

面積 (8.91)<sup>m</sup> 方位 N-19°-W

床面 遺構確認面から54cm程掘り込んで床面となる。床面南東部分が低かった。ここには床下土坑状の掘り込みが検出された。

埋没土 床面直上層は少量の白色軽石粒と多くのロ

ーム粒・ブロックを含む黄褐色土で埋まっていた。

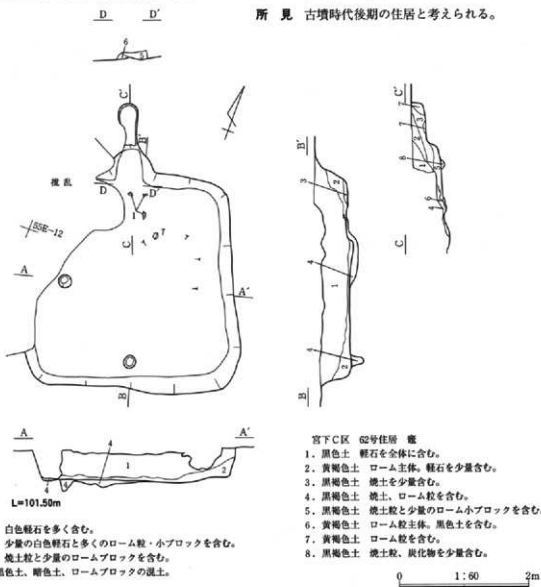
竈 北壁はほぼ中央に造られていた。燃焼部は地山を掘り込んで壁外に設けられている。約90cmで立ち上がり、段をなして煙道部へと移行している。全長123cm、燃焼部幅86cm、焚口幅46.5cmである。

周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

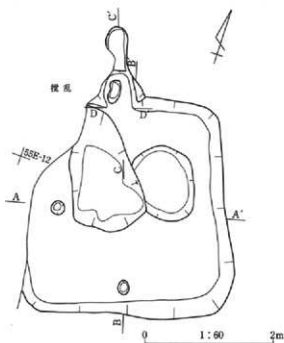
遺物 形状を知るに得る資料の出土は少量であった。杯(1)が破片状態で竈焚口部前から出土している。

掲載した資料の他に土師器破片34点、軟質陶器破片1点、陶磁器破片3点、弥生土器破片2点が出土している。(観P45)

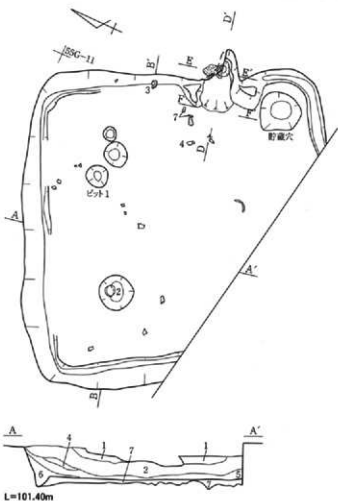
所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



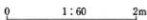
第221図 C区62号住居(1)



第222図 C区62号住居(2)・出土遺物



1. 褐色土 多くのローム粒とわずかな焼土粒を含む。
2. 黒褐色土 多くの白色軽石とわずかな焼土粒、ローム粒を含む。
3. 黒褐色土 2層に比して軽石の量は少ない。
4. 黒褐色土 3層に焼土ブロックを含む。
5. 黒褐色土 3層にロームブロックを含む。
6. 褐色土 ローム粒を多く含む。
7. 黄褐色土 ローム主体、黒色土を少量含む。



第223図 C区65号住居(1)

## C区 65号住居

(第223~227図、PL51・124・125)

位置 55F-10、55G-10・11

重複 東側部分(竈部分)で64号住居と重複し、本遺構が64号住居により掘り込まれていた。

形状 遺構の南側が調査区域外に及んだため全体の形状は確認できないが、東西を長軸とする隅丸長方形を呈すると推定される。確認した範囲での規模は東西長4.69m、南北長4.28mである。

面積 (17.90)㎡ 方位 N-79°-E

床面 遺構確認面から58cm程掘り込んで床面となる。床面の南東部分は緩やかに下がり、中央付近に比べ8cm程低くなっていた。

埋没土 白色軽石粒とロームブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。全長96cm、燃焼部幅45cm、焚口幅52cmである。燃焼部奥の

壁面は焼土化し、底面に灰層が広がっていた。

周溝 東西南北の壁面下の一部に掘られていた。全面に掘られていたと考えられる。

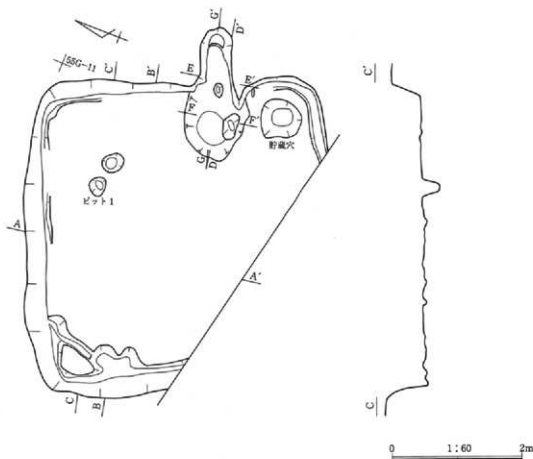
ピット 1本掘られていた。規模は長径34cm短径33cm、床面からの深さ30cm程である。

貯蔵穴 南東部分に掘られていた。規模は長径65cm短径59cm、床面からの深さ50cm程である。上端の形状は不定形を呈する。

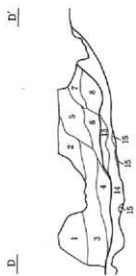
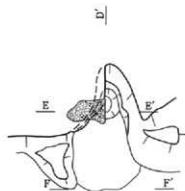
遺物 杯(2)は北西の浅い皿状の掘り込みと重複する地点で床面から3cm離れた高さから出土した。土製支脚(7)は左軸部手前に転がり出ていた。杯(3)は床面下精査時に東壁際から出土した。

掲載した資料の他に土師器破片110点、須恵器破片11点、軟質陶器破片1点、弥生土器破片1点を出土した。(観P45)

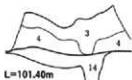
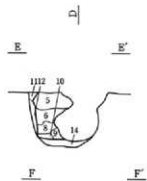
所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



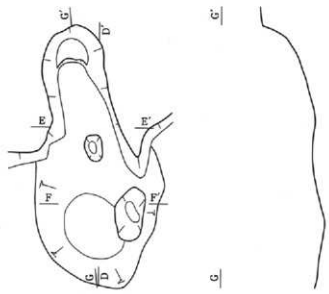
第224図 C区65号住居(2)



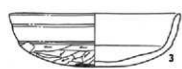
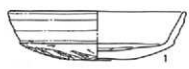
1. 暗褐色土 多くの白色軽石とわずかな焼土粒を含む。
2. 暗褐色土 1層に近似。白色軽石、焼土粒が少ない。
3. 暗褐色土 砂層でローム粒、焼土粒を微量含む。
4. 暗褐色土 粘質土ブロックに焼土粒をわずかに含む。
5. 暗褐色土 灰色粘質土を多量に含む(天井部崩落土)。
6. 暗褐色土 粘質土にローム粒、焼土粒を含む。
7. 褐色土 多くのローム粒と焼土を含む。
8. 褐色土 ローム、焼土を多量に含む。
9. 灰色土 灰層。焼土粒を含む。
10. 褐色土 焼土を多量に含む。
11. 黄褐色土 ローム粒を少量含む。
12. 黄色土 地山ローム。表面は焼土化。
13. 灰色土 多くの灰と少量の焼土を含む。
14. 暗黄褐色土 ローム粒と少量の焼土粒を含む。
15. 褐色土 焼土粒を多量に含む。



0 1:30 1m

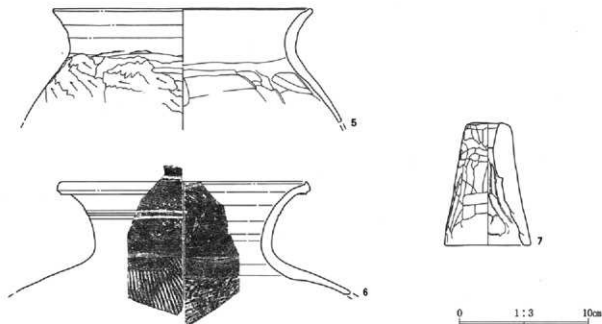


第225図 C区65号住居(3)



0 1:3 10cm

第226図 C区65号住居出土遺物(1)



第227図 C区65号住居出土遺物(2)

**A区 6号住居 (第228~230図, PL53・124)**

位置 44Q・R-1

**重複** 重複する遺構はないが、床面の中央部分に調査用排水坑の設定が重なったためこの部分は未調査である。

**形状** 長軸を東西方向に有する長方形である。東側の南・北両隅はやや丸味を帯びている。規模は長軸3.59m、短軸2.40mを測る。

面積 7.79㎡ 方位 N-94°-E

**埋没土** 北壁際に黒褐色土が三角堆積していた他は暗褐色土が堆積していた。

**床面** 遺構確認面から36cm程掘り込んで床面となる。床面は東側寄りが高く、西側寄りがやや低かった。東側は全体が硬く踏みしめられていた。

**竈** 東壁のほぼ中央に造られていた。規模全長177cm、焚口部幅49cm、燃焼部幅45cm、煙道部長99cm、煙道部幅20~34cmを測る。

燃焼部は住居内に設置され、一部東壁を掘り込んで立ち上がっていた。

左右の袖部は一部を地山に掘り残して基礎とし、これに粘質土を貼りつけていた。両袖部の先端には長さ40cmほどの扁平な礎を据え、焚口部を形成していた。

調査時焚口部に横倒しの状態で発見された甕(11)は二つの礎の上に鳥居状にわたされ、焚口部天井を補強していたものと考えられる。

煙道部は燃焼部底面から段差を持って壁外に大きく延びている。竈の軸線は住居の主軸とやや異なり、北方向に振れている。

**周溝・柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**床下** 床面下5~10cm程に掘り方基底面があった。

土坑状・ピット状の掘り込みは検出されなかった。

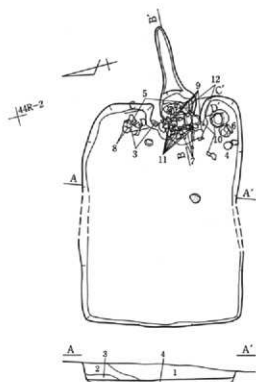
**遺物** 竈内及びその両脇から多数の土器が出土した。

竈燃焼部の上層から甕(9)が横倒しの状態で出土している。竈左袖部前の床面からやや離れた高さからは杯(1)、甕(8)が出土した。

右袖部外側、南東隅の床面上からは甕(10)の上位が倒立状態でこれに近接し甕(6)、杯(4)が出土している。

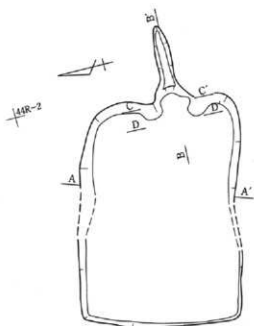
掲載した資料の他に土師器破片58点、須恵器破片1点が出土した。(観P46)

**所見** 古墳時代後期の住居である。



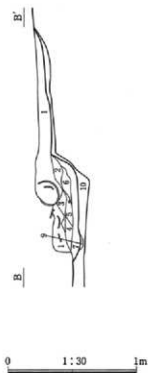
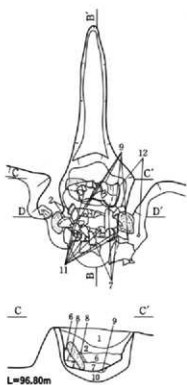
1. 暗褐色土 白色軽石を多く含む。
2. 暗褐色土 1層に類似するが、白色軽石を含む割合が少ない。
3. 黒褐色土 しまり、粘性あり。
4. 黒褐色土 しまりあり。

0 1:60 2m

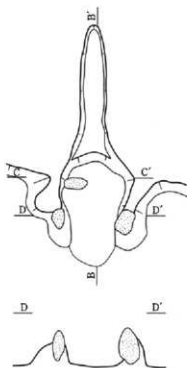


宮下A区 6号住居 概

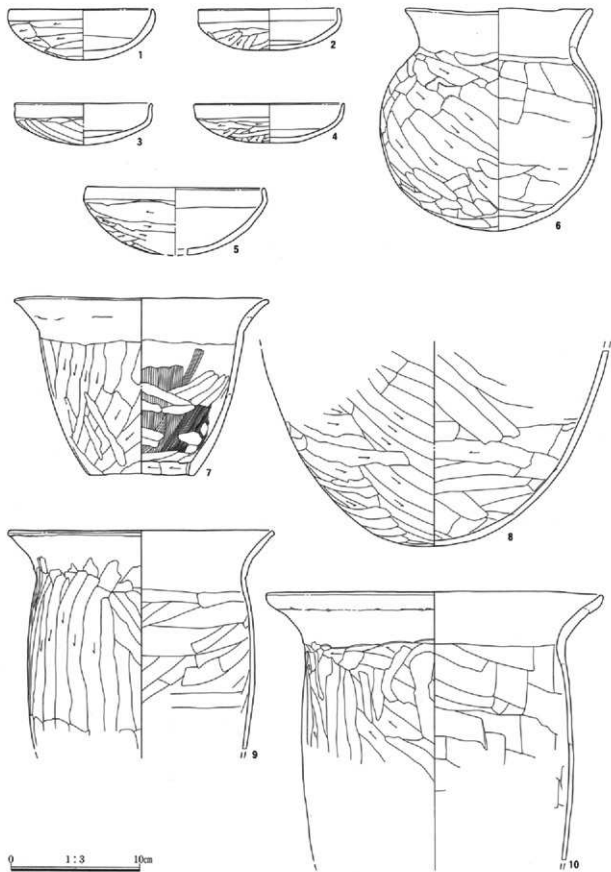
1. 濃い褐色土 焼土とローム粒を含む。
2. 灰色土 粘性をおびた灰。
3. 褐色土 焼土を多量に含む。
4. 褐色土 焼土を少量含む。
5. 褐色土 焼土を少量含む。
6. 黒褐色土 焼土を少量含む。
7. 黒褐色土
8. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
9. 褐色土 焼土を多量に含む。
10. 暗褐色土 しまりあり。



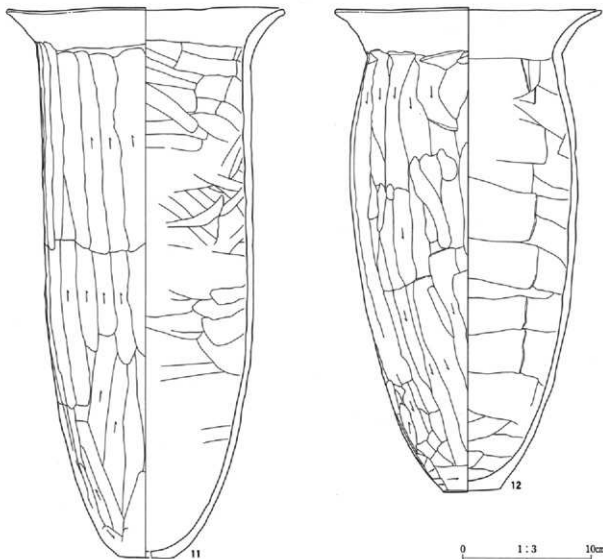
第228図 A区6号住居







第229図 A区6号住居出土遺物(1)



第230図 A区6号住居出土遺物(2)

**B区 12号住居 (第231・232図、PL54)**

**位置** 45A・B-16、45B-17

**重複** 10号住居、2号溝より先出である。

**形状** 竈とその周辺東壁の一部を検出したに止まった。残存長は東西方向で4.60m、南北方向で1.14mを測った。

**面積** 計測不能 **方位** N-65°-E

**床面** 遺構確認面から20cm程掘り込まれて床面となる。

**竈** 東壁に造られていた。燃焼部は住居内の床面上から住居の壁面を一部掘り込んでいた。全長約80cm、最大幅105cmを測った。

袖部の存在は確認できなかった。埋没土中には天

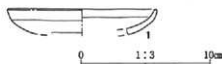
井部の一部であったと考えられる黄褐色ローム土や焼土が多数含まれていた。

**周溝・柱穴・貯蔵穴** 確認できなかった。

**遺物** 検出範囲が狭く、床面直上からの遺物の出土はなかった。掲載した杯(1)も埋没土中出土の破片である。

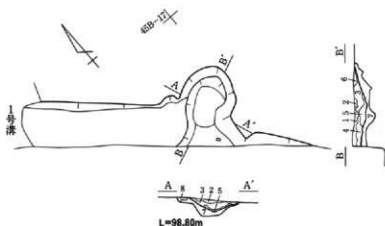
掲載した資料の他に土師器破片17点、須恵器破片1点が出土した。(観P47)

**所見** 古墳時代後期の住居である。



第231図 B区12号住居出土遺物

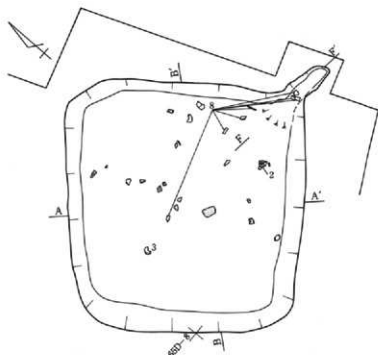
第6節 古墳時代後期の遺構と遺物



第232図 B区12号住居

1. 暗褐色土 白色軽石、黄褐色ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 焼土を含む。
3. 暗褐色土 1層より黒色味が強い。焼土ブロックを含む。白色軽石、黄褐色ローム粒を少量含む。
4. 黒褐色土 焼土粒、黄褐色ロームを含む。
5. 黒褐色土 焼土粒を少量含む。黄褐色ロームを多く含む。
6. 暗褐色土 焼土をブロック状に含む。
7. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
8. 黄褐色土 白色軽石、黄褐色ローム粒を含む。

0 1:60 2m



L=102.30m

宮下C区 7号住居 竪

1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。
2. 明黄褐色土 ローム主体に暗褐色土を混入。
3. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックと少量の焼土粒を含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を含むが、3層よりも少ない。
5. 黄色土 ローム主体、暗褐色土を少量含む。

0 1:60 2m

第233図 C区7号住居(1)

1. 暗褐色土 焼土ブロック、ロームブロックを少量、As-Cを多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土粒・ブロック、粘質土ブロックを多量に、ローム小ブロックとAs-Cを含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・小ブロック、As-Cを少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
5. 暗褐色土 3層よりAs-C少なく、ローム粒を含む。
6. 黄褐色土 地山ロームを多く含む。
7. 暗褐色土 ローム粒、As-Cを微量に、粘質土を含む。
8. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
9. 暗褐色土 ローム粒、少量のローム小ブロックを含む。
10. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
11. 暗褐色土 ローム主体。黒褐色土をわずかに含む。
12. 暗褐色土 ブロック状に混入する。

C区 7号住居 (第233~235図、PL54・126)

位置 65C-7・8、65D-8

重複 6号住居と重複し、本遺構が6号住居を掘り込んでいる。

形状 長軸を東西にする隅丸方形を呈する。規模は長軸3.94m、短軸3.72mである。

面積 10.31㎡ 方位 N-53°-E

床面 遺構確認面から46cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 上・中層は焼土粒・ブロックを含むAs-C混土。As-Cの含有量は下位に行くほど少なくなる。

竈 南東隅に造られていた。燃焼部・焚口部を住居内に設け、ここから地山を掘り込んで壁外に煙道部が延びる構造であった。調査の際、使用面を掘りすぎたため、右側の検出状況が悪い。

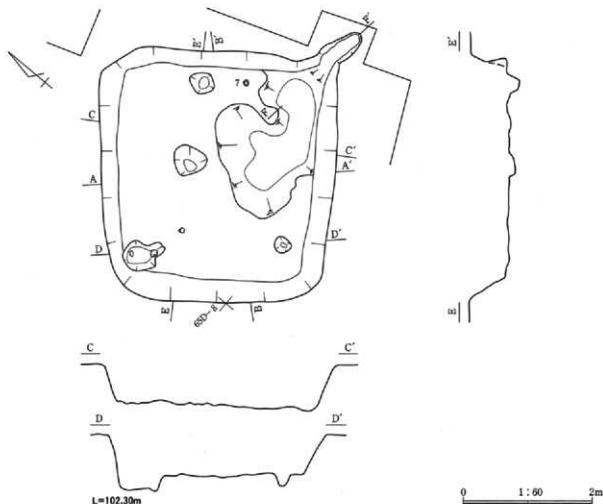
周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

床下 竈焚口部前の広範囲、床面全体の約1/4ほどが約10cm程掘り込まれていた。他にも小ピットを4本検出した。

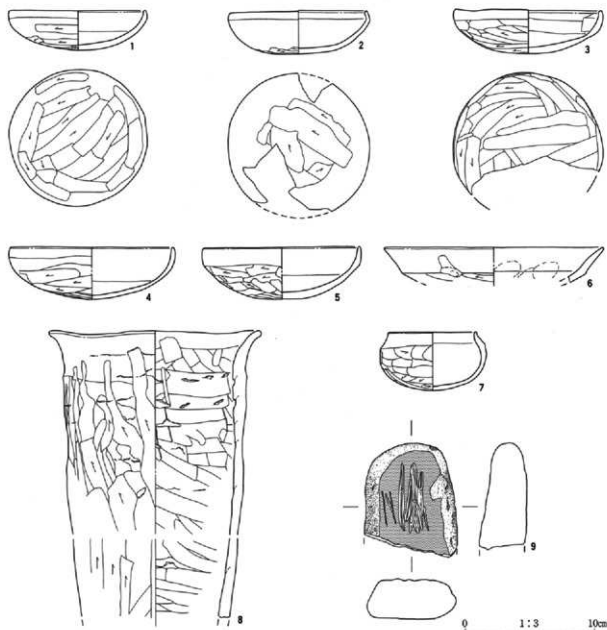
遺物 土師器杯(1・3~5)は埋没土中からの出土である。甕(8)は竈燃焼部内から焚口部手前の床面上に破片となって散在していた。杯(2)は南側、床面から4cm離れての出土である。また小型壺?(7)は東側、掘り方基底面に接しての出土である。また、埋没土中から砥石(9)が出土した。

掲載資料の他土師器破片374点、須恵器破片5点、軟質陶器破片6点、陶磁器破片1点、弥生土器破片10点が出土している。(観P47)

所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



第234図 C区7号住居(2)



第235図 C区7号住居出土遺物

## C区 23号住居

(第236～239図、PL54・55・126)

位置 55A・B-19・20

重複 1号溝と重複し、本遺構が1号溝により掘り込まれていた。北東部分で24号住居と重複している。

形状 南北を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.90m、短軸3.52mである。

面積 10.97㎡ 方位 N-103°-E

床面 遺構確認面から56cm程掘り込んで床面とな

る。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 多くの軽石を含む灰黒色土で埋まっていた。

竈 東壁やや南寄りに造られていた。右袖部は壁面から42cm、左袖部は壁面から56cm残存していた。焚口部は住居内にあり、幅広の燃燒部は奥壁の立ち上がりが地山を斜めに掘り込み、煙道部へと移行する断面形状をとっている。袖部は粘土質の灰褐色土を用いて造り付けられていたが、左右とも崩壊が著しく、やせていた。左右の基部には壁面の補強のため、高さ30cm前後の扁平な礫を垂直に据えていた。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

燃焼部底面には灰層が堆積していた。掘り方基底面は、この最終使用面より20cmほど下位に設けられ、この間の土層中には炭化物・灰が多量に含まれていた。全長103cm、燃焼部幅53cm、焚口幅78cmである。

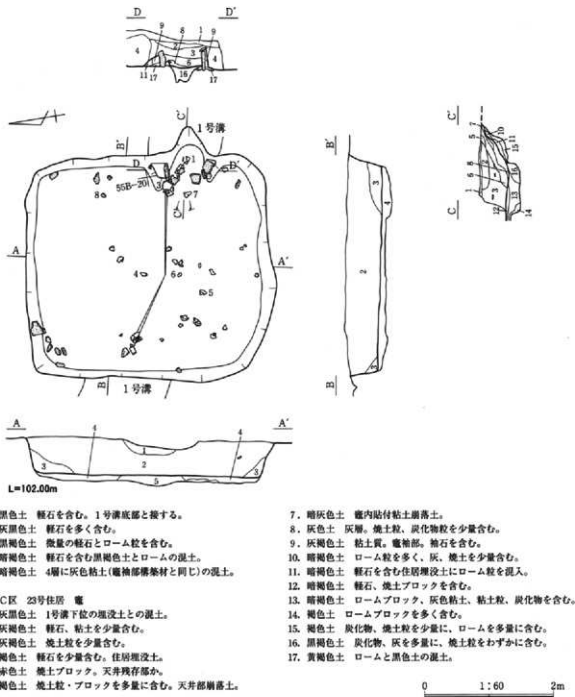
周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物 床面直上から出土した完形・半完形の土器

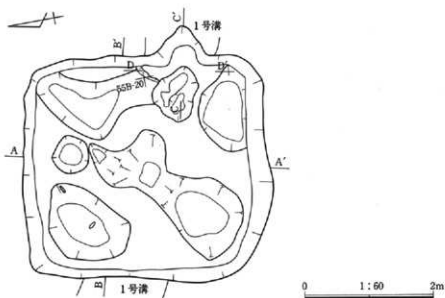
はない。燃焼部周辺から杯(1・3)、壺(6・7)が出土したがいずれも完形ではない。北東部分の床面直上からは砥石(8)が出土している。

掲載した資料の他に土器破片464点、須恵器破片9点、弥生土器破片4点、縄文土器破片5点が出土している。(観P47・48)

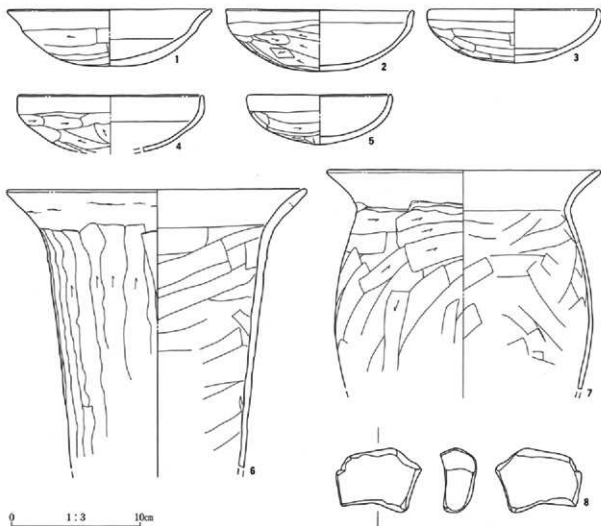
所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



第236図 C区23号住居(1)

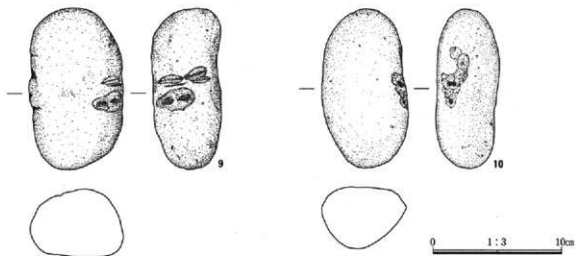


第237図 C区23号住居(2)

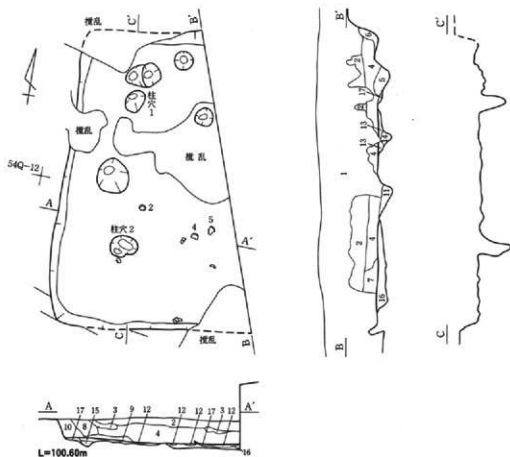


第238図 C区23号住居出土遺物(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第239図 C区23号住居出土遺物(2)



1. 褐色土 表土及び煙道土層。
2. 黒色土 As-Cを多く含む。
3. 黄褐色土 ローム粒・ブロック主体。
4. 暗褐色土 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。
5. 暗褐色土 3層よりロームブロックが多い。
6. 暗褐色土 4層よりロームブロックが多い。
7. 黒褐色土 少量のローム粒と焼土粒を含む。
8. 黒褐色土 7層に近いが焼土粒を含まない。
9. 褐色土 多くのローム粒・ブロックを含む。

10. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
11. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
12. 暗褐色土 As-Cをわずかに含む。
13. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
14. 暗褐色土 12層よりロームが多い。
15. 黒褐色土 ロームブロックを含む。
16. 暗褐色土 やや赤色味あり。
17. 褐色土 やや濁ったローム。

第240図 C区41号住居

0 1:60 2m



**C区 41号住居 (第240・241図、PL55・126)**

位置 55P-11・12

重複 なし。後世の攪乱により本遺構が部分的に壊されており、北西隅は削平されていた。

形状 遺構の東側が調査区域外のため全体の形状は不明である。確認した範囲での規模は南北長4.60m、東西の残存長3.13mである。

面積 計測不能 方位 計測不可

床面 遺構確認面から39cm程掘り込んで床面となる。確認範囲での床面はほとんど平坦であった。

埋没土 上層ではAs-Cを含む黒色土で、床面直上層はロームを含む暗褐色土で埋まっていた。

竈・貯蔵穴 焼土を含め、確認できなかった。

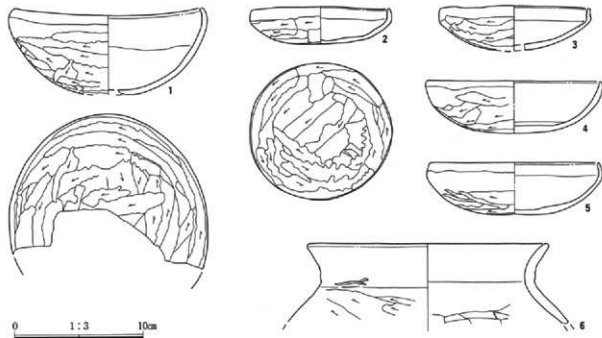
周溝 確認した範囲では掘られていなかった。

柱穴 2本掘られていた。柱穴1は長径33cm短径27cm、深さ46cm。柱穴2は長径31cm短径26cm、深さ54cmである。

遺物 土師器杯・甕を出土したが、3分の1残存の杯(4)が中央、床面直上から出土した他はいずれも床面から10cm程離れた埋没土中からの出土である。

掲載した資料の他に土師器破片79点、須恵器破片12点、軟質陶器破片6点、陶磁器破片14点、縄文土器破片1点が出土している。(観P48・49)

所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



第241図 C区41号住居出土遺物

**C区 63号住居 (第242・243図、PL55・127)**

位置 54D・E-9

重複 なし。攪乱により竈周辺を除いた本遺構の大半が壊されていた。

形状 遺構の南側が調査区域外のため、また後世の攪乱により遺構の大半が壊されているため、全体の形状は不明である。

面積 計測不能 方位 計測不可

床面 調査区の南壁面で壁高を確認した。遺構確

認面から27cm程掘り込んで床面となる。確認した範囲で床面はほとんど平坦であった。

埋没土 As-Cとローム粒・ブロックを含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁の一部に造られていた。後世の攪乱により竈の主要部分が壊されていた。

周溝・柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 東壁際の一部に掘られていた。規模は長径83cm短径80cm、床面からの深さ22.5cm程である。

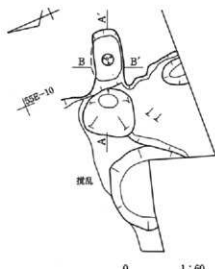
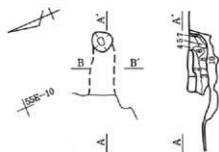
上端の形状は不定形を呈する。

遺物 竈内から杯(2)、甕(3)の破片が出土した。

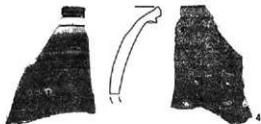
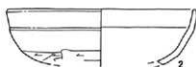
掲載した資料の他に土師器破片81点、須恵器破片6

点、軟質陶器破片11点、陶磁器破片3点、弥生土器破片1点出土した。(観P49)

所見 古墳時代後期の住居と考えられる。



第242図 C区63号住居



第243図 C区63号住居出土遺物

C区 71号住居 (第244・245図、PL56・127)

位置 55I・J-12

重複 東側で72号住居と重複し、本遺構が72号住居により掘り込まれていた。

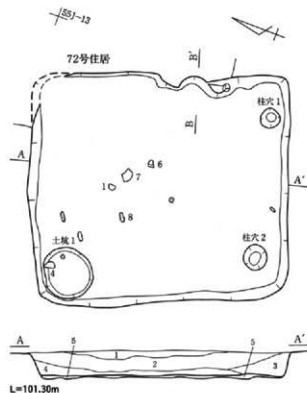
形状 他遺構と重複する部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸4.12m、短軸

3.58mである。

面積 (12.63)m<sup>2</sup> 方位 N-70°-E

床面 遺構確認面から38cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 上層はAs-Cとローム粒を含む灰褐色土で、床面直上層はローム粒を含む黒褐色土で埋まってい



宮下C区 71号住居 概

1. 黒褐色土 微量の焼土粒、炭化物、粘土粒を含む。
2. 黒褐色土 ローム主体。焼土を少量含む。

1. 灰褐色土 As-Cを含む。
2. 灰褐色土 多くのAs-Cとローム粒を含む。
3. 黒色土 As-Cを多量に含む。
4. 黒褐色土 ローム粒を含む。
5. 黄褐色土 ローム主体で黒色土を含む。



第244図 C区71号住居

た。

**竈** 東壁中央やや南寄りに造られていた。72号住居との重複により、燃焼部下がわずかに残存していただけである。

**周溝** 掘られていなかった。

**柱穴** 2本掘られていた。柱穴1は長径32cm短径31cm、深さ18cm。柱穴2は長径42cm短径38cm、深さ15cmである。

**貯蔵穴** 東側中央やや北寄りに掘られていた。規模は長径95cm短径92cm、床面からの深さ30cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

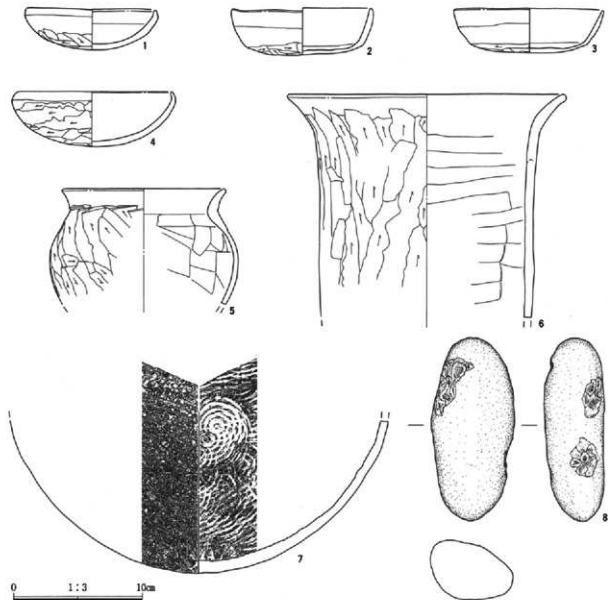
**土坑** 北西隅で土坑1基検出した。長径83cm短径75cm、深さ19cmである。

**床下** 床面精査の結果、南東隅、南西隅で土坑状の掘り込みを検出した。南西隅のものを土坑2として報告する。

**遺物** 床面直上からの出土は少量であった。中央部分から甕(6)と須恵器甕(7)が出土しているが、いずれも破片である。

掲載した資料の他に土師器破片125点、須恵器破片4点、弥生土器破片4点が出土した。(観P49)

**所見** 古墳時代後期の住居と考えられる。



第245図 C区71号住居出土遺物

## 3 溝

## A区 23号溝 (第246図、PL56・127)

位置 44O-17~54N-1

重複 18号~20号・22号溝と重複、いずれの溝より先出である。

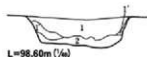
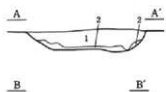
形状 北端は54N-1グリッドで攪乱を受けていた。ここから約18.07mはN-7°-Wの方向にほぼ直線的な軌跡を描く。44N-18グリッドで大きく屈曲、走向をN-53°-Eとし、44O-17グリッドで現道下に延びている。B区では検出されていない。断面形はやや上端に向けて外傾する壁面を有しているが、基本的には箱形に近い形状であったと考えられる。長さは延べで27.08mを検出した。規模は上幅が1.08~1.52m、下幅が0.68~1.14mである。深さは0.19~0.29mを測った。

方位 N-7°-W、N-53°-E

埋没土 上層にAs-Cを含む黒色土が下層に暗褐色土が堆積している。流水の痕跡は認められない。

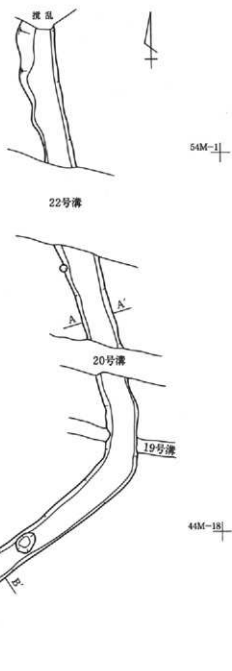
遺物 44O-17グリッド内の埋没土中から土師器杯(1)が出土している。この他に土師器破片10点、須恵器破片1点が出土した。(観P50)

所見 埋没土中にAs-Cが多数混入する状態が他の溝と様相を異にすること、杯(1)が出土していることを考え合わせると、本遺構は古墳時代後期の溝であることが考えられる。性格は不明である。



1. 黒色土 As-Cの混入が目立つ。黒色味強い。
- 1'. 暗褐色土 1・2層の混土層。
2. 暗褐色土 地山の土粒(ロームとの混存層)に近い土層。やや軟弱。

0 1:150 5m



0 1:3 10cm

第246図 A区23号溝・出土遺物

4 土坑

C区 3号土坑(第247図)

位置 65D-1・2

重複 1号・2号溝、19号・20号住居と重複する。  
調査時の所見では19号住居より新しく、20号住居より古いと考えられている。

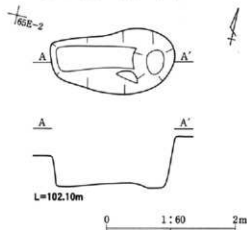
形状 平面形は不整形である。西側は長方形を基本としているように見えるが、東側は弧状を呈する。規模は長軸1.93m短軸0.93m、深さ0.90mを測る。

方位 N-74°-E

埋没土 上層に暗褐色土、中・下層に褐色土が20~30cmの厚さで堆積する。

所見 調査時の所見に従えば弥生時代中期後半か

らの奈良時代の土坑となるが遺物が全く出土していないため詳細な時期は不明である。



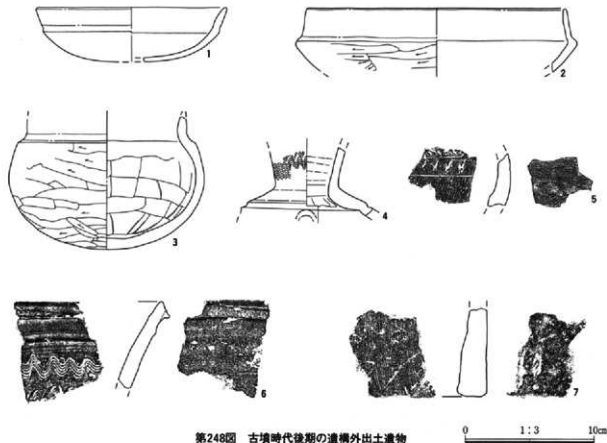
第247図 C区3号土坑

5 遺構外出土遺物(第248図、PL127)

ここでは、竪穴住居出土資料の中には認められなかった遺構外出土の資料を中心に報告する。

大型の杯(2)と広口壺(3)は遺構が倒平されてしま

ったB区北側部分からの出土である。(4)の須恵器も住居からの出土はなかった。(7)は円筒埴輪の基底部破片である。調査区域内及び隣接地に埴輪を樹立する古墳の存在は知られていない。



第248図 古墳時代後期の遺構外出土遺物

## 第7節 奈良・平安時代の遺構と遺物

## 1 概要

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居51軒と掘立柱建物4棟を検出した。

竪穴住居は台地東縁部のA区においては3軒と少数であったが、C区では38軒を検出した。同様の傾向はB区と重複する前橋市教育委員会調査部分においても見られ、台地中央部一帯に居住域が広がっていたことが知られる。

C区においては8世紀の住居の分布が比較的広範囲であったのに対し、9世紀の住居はそれよりも集中傾向にあった。調査区の南半で多く検出した。

## 2 住居

## A区 2号住居 (第249~251図、PL57・127)

位置 44K・L-7・8

**重複** 12号溝と重複し、これに先出する。

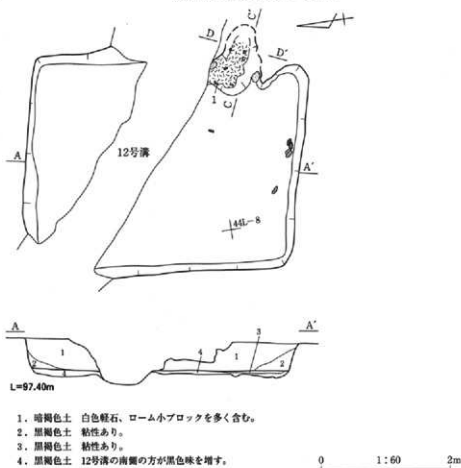
**形状** 長軸を南北に有する長方形を呈する。規模は長軸4.39m、短軸3.53mを測る。

**面積** (12.37)㎡ **方位** N-102°-E

**埋没土** 壁際に黒褐色土が三角堆積した他は、暗褐色土が全層にわたり堆積していた。

**床面** 遺構確認面から54cmほど掘り込んで床面となる。床面は北西隅が高く、東壁、南壁に向かって12~15cmほど低くなるが、大きな起伏はない。

**竪** 東壁の南東隅寄りに造られていた。燃焼部は一部東壁を掘り込んでおり、全長115cm、燃焼部幅30cmを測った。右袖部は住居内に52cmほど突出しており、内側に袖石を据えていた。左袖部は12号溝との重複に削平されていたが、右袖部と相対する位置に袖石が置かれていた。焚口部分は皿状にくぼみ、灰が層をなして広がっていた。



第249図 A区2号住居(1)

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

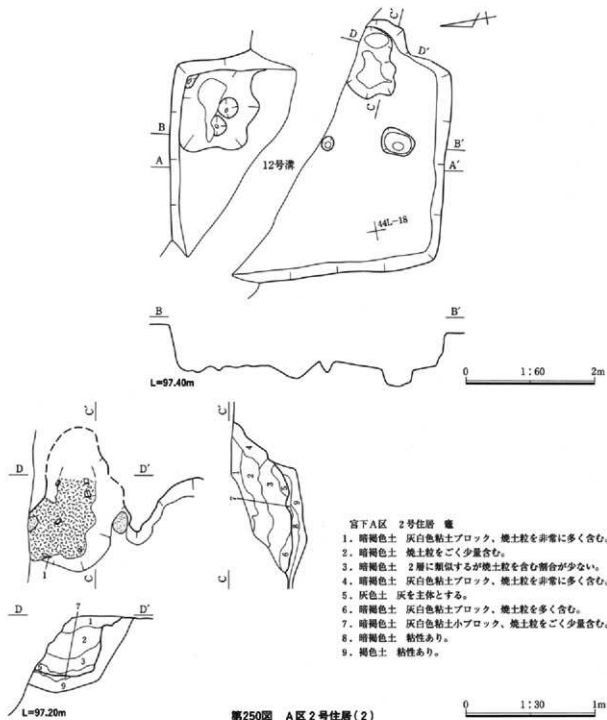
床下 掘り方は北東隅が10cmほど下がる他は全体に浅い。また、精査によりピットを2本で検出した。

遺物 竈焼部をはじめ小破片が出土したが、形状等を把握できるものは少量であった。土師器杯(1)

は竈焼部からの出土で、外面線刻が施されていた。南壁際の床面上からは長さ15cmほどの棒状礫5点が出土している。

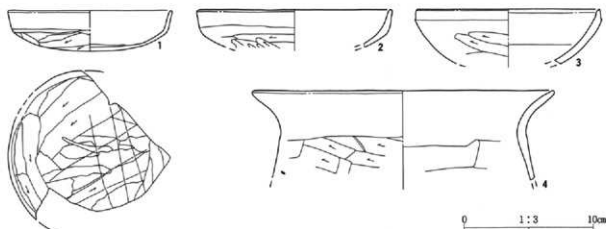
掲載した資料の他に土師器破片81点、須恵器破片1点、軟質陶器破片1点が出土した。(観P50・51)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



第250図 A区2号住居(2)





第251図 A区2号住居出土遺物

A区 3号住居 (第252・253図, PL57・127)

位置 44L・M-8・9

重複 4号住居と重複、これに後出する。

形状 長軸を南北方向に有する方形であるが、規模は長軸3.23m、短軸3.12mとあまり大差はない。

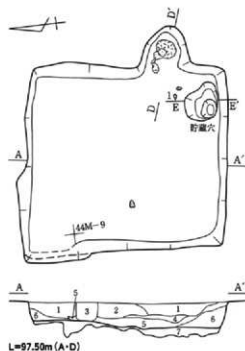
四隅は整然とした形状である。

面積 7.65㎡ 方位 N-98°-E

埋没土 黒褐色砂壤土、暗褐色土が堆積していた。

床面 遺構確認面から46cm掘り込んで床面となる。床面は北側が高く、南側に向かって深くなっており、北東隅と南東隅の比高差は19cmとなる。

竪 東壁中央から南寄りに造られていた。東壁を



宮下A区 3号住居 貯蔵穴

1. 褐灰色土 ロームブロックを含む。
2. 黄色土 ロームブロック。
3. 褐灰色土 1層より黒色味あり。

1. 黒褐色砂壤土 黄色ローム、直径5mm大の白色軽石(Hr-FP)を全体に含む。
2. 黒褐色砂壤土 黄色ローム、直径5mm大の白色軽石(Hr-FP)を全体に含む。黒色粘質土をブロック状に含む。
3. 暗褐色砂壤土 黄色ローム、白色軽石を含む(1, 2より少ない)。上層からの柱状と思われる。
4. 暗褐色土 黄色ローム粒、白色軽石を少量含む。
5. 暗褐色土 4層より黄色味が強い。黄色ロームを多く、白色軽石を少量含む。
6. 暗褐色土 直径5mm大の黄色ローム、白色軽石を多く含む。
7. 黒褐色土 黄色ロームをブロック状に含む。最大径は10cm。

0 1:80 2m

第252図 A区3号住居(1)

#### 第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

掘り込んで燃焼部が設けられており、軸部は認められなかった。残存規模は長さ76cm、焚口部幅68cm、燃焼部幅49cmを測った。

煙道部は全て削平されていた。燃焼部の使用面中央の狭い範囲に灰、焼土の堆積が認められた。

**周溝・柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅で検出した。平面形は不整形である。断面形は2段に掘り込まれており、南西隅がピット状に深くなっていた。規模は長軸64cm短軸53cm、深さ26cmを測った。

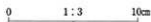
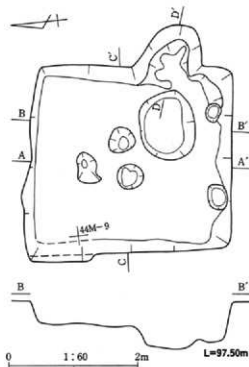
**床 下** 掘り方も南側が深く、北側がやや浅めであ

った。精査の結果竈焚口部の手前に長軸110cm短軸87cm、深さ22cmの土坑状の掘り込みが検出された。この他に中央やや北側寄りです3本、南壁際で1本ピットを検出した。

**遺物** 床面直上からの出土遺物は全くなかった。杯(1)は破片の状態です南東部分の床面からやや離れた高さから、杯(2)は3分の2ほどの残存で貯蔵穴内から出土した。

掲載した資料の他に土器器破片11点、須恵器破片1点が出土した。(観P51)

**所見** 奈良時代の住居と考えられる。



第253図 A区3号住居(2)・出土遺物

#### A区 7号住居

(第254~257図、PL57・58・127・128)

**位置** 44I-10~12、44H-10・11

**重複** 1号址に後出、28号溝に先出する。

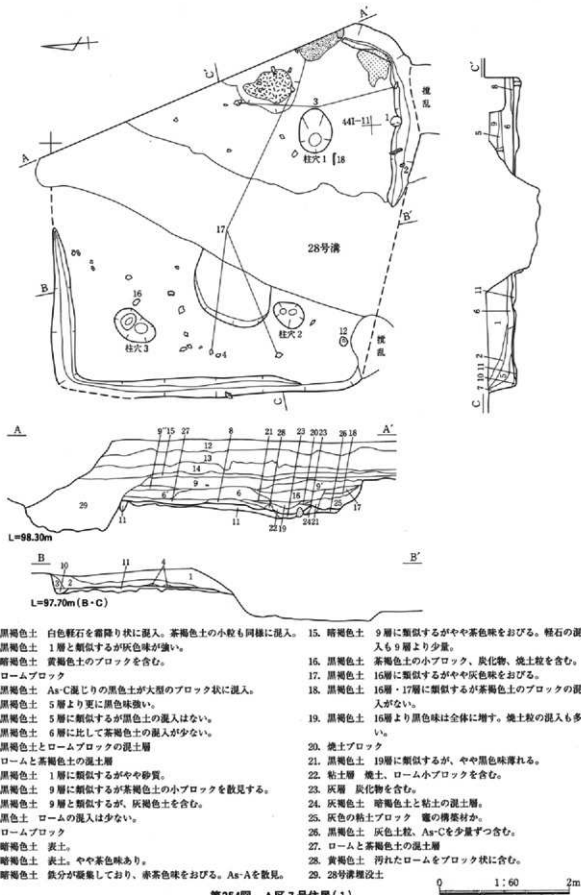
**形状** 東側の一部が調査区域外に及び、北壁・東壁の一部が未検出である。また、28号溝との重複により中央部の床面が広範囲にわたり削平を受けている。南西隅が鈍角をなすため西壁を上辺、東壁を下辺とする台形状のプランが想定される。残存長は南北長5.77m、東西長5.46mである。

**面積** (27.22)㎡ **方位** N-2°-W

**埋没土** 黒褐色土がレンズ状に堆積、混入物により分層される。

**床面** 遺構確認面から52cmほど掘り込まれて床面となる。西側が高く、東側に向かって低くなる。床面はローム層を掘り込んで造られており、東側は著しく踏み固められていた。検出時にみられた小さな凹凸は地震の影響によるものと考えられる。

**竈** 検出できなかったが、床面上の焼土・灰層の検出状況、堆積土中の粘土ブロックの混入状況から



第254図 A区7号住居(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

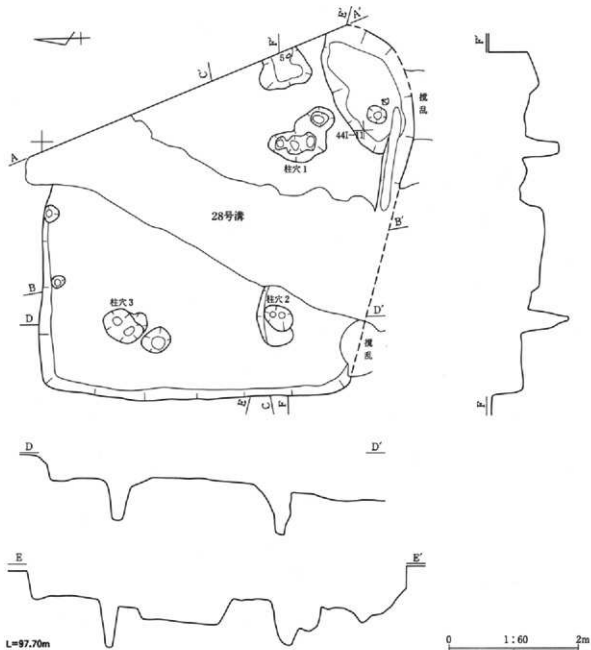
調査区域外周近に位置すると考えられる。調査区域から検出した礎は竈補強材の可能性を有している。

**周溝** 一部未検出の部分があるものの各壁下で検出した。幅は8~18cm、深さは2~15cmである。黒色土が堆積していた。

**柱穴** 北東隅を除く3本を検出した。いずれも柱痕は確認できなかった。柱穴1は長径69cm短径52cm、深さ66cmを測る。埋没土は、上層に黒褐色土、下層に茶色味をおびる暗褐色土が堆積していた。床面か

ら約20cmの位置から有舌尖頭器が出土した。床面精査時に南東側に長径41cm、深さ41cmのピットを検出している。また北側に2本ピットを検出した。

柱穴2は長径51cm短径40cm、深さ79cmを測る。上層にロームが多く流入し、床面との識別が困難であったため床面下精査の途中で検出した。中・下層はやや灰色味をおびた暗褐色土とロームブロックの混土層である。掘り方は2本あり、建て替えがあった可能性もある。



第255図 A区7号住居(2)

柱穴3は長径70cm短径41cm、深さ68cmを測る。南西側に深さ31cmのピットが接している。埋没土は上層に黒褐色土、中・下層にロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積していた。

**貯蔵穴** 明瞭な形では検出できなかったが、南東隅部分は床面下精査時に土坑状に落ち込むことが確認されたため、ここに貯蔵穴が存在した可能性が考えられる。

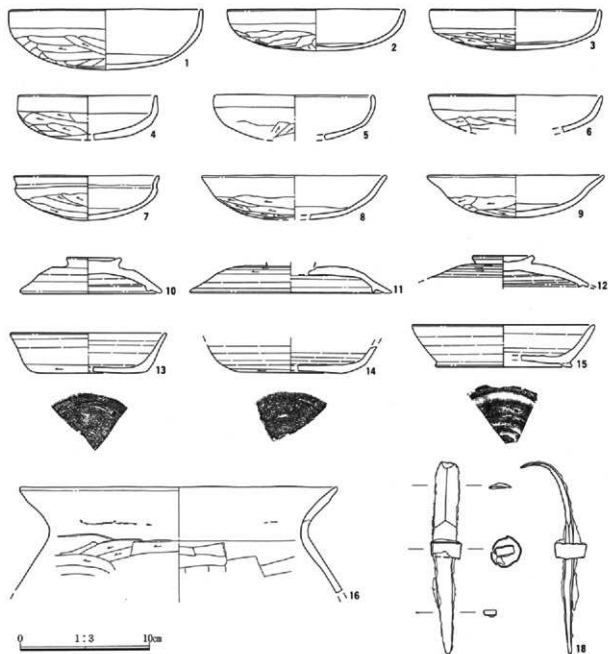
**床下** 南東隅が土坑状に掘り込まれていた他は全

体に小さなピット状の掘り方基底面が検出された。

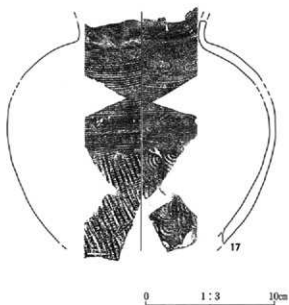
**遺物** 床面直上からの出土は少量である。柱穴1の西側床面上から鉢(18)が出土している。土器は南壁際から杯(1)が出土した。西壁際では須恵器蓋(10・12)が床面から離れて出土している。

掲載した資料の他に土師器破片1,000点、須恵器破片45点、軟質陶器破片1点、陶磁器破片2点が出土した。(観P51・52)

**所見** 奈良時代の住居と考えられる。



第256図 A区7号住居出土遺物(1)



第257図 A区7号住居出土遺物(2)

**B区 0号住居 (第258・259図、PL58)**

**概要** 本住居は前橋市教育委員会が宮下遺跡13号住居として調査報告した住居である。今回再度位置を確認、掘り方部分の調査を実施した。

**位置** 44S・T-17・18

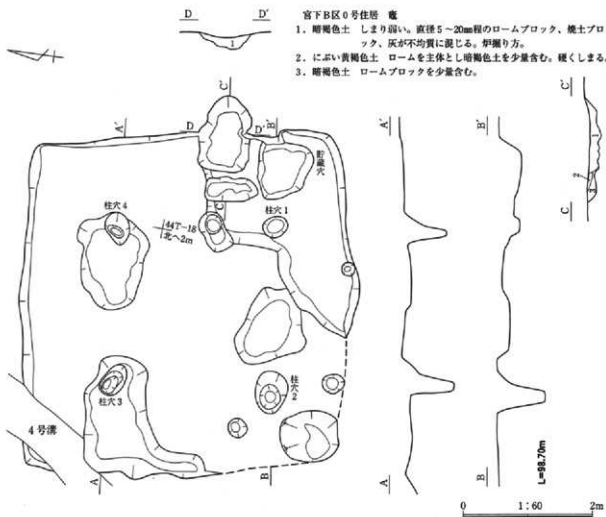
**重複** 4号・6号・10号溝と重複、いずれの溝より先出である。

**形状** ほぼ正方形を呈している。規模は東西長で5.44m、南北長で5.42mを測った。

**面積** (24.62)㎡ **方位** N-78°-E

**埋没土** 確認面から9cm程で掘り方基底面にいたる。

**竈** 焚口部幅52cm、燃焼部幅40cm、全長67cm、東壁の中央からやや南側寄りに造られていた。燃焼部を住居内から一部東壁を掘り込む位置においていたと考えられ、長軸116cm短軸79cmの土坑状の掘り方



第258図 B区0号住居

を検出した。

前橋市教育委員会の調査では竈は2基検出されたとの記録がある。

周溝 検出されなかった。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径40cm短径32cm、深さ16cm。柱穴2は長径67cm短径49cm、深さ77cm。柱穴3は長径53cm短径31cm、深さ71cm。柱穴4は長径52cm短径35cm、深さ64cmである。

貯蔵穴 南東隅に設置されていた。長径104cm短径76cm、深さ19.5cmを測り、平面形は四角形であった

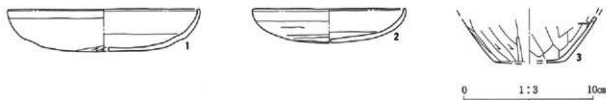
か。

床下 掘り方基底面は起伏に富み、南東隅寄りが低く下がったのをはじめ、南西隅、中央からやや南東隅寄りあるいは柱穴3・4の周辺で土坑状の掘り込みを検出した。

遺物 掘り方埋土中から杯(1・2)、甕(3)の破片を検出した。

掲載した資料の他に土師器破片48点、須恵器破片3点が出土した。(観P52)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



第259図 B区0号住居出土遺物

#### B区 1号住居 (第260～262図、PL58・128)

位置 45B-9、45C-9・10

重複 南側は用水路により削平されていた。

形状 調査区の南西隅に位置したため、東壁とこれに続く床面の一部を検出したに止まり、大半が調査区域外に及んだ。残存規模は南北長4.53m、東西長1.62mである。

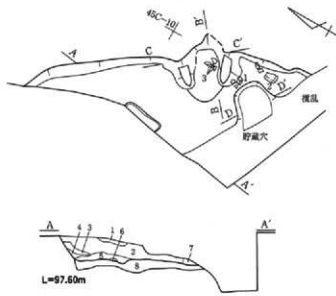
面積 計測不能 方位 N-57°-E

埋没土 暗褐色土が堆積していた。

床面 遺構確認面から51cm程掘り込んで床面となる。

竈 東壁に造られていた。住居内に燃焼部を置き、左右の袖部には黄褐色ロームを構築材として使用していた。最終使用面には灰が層をなしていた。規模は全長84cm、焚口部幅57cm、燃焼部幅39cmであった。

周溝・柱穴 検出されなかった。



第260図 B区1号住居(1)



L=97.10m 貯蔵穴

宮下B区 1号住居 貯蔵穴

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

1. 黒褐色土 直径1mm大の白色軽石と、黄色土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 直径3～4mm大の黄色ロームを多く含む。直径1mm大の白色軽石を含む。
3. 黒褐色土 黄色ローム粒、白色軽石を少量含む。
4. 暗褐色土 黄色ローム土をブロック状に含む。
5. 黒褐色土 黄色ローム粒、白色軽石を少量含む。
6. 黄褐色ローム土
7. 暗褐色土 黄褐色ローム土をブロック状に含む。
8. 暗褐色土と黄褐色ローム土の混土

0 1:60 2m

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

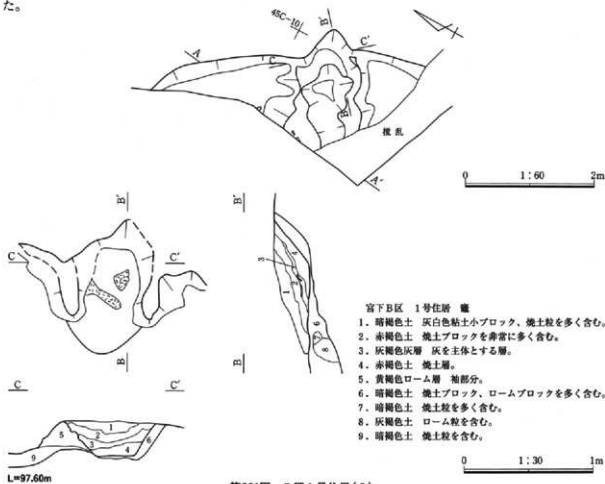
**貯蔵穴** 調査時の所見では竈の右前に位置していた。南端は用水路により削平されていた。長軸の残存長63cm短軸幅55cm、深さ25cmを測った。平面形は隅丸長方形が推定される。

**床下** 床面下10~20cmで掘り方基底面に達していた。

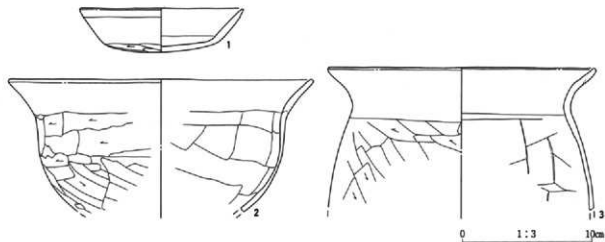
**遺物** 床面直上からの出土はなかった。竈(3)は竈焼部内出土の破片資料である。

掲載した資料の他に土師器破片105点が出土した。(観P53)

**所見** 奈良時代の住居と考えられる。



第261図 B区1号住居(2)



第262図 B区1号住居出土遺物



## B区 7号住居 (第263~265図、PL58・128)

位置 45C・D-15・16

重複 4号・10号・11号住居、1号溝と重複する。

1号溝は本住居より後出である。

形状 南東隅、南西隅を含む南側部分が削平を受けていたが、東西に長軸を有する方形または長方形であったと推定される。規模は東西長4.48m、南北の残存長4.00mである。

面積 計測不能 方位 N-48°-E

埋没土 中央部分の上層に暗褐色土が、中央部分の下層から壁寄りに黄褐色土がいずれもレンズ状に堆積していた。

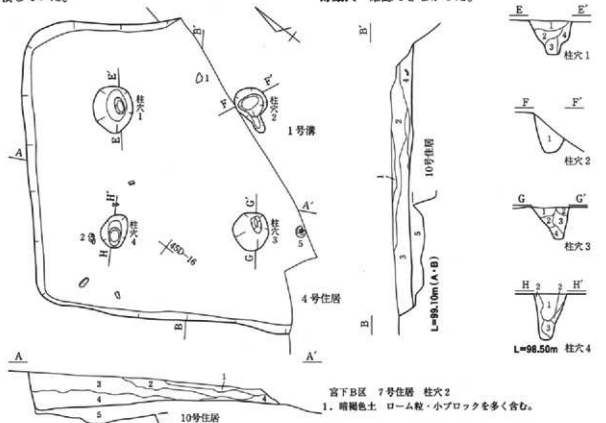
床面 遺構確認面から46cm掘り込まれて床面となる。中央部分でやや浅くなっているがほぼ平坦である。

電 確認できなかった。

周 溝 掘られていなかった。

柱 穴 4本掘られていた。いずれも底面の平面形が長円形を呈していた。柱穴1は長径74cm短径63cm、深さ54.5cm。柱穴2は1号溝に削平されたが長径52cm短径47cm、深さ68cm。柱穴3は長径62cm短径60cm、深さ53.5cm。柱穴4は長径51cm短径39cm、深さ72.5cmである。

貯蔵穴 確認できなかった。



1. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石を多く含む。
3. 黄褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。
4. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
5. 茶褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土层。

## 宮下B区 7号住居 柱穴1

1. 暗褐色土 ローム粒を非常に多く含む。
2. 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
3. 黒褐色土 2層に類似するがより多くローム小ブロックを含む。
4. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。

## 宮下B区 7号住居 柱穴2

1. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く含む。

## 宮下B区 7号住居 柱穴3

1. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 1層に類似するがより多くローム小ブロックを含む。
3. 黄褐色土 ロームを主体とし黒色土粒を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。

## 宮下B区 7号住居 柱穴4

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 黄褐色土 ロームを主体とし黒色土小ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。

0 1:60 2m

第263図 B区7号住居(1)

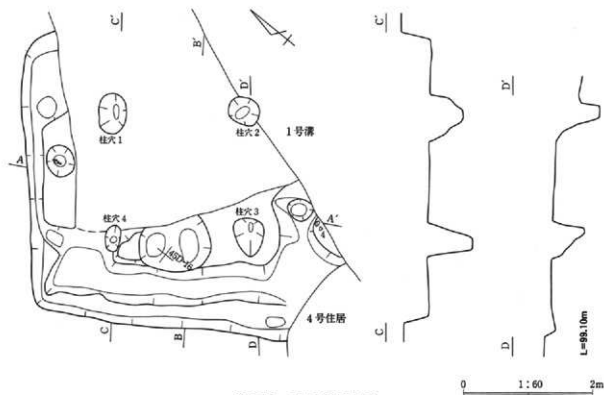
第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

**床 下** 全体的に起伏の大きな掘り込みがみられ、ピット状を呈する部分もあった。

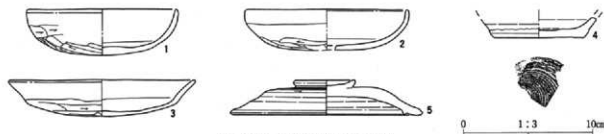
**遺 物** 柱穴3の南側、南西部分の床面直上から須恵器蓋(5)が出土した他は床面からやや離れて、ある

いは埋没土中からの出土である。

掲載した資料の他に土師器破片322点、須恵器破片8点、弥生土器破片6点が出土した。(観P53)  
**所 見** 奈良時代の住居である。



第264図 B区7号住居(2)



第265図 B区7号住居出土遺物

**B区 8号住居 (第266・267図、PL59・128)**

**位 置** 44Q・R-18・19

**重 複** 3号溝、14号・15号住居と重複、両住居より後出、3号溝より先出。

**形 状** 南北に長軸を有する長方形である。南東隅は3号溝により削平を受けている。その他にも壁の立ち上がりを検出できない部分が数箇所におよんだ。規模は南北長4.73m、東西長3.27mである。

**面 積** (12.93)m<sup>2</sup> **方 位** N-87°-E

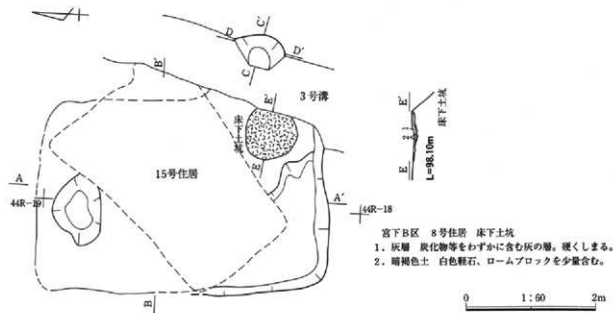
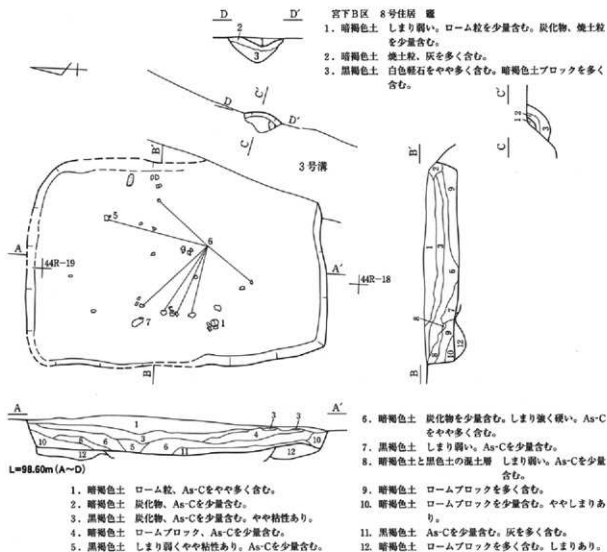
**埋没土** 暗褐色土、黒褐色土が10~20cmの厚さで堆積していた。

**床 面** 遺構確認面から56cm程掘り込まれ床面となる。下位に14号住居が重複するため壁際が高く、中央部分がやや低くなっていた。

**竈** 東壁中央から南東隅寄りに位置するが、3号溝によりその大半が削平を受け、燃焼部の一部を検出するに止まった。

**周溝・柱穴・貯蔵穴** 確認されなかった。

第7節 奈良・平安時代の遺構と遺物



第266図 B区8号住居

#### 第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

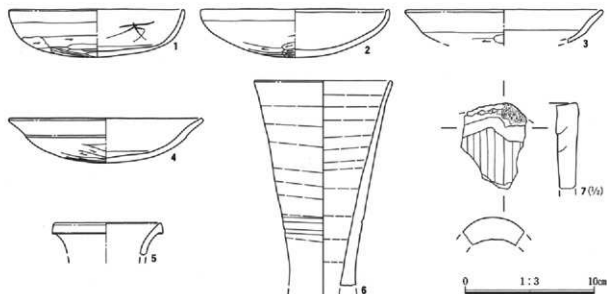
**床 下** 14号住居と重複しており、全体を詳細に検出することは困難であった。厚さ10~15cm程の掘り方を有していた。竈焚口部前には灰層が直径80cm程の範囲に厚さ2~3cm程堆積していた。

**遺物** 西側の床面直上から線刻のある杯(1)が出土している。須恵器長頸壺(6)の口縁部は床面の西・

東側の広範囲から出土した破片が接合したものである。他は埋没土中からの出土である。この中には土製の羽口(7)の破片も含まれている。

掲載した資料の他に土師器破片371点、須恵器破片13点が出土した。(観P53・54)

**所見** 奈良時代の住居と考えられる。



第267図 B区8号住居出土遺物

#### B区 9号住居

(第268~270図、PL59・128・129)

**位置** 44P・Q-19・20

**重複** 3号井戸、2号・3号溝に先出する。

**形状** 他遺構との重複により、壁面、床面の多くが削平されている。また、東壁南半は調査区域外に及んでいた。形状は南北に長軸を有する長方形を呈しているが四隅の中で検出されたのは北東部分のみである。規模は長軸5.34m、短軸4.12mである。

**面積** (18.59)㎡ **方位** N-15°30'-E

**埋没土** 暗褐色土が堆積していた。

**床面** 遺構確認面から30cm程掘り込まれて床面となる。調査区域境における土層観察では厚さ25cmの埋没土の堆積が認められた。床面には大きな起伏はないが北側が高く、南側に低くなる傾向が認められた。

**竈** 確認できなかったが、B-B'の土層断面で焼土を含む土粒の堆積が確認されていることから、東

壁に造られていた可能性が高い。

**周溝** 床面精査時に東・北壁下に溝状の掘り込みを検出した。これが周溝である可能性が高い。幅20~27cm、深さ1~7cmであった。

**柱穴・貯蔵穴** 確認できなかった。

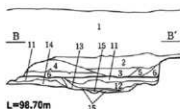
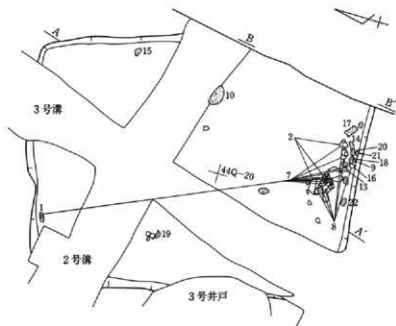
**床下** 床面下10~20cmで掘り方基底面にいたった。北東隅、中央、南東部分に土坑状の掘り込みを、他にピット4本を検出した。南東部分の土坑は貼床下に深さ6cmの掘り込みを有し、基底面に3~5cmの厚さで灰が堆積していた。

**遺物** 南壁床面直上から杯(2)、甕(7・8)が出土した。北壁際出土の杯(1)も床面直上からの出土である。南壁際の土器の東側からはこも藪み石状の礫が多数出土しており、この中に散石(9)が含まれていた。

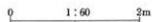
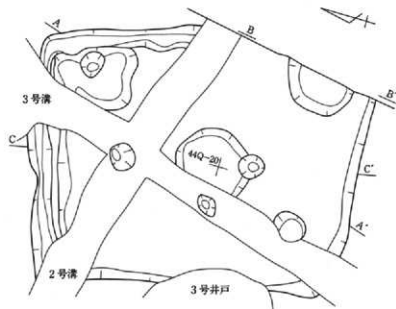
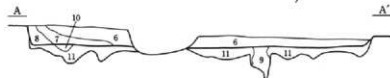
掲載した資料の他に土師器破片134点、須恵器破片16点、軟質陶器破片1点が出土した。

(観P54・55)

**所見** 奈良時代の住居である。



1. 表土
2. 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
3. 暗褐色土 白色軽石をやや多く含む。
4. 暗灰色灰層 焼土ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
6. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
7. 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
8. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
9. 黒褐色土 ローム小ブロック、白色軽石を少量含む。
10. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。硬くしまる。
11. 暗褐色土 ロームと焼土、灰の小ブロックを非常に多く含む。硬くしまった床面と思われる。
12. 暗褐色土 焼土と灰の小ブロックを非常に多く含む。11層ほどしまらない。焼土や炭をわずかに含むほぼ純粋な灰である。床下土坑に貼ったような状態である。硬くしまる。
13. 灰色灰層
14. 暗褐色土とロームブロックの混土 ややしまるが11層よりは軟質である。
15. 暗褐色土 焼土小ブロックを多く含む。



第268図 B区9号住居